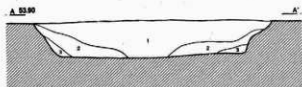
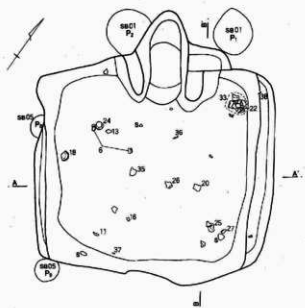
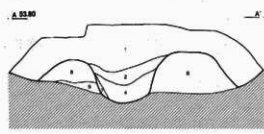
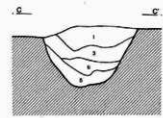
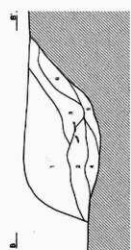
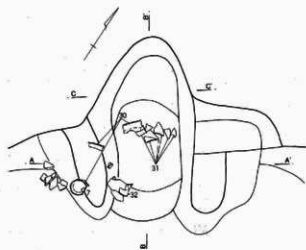


第338図 C区第3号住居跡



SJ03

- 1 黒褐色土 ローム粒子多量、ロームブロック少量
- 2 黒褐色土 ローム粒子少量
- 3 暗褐色土 ローム粒子多量

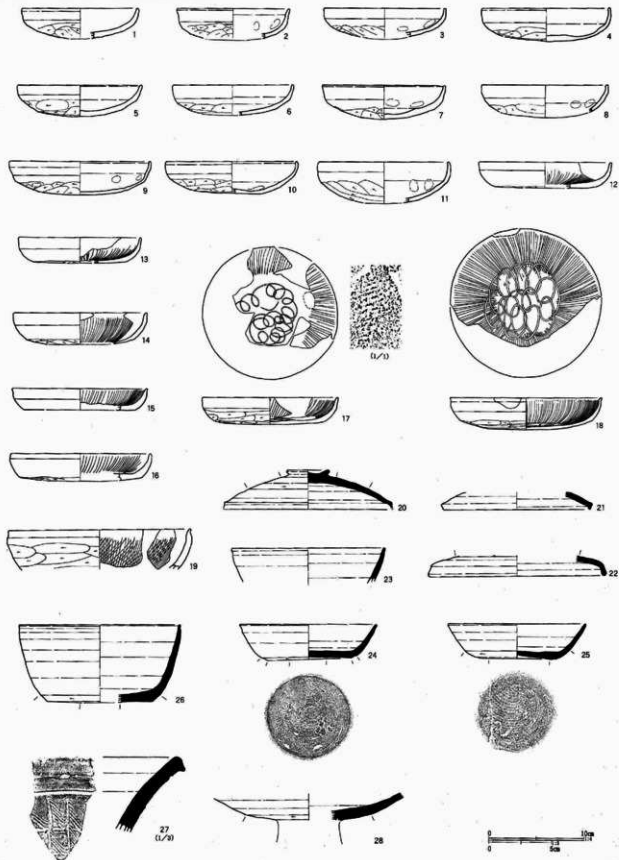


カマド

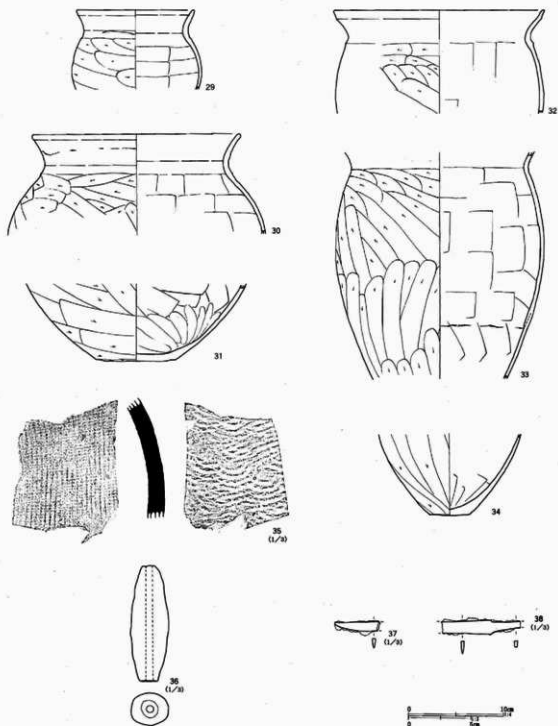
- 1 黒褐色土 ローム粒子多量、ロームブロック少量
- 2 灰褐色土 粘質土、焼土粒子少量
- 3 灰褐色土
- 4 暗赤褐色土 焼土粒子・焼土ブロック混入
- 5 黒褐色土 焼土・灰混入、灰層
- 6 赤褐色土 焼土粒子・焼土ブロック多量
- 7 赤褐色土 焼熟焼土
- 8 灰色粘土 ローム粒子少量含む
- 9 灰褐色粘土 ロームブロックを含む



第339图 C区第3号住居跡出土遺物(1)



第340図 C区第3号住居跡出土遺物(2)



されなかった。

ピットは5本検出された。Pit 5はカマド前面の掘り方である。Pit 1は床面を切っていた。Pit 2～4はいずれも柱穴にしては浅く、住居に伴う可能性は低い。

壁溝はカマドの周囲を除き巡っていた。

出土遺物は第1号カマドとその周囲からまとまって出土した(第344・345図)。1～3は土師器環。深身で体部の開きが大きい。4～6は須恵器皿。底部は回転糸切り。末野産である。7は須恵器環か。8～

第132表 C区第3号住居跡出土遺物観察表 (第339-340図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師環	(12.2)	3.2		CG	B	褐色	20%	覆土
2	土師環	(11.7)	3.1		G	A	褐色	25%	覆土
3	土師環	(12.6)	2.9		AB	B	褐色	25%	覆土
4	土師環	(13.3)	3.5		A	B	褐色	50%	覆土
5	土師環	12.9	3.2		ABD	B	褐色	40%	覆土
6	土師環	12.5	3.2		G	B	褐色	60%	No.8-11. 覆土中層+下層
7	土師環	12.8	3.5		ABG	A	褐色	95%	カマド内No1
8	土師環	(13.1)	2.8		B	B	褐色	35%	覆土
9	土師環	(14.7)	3.5		AB	C	褐色	25%	覆土
10	土師環	13.6	3.4		AE	B	褐色	50%	覆土
11	土師環	(13.5)	4.3		AB	B	淡茶色	25%	No16. 床面。裏面底部黒斑
12	土師暗文環	(13.8)	2.7	(9.8)	AB	B	褐色	15%	覆土。内面放射暗文
13	土師暗文環	(12.8)	2.7		A	B	褐色	25%	No9. 覆土下層。内面放射暗文
14	土師暗文環	(13.8)	3.3		AB	B	褐色	15%	覆土。内面放射暗文
15	土師暗文環	(14.1)	2.3	(11.7)	B	B	褐色	15%	覆土。内面放射暗文
16	土師暗文環	(14.6)	2.8		B	B	褐色	20%	No18. 覆土下層。内面放射暗文
17	土師暗文環	(14.2)	2.9		AD	B	茶褐色	50%	覆土+カマド内。内面放射+ラセン暗文
18	土師暗文環	(15.8)	3.4		ABF	A	茶褐色	70%	No12. 覆土下層。内面放射+ラセン暗文。底部外面黒斑
19	土師暗文環	(19.0)	4.2		ABF	C	橙褐色	10%	覆土。斜放射暗文の上に正放射暗文
20	須恵蓋	(17.8)	4.0		CDE	C	黄灰色	25%	No25. 覆土上層。産地不明(末野か)。酸化礫含む
21	須恵蓋	(15.3)	1.9		BC片	A	灰色	10%	覆土。末野産
22	須恵蓋	(18.4)	3.1		BC	A	淡灰色	20%	No29. 覆土下層。産地不明。表面放射状にナデ
23	須恵環	(16.0)	3.7		F片	D	灰色	5%	覆土。末野産
24	須恵環	14.3	3.8	8.8	C片	C	黄褐色	80%	No10. 覆土下層。末野産。黒色の変色部と火傷痕
25	須恵環	14.4	3.8	7.9	C片	C	黄灰色	80%	No28. 覆土下層。末野産。底部B3d手法
26	須恵碗	(16.8)	8.2	(11.2)	CF片	A	暗灰色	20%	No26. 床面。末野産。体部下端+底部回転ヘラケズリ
27	須恵甕		5.9		BE	B	青灰色	No22.	覆土中層。末野産。口縁破片
28	須恵高壇		2.8		BCD片	B	灰褐色	20%	覆土。末野産
29	土師小型甕	(12.3)	8.3		A	B	褐色	20%	覆土
30	土師壺	(21.7)	10.7		AB	B	淡橙褐色	40%	カマド内No3-14-7一括
31	土師壺		8.3	8.4	AB	B	淡橙褐色	45%	カマド内No4-6-9-11. 底部黒斑。内底面指ナデ
32	土師甕	(22.0)	10.8		AB	B	褐色	25%	カマド内No12
33	土師甕		24.0		AB	B	褐色	50%	No1. 覆土中層。外面部分的に黒斑あり
34	土師甕		8.6	4.2	AB	B	褐色	45%	覆土
35	須恵甕				BE	A	暗灰色	No27.	覆土上層。末野産
36	土鏃	No2. 覆土上層。長さ9.2cm。最大径1.3cm。孔径0.6cm。重さ70.25g。胎土AB。焼成B。淡茶-黒色							
37	刀子	No14. 覆土上層。残長3.5cm。切先。No38と同一個体かもしれない							
38	刀子	No3. 覆土中層。残長6.2cm							

13は高台碗。13は須恵器としたが、ロクロ土師器かもしれない。厚手で胎土は粉っぽい。15は須恵器壺。南比企産である。16~18は「コ」の字状口縁である。18は厚手で、粘土積み上げ痕を明瞭に残す。ヘラケズリも浅く且つ雑で、ヘラケズリが及ばない部分もある。同種の甕の中でも退化的な様相が認められる。

須恵器は75片出土し、内訳は環・高台碗が58点(末野産55・南比企3)、皿が4点(末野)、甕が12点(末野5・南比企7)、蓋が1点(末野)である。

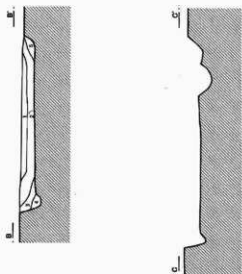
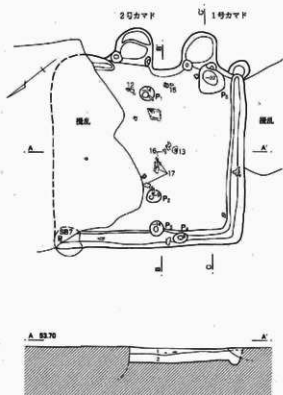
住居の時期は熊野Ⅱ期と考えられる。

C区第5号住居跡 (第343図)

C区第5号住居跡は31-20グリッドに位置する。平面形態は方形で、規模は長軸長3.32m、短軸長3.18m、深さ0.30mである。主軸方位はN-11°-Eを指す。

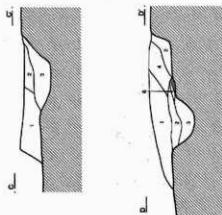
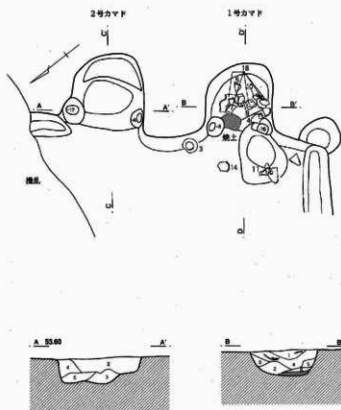
床面は平坦で堅く踏み固められていた。埋土はローム粒子を少量含む褐色土をベースとしている(第2・3層)。

第341図 C区第4号住居跡



SJ04

- 1 暗褐色土 ローム粒子微量
- 2 暗褐色土 ローム粒子少量
- 3 褐色土 ローム粒子中や多量
- 4 褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量
- 5 暗褐色土 黄灰色粘土ブロック・焼土粒子少量



1号カマド

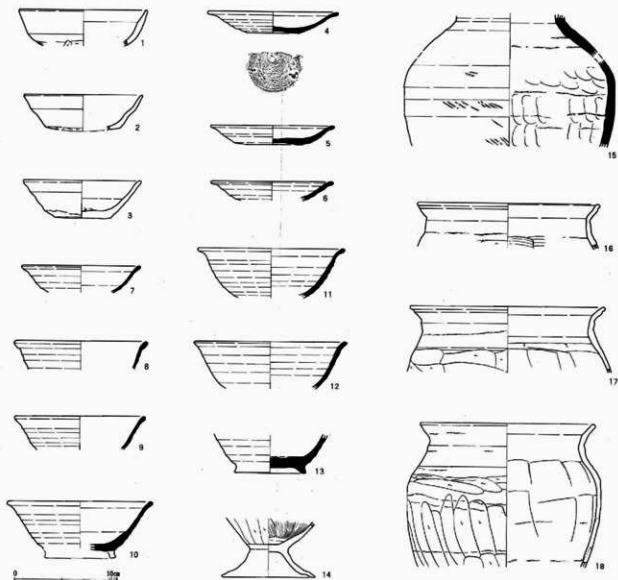
- 1 暗褐色土 住居覆土
- 2 暗赤褐色土 焼土粒子・焼土ブロック混入
- 3 黒褐色土 ロームブロック多量
- 4 褐色土 焼土粒子多量、黄灰色粘土ブロック混入
- 5 焼土ブロック
- 6 黒灰色土 灰層

2号カマド

- 1 暗褐色土 住居覆土
- 2 黒褐色土 ローム粒子少量
- 3 黒褐色土 ローム粒子・焼土粒子混入
- 4 褐色土 焼土粒子・黄灰色粘土混入
- 5 黒色土 炭化物・ローム粒子・焼土混入



第342图 C区第4号住居跡出土遺物



第133表 C区第4号住居跡出土遺物観察表 (第342图)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師环	(13.4)	3.8		B G	B	褐色	10%	覆土
2	土師环	(12.4)	3.7	(7.8)	C	B	淡茶褐色	8%	1号カマF
3	土師环	12.1	4.0	5.9	B C	B	褐色	85%	No.22. 床面
4	須恵皿	(13.4)	2.2	5.4	B C片	C	褐色	35%	1号カマF内No.7. 未野産
5	須恵皿	(12.8)	2.0	(6.6)	C片	A	青灰色	20%	1号カマF内No.19. 未野産
6	須恵皿	(12.6)	2.0		B片	A	青灰色	10%	1号カマF. 未野産
7	須恵环?	12.2	2.8		B片	A	青灰色	15%	覆土. 未野産
8	須恵高台椀	(13.6)	3.0		B C片	A	青灰色	15%	覆土. 未野産
9	須恵高台椀	(13.4)	3.5		B C片	B	暗灰色	20%	1号カマF内No.15. 未野産
10	須恵高台椀	(14.9)	5.2		C片	C	灰褐色	30%	1号カマF内No.18 覆土. 未野産
11	須恵高台椀	(15.2)	5.2		B C片	C	黄灰褐色	15%	1号カマF内No.3. 未野産
12	須恵高台椀	(15.8)	5.0		B片	C	淡灰色	30%	No.19. 覆土上層. 未野産
13	須恵高台椀	4.1	5.8	5.8	A D G	B	淡黄灰色	65%	No.11. 覆土上層. 土師質 胎土粉っぽい
14	土師台付甕	5.8	9.6	9.6	B D G	B	茶褐色	70%	1号カマF内No.1
15	須恵甕	(14.0)			C針	A	暗青灰色	25%	No.21 (床面)+カマF・覆土. 南比金産

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
16	土師甕	(19.0)	4.6		BD	B	褐色	30%	No.8-9, 覆土上層
17	土師甕	20.3	7.0		BG	B	茶褐色	90%	No.3-6-7, 覆土上層+中層
18	土師甕	18.1	15.2		CG	B	茶褐色	55%	1号カマド内No.6-11, 整形鉢, 胴部無調整部日立

第134表 C区第5号住居跡出土遺物観察表 (第344-345図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師環	12.1	3.8	7.6	BG	A	褐色	70%	No.36, 床面
2	須恵環		2.9	6.5	C片	D	褐色	60%	覆土, 末野産
3	須恵皿	(12.4)	2.4	(5.6)	CF片	B	灰色	30%	覆土, 末野産
4	須恵皿	12.8	2.6	6.0	DF片	C	褐色	50%	No.2, 床面, 末野産
5	須恵皿	11.6	2.3	6.1	CF片	B	暗灰色	90%	No.11-12-45, 覆土下層, 末野産
6	須恵皿	12.3	2.4	6.8	C片	A	青灰色	100%	No.5-9, 覆土中層+ほぼ床面, 末野産
7	須恵皿	(12.6)	2.1	6.0	C片	A	青灰色	50%	カマド内No.5, 末野産
8	須恵蓋	(15.3)	3.7		C片	A	青灰色	40%	No.39, 覆土上層, 末野産
9	須恵高台碗	(13.8)	5.3	(5.8)	ABF片	B	灰褐色	20%	覆土, 末野産
10	須恵高台碗	(14.1)	5.3	5.6	C片	C	茶褐色	45%	No.13, ほぼ床面, 末野産
11	須恵高台碗		5.1	(5.9)	片	A	青灰色	25%	No.40, ほぼ床面, 末野産
12	須恵高台碗	14.3	6.2	6.6	D片	C	黄灰褐色	95%	No.28, 覆土下層, 末野産
13	須恵高台碗	(14.4)	5.9	5.8	C片	C	淡灰褐色	40%	No.14-15, 覆土中層, 末野産, 内底面重ね焼き痕残る
14	須恵長頸瓶		13.0		BF	A	黒灰色	35%	No.28・カマド内No.1, 床面, 東金子産
15	須恵甕		8.2		BC片	A	暗灰色	20%	No.10, 覆土中層, 末野産
16	須恵甕		11.3		C片	A	暗灰色	15%	No.6, 覆土下層, 末野産
17	須恵瓶小		9.2		C片	A	暗青灰色	5%	No.26, 床面, 末野産
18	土師甕	(20.4)	9.3		ABCG	B	暗褐色	10%	覆土, 歪み大 整形鉢 胴部器壁厚い
19	土師甕	(19.2)	23.7		ABEG	A	橙褐色	40%	カマド内No.3-4・カマド内No.10-16
20	土師甕	(19.6)	9.6		ABG	B	褐色	20%	No.1-30, 覆土下層
21	土師甕	(21.7)	6.7		ABCG	C	橙褐色	10%	覆土
22	土師甕	(21.6)	9.8		ABEG	B	褐色	10%	カマド内No.2
23	土師甕		1.8	(4.7)	AB	B	暗褐色	40%	覆土
24	土師台付甕		2.7	(9.8)	CG	A	橙褐色	45%	カマド内No.4+覆土

カマドは南東壁に設けられていた。燃焼部は壁外に突出する。埋土は第2～5・7層が天井部崩落土、第6層が灰層である。袖は検出されなかった。

ピットは検出されなかった。土壌は3基あり、上面に貼床されていることから床下土壌と思われる。

また、北西壁に寄った床面には灰跡状のピットが検出された。西側を馬蹄状に粘土が囲み、炉内は灰と焼土が詰まっていた。性格は不明である。

壁溝はカマドの周囲を除き巡っていた。

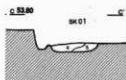
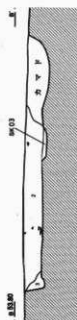
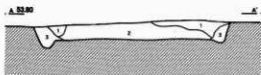
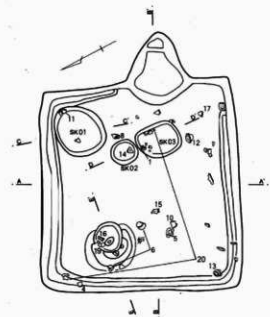
出土遺物はカマド内と住居内全体から比較的まとまって出土している(第344-345図)。1は土師器環。平底でやや深身の器形である。2は須恵器環。底部は回転糸切り。3～7は須恵器皿。8は須恵器蓋。高台碗蓋であるが混入の疑いがある。末野産。9～13は須恵器高台碗。口径は14.0～14.5cm程である。

14は須恵器長頸瓶。肩部に黄灰色の自然釉が垂れている。胴部は黒色、内面は灰色で、非常に焼きが良い。胎土は微細な砂粒が多く含まれている。産地は不明であるが、東金子産の可能性があろうか。15-16は須恵器甕。いずれも末野産であるが、15は焼きが良く、16は焼きが甘い。17は須恵器瓶か。羽釜状の凸帯が巡る。末野産。18～22はいわゆる「コ」の字状口縁甕である。18は整形が雑で、胴部器壁は厚くなっている。

須恵器は184片出土し、内訳は環・高台碗が91点(末野産89・南比企産2)、皿が33点(末野)、甕が35点(末野34・南比企1)、壺瓶類19点(末野7・不明12)、蓋が5点(末野)、瓶が1点(末野)である。

住居の時期は熊野Ⅱ期と考えておきたい。

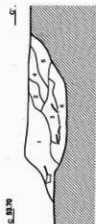
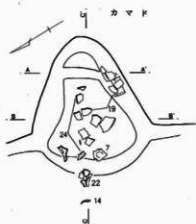
第343図 C区第5号住居跡



SJ05

- | | | |
|----|-------|---------------------|
| 1 | 灰褐色土 | ロームブロック混入 |
| 2 | 褐色土 | 焼土粒子やや多量、ローム粒子少量 |
| 3 | 褐色土 | ロームブロック、ローム粒子少量 |
| 4 | 黒褐色土 | ロームブロック混入 |
| 5 | 褐色土 | ロームブロック多量 |
| 6 | 褐色土 | 粘質土 |
| 7 | 褐色土 | 粘質土主体、黒色灰・ローム混入 |
| 8 | 黒色土 | 灰・焼土主体、ローム・黄灰色粘質土混入 |
| 9 | 黄灰色粘土 | 焼土粒子微量 |
| 10 | 明褐色土 | ローム・炭化物粒子混入、焼土粒子少量 |

0 2.0m

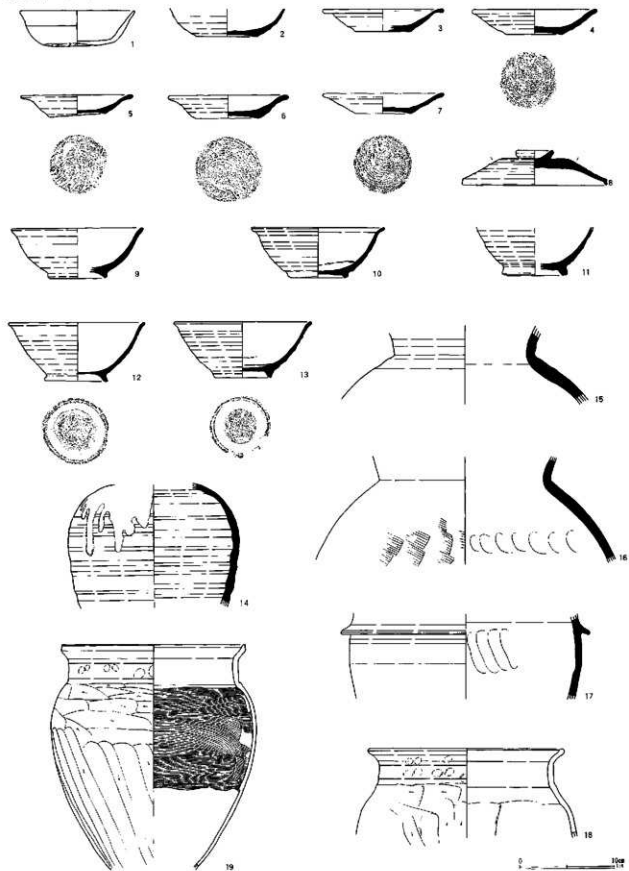


カマフ

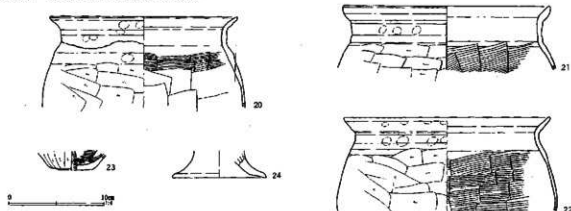
- | | | |
|---|------|---------------------|
| 1 | 褐色土 | 焼土・黄灰色粘土やや多量 |
| 2 | 褐色土 | 黄灰色粘土多量 |
| 3 | 褐色土 | 赤褐色焼土ブロック纏めて多量 |
| 4 | 褐色土 | 焼土ブロック・黄灰色粘土粒子多量 |
| 5 | 褐色土 | 焼土粒子・炭化物・灰少量 |
| 6 | 黒灰色土 | 灰層、灰・炭化物・焼土粒子混入 |
| 7 | 明褐色土 | ローム粒子やや多量、黄灰色粘土粒子少量 |



第344图 C区第5号住居跡出土物(1)



第345図 C区第5号住居跡出土遺物(2)



C区第6号住居跡 (第346・347図)

C区第6号住居跡は調査区東端の31・32-20・21グリッドに位置し、一部は調査区外に延びている。第10号掘立柱建物跡が重複するが、住居跡の調査が先行したために新旧関係が明瞭に掴めなかった。住居覆土を切るピットが1本検出され、第10号掘立柱建物跡南側梁行の中間柱に相当する可能性を考えたが柱間寸法が異なり、結局結論は出なかった。

平面形は正方形と推定され、規模は一辺5.40m、深さ0.65mである。主軸方位はN-7°-Wを指す。

床面は平坦で、柱穴の内側からカマド前面が特に堅く踏み固められていた。埋土は最上層に焼土と炭化物を多量に含む暗褐色土が堆積し、その下部はロームブロック混じりの褐色土が主体となっていた。人為的に埋め戻された可能性が高いであろう。

カマドは2基検出された。遺存状態から2号カマドから1号カマドに付け替えられたものと考えられる。1号カマドは北壁にあり、燃焼部先端は僅かに壁を切り込んでいる。埋土は第3-5・7層が天井部崩落土、第6層が天井部崩落土と灰層に相当しよう。第8層は掘り方で、その上面が火床面に相当する。袖は灰白色粘土と褐色土から構成され、燃焼部側壁は強く被熱していた(第347図)。

第2号カマドは西壁にあり、燃焼部先端が遺存していたに過ぎない。両側壁は強く被熱しており、底面には炭化物混じりの灰層が形成されていた。

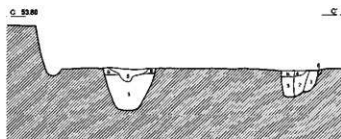
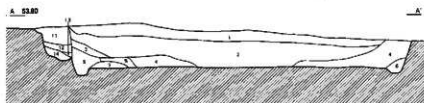
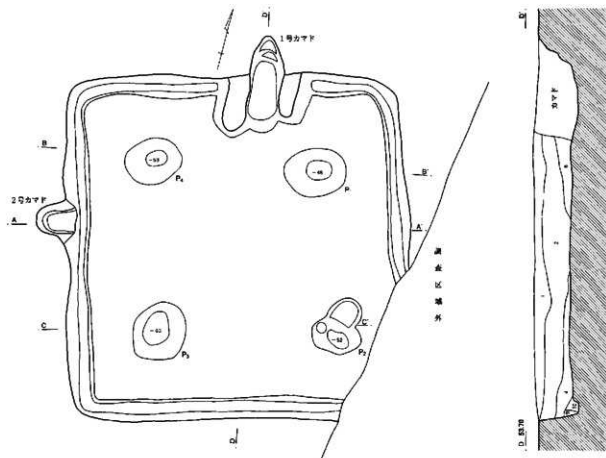
ピットは4本検出された。規則的な配置から住居

に伴う主柱穴と考えられる。壁溝は全周する。

出土遺物は非常に多い。覆土上層から床面まで分布するが、特に上層からの出土量が多く、おそらく焼土混じりの土と共に投棄されたものと推定される(第348・349図)。器種的には土師器環・皿・碗・暗文環・甕・小型甕・壺・甌、須恵器環・高台環・椀・蓋・盤・磨鉢・高坏・水瓶?・瓶・壺・甕・横瓶、石製紡錘車、鉄製刀子、土鍾、編物石がある(第350-353図)。1-17は土師器環。1は非定形的な環。2は有段口縁環。3-17は丸椀形態の北武藏型環である。3はカマド脇の床面出土で完形品。18-22・29は暗文環である。18-20は放射暗文、22は放射暗文であるが、間隔が開いている。21は斜格子暗文と思われるが、雑な施文である。29は大振りの椀形態。23-28は皿である。30は椀で、口縁部は内灣気味である。37-40は甕で、39のように器壁が厚く鬼高的な様相を残すものと、胴部器壁が薄くなり口縁部がくの字に屈曲するものの両者がある。41は甌か。

46-57は須恵器蓋である。小振りのもの(46-49)と大振りのもの(50-52・54-57)がある。坏も小型(58)と大型品(59-64)があり、後者が多い。58は箱形につくる。体部下位と底部を回転ヘラケズリ調整。60・61・63は底部回転ヘラケズリ、62は手持ちヘラケズリ調整である。65は高台環(坏B)。胎土は細かく黒色粒子が吹き出している。秋間産と思われる。66は無台の椀。体部上位に1条の沈線が巡る。底部から体部下端にかけて回転ヘラケズリ調整。末野産。

第346図 C区第6号住居跡



SJ06

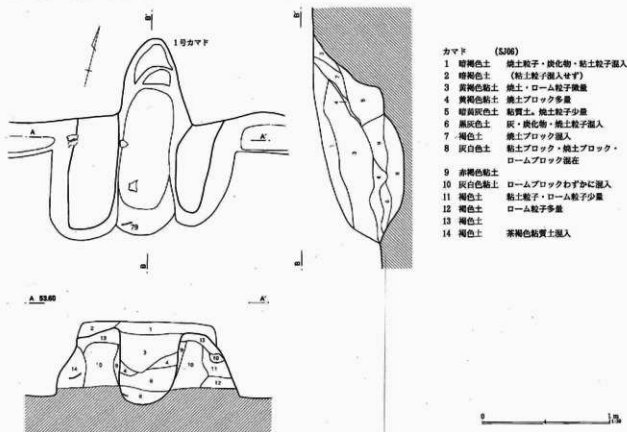
- 1 暗褐色土 焼土粒子・炭化物多量
- 2 褐色土 ローム粒子まばらに混入
- 3 褐色土 ロームブロック多量
- 4 褐色土 ロームブロック・黒色土ブロック多量
- 5 黄褐色土 ロームブロック主体
- 6 褐色土 ローム粒子少量
- 7 暗褐色土
- 8 灰白色粘土 焼土ブロック混入
- 9 黒色土 褐色土少量
- 10 黄褐色土 ロームブロック多量
- 11 褐色土 ローム粒子少量
- 12 明褐色土 ローム・黄灰色粘土ブロック・焼土ブロック混入
- 13 粘土
- 14 黄灰色灰層 炭化物多量

ピット (S106)

- 1 褐色土 ロームブロック・焼土や中少量
- 2 褐色土
- 3 褐色土 ロームブロック多量、焼土少量
- 4 黄褐色土 粘質土
- 5 黄褐色土
- 6 黄褐色土 ローム主体

0 2m

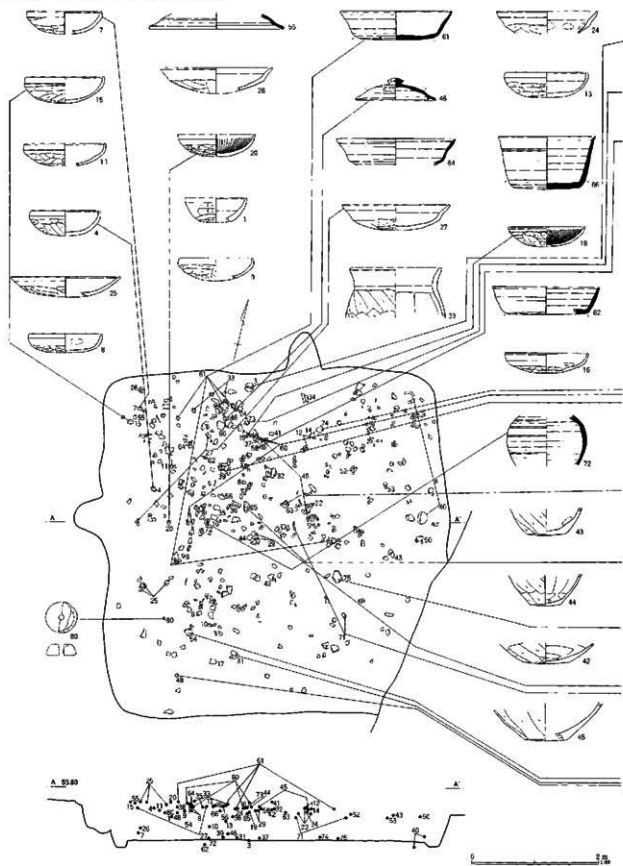
第347図 C区第6号住居跡カマド



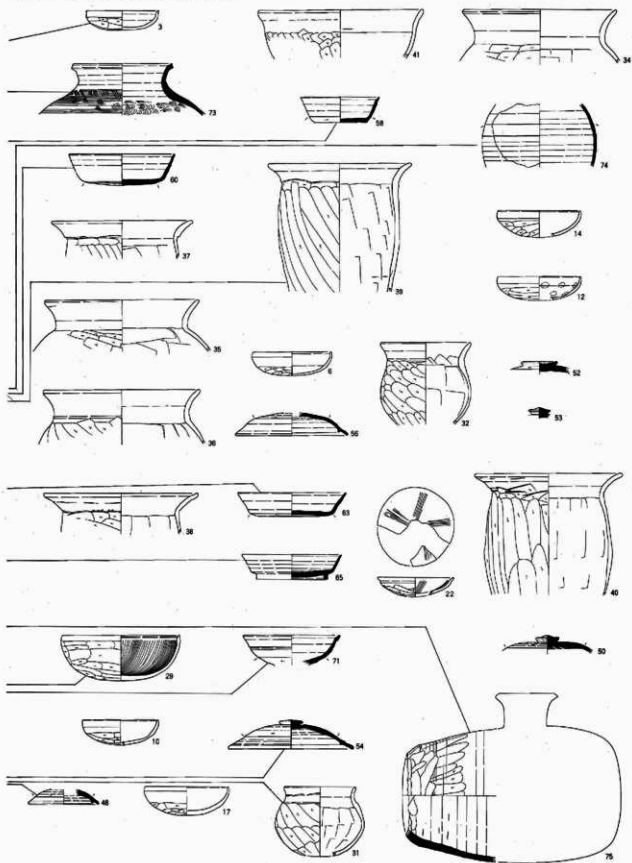
第135表 C区第6号住居跡出土遺物観察表 (第350~353図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師環	(9.6)	3.8		AB	C	淡褐色	20%	No.334。覆土中層。外側面黒斑あり
2	土師環	(10.6)	2.9		AD	B	灰白色	10%	覆土上層。有段口縁環
3	土師環	11.1	3.0		ABD	B	橙褐色	100%	No.471。床面
4	土師環	(10.6)	4.0		AB	B	淡褐色	40%	No.172他。覆土上層
5	土師環	(10.7)	3.6		AB	B	褐色	50%	覆土。内外両面黒斑あり
6	土師環	(12.2)	3.7		A	B	褐色	30%	No.116他。覆土上層
7	土師環	(11.6)	3.5		ABD G	B	橙褐色	20%	No.389。覆土下層。底部裏面黒斑あり
8	土師環	(11.4)	2.9		AF	B	褐色	30%	No.245-337。覆土上層。外面底部黒く変色
9	土師環	(11.4)	3.3		A	B	淡褐色	40%	No.409。覆土上層。外面底部黒斑あり
10	土師環	(11.7)	3.9		AB	C	褐色	35%	No.410。覆土中層
11	土師環	(12.6)	3.4		AB	B	淡褐色	20%	No.91。覆土上層
12	土師環	(12.7)	3.9		AF	B	褐色	35%	No.35-37。覆土上層。内面指頭痕あり
13	土師環	(12.8)	4.0		ABG	C	褐色	35%	No.396他。覆土中層
14	土師環	(12.8)	4.0		AB	B	明褐色	30%	No.37。覆土上層。内面口縁部付近黒斑あり
15	土師環	12.2	4.0		AG	B	褐色	60%	No.77。覆土上層。底部黒斑あり
16	土師環	(13.0)	3.1		A	B	褐色	25%	No.185。覆土上層
17	土師環	(12.9)	4.5		ABD	B	褐色	40%	No.308。覆土上層。断面灰色に還元
18	土師暗文環	(10.2)	3.0		ABD	B	褐色	20%	覆土上層。内面放射暗文(下→上)左回り
19	土師暗文環	(12.1)	3.1		ABD	B	褐色	25%	No.364。覆土上層。外面底部黒斑。内面放射暗文
20	土師暗文環	(12.0)	3.4		AB	B	褐色	25%	No.168。覆土上層。内面放射暗文(下→上)左回り
21	土師暗文環	(12.8)	2.7		ABG	B	橙褐色	15%	覆土。内面斜格子暗文(下→上)4方向より施文
22	土師暗文環	11.8	3.0		AB	B	橙褐色	60%	No.137-140-142他。覆土上層。内面放射暗文
23	土師皿	(16.8)	3.9		AB	B	橙褐色	30%	覆土上層下層
24	土師皿	(15.8)	3.4		AB	B	褐色	30%	No.464他。覆土上層

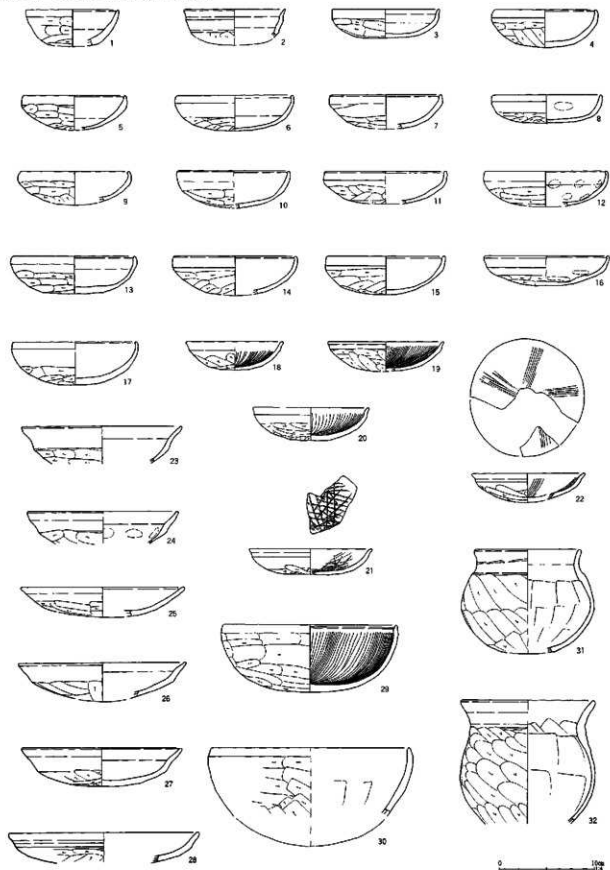
第348图 C区第6号住居跡遺物分布图(1)



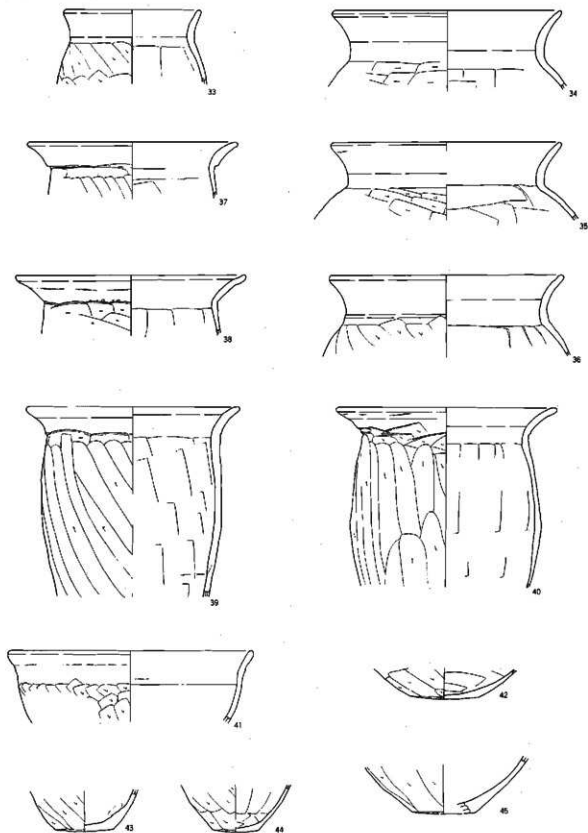
第349图 C区第6号住居跡遺物分布图(2)



第350图 C区第6号住居跡出土遺物(1)

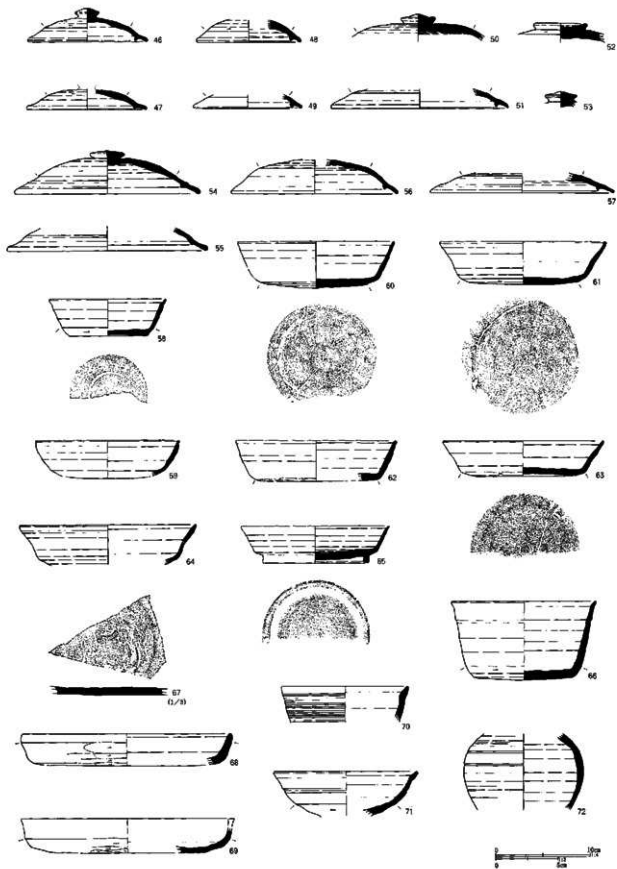


第351图 C区第6号住居跡出土遺物(2)

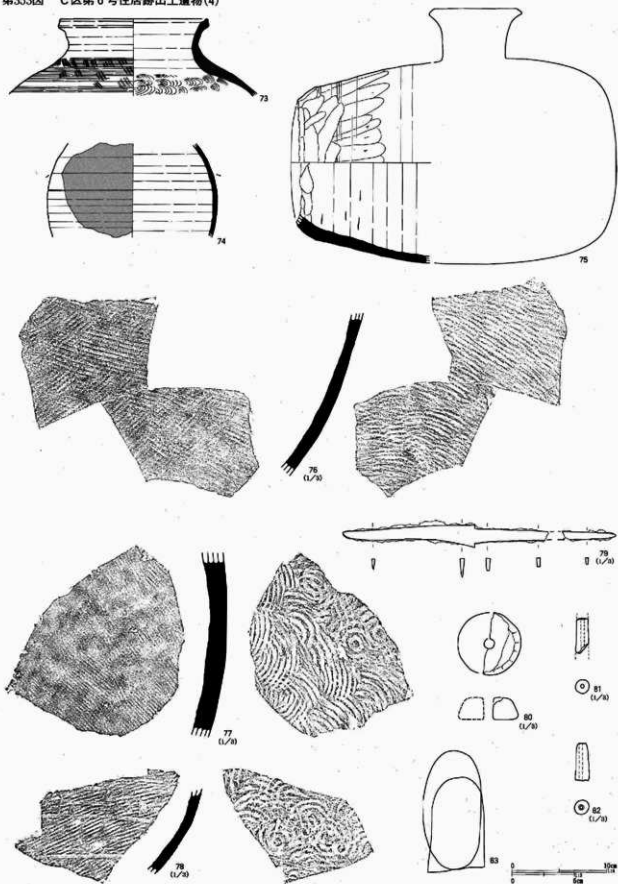


0 10cm

第352图 C区第6号住居跡出土遺物(3)



第353图 C区第6号住居跡出土物(4)



番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
25	土師皿	(17.0)	3.1		A B	B	橙褐色	55%	No236-238-239他。覆土上層
26	土師皿	(17.5)	3.8		A B D	B	褐色	20%	No389。覆土下層
27	土師皿	(16.8)	4.0		A B	B	褐色	25%	No108-165。覆土上層
28	土師皿	(19.0)	3.1		A D	C	淡褐色	15%	覆土下層
29	土師陶文坏	(18.2)	7.1		A B F	A	橙褐色	30%	No200-349他。覆土上層。内面放射陶文
30	土師碗	(20.8)	7.2		A B C	B	橙褐色	10%	覆土上層
31	土師小空甕	11.0	10.9		A B	A	橙褐色	50%	Pri3 No411。覆土下層。胴部外面保付着
32	土師小空甕	13.8	13.0		A B D F	B	褐色	40%	No422。覆土上層
33	土師小空甕	(14.0)	7.9		A B C	C	褐色	30%	No12-316。覆土上層。外部表面やや風化
34	土師壺	(23.7)	8.5		A B	B	褐色	20%	No468。覆土上層
35	土師壺	(23.8)	8.2		A B	B	淡褐色	20%	No176。覆土上層
36	土師壺	(24.2)	8.7		A B G	A	橙褐色	30%	No189。覆土上層
37	土師甕	(21.6)	5.9		A B G	C	暗褐色	20%	No423。床面
38	土師甕	(24.0)	6.4		A B C G	A	橙褐色	20%	No408。覆土上層
39	土師甕	22.0	20.2		A B D G	A	橙褐色	90%	No400。ほぼ床面。外面及び口縁部黒色
40	土師甕	22.4	19.1		A B G	A	橙褐色	75%	No442-451。床面+覆土下層
41	土師瓶	(25.4)	7.6		A B	B	橙褐色	30%	No32他。覆土上層
42	土師壺		3.1	(7.2)	B F G	B	褐色	40%	No413。覆土上層
43	土師甕		4.2	(6.3)	A B G	B	褐色	30%	No453。覆土上層。外面二次焼成を受ける
44	土師甕		4.9	(4.8)	A B	C	黒褐色	40%	No202。覆土上層。全体黒く変色
45	土師壺		5.9	6.7	A B	B	淡褐色	50%	No30-144。覆土上層。内面黒く変色
46	須恵壺	(12.3)	3.5		B C 片	A	青灰色	35%	No470。覆土下層。未野産
47	須恵壺	(12.7)	2.1		B C 片	A	青灰色	15%	2号カマド内。未野産
48	須恵壺	(10.6)	2.4		B C	A	青灰色	15%	No309。覆土上層。硬質。産地不明
49	須恵壺	(11.3)	1.5		B	B	灰色	5%	覆土下層。未野産?
50	須恵壺		2.8		B C 片	C	灰色	35%	No163。覆土上層。未野産。つまみ径3-7cm
51	須恵壺	(18.6)	2.0		A 片	C	黄灰色	20%	覆土下層。未野産
52	須恵壺		1.8		C 片	C	黒灰色	85%	No152。覆土上層。未野産。つまみ径5-4cm
53	須恵壺		1.6		B 片	B	灰色	100%	No156。覆土中層。未野産
54	須恵壺	(19.4)	4.6		C 片	C	淡灰褐色	40%	No306。覆土上層。未野産
55	須恵壺	(20.8)	2.4		B C	B	黄褐色	25%	No78。覆土上層。未野産?
56	須恵壺	(17.4)	3.6		B C 片	D	黒褐色	30%	No107。覆土上層。未野産
57	須恵壺	(19.2)	2.1		B 片	B	灰色	20%	覆土上層。未野産
58	須恵坏	12.2	4.1	8.5	C 片	C	黄灰色	45%	No362。覆土上層。未野産。底部3c手法
59	須恵坏	(15.0)	3.7		C 片	B	灰色	35%	覆土上層。未野産
60	須恵坏	(16.4)	4.9	11.3	C 片	B	灰色	45%	No28-29-181-182。覆土上層。未野産。底部3a手法
61	須恵坏	17.3	4.6	11.4	C 片	B	淡灰色	70%	No10-20-219-467。覆土上層。未野産。底部3a手法
62	須恵坏	(16.8)	4.3		B F 片	B	灰色	10%	No398 床面。未野産。底部2a手法
63	須恵坏	(16.8)	3.7	(13.0)	B C 片	B	明灰色	30%	No421。覆土上層。未野産。底部3a手法
64	須恵坏	(18.6)	4.2		B 片	B	黄灰色	30%	No83。覆土上層。未野産
65	須恵高台坏	15.6	3.9	11.1	B	A	明灰色	50%	No190。覆土上層。秋間産。底部3a手法
66	須恵碗	(15.1)	8.2	10.6	C 片	B	灰青色	35%	No18。覆土上層。未野産。底部3c手法
67	須恵盤		3.2	(9.3)	B D F	B	淡茶色	10%	No269。覆土上層。未野産。底部内面同心円当て具
68	須恵盤	(22.0)	3.2		B C	A	灰色	5%	覆土。未野産
69	須恵盤		2.7	(15.2)	B	A	灰色	5%	覆土上層。未野産
70	須恵磨鉢	(13.3)	3.9		B C	A	淡青灰色	5%	覆土。外面カキ目。秋間産
71	須恵高坏	(15.0)	4.7		B	A	明灰色	15%	No294-206。覆土上層+中層。湖西産
72	須恵瓶		8.0		C 片	A	青灰色	35%	No402 床面。未野産。水痕
73	須恵壺	(15.4)	8.0		B C 片	A	青灰色	25%	No27。覆土上層。未野産
74	須恵長頸瓶		9.8		B F	A	淡灰色	5%	No425他。床面。湖西産か。外面自然釉
75	須恵甕		14.1		C 片	A	暗青灰色	35%	No458。ほぼ床面。未野産。模様の可能性もあり
76	須恵甕				B	B	灰白色		No22-463。秋間産。網斜格子叩き+同心円当て具
77	須恵甕				C 片	B	暗灰色		No296。覆土上層。未野産

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
78	須恵甕				片	B	淡灰色		No.311, 覆土上層, 未野産, 裏面同心円状当具
79	刀子	1号カマド掘り方内No.1 覆上下層, 残長20.3cm							
80	石製紡錘車	No.301, 覆土上層, 推定径4.9cm, 孔径0.75cm, 高さ1.7cm, 重さ29.76g							
81	上甕	覆土上層, 長さ2.7cm, 最大径1.1cm, 孔径0.3cm, 重さ3.20g, 胎土F, 焼成B, 淡茶色, 残存率40%							
82	七瀬	覆土上層, 長さ2.9cm, 最大径1.1cm, 孔径0.3cm, 重さ3.24g, 胎土F, 焼成B, 淡茶色, 残存率50%							

67～69は盤。底部はいずれも手持ちヘラケズリ。67は内面に同心円当てで具痕が残る。70は磨鉢か。外面にカキ目が施される。A区第2号特殊遺構から出土した磨鉢と類似する。秋間産と思われる。71は高坏の可能性がある。胎土から湖西産と考えられる。72は水瓶か。73は壺。74は長頸瓶(ラスコ瓶?)胴部片。薄手で焼きはやや甘い。外面は全面淡黄緑色の自然釉が掛かる。内面は黒色粒子の吹き出しが顕著である。湖西産か。75は横瓶と思われる。つくりは非常に雑である。未野産。79は刀子。両刃式。80は石製紡錘車で、欠損している。

須恵器は58片出土し、内訳は坏が261点(未野産259・南比企産1・湖西産1)、無台碗1点(未野)、高台坏1点(秋間産)、蓋144点(未野140・群馬産?1・不明3)・盤7点(未野6・不明1)、磨鉢1点(秋間)、高坏1点(湖西)、壺瓶類7点(未野5・湖西1・秋間?1)、甕35点(未野33・秋間?2)となる。

住居の時期は熊野Ⅱ期と考えられる。

C区第7号住居跡(第354図)

C区第7号住居跡は28-15-16グリッドに位置す

る。重複する第17・18号掘立柱建物跡を切り、第3号溝跡と第21号土壇に切られていた。

平面形態は方形で、規模は長軸長3.30m、短軸長2.88m、深さ0.25mである。主軸方位はN-55°-Eを指す。

床面は概ね平坦で全体に堅く踏み固められていた。埋土はローム粒子混じりの黒褐色土を基調としていた(第1・2層)。

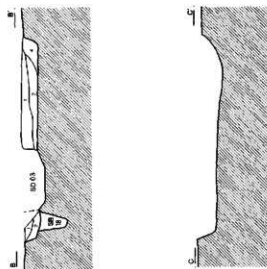
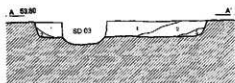
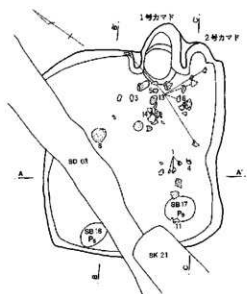
カマドは北東壁に2基検出された。遺存状態から第2号カマドから第1号カマドに付け替えられたものと考えられる。第1号カマド燃焼部は壁を切り込んで構築されている。南側側壁上部は強く被熱していた。また、燃焼部内とその前面には礫が数個散乱していた。カマド構築材として使用されたものであろう。埋土は2層に分かれ、いずれも天井部崩落土と考えられる。明確な灰層は遺存していなかった。袖は黄灰色粘土を積み上げて構築されていたが遺存状態は悪い。

第2号カマドは第1号カマドの南に隣接している。埋土下層に焼土粒子混じりの褐色土、側壁に被熱焼

第136表 C区第7号住居跡出土遺物観察表(第355図)

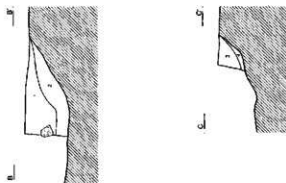
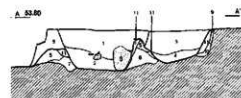
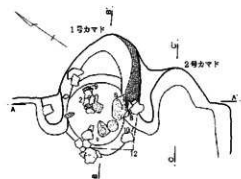
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵坏	(12.4)	3.0	5.9	B片	A	灰色	40%	No.33-34・35, 覆土下層+ははは表面, 未野産
2	須恵坏	13.5	3.9	5.6	BDF片	B	灰褐色	80%	1号カマド内No.7・10・11他, 未野産
3	須恵坏	(12.6)	3.3		B C片	A	青灰色	35%	No.4, 覆土中層, 未野産, 体部下端回転ヘラケズリ
4	須恵坏	(13.4)	3.5	(8.2)	B C片	A	灰色	20%	No.32, 覆土中層, 未野産, 底部手持ちヘラケズリ
5	須恵皿		1.6	(7.0)	B F片	B	褐色	20%	No.8, 覆土上層, 未野産
6	須恵高台碗	14.0	5.6		AB	C	淡褐色	95%	No.25, 覆土中層, 産地不明(在地産)
7	須恵高台碗	(15.0)	4.2		BDF片	D	褐色	25%	覆土, 未野産, 軟質須恵器
8	須恵高台碗		3.7	(6.6)	B F片	B	灰褐色	20%	1号カマド内No.26, 未野産
9	須恵高台碗		3.8	(5.8)	F D片	D	褐色	30%	1号カマド内No.13, 未野産, 内面重ね焼き痕残る
10	須恵甕?				C片	A	青灰色	30%	1号カマド内No.24, 未野産, 内面厚塗, 転用説又は内面焼か
11	土師小型甕	(12.0)	7.7		AB	B	橙褐色	25%	No.40, 覆土上層
12	土師甕	18.9	15.7		BCD		橙褐色	70%	1号カマド内No.16-21
13	土師甕	20.0	(19.5)		ABH	A	褐色	40%	No.6・7他, 覆土中層
14	須恵甕		17.9	(13.7)	C片	A	暗青灰色	35%	No.8・11・12他, 覆土上層, 未野産

第354図 C区第7号住居跡



SJ07

- 1 黒褐色土 ローム粒子多量
- 2 黒褐色土 ロームブロック混入
- 3 褐色土 ローム粒子多量
- 4 黄褐色土 ロームブロック少量
ローム粒子混入

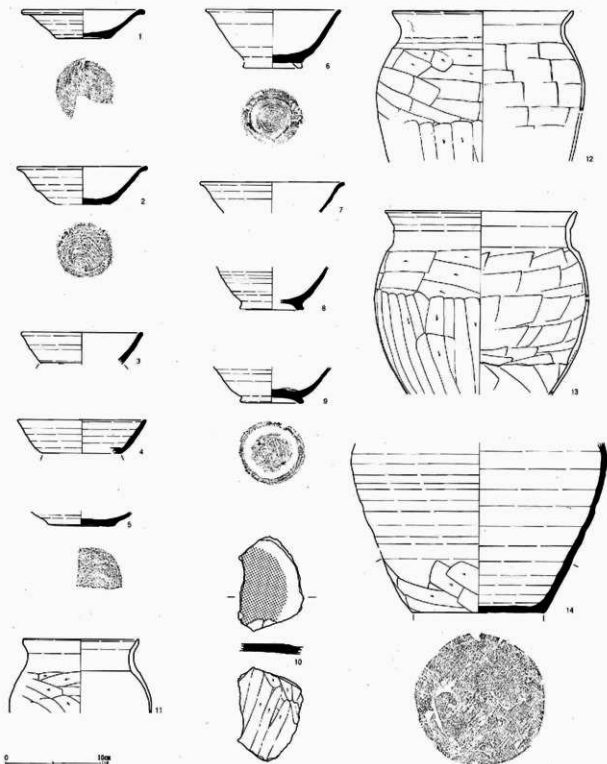


カマド

- 1 褐色土 ローム粒子・粘土粒子少量
- 2 褐色土 粘土粒子多量、黄灰色粘上少量
- 3 褐色土 ローム粒子少量
- 4 褐色土 粘土粒子・炭化物混入、黄灰色粘上少量
- 5 黄灰色粘土 粘土粒子・ローム粒子混入
- 6 黄灰色粘土
- 7 黄褐色土 ローム粒子・黒色土混入
- 8 褐色土 粘土・ローム粒子・粘土混入
- 9 黄褐色土 ロームブロック・粘土粒子混入
- 10 黄褐色土 ローム主体、粘土粒子少量
- 11 純粋粘土



第355図 C区第7号住居跡出土遺物



土が残されていたが大半は失われており、詳細は不明である。

ピット、壁溝は検出されなかった。

出土遺物は須恵器・皿・高台碗・甕、土師器・甕・小

型甕がある(第355図)。1は浅身の坏。焼きはよい。

2は坏で底部は回転米切り。3・4は混入。5は皿。

6～9は高台碗である。6は非末野産の在産須恵

器か。10は盤か。内面が磨滅しており、転用碗また

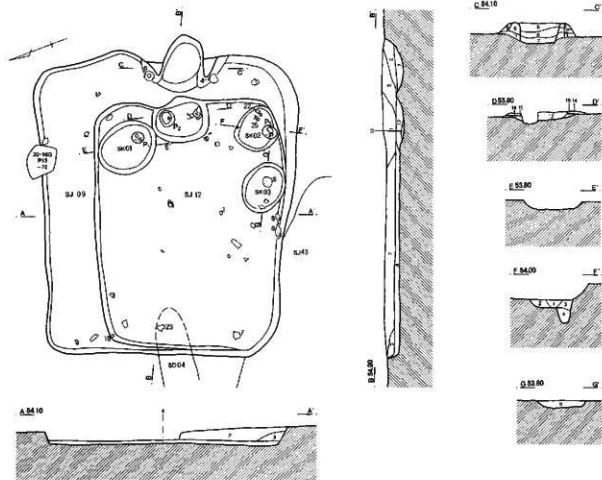
は円面視であろう。12・13は「コ」の字状口縁甕。14は甕。胴部下端と底部はヘラケズリ。

須恵器は80片出土し、内訳は坏が45点(末野産42・南比企産3)、高台椀20点(末野)、皿1点(末野)、甕11点(末野9・南比企2)、蓋2点(末野)、盤1点(末野)である。

住居の時期は熊野覆期を中心とした年代と考えておきたい。

C区第9号住居跡 (第356図)

第356図 C区第9・12号住居跡



SJ09・SJ12

- 1 黒褐色土 ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 2 黒褐色土 ローム粒子多量
- 3 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック混入
- 4 暗褐色土 ローム粒子多量
- 5 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子多量
- 6 暗赤褐色土 焼土粒子多量
- 7 黒褐色土 灰混入
- 8 灰白色粘土 黒褐色土混入
- 9 灰白色粘土 黒褐色土混入
- 10 黄褐色土 粘質土

- 11 暗褐色土 ロームブロック多量
- 12 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子混入
- 13 褐色土 ローム粒子混入
- 14 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量
- 15 暗褐色土 ローム粒子多量

SJ12 SK02・03

- 1 黒褐色土
- 2 褐色土 ローム粒子少量
- 3 暗褐色土 ロームブロック多量
- 4 暗褐色土 ローム粒子・炭化物少量
- 5 暗褐色土 ロームブロック混入

0 2m

C区第9号住居跡は30-15・16グリッドに位置する。重複する第10・43号住居跡を切り、第4号溝跡に上面を削平されていた。また、入れ子状に第12号住居跡が重なっているが、本住居跡の方が新しく、第12号住居跡から本住居跡に建て替えられたものと推定される。

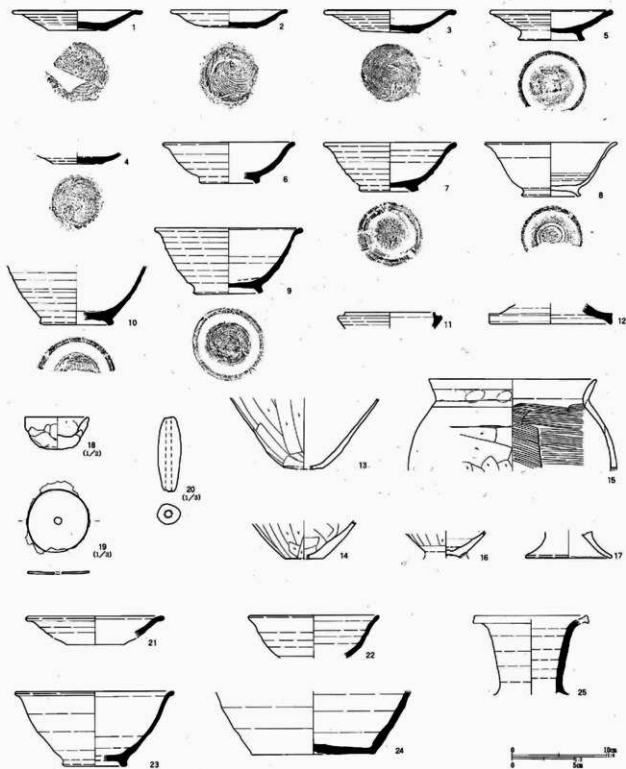
平面形態は長方形で、規模は長軸長4.74m、短軸長4.20m、床面までの深さ0.15mである。主軸方位はN-115°-Eを指す。

床面は概ね平坦で、全面貼床されていた。壁際は
やや軟弱な部分があるが、中心付近は強く踏み固め
られていた。埋土はローム粒子を多量に含む黒褐色

土を基調としていた。

カマドは東壁に設けられていた。燃焼部先端は壁
外に延び、底面は皿状に窪んでいる。埋土は第5・

第357図 C区第9・12号住居跡出土遺物



第137表 C区第9・12号住居跡出土遺物観察表 (第357図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵皿	(13.5)	2.1	6.0	B/F片	B	灰色	50%	No.15, 床面, 未野産。口縁内面凹む
2	須恵皿	12.0	1.9	5.5	B/D/G片	B	褐色	95%	覆土, 未野産
3	須恵皿	13.0	2.4	6.0	F片	A	灰色	80%	覆土, 未野産
4	須恵皿		1.2	5.1	B/C/D片	C	灰褐色	80%	カマド内No.11, 未野産
5	須恵高台皿	(12.4)	3.2	6.3	B/C/G片	D	暗褐色	50%	覆土, 未野産。口縁内面凹む
6	須恵高台皿	(13.6)	4.3	(5.6)	B/F/C	D	淡灰色	20%	覆土, 胎土粗雑で気泡多い。在地産
7	須恵高台皿	(13.6)	5.2	5.2	B/C片	D	黒褐色	30%	No.11, ほぼ床面, 未野産。内外面とも黒色
8	土師質高台皿	(13.6)	5.7	5.6	B/C/D	D	明褐色	33%	カマド, ロクロ土師質, 産地不明, 底部渦巻状沈線
9	須恵高台皿	15.2	7.0	6.5	B/F片	B	暗灰色	90%	カマド内No.2, 未野産
10	須恵高台皿		6.3	(6.8)	B/D/G片	D	淡褐色	30%	カマド, 未野産
11	須恵環	(9.4)	1.7		B	A	黒灰色	25%	覆土, 東海産(湖西か)。受部推定径10-7cm 混入品
12	須恵壺		2.1	(12.7)	B/D	A	灰色	20%	覆土, 未野産
13	土師甕		7.5	(4.1)	ABG	A	褐色	40%	覆土, 底部砂付着
14	土師甕		4.0	(4.0)	ABG	B	褐色	40%	覆土, 器壁厚い
15	土師甕	(17.6)	9.6		AB/F	A	暗褐色	15%	覆土, 肩部無調整 内面木口ナデ
16	土師台付甕		2.4		D/G	B	褐色	60%	覆土
17	土師小壺台付甕		2.8	(8.8)	ABG/B	B	橙褐色	50%	カマド一括
18	手づくね土器	3.3	1.7		B	A	褐色	90%	覆土, 接合痕顯著に残す 整形雑
19	鉄製紡錘車	No.3, 床面, 径5.0cm, 厚さ0.2cm, 筋輪							
20	土錘	覆土, 長さ5.8cm, 最大径1.8cm, 孔径0.5cm, 重さ17.78g, 胎土B/D, 焼成B, 赤褐色, 残存率10%							
21	須恵皿	(14.0)	2.3		B/C/D	C	淡灰褐色	15%	SJ12カマド, 未野産
22	須恵高台皿	(13.5)	4.5		片	A	灰色	15%	SJ12Sx-2 No.2, 未野産, ほぼ床面
23	須恵高台皿	(16.5)	7.9	(6.4)	B片	B	灰褐色	25%	SJ12No.1, 床面, 未野産
24	須恵甕		6.7	(12.9)	B片	B	青灰色	25%	SJ12覆土, 未野産
25	須恵長脚瓶		7.8		B/C片	B	青灰色	30%	SJ12Sx-2 No.3, 覆土上層, 未野産, 太頸知味

6層が天井部崩落土、第7層が灰層に相当しよう。袖は灰白色粘土をベースに構築されていた。

ビットは3本検出されたが、遺構に伴うものではない。壁溝は検出されなかった。

遺物は須恵器環・高台皿・皿・高台皿・脚付壺、土師器甕・小型台付甕、手捏土器、土錘、鉄製紡錘車がある(第357図1-20)。1-4は須恵器皿。底部は回転糸切り後無調整。5は高台皿である。6-10は高台皿で、器高の浅いもの(6・7)と深身のもの(9・10)がある。6は還元焰焼成されているが、胎土が極めて粗く、黒色粒子を多量に含む。在地産か。7は未野産であるが、厚手でぼったりしたつくり。8はロクロ土師器とした方が良くもかもしれない。底部外面には渦巻状の沈線が残る。11はいわゆる環Hで混入。東海産と思われる。12は壺脚部か。混入の可能性が高い。15は土師器甕で、口縁部はくの字に折れ、胴部器壁は厚い。粘土積み上げ痕を顯著に残し、胴部上端はケズリが及んでいない。内面は木口状工具に

よる整形がなされている。13-14は「コ」の字状口縁部の承譜を引くものであろうが、14は器壁が分厚くなっている。18は手捏土器で、接合痕を顯著に残し、整形は雑である。19は鉄製紡錘車の紡輪である。

住居の時期は熊野Ⅱ期と考えられる。

C区第10号住居跡 (第358・359図)

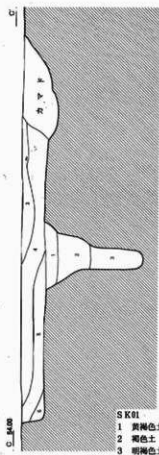
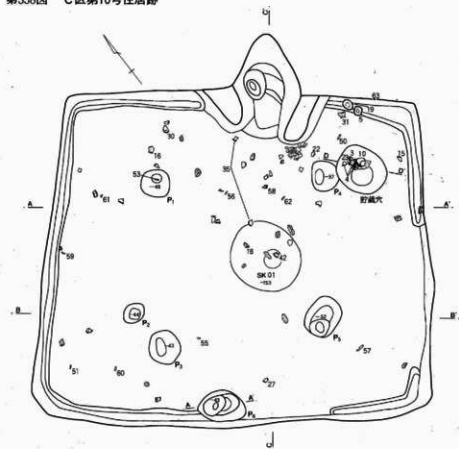
C区第10号住居跡は30-16・17グリッドに位置する。重複する第9号住居跡に西隅部を僅かに切られていた。

平面形態は方形で、規模は長軸長6.30m、短軸長5.34m、深さ0.38mである。主軸方位はN-39°-Eを指す。

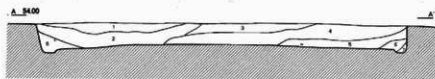
床面は概ね平坦で全体に堅く踏み固められていたが、壁際がやや軟弱であった。埋土は第4・5層中にロームブロックが多量に含まれており、人為的に埋め戻された可能性がある。

カマドは北東壁に設けられていた。燃焼部は壁を切り込んでおり、底面は皿状に窪む。また、西側壁

第358図 C区第10号住居跡

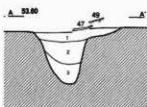


SK01
1 黄褐色土
2 褐色土
3 暗褐色土



SJ10

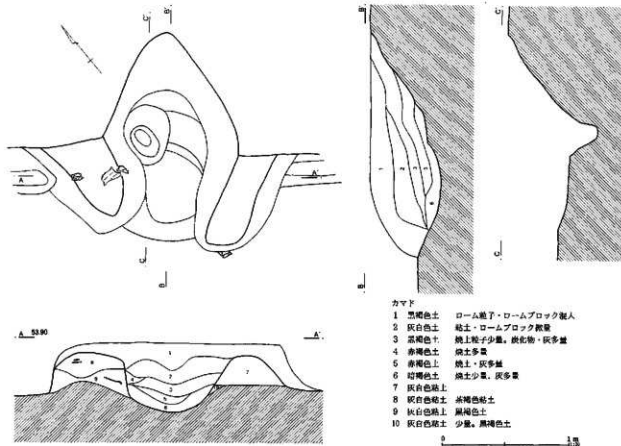
- 1 暗褐色土 ローム粒子
- 2 黒褐色土 ローム粒子多量
ロームブロック・焼土粒子
少量
- 3 灰褐色土 灰色粘土ブロック・焼土粒子
混入
- 4 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック
多量
- 5 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック
・焼土粒子多量
- 6 黒褐色土 ローム粒子
- 7 褐色土 ロームブロック多量
貯蔵穴



ピット6

- 1 暗褐色土 ローム粒子多量
- 2 暗褐色土 茶褐色粘質土ブロック混入
- 3 暗褐色土 茶褐色粘質土ブロック多量
ロームブロック多量

第359図 C区第10号住居跡カマド



側にはピット状に掘り込まれた部分がある。埋土は第2～5層が天井部崩落土、第6層が灰層である。袖は灰白色粘土を積み上げて構築されていた。

ピットは6本検出された。Pit 1・2・4・5が支柱穴に相当しよう。Pit 3の層属は不明確、Pit 6は作う可能性がある。

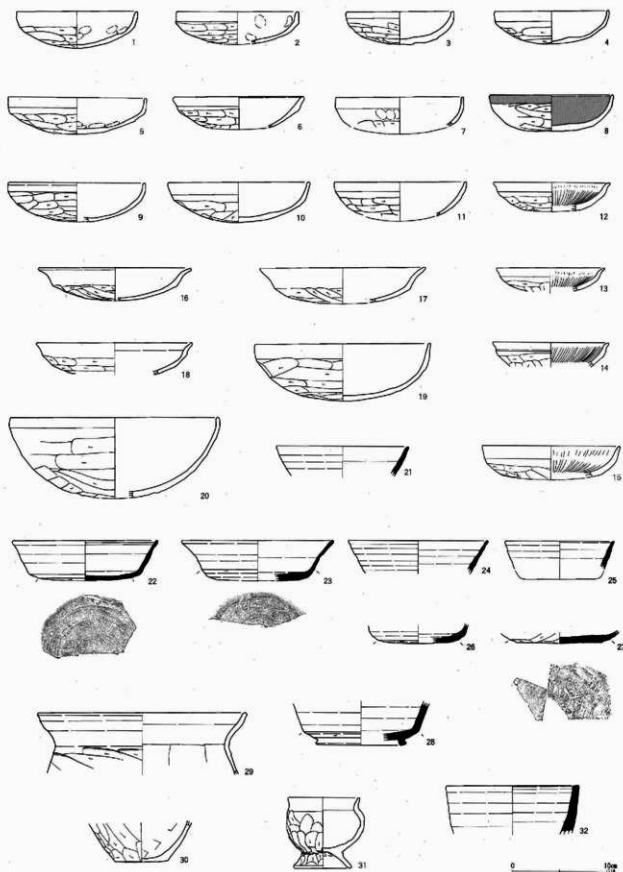
土壌は1基、住居中央部から検出された。上面に貼床されており、通常の床下土壌とは形態が異なる。住居よりも古い土壌(井戸跡?)の可能性がある。埋土は第1層が貼床層。第2層はロームブロック混じりの褐色土、第3層は褐色粘土とロームブロック混じりの明褐色土で、故意に埋め戻されたものと推定される。壁溝は一部途切れる箇所がある。

出土遺物は比較的まとまっている。土師器杯・椀・皿・暗文環・甕・小型台付甕、須恵器杯・高台杯・磨鉢・蓋・壺・瓶・円面硯・甕、土錘、鉄製品の他、編物石がある(第360～362図)。1～5・7～11は土師器杯であ

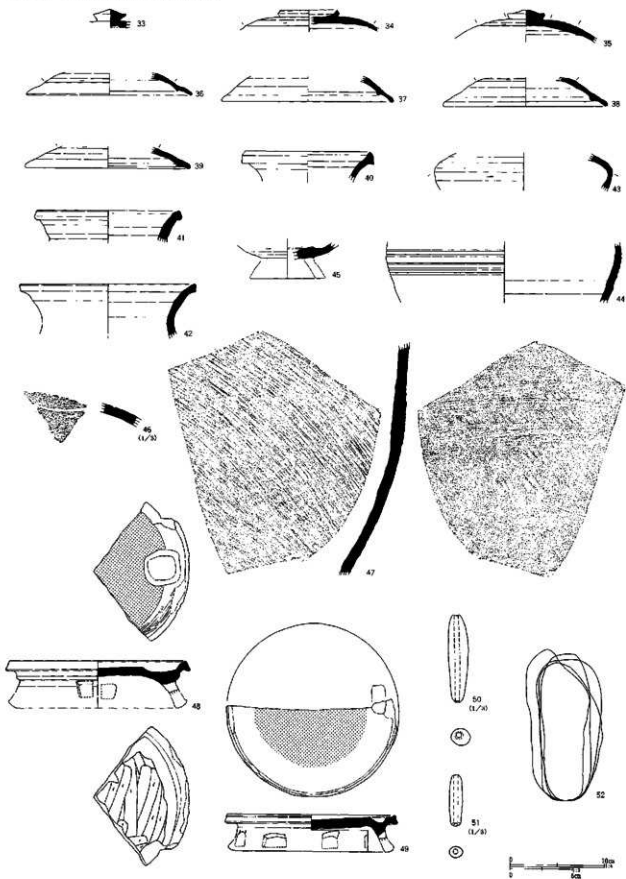
る。8は口縁部外面と内面に赤彩痕が残る。全体に厚手で、硬質の焼き上がりである。統比企型杯か。他は丸底の北武蔵型杯である。12～15は暗文環。内面に放射暗文が施文される。

21～27は須恵器杯である。分量差があり25・26が小型、21・24が中型、22・23・27が大型品である。28は高台杯と思われる。口縁部が欠き、底部下端以下は回転ヘラケズリ調整。器壁が厚く、高台は底部周縁よりも内側に付く。末野産。31は小型台付甕のミニチュア品。32は磨鉢か。33～39は須恵器蓋。34はリングつまみをもつ。端部の特徴から群馬産と考えられる。39はかえり部分の器壁が厚く、端部を折り返してかえりをつくったものと思われる。素地土が粗く末野産に似るが、産地は不明確。40～46は壺瓶類。41は焼きの良い須恵器で産地不明。45は湖西産の脚付長頸瓶と思われる。46は沈線とカキ目が巡る。群馬産か。47は須恵器大甕。外面は平行叩き、内面は

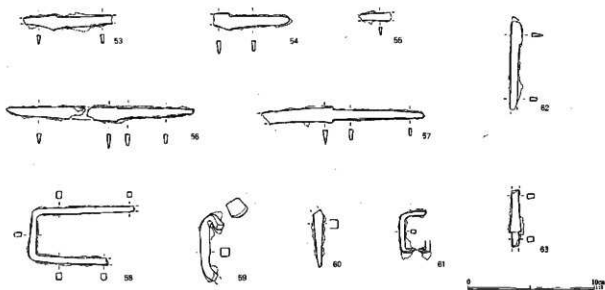
第360图 C区第10号住居跡出土遺物(1)



第361图 C区第10号住居跡出土物(2)



第362図 C区第10号住居跡出土遺物(3)



平行叩き状の当て具の上をロクロナデしている。末野産。48は須恵器円面硯。本住居跡と、第15号住居跡、第22号住居跡から出土した破片が接合した。硯面の一隅を窪ませて墨溜めをつくる。脚部は透孔の一部が残る。裏面は手持ちへラケズリ調整で、赤色顔料が染み込んでいる。朱墨と思われる。胎土に片岩が含まれ、末野産の可能性ある。49も同類の円面硯で、硯面に墨溜め、脚部に方形の透孔が開く。胎土は粗砂粒を多く含む。末野産か。53~57は鉄製

刀子。58は門金具か、59・60は鉄釘。59の頭部は方形。61は鋸か。62・63は鉄鎌。62は片刃簡鎌と思われる。63は茎部で、開翼状となる。

須恵器は188片出土し、内訳は坏が92点(末野産90・不明2)、椀が2点(末野)、高台坏1点(末野)、蓋57点(末野55・群馬1・不明1)、甕19点(末野)、壺瓶類11点(末野8・湖西1・群馬1・不明1)、盤2点(末野)、磨鉢2点(末野)、円面硯2点(末野)。

住居の時期は熊野Ⅱ期に位置付けられる。

第138表 C区第10号住居跡出土遺物観察表 (第360~362図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師環	(12.6)	3.9		AB	B	茶褐色	25%	覆土。外面風化
2	土師環	(12.7)	3.4		AB	B	茶褐色	35%	覆土
3	土師環	11.2	3.4		ABC	C	暗茶褐色	95%	貯蔵穴内No1。全体に厚手。黒斑あり
4	土師環	11.9	3.5		AB	B	茶褐色	80%	貯蔵穴内No5・6・7
5	土師環	14.4	3.9		BG	B	茶褐色	100%	No3。覆土下層
6	土師皿	(13.6)	3.3		ABG	A	橙褐色	35%	覆土。粉っぽい胎土
7	土師環	(13.4)	3.1		AB	B	茶褐色	15%	覆土
8	土師環	(13.0)	3.8		B	B	茶褐色	20%	覆土。純比企型か。口縁外面十内面赤彩痕
9	土師環	(14.4)	4.1		AG	B	茶褐色	40%	覆土
10	土師環	14.8	4.2		A	A	淡褐色	65%	貯蔵穴内No2
11	土師環	(13.8)	3.6		AB	B	淡褐色	15%	覆土
12	土師暗文環	(12.0)	2.9		B	A	茶褐色	15%	覆土。内面放射暗文(下→上)
13	土師暗文環	(11.4)	2.4		AB	A	淡褐色	15%	覆土。内面放射暗文(下→上)
14	土師暗文環	(12.2)	2.6		BC	A	橙褐色	20%	覆土。内面放射暗文
15	土師暗文環	(14.4)	3.4		AB	B	橙褐色	15%	No8。覆土中層。内面放射暗文
16	土師皿	(16.0)	3.5		AB	A	褐色	25%	No40。覆土中層
17	土師皿	(17.2)	3.7		A	B	茶褐色	20%	覆土
18	土師皿	(16.4)	3.3		AB	B	茶褐色	50%	No30。覆土中層

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存	備考
19	土師環	18.4	6.0		C G	A	明褐色	85%	No2. 覆上下層
20	土師輪	(21.7)	8.6		A B	B	橙褐色	15%	覆土
21	須恵環	(13.8)	3.2		B	C	灰白色	10%	カマド。未野産か？
22	須恵環	(15.2)	4.2	(10.0)	B片	B	灰色	40%	攪乱面 No5. 覆土上層。未野産
23	須恵環	(15.8)	4.3	(10.2)	片	B	灰色	25%	貯蔵穴内No4. 未野産
24	須恵環	(14.6)	3.5		B	C	灰白色	15%	SJ10 SJ22西。未野産か？
25	須恵環	(11.5)	2.9		B C片	B C	暗灰色	15%	覆土。未野産
26	須恵環		1.9	(8.5)	B片	A	灰色	20%	覆土。未野産
27	須恵環		1.3	(9.1)	B C片	A	灰色	20%	No58. 覆土中層。未野産。底縁手持ちヘラケズリ
28	須恵高台環		4.6	8.2	B C片	A	茶灰色	20%	覆土。未野産
29	土師甕	(21.8)	6.4		A B	B	明褐色	65%	覆土
30	土師甕		4.2	5.4	B G	A	淡褐色	85%	No39. 覆土上層
31	小型台付甕	7.4	7.5	6.0	A B C G	A	褐色	95%	No1. ぼぼ灰面。ミニチュア品
32	須恵磨鉢	(13.8)	5.1		B片	A	青灰色	10%	覆土。口縁部内挿する面をもつ。未野産
33	須恵蓋		1.9		A B	C	淡褐色	95%	覆土。未野産
34	須恵蓋		2.3		C	A	淡灰色		SJ09+SJ10. 群馬産
35	須恵蓋		3.3		F G片	B	灰茶色	80%	No17-32. 覆土上層十中層。未野産
36	須恵蓋	(17.4)	2.3		B片	C	灰色	15%	覆土。未野産
37	須恵蓋	(18.0)	2.7		B C片	B	明黄灰色	15%	覆土。未野産
38	須恵蓋	(17.1)	3.0		B片	B	淡灰色	15%	覆土。未野産
39	須恵蓋	(17.2)	2.2		C F	C	灰白色	10%	覆土。産地不明
40	須恵長頸瓶？	(13.2)	3.2		B片	A	暗灰色	15%	覆土。未野産
41	須恵壺	(15.0)	3.3		B C	A	暗灰色	5%	確認面。産地不明
42	須恵壺	(18.4)	5.7		C片	A	暗灰色	15%	No26. 覆土中層。未野産
43	須恵長頸瓶		3.8		B片	A	灰色	10%	覆土。未野産。長頸瓶胴部 胴部径(18.8cm)
44	須恵瓶胴部		6.3		B C片	A	暗青灰色	10%	覆土。未野産。沈線5条 横的に施文
45	須恵長頸瓶		2.2		B F	A	青灰白色	20%	覆土。湖西産
46	須恵壺				B C	C	灰白色		覆土。群馬(碓氷産か?)。沈線1条胴部に施文
47	須恵大甕				B C片	A	暗青灰色		Pi6No3. 覆土下層。未野産。大甕胴部片
48	須恵円面硯	(18.5)	3.7		C片	B	淡灰色	30%	SJ15+SJ22Pi2接合。未野産か
49	須恵円面硯	(17.8)	2.7		C H片	C	淡黄灰色	50%	Pi6上面No2. 覆土下層。未野産か
50	土鍾	No4. 床面。長さ6.9cm。最大径1.3cm。孔径0.4cm。重さ13.76g。胎土B。焼成B。明褐色。残存率96%							
51	土鍾	No51. 覆土下層。長さ(4.1cm)。最大径0.9cm。孔径0.3cm。重さ4.13g。胎土B。焼成A。暗褐色。							
53	刀子	Pi1 No1. 残長7.0cm							
54	刀子	SK01内覆土上層。残長5.9cm							
55	刀子	No55. 覆土上層。残長2.3cm。刀薄片。No53orNo54orNo62と同一か？							
56	刀子	No25. 覆土下層。残長13.3cm。接合しないか同一と思われる							
57	刀子	No57. 覆土下層。残長12.7cm							
58	門金具	No20. 覆土中層。残長8.0cm							
59	釘	No48. 覆土上層。残長5.3cm							
60	釘	No52. 覆土上層。残長4.5cm							
61	不明鉄製品	No43. 覆土中層。残長3.2cm。ねじれあり 疑か？							
62	鉄錐	No21. 覆土上層。残長6.8cm。片刃跡							
63	鉄鏝	30-17G No11. 覆土上層。残長4.5cm。頭部片。隅線跡							

C区第11号住居跡(第363図)

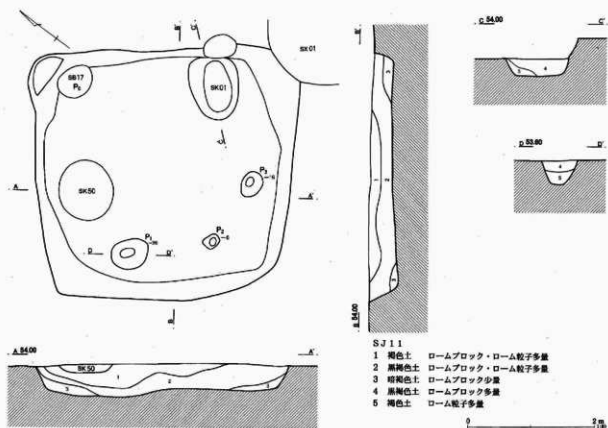
C区第11号住居跡は29-16グリッドに位置する。重複する第1号特殊遺構を切り、第17号掘立柱建物跡及び第50号土壌に切られていた。

平面形態は方形で、規模は長軸長4.14m、短軸長4.02m、深さ0.52mである。主軸方位はN-54° -

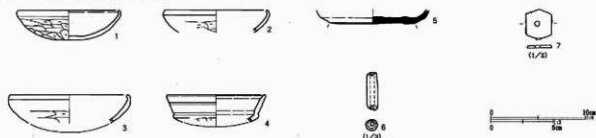
Eを指す。

床面は凹凸が顕著で比較的堅く踏み固められていた。壁の立ち上がりは緩く通常の住居跡とは趣を異にする。埋土は第1・2層にルームブロックが多量に含まれ、人為的に埋め戻された可能性が高い。カマドは検出されなかった。土壌は1基北東壁際

第363図 C区第11号住居跡



第364図 C区第11号住居跡出土遺物



第139表 C区第11号住居跡出土遺物観察表 (第364図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師杯	(10.6)	3.1		AB	A	橙褐色	30%	覆土
2	土師杯	(10.8)	2.4		A	B	橙褐色	10%	覆土
3	土師杯	(12.4)	3.0		AB	B	橙褐色	15%	覆土
4	土師杯	(10.2)	2.8		AB	A	明褐色	25%	覆土。有段口縁環 口縁部沈線2条
5	須恵杯		1.5	9.0	B	A	灰色	30%	覆土。産地不明(群馬または長野)
6	土錘	覆土。長さ3.0cm。最大径0.9cm。孔径0.3cm。重さ2.59g。胎土BCF。焼成A。暗褐色。							
7	不明鉄製品	縦1.6cm。横1.3cm。厚さ0.2cm。混入か							

に掘り込まれていた。深さ0.28m。Pitは3本検出されたが、帰属は不明である。

出土遺物は少なく、土師器杯、須恵器杯、土錘、鉄製品がある(第364図)。1～3は内屈口縁の北武蔵

型杯。4は有段口縁杯である。5は須恵器杯。底部は全面回転ヘラケズリ調整される。7は六角形で中央に小孔が穿たれている。混入か。

住居の時期は不明確である。遺物は熊野I期に比

定され、第1号特殊遺構との関係から古代の住居跡と考えたが、カマドがなく、壁の立ち上がりが緩やかであることなど、中世の竪穴状遺構と共通する特徴も認められる。古代の住居跡としても、通常の住居とは性格は異なるものであろう。

C区第12号住居跡(第356図)

C区第12号住居跡は30-15・16グリッドに位置する。第9号住居跡の内部に重複し、南壁と東壁をほぼ共有すること、第9号住居跡の床面下から検出されたことから、本住居跡から第9号住居跡に建て替えられたものと考えられる。

平面形態は長方形で、規模は長軸長3.95m、短軸長3.00m、深さ0.05mである。主軸方位はN-115°-Eを指す。

床面は平坦である。埋土はローム混じりの暗褐色土で埋め戻されていた(第9号住居跡貼床)。

カマドは東壁の中央部に設けられたものと推定され浅い土壇状の掘り方が遺存していた。埋土には焼土粒子が多量に混在していた(第12層)。

土壇は3基検出された。いずれも浅く掘り方の一部と思われる。壁溝は検出されなかった。

出土遺物は須恵器の皿・高台碗・甕・長頸瓶が検出

された(第357図21-25)。第9号住居跡から出土した遺物とほぼ同時期である。住居の時期は熊野Ⅷ期と考えられる。

C区第14号住居跡(第365図)

C区第14号住居跡は29-16・17グリッドに位置する。第15号住居跡、第1号特殊遺構を切り、第13号住居跡、第22号掘立柱建物跡及び第1号墓跡に切られていた。

平面形態は長方形で、規模は長軸長2.90m、短軸長2.38m、深さ0.30mである。主軸方位はN-64°-Eを指す。

床面は概ね平坦で、堅く踏み固められていた。埋土はローム粒子を多量に含む黒褐色土を基調としていたが、埋め戻されたか否かは判断できなかった。

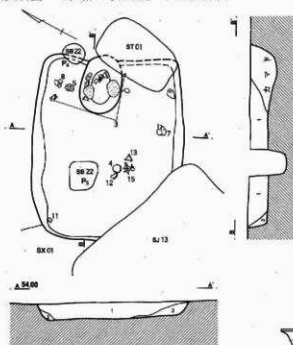
カマドは北東壁に設けられていた。先端は第1号墓跡に切られており判然としませんが、燃燒部は壁内に納まるようである。焚口部の両端には袖石と思われる礫が据えられていた。埋土は上下2層に分かれ、下層には焼土が多量に含まれていた。袖は白色粘土が使用されており明確に把握することができなかった。

ピットは検出されなかった。

第140表 C区第14号住居跡出土遺物観察表(第365・366図)

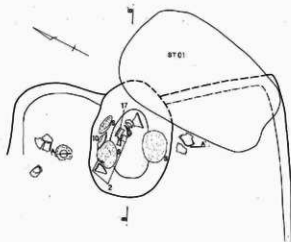
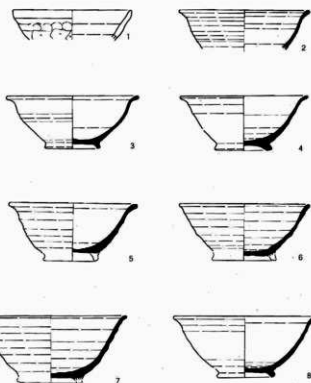
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師坪	(12.4)	3.1		AD	B	褐色	25%	覆土
2	須恵高台碗	(13.4)	4.2		BCF片	B	茶褐色	15%	カマド内No3-15。未野産
3	須恵高台碗	(13.6)	5.6	5.2	BC	C	茶褐色	25%	No1・13。覆土下層。在地産(未野産?)
4	須恵高台碗	(13.2)	5.8	5.1	C片	B	暗青灰色	55%	No6。覆土下層
5	須恵高台碗	13.4	5.4		CFG片	C	灰褐色	80%	No11。床面。未野産。高台剥落
6	須恵高台碗	13.5	5.5		BCE片	D	茶褐色	60%	カマド。未野産。土師質
7	須恵高台碗	15.8	6.8		CF片	C	暗灰褐色	70%	No9。覆土下層。未野産。高台欠失
8	須恵高台碗	14.9	6.6	5.6	BC片	C	暗灰色	55%	No12。覆土下層。未野産
9	須恵高台碗	(14.0)	5.4		CDE片	D	茶褐色	20%	覆土。未野産
10	須恵皿	12.9	2.5	5.5	CEF片	B	淡灰色	95%	カマド内No12。未野産
11	須恵高台碗		2.3	6.0	BC片	C	茶褐色	70%	No4。覆土中層。未野産。底部指圧痕残す
12	須恵坪		3.1	5.2	BEF	B	青灰色	70%	No5。SX01と接合。覆土下層。未野産か
13	須恵鉢	(26.0)	7.3		BE片	A	暗青灰色	20%	No8。覆土中層。未野産
14	土師小型甕	(13.2)	3.7		AG	C	明褐色	10%	覆土
15	土師小盥台付甕		7.9	7.1	AG	C	褐色	70%	No7。覆土下層。外面被熱し器面剥落
16	土師甕		3.7	5.8	AEG	A	淡褐色	70%	覆土。底部黒斑あり
17	土師甕	(20.3)	11.3		ABCG	A	褐色	20%	SJ14カマド内No4+ SX01覆土上層。器壁厚い
18	土罐								覆土。長さ4.3cm。最大径1.0cm。孔径0.35cm。重さ4.17g。胎土A.B。焼成C。茶褐色。残存率95%。
19	土罐								覆土。長さ2.5cm。最大径0.9cm。孔径0.25cm。重さ1.74g。胎土A。焼成A。褐色。上半部欠失

第365図 C区第14号住居跡・出土遺物(1)



SJ14

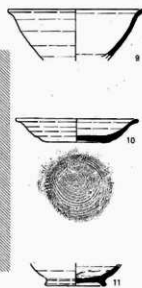
- 1 黒褐色土 ローム粒子多量。炭化物少量
2 赤褐色土 ローム粒子・ロームブロック混入



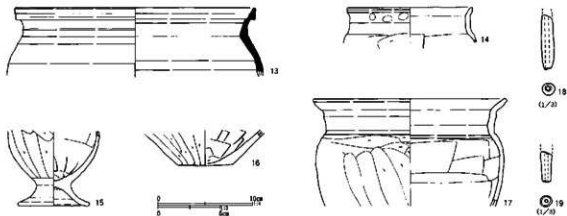
カマド

カマド

- 1 黒褐色土 ローム粒子多量。炭化物少量
2 赤褐色土 焼土粒子多量。焼土ブロック混入



第366図 C区第14号住居跡出土遺物(2)



出土遺物は土師器・甕・台付甕、須恵器・環・皿・高台碗・鉢・土鍾がある(第365・366図)。1は土師器環。体部下半がヘラケズリ調整されている。2～9・11は須恵器高台碗である。口縁部は大きく外反している。大半が末野産であるが、3はロクロ日が目立たず在地産と思われるが、末野産として良いかは不明確である。10は無台の皿。12は坏である。13は鉢。17はいわゆる「コ」の字状口縁甕であるが、器壁は厚く退化形態といえる。16は「コ」の字状口縁甕の底部と思われる。やはり器壁は厚い。

須恵器は167片出土し、内訳は環・高台碗類が149点(末野144・南比企1・不明4)、皿2点(末野)、甕6点、鉢7点、壺・長頸瓶・磨鉢(混入)が各1点、いずれも末野産である。

住居の時期は熊野Ⅵ期と考えておきたい。

C区第15号住居跡(第367・368図)

C区第15号住居跡は29・16・17グリッドに位置する。重複する第22号住居跡を切り、第6号溝跡、第27号土塊に切られていた。

平面形態は横長の長方形で、規模は長軸長5.45m、短軸長4.32m、深さ0.42mである。主軸方位はN-42°-Eを指す。

床面は概ね平坦で堅く踏み固められていた。埋土はローム粒子やロームブロックを多量に含む暗褐色土を基調としており、人為的に埋め戻された可能性がある。

カマドは北東壁の中央に設けられていた。燃焼部は壁を切り込み、煙道部は緩やかに立ち上がる。埋土は第2・3層が天井部崩落土、第4層が灰層である。袖は灰褐色粘土を積み上げて構築されていた。

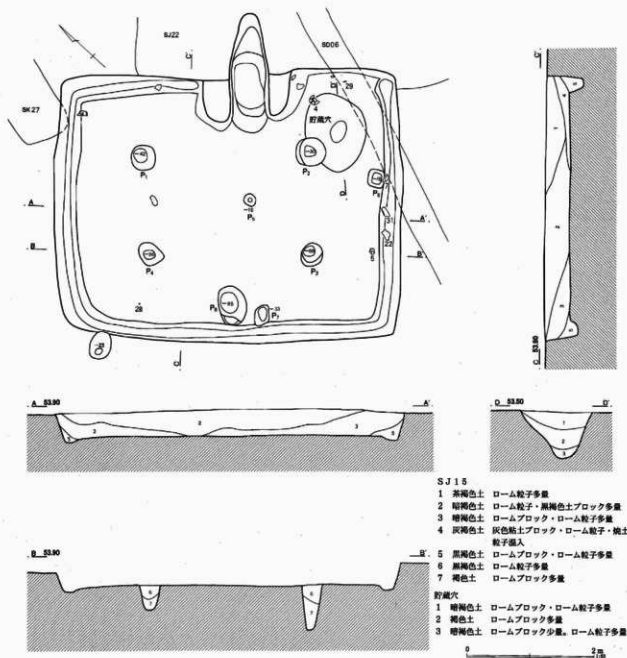
ピットは8本検出された。Pit 1～4は主柱穴である。Pit 8は出入り口に関係するものか。周囲は非常に堅く踏み固められていた。Pit 7は上面に貼付されていた。

貯蔵穴はカマド右脇のコーナー部にある。長径1.22mの楕円形プランで、深さ0.74m。

壁溝はカマド東側を除き巡っていた。深さ10～20cm。

出土遺物は土師器・環・鉢・皿・暗文環・甕・壺・瓶?、須恵器・蓋・短頸壺・長頸瓶・甕、鉄鏝、銅板片、土鍾がある(第369・370図)。1～7は丸底形態の北武蔵型環。8は大振りの碗。9・10は皿。11～15は暗文環。11～13は内面放射暗文、14・15は斜格子暗文が施文される。16・17は須恵器かえり蓋。17は硬質で、黒色粒子が吹き出す。秋間産か? 18・19は須恵器環。20は短頸壺。肩部に黄灰色の自然釉が掛かる。胎土・焼きともに良く東海産(湖西か)と考えられる。22は甕で、外面平行叩き、内面同心円当てで具。27は平造超三角形脇扶間筒被形式の甕。28は板状の青銅製品残欠。帯金具裏金の可能性がある。その他、円面視が1点検出され、第10号住居跡出土片と接合したため、第10号住居跡図版に掲載してある。

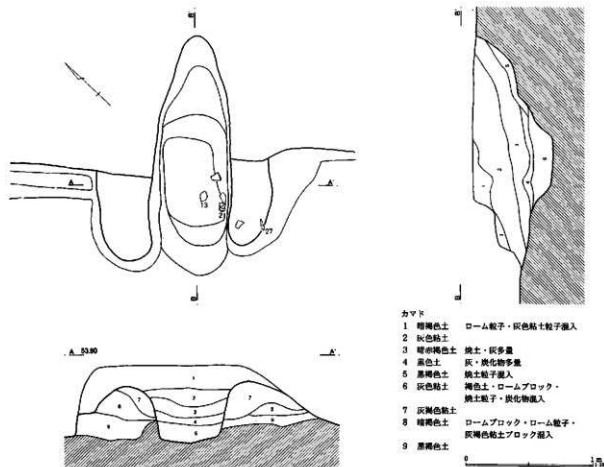
第367図 C区第15号住居跡



第141表 C区第15号住居跡出土遺物観察表 (第369・370図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師環	(10.6)	2.8		ABF	B	褐色	25%	覆土
2	土師環	12.9	2.8		B	B	橙褐色	85%	カマF内No5
3	土師環	(12.0)	3.2		AB	A	暗褐色	35%	覆土
4	土師環	12.6	3.5		AB	B	赤褐色	60%	No8, 覆土下層
5	土師環	(13.3)	4.0		DFG	B	橙褐色	45%	No2, ほぼ床面
6	土師環	(14.0)	3.9		AB	A	赤褐色	20%	覆土
7	土師環	(14.0)	4.0		AB	B	橙褐色	25%	覆土
8	土師碗	(19.0)	5.2		AB	A	褐色	20%	覆土
9	土師皿	(13.1)	3.0		AB	B	橙褐色	10%	覆土
10	土師皿	(16.4)	3.0		AB	B	橙褐色	5%	覆土

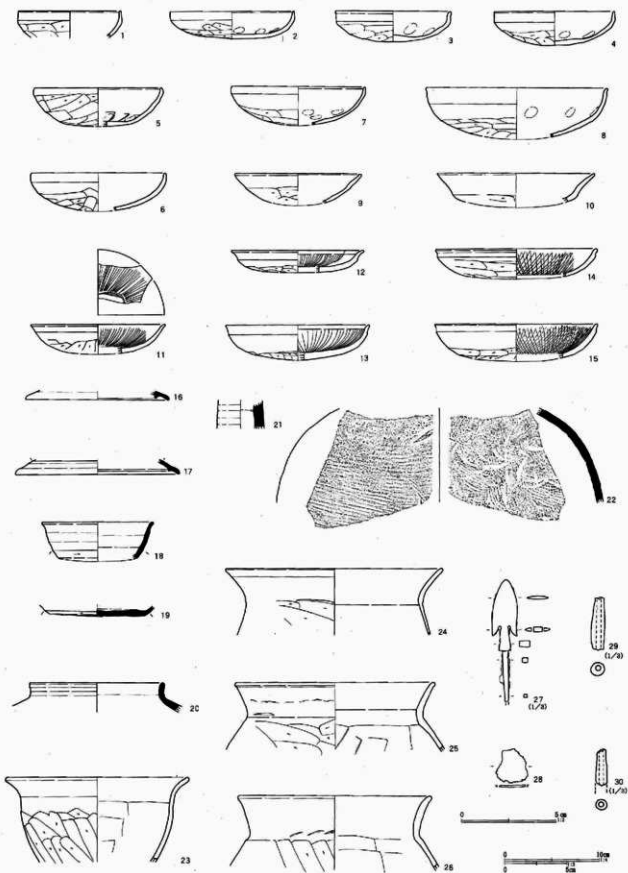
第368図 C区第15号住居跡カマド



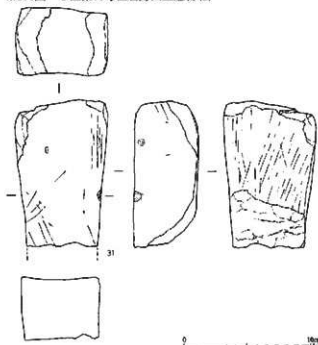
- カマド
- 1 暗褐色土 ローム粒子・灰色粘土粒子混入
 - 2 灰色粘土
 - 3 暗赤褐色土 焼土・灰多量
 - 4 灰色土 灰・炭化物多量
 - 5 黒褐色土 焼土粒子混入
 - 6 灰色粘土 褐色土・ロームブロック・焼土粒子・炭化物混入
 - 7 灰褐色粘土
 - 8 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子・灰褐色粘土ブロック混入
 - 9 原褐色土

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
11	土師陶文環	(14.0)	3.1		AB	B	暗褐色	10%	覆土。内面放射暗文(下→上)右回り
12	土師陶文環	(13.8)	2.3		AB	B	黄褐色	20%	カマド。内面放射暗文
13	土師陶文環	(15.0)	3.8		AB	B	明赤褐色	25%	カマド内No2。内面放射暗文(下→上)
14	土師陶文環	(16.8)	3.0		AD	A	明褐色	15%	カマド。内面斜格子暗文(右上がり→左上がり)
15	土師陶文環	(17.0)	3.7		A	A	暗褐色	20%	覆土。斜格子暗文(右上がり→左上がり)
16	須恵壺	(15.0)	0.9		F片	C	灰白色	10%	覆土。未野産
17	須恵壺	(17.1)	1.6		F	B	淡灰色	10%	覆土。群馬産(秋間産か)。外面灰白色の自然釉
18	須恵環	(11.6)	3.9	(8.4)	BD/F片	C	灰褐色	30%	覆土。未野産。底部十体部下端回転ヘラズリ
19	須恵環		1.2	(10.0)	B片	B	青灰色	20%	覆土。未野産
20	須恵短頸産	(14.0)	3.1		BF	A	灰色	15%	Fit2 床下。東海産(瀬西産か)
21	須恵長頸瓶?		3.0		BF	B	灰色	60%	床下。未野産か
22	須恵壺		10.0		BC/F片	A	黒灰色	10%	Ns3。床面。未野産。肩部自然釉
23	土師小型瓶?	(19.0)	8.9		BFG	B	暗褐色	20%	覆土
24	土師壺	(22.5)	7.0		BD	B	黄褐色	15%	カマド右袖
25	土師壺	(20.8)	7.4		AB	B	淡黄褐色	15%	覆土
26	土師壺	(20.0)	7.8		AB	B	淡褐色	10%	覆土
27	鉄鉢	カマド内No6。右袖上部。残長9.6cm							
28	青銅製品	No1。覆土下層。縦1.7cm。横1.7cm。厚さ0.1cm							
29	土鏝	No6。覆土下層。長さ4.2cm。最大径1.05cm。孔径0.4cm。重さ4.82g。暗褐色。							
30	土鏝	覆土。長さ2.9cm。最大径0.9cm。孔径0.4cm。重さ1.85g。暗褐色。							
31	砂石	No4。床面。長さ11.5cm。短径5.5cm。厚さ4.6cm。重さ700g。石材凝灰岩?							

第369图 C区第15号住居跡出土遺物(1)



第370図 C区第15号住居跡出土遺物(2)



須恵器は60片出土し、内訳は坏が26点(末野25・南比企1)、蓋15点(末野12・群馬?3)、甕15点(末野)、壺瓶類3点(末野1・東海2)、円面硯1点(末野か)となる。

住居の時期は熊野Ⅱ期と考えられる。

C区第16号住居跡(第371図)

C区第16号住居跡は28・29-17グリッドに位置する。第18・20号住居跡と重複し、本住居跡の方が古い。また、第20号掘立柱建物跡との関係は不明確であった。

平面形態は横長の長方形で、規模は長軸長5.04m、短軸長3.90m、深さ0.65mである。主軸方位はN-33°-Eを指す。

床面は全体に凹凸が比較的顕著である。特にSK01上面は床面が沈下していた。埋土にはローム粒子の

混入が目立つが、自然堆積か否かは不明確である。

カマドは北東壁に設けられたものと考えられるが、上面は削平され詳細は不明である。壁際に焼土と炭化物混じりの浅い土壌が検出され、この位置に燃焼部が存在したのであろう。

ビットは2本検出されたが、主柱穴とはならない。土壌は4基検出された。いずれも上面に床面が乗っており、住居に伴う床下土壌と考えられる。埋土はロームブロックが多量に混じり、人為的に埋め戻されている。壁溝は概ね全周する。

出土遺物は住居北半に多い。土師器環・皿・暗文環・甕・小型甕・台付甕・壺・瓶、須恵器環・甕・甕、鉄製品がある(第372・373図)。1は暗文環で、内面に放射暗文が施文される。2-11は環。丸底の北武蔵型環である。12-15は皿。16-17は須恵器蓋。16はつまみ径が7.4cmと大型である。群馬産と考えられる。17は大型かえり蓋。つまみを欠く。18は大型環。底部は回転ヘラケズリ調整されている。19-20は土師器壺。21-24は土師器瓶である。23は土師器甕。鬼高系甕の長胴甕である。26は台付甕脚部。27は須恵器大甕。28は丸底の壺または横瓶か。擬斜格子叩きの上にカキ目風のロクロナデが見える。

須恵器は41片出土し、内訳は坏が19点、高台環2点、蓋6点、甕9点、壺5点である。蓋1点を除き末野産と考えられる。

住居の時期は熊野Ⅱ期と推定される。

C区第17号住居跡(第374図)

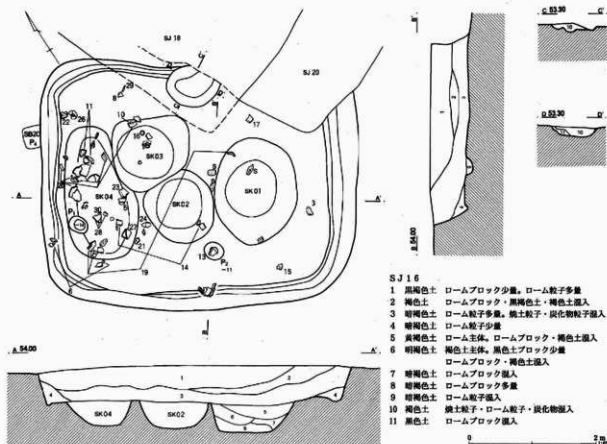
C区第17号住居跡は調査区南東部の32-20グリッドに位置し、南壁部は調査区外に延びている。

平面形態は方形と推定され、規模は長軸長3.90m、

第142表 C区第16号住居跡出土遺物観察表(第372-373図)

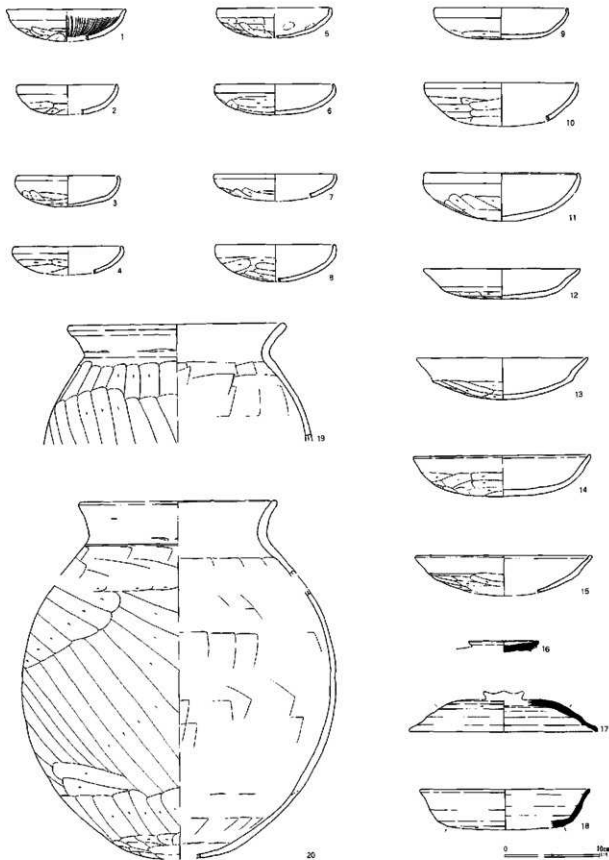
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師暗文環	(12.5)	3.2		AB	A	淡褐色	25%	覆土。内面放射暗文(下→)左回り
2	土師環	(10.6)	3.1		B	A	淡褐色	20%	覆土
3	土師環	10.8	3.3		AG	A	褐色	75%	No2。覆土中層
4	土師環	(11.5)	(3.0)		ABG	A	赤褐色	20%	覆土
5	土師壺	12.0	3.1		B	A	淡橙褐色	50%	No23。ほぼ床面
6	土師瓶	12.5	3.3		BG	A	褐色	65%	No26・31。覆土中層
7	土師環	(12.8)	2.8		ABC	A	黄褐色	20%	覆土

第371図 C区第16号住居跡

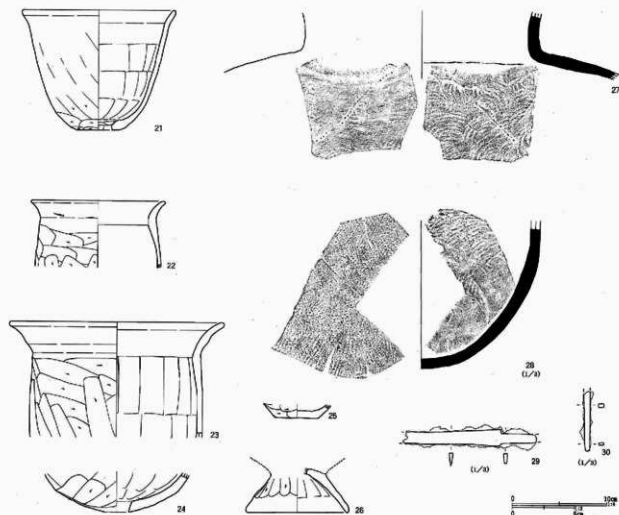


番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
8	土師環	(12.5)	3.9		ABC	A	明褐色	25%	No51. 覆土下層
9	土師環	(14.0)	3.3		AG	A	赤褐色	30%	覆土
10	土師環	(16.0)	4.0		A	A	明褐色	20%	No49. 覆土下層
11	土師環	16.2	5.1		AB	B	褐色	75%	No36・39. 覆土下層
12	土師皿	(16.4)	3.2		AG	A	褐色	30%	覆土
13	土師皿	(17.9)	4.4		AB	A	淡橙褐色	40%	No10. 覆土下層。
14	土師皿	(18.6)	4.3		AB	B	橙褐色	30%	No9・18. 床面+覆土中層
15	土師皿	(18.5)	3.9		AB	A	橙赤褐色	20%	No3. 覆土下層。粉っぽい胎土
16	須恵蓋		1.2		BC	B	灰色	100%	No45. 覆土下層。群馬産。つまり最大径7・4cm
17	須恵蓋	(19.8)	3.4		B C片	A	茶褐色	25%	No1. 床面。未野産
18	須恵環	(17.8)	4.1	(12.4)	B	C	黄灰色	20%	覆土。未野産
19	土師壺	(22.6)	12.5		AB	B	淡褐色	20%	No5・27・30. 覆土上層+中層
20	土師壺	(20.4)	37.8		AB	B	褐色	25%	No33・34・37・41・47. 覆土中層+下層
21	土師瓶	(15.8)	12.5		AB	B	褐色	20%	No15. 覆土下層。孔部周辺黒斑。二次被熱
22	土師小型甕	(14.0)	7.0		ABG	A	暗褐色	40%	No53. 覆土下層
23	土師壺	(22.2)	12.2		AB	B	明褐色	25%	No24. 覆土下層
24	土師瓶		4.2		G	A	淡褐色	30%	No13. 覆土上層。孔径2・6cm 外面黒斑あり
25	土師台甕		1.5	4.6	AB	A	暗褐色	70%	覆土
26	土師台付甕		4.6	(10.5)	AB	A	淡橙褐色	90%	No52. 覆土下層
27	須恵壺		7.1		片	B	青灰色	10%	No16. 覆土下層。未野産
28	須恵壺		11.7		B片	B	灰色	15%	No20・21. 覆土中層。未野産
29	刀子	No50. 覆土中層。残長10.3cm							
30	不明鉄製品	No22. 覆土上層。残長4.7cm。棒状							

第372图 C区第16号住居跡出土遺物(1)



第373図 C区第16号住居跡出土遺物(2)



短軸長3.54m、深さ0.35mである。主軸方位はN-10°-Wを指す。

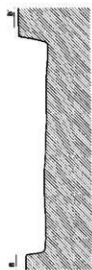
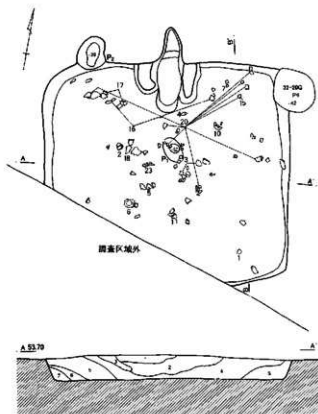
床面は平坦で全体に堅く締まっていた。埋土は第4・5層にロームブロックとローム粒子が多量に含まれ、埋め戻された可能性がある。第1～3層は自然堆積かもしれない。

カマドは北壁に設けられていた。燃焼部は壁を僅かに切り込んで構築され、一段高い煙道部に続く。埋土は第3・4・6・7層が天井部崩落土、第5層が天井部崩落土と灰層が混じった層と思われる。袖は灰白色粘土と暗灰色粘土を積み上げて構築されていた。

ビットは1本中央部から検出されたが、上面に貼床されており柱穴とは異なる。壁溝は検出されなかった。

出土遺物は土師器・暗文・暗文皿・甕・壺、須恵器・碗・蓋・盤・甕と編物石がある(第375・376図)。1～4は口縁部が小さく内屈または内彎する北武蔵型環。5は模倣環である。口縁部内面に1条の沈線が走る。口縁下の稜はヘラケズリによってつくられている。6は暗文環で、内面放射暗文が施文される。7～9は暗文皿。10・11は須恵器蓋。内面にかえりが付く。12は無かえりの小型蓋。壺蓋か。13は環。口径11.4cmの小型品。焼きは甘く、底部はヘラ切り後ナデか。ヘラケズリの痕跡は見えない。14は須恵器碗。やはり焼きは甘い。底部から体部下位にかけて回転ヘラケズリ調整。15は須恵器盤。18は須恵器甕。外面は平行叩き、内面は同心円当て具。硬質に焼き上がり、内面黒色粒子が吹き出す。秋間産と思われる。

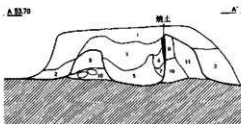
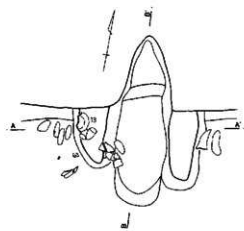
第374図 C区第17号住居跡



S J 17

- | | |
|--------|------------|
| 1 灰褐色土 | |
| 2 黒褐色土 | ローム粒子少量 |
| 3 褐色土 | ローム粒子少量 |
| 4 褐色土 | ロームブロック多量 |
| 5 暗褐色土 | ロームブロック中多量 |
| 6 黒褐色土 | ローム粒子少量 |
| 7 明褐色土 | ローム粒子多量 |

0 5m

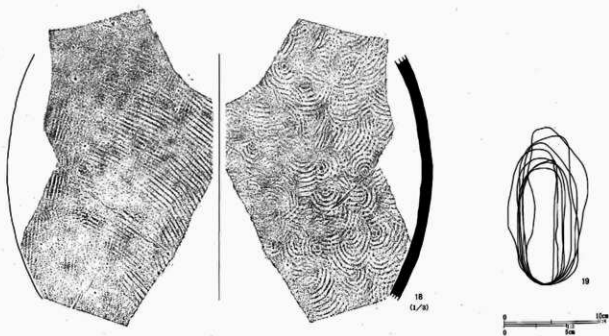
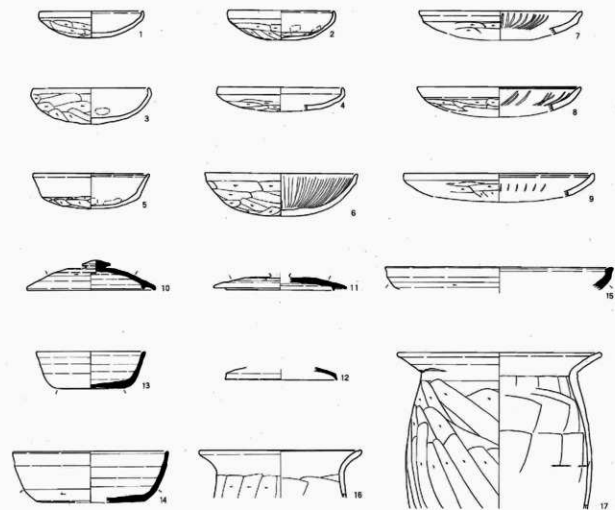


K M F

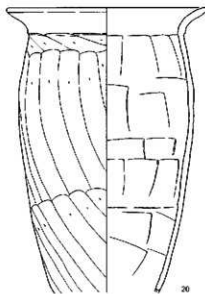
- | | | |
|---------|----------------|----------|
| 1 暗褐色土 | ローム粒子少量 | 6 赤褐色粘土 |
| 2 黒褐色土 | | 7 灰白色粘土 |
| 3 灰白色粘土 | 粘土粒子・ロームブロック混入 | 8 褐色土 |
| 4 灰白色粘土 | 褐色土・ロームブロック中多量 | 9 褐色土 |
| 5 黒褐色土 | 粘土ブロック多量 | 10 暗褐色粘土 |
| | 灰質・炭化物・焼七土混入 | 11 暗褐色粘土 |
| | | |

0 5m

第375图 C区第17号住居跡出土遺物(1)



第376図 C区第17号住居跡出土遺物(2)



第143表 C区第17号住居跡出土遺物観察表 (第375・376図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師環	(11.0)	2.8		AB	A	褐色	20%	No26、覆土中層
2	土師環	11.0	3.1		AB	B	褐色	75%	No57、覆土上層
3	土師環	12.3	3.8		AB	B	黒褐色	35%	No41・43、覆土中層
4	土師環	(13.1)	2.4		AB	A	茶褐色	25%	No27、覆土上層
5	土師環	12.2	3.8		AB	B	褐色	90%	No53、覆土中層
6	土師崎文甕	16.0	4.5		AB	A	櫻褐色	70%	No5、覆土中層、内面放射線文(下→上)、底部外面黒斑
7	土師崎文甕	(17.0)	2.3		B	B	赤褐色	10%	No50、覆土下層、内面放射線文、内面赤褐色、外面黒斑
8	土師崎文甕	(17.0)	2.5		AB	B	明赤褐色	25%	覆土、内面不規則で雑な放射線文
9	土師崎文甕	(20.0)	2.4		AB	B	褐色	10%	覆土、内面放射線文(間隔疎ら)
10	須恵蓋	(13.4)	3.2		BD片	A	淡褐色	40%	No18、ほば床面、未野産。つまみ中心からずれる
11	須恵蓋	(13.5)	1.4		BD	B	黄褐色	15%	No46、覆土中層、未野産。かえり径11・4cm
12	須恵蓋	(11.7)	1.3		BF	B	灰色	15%	覆土、群馬産か、赤地土やや粗い
13	須恵輪	(11.4)	3.9	7.0	C片	B	黄褐色	40%	カマF内No14、未野産。底部へラ切り後付
14	須恵輪	(16.3)	5.4	(11.6)	B片	C	灰色	25%	覆土、未野産。底部3c手法。SI22-28と接合
15	須恵盤	(24.0)	2.4		BCF片	B	灰褐色	5%	No7、覆土中層、未野産
16	土師小型甕	(17.0)	5.0		AB	B	淡茶褐色	45%	No10-61、覆土中層+下層。
17	土師甕	21.2	16.5		AB	B	黒褐色	50%	No62-64、床面+覆土下層
18	須恵甕		19.5		BCF	A	黒灰色		No50、ほば床面、秋田産。胴部自然釉
20	土師甕	(20.9)	30.1		AB	B	褐色	45%	No1-3・6・12・21・30・34・66、覆土上層-下層+床面
21	土師小型甕	(16.5)	4.0		AB	B	櫻褐色	25%	覆土
22	土師甕	(21.1)	4.2		AB	B	褐色	20%	覆土
23	土師甕	(25.0)	4.6		ABG	A	淡櫻褐色	20%	No56、覆土中層

る。17・20は口縁部がくの字に折れ、胴部上位に膨らみをもつ長胴甕。21は壺。19は編物石の集積団。カマド脇からまとまって出土した。

須恵器は42片出土し、内訳は坏が12点(未野9・群馬1・不明1)、椀が4点(未野)、蓋が11点(未野10・群馬?1)、盤が1点(未野)、甕が11点(未野8・群馬

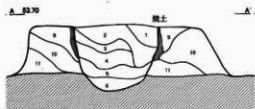
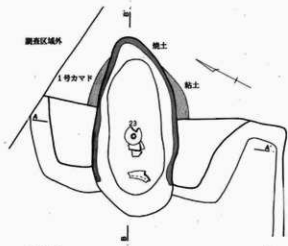
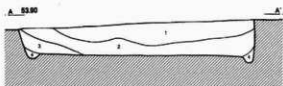
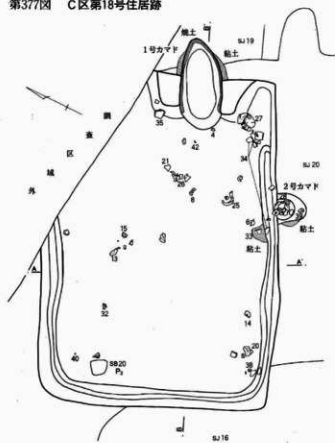
3・不明1)、壺瓶類が3点(未野2・不明1)。

住居の時期は熊野I期新段階が中心となろう。

C区第18号住居跡(第377図)

C区第18号住居跡は28-17グリッドに位置し、北東部は壁外に延びている。重複する第16-19・20号住居跡を切っている。また、第20号掘立柱建物跡が重

第377図 C区第18号住居跡



SJ 18

- 1 茶褐色土 ローム粒子多量
- 2 暗褐色土 ローム粒子多量、炭化物混入
- 3 黒褐色土 ロームブロック多量
- 4 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量

0 1.5m

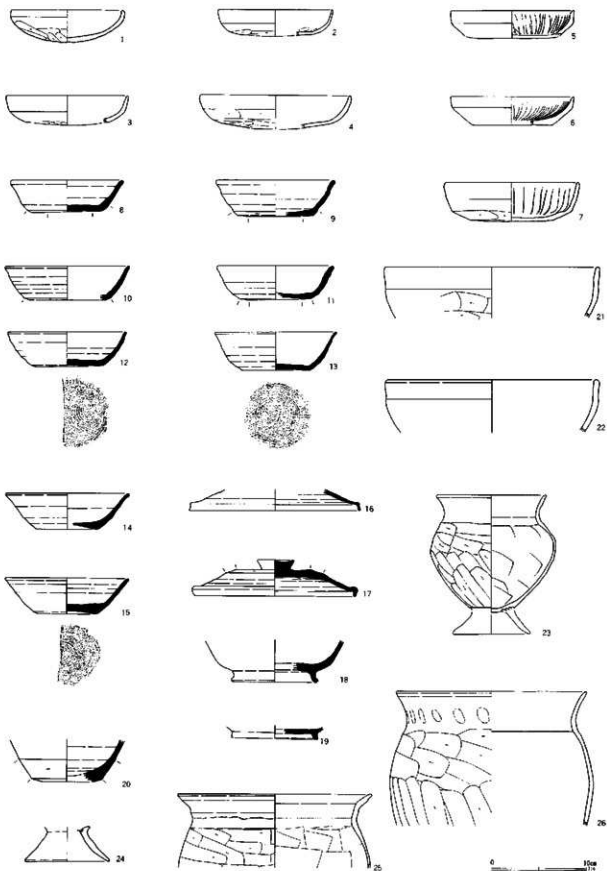


カマド

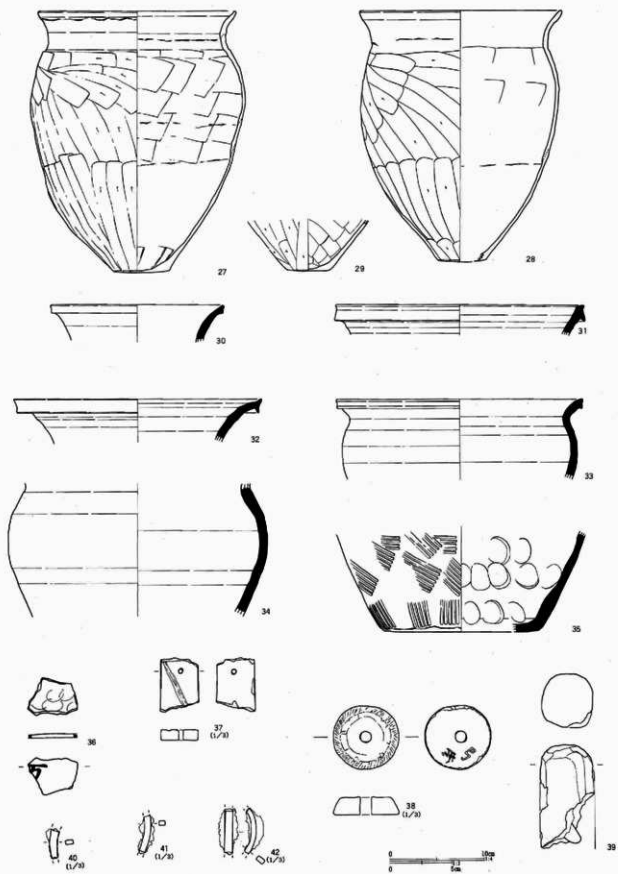
- 1 暗褐色土 粘土粒子多量
- 2 茶褐色土 粘土粒子多量、灰褐色粘土混入
- 3 灰褐色土 粘土粒子少量
- 4 赤褐色土 粘土・灰多量
- 5 暗灰色土 炭化物・灰多量、灰層
- 6 黒褐色土 炭化物・灰混入
- 7 黒色土 炭化物・灰多量
- 8 黒褐色土 炭化物・灰多量
- 9 灰褐色粘土
- 10 黒褐色土 粘土粒子混入、灰褐色粘土多量
- 11 黒褐色土 ロームブロック多量

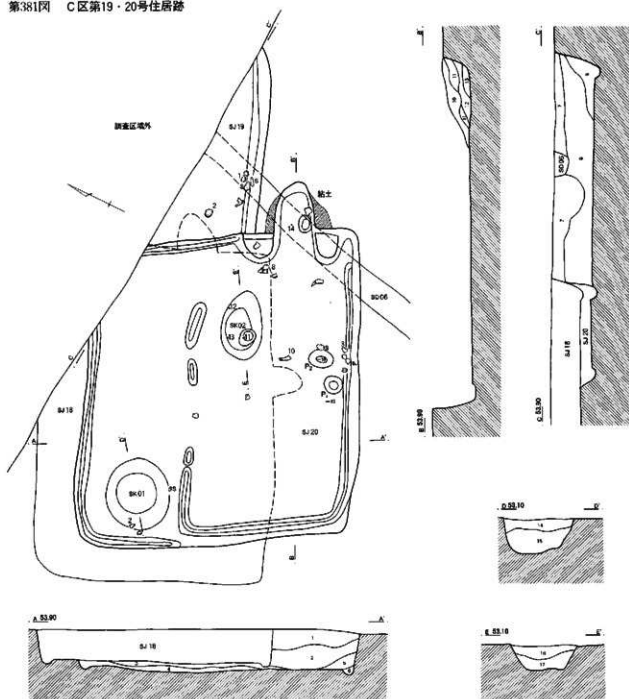
0 1.5m

第378图 C区第18号住居跡出土遺物(1)



第379图 C区第18号住居跡出土遺物(2)





SJ 20

- 1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子少量。
焼土粒子混入
- 2 黒褐色土 ロームブロック少量
- 3 褐色土 灰白色粘土・ロームブロック混入
- 4 暗褐色土 ロームブロック・焼土粒子多量
- 5 褐色土 ロームブロック・ローム粒子少量
- 6 褐色土 ロームブロックやや多量
- 7 褐色土 ローム粒子多量
- 8 暗褐色土 ロームブロックやや多量
- 9 黒色土

- 10 褐色土 ロームブロック多量
- 11 灰褐色土 粘土・ロームブロック混入
- 12 暗褐色土 粘土・灰多量
- 13 黒褐色土 焼土粒子・灰少量
- 14 褐色土 焼土粒子・ロームブロック少量混入
- 15 褐色土 ロームブロック混入
- 16 褐色土 焼土粒子・灰・炭化物・白色粘土・ローム小ブロック混入
- 17 褐色土 焼土粒子・灰・炭化物・白色粘土・ローム小ブロック混入。ローム大ブロック多量

0 2m

第144表 C区第18号住居跡出土遺物観察表(第378~380図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師環	11.8	3.4		A C	A	褐色	75%	覆土
2	土師環	(12.0)	2.8		B	A	赤褐色	20%	覆土
3	土師環	(12.8)	2.8		B	A	褐色	25%	覆土
4	土師環	(15.8)	3.5		AB	A	橙褐色	20%	№5. 覆土下層。カマド周辺
5	土師暗文環	(13.0)	2.6		AB	A	赤褐色	20%	1号カマド 覆土。内面放射暗文
6	土師暗文環	(13.0)	3.0	(8.4)	B	A	赤褐色	30%	SJ20№14. 覆土下層。内面放射暗文
7	土師暗文環	(14.0)	4.1		AB	A	褐色	30%	覆土。内面放射暗文(下-上)
8	須恵環	11.8	3.4	7.4	B C片	A	灰色	50%	№16. 覆土中層。末野産。底部B3d手法
9	須恵環	(12.3)	3.8	8.0	B片	A	灰色	40%	覆土。末野産。底部B3d手法
10	須恵環	(13.0)	3.7	(8.0)	B C片	A	暗青灰色	20%	覆土。末野産。底部周辺回転ヘラケズリ
11	須恵環	(12.0)	3.5	(7.4)	AB片	A	黄灰色	20%	覆土。末野産。底部B3b手法
12	須恵環	(12.5)	3.7	(7.0)	B C片	A	灰色	30%	覆土。末野産。底部B O手法
13	須恵環	12.8	4.1	7.0	B C片	A	黄灰色	80%	№23. 覆土中層。1号カマド左袖。末野産
14	須恵環	(13.0)	3.8	(6.5)	F H	A	淡黄灰色	35%	№28. 覆土上層。在地産。底部B O手法
15	須恵環	(13.0)	3.8	6.0	C片	A	灰白色	25%	№21. 覆土中層。末野産。底部B O手法
16	須恵蓋	(18.0)	2.3		A G	A	灰褐色	10%	覆土。産地不明
17	須恵蓋	(17.0)	3.8		C F片	A	明灰色	50%	覆土。末野産
18	須恵高台碗		4.4	(8.5)	B片	A	灰色	30%	覆土。末野産
19	須恵高台環		1.3	(9.0)	B針	A	灰色	40%	覆土。南比企産
20	須恵瓶		4.5	(7.5)	B C	A	灰色	20%	№30. 覆土下層。末野産か
21	土師碗	(22.5)	5.3		AB G	A	赤褐色	20%	№18. 覆土下層
22	土師碗	(22.0)	5.5		AB	A	明褐色	10%	覆土
23	土師小壺台付甕	11.4	12.5		B	A	赤褐色	80%	1号カマド内№2
24	土師台付甕		3.7	(8.8)	AB	A	赤褐色	25%	覆土
25	土師壺	(20.3)	7.8		ABCE	A	茶褐色	40%	№15+1号カマド。覆土下層
26	土師壺	(20.0)	14.1		B	A	暗褐色	20%	№18. 覆土下層
27	土師壺	20.6	27.6	5.8	ABCE	B	褐色	80%	№6他。覆土下層。胴部外面煤付着
28	土師壺	21.2	26.8	(5.2)	B	B	褐色	50%	2号カマド内№1
29	土師壺		5.4	4.5	AB G	A	暗灰色	70%	覆土
30	須恵壺	(18.0)	3.9		B C	A	黒灰色	10%	覆土。末野産か
31	須恵壺	(26.0)	3.2		B片	A	灰色	10%	覆土。末野産
32	須恵壺	(26.0)	4.6		B C	A	青灰色	10%	№25. 覆土中層。末野産か
33	須恵鉢	(25.8)	8.5		C F片	C	灰白色	10%	№14. 覆土下層。末野産
34	須恵鉢		14.1		C片	B	灰色	20%	№13-37. 覆土中層+下層。末野産
35	須恵壺		10.7	(16.6)	ABCG	D	淡灰色	15%	№2. 覆土下層。末野産
36	土師暗文環				AB	A	赤褐色		覆土。底部外面に編書「万」。内面クセン暗文
37	捉壺	覆土。高さ0.8cm。重さ17.30g							
38	紡錘車	№35。直径5.15cm。高さ1.4cm。孔径0.9cm。重さ67.88g。刻字「弓成」							
39	土製支脚	10.7			A B C	B	褐色	60%	2号カマド内№4。ケズリとナゲによる整形。粗製
40	不明鉄製品	№27. 覆土上層。残長2.3cm。棒状。わずかに湾曲する							
41	不明鉄製品	覆土上層。残長3.0cm。棒状							
42	不明鉄製品	№4. 覆土上層。残長3.4cm。棒状。湾曲する							
43	須恵鉢	(21.2)	17.5	(11.0)	B片	A	青灰色	25%	SJ18(カマド周辺)+SJ21(№225-254)。末野産

石製紡錘車。一面に「弓成」と線刻されている。人名であろう。南西コーナー近くの床面よりも4cm浮いた位置から出土した。40~42は緩やかに湾曲する鉄製品でほぼ同一形態。

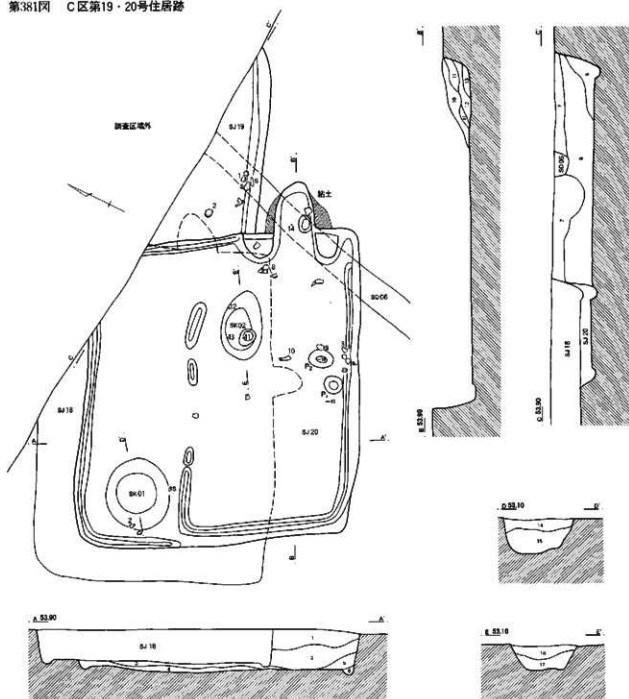
須恵器は394片出土し、内訳は坏が310点(末野280・南比企27・不明3)、高台碗6点(末野)、高台環1点

(南比企)、蓋33点(末野31・不明2)、甕33点(末野)、鉢4点(末野)、壺瓶類7点(末野)である。

住居の時期は熊野Ⅳ期と考えられる。

C区第19号住居跡(第381図)

C区第19号住居跡は28-17・18グリッドに位置する。住居の大半は調査区外にあり、西部は第18・20



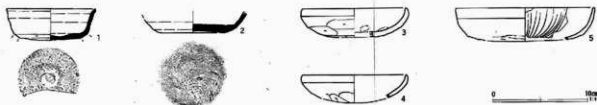
SJ 20

- 1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子少量。
焼土粒子混入
- 2 黒褐色土 ロームブロック少量
- 3 褐色土 灰白色粘土・ロームブロック混入
- 4 暗褐色土 ロームブロック・焼土粒子多量
- 5 褐色土 ロームブロック・ローム粒子少量
- 6 褐色土 ロームブロックやや多量
- 7 褐色土 ローム粒子多量
- 8 暗褐色土 ロームブロックやや多量
- 9 黒色土

- 10 褐色土 ロームブロック多量
- 11 灰褐色土 粘土・ロームブロック混入
- 12 暗褐色土 粘土・灰多量
- 13 黒褐色土 焼土粒子・灰少量
- 14 褐色土 焼土粒子・ロームブロック少量混入
- 15 褐色土 ロームブロック混入
- 16 褐色土 焼土粒子・灰・炭化物・白色粘土・ローム小ブロック混入
- 17 褐色土 焼土粒子・灰・炭化物・白色粘土・ローム小ブロック混入。ローム大ブロック多量

0 2m

第382図 C区第19号住居跡出土遺物



第145表 C区第19号住居跡出土遺物観察表 (第388図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵環	9.2	3.3	6.4	C片	A	暗青灰色	55%	No.6. 埋土下層。末野産。底部へう切り後ナデ
2	須恵環		2.3	6.5	ABC片	A	黄灰色	80%	No.1. 確認面上。末野産
3	土師環	(11.0)	3.0		AB	A	橙赤褐色	25%	埋土
4	土師環	(11.0)	2.4		AB	A	赤褐色	10%	埋土
5	土師暗文環	(14.5)	3.5		AB	A	赤褐色	15%	埋土

号住居跡に切られているため遺構の詳細は不明である。また、第6号溝跡が覆土上部を削平していた。

平面形態は方形系と推定され、残存規模は長軸長2.94m、短軸長1.68m、深さ0.60mである。

床面は南壁際がやや低いが、全体に堅く踏み固められていた。埋土は特に埋め戻したような形跡は認められなかった。

カマド、ピットは検出されなかった。壁溝は南壁際を巡っていた。

出土遺物は少ない。土師器環・暗文環、須恵器環がある(第382図)。1は須恵器のいわゆる環Gで、南壁直下の覆土下層から出土した。底部はへう切り後ナデ調整。体部下端を回転ヘラケズリ調整している。末野産。2は確認面より上部から出土した須恵器環で、底部は回転糸切り。第18号住居跡に伴う可能性が高い。3・4は内罫口縁の北武蔵型環。5は底部平底風の暗文環。内面は放射暗文が施文される。混入と思われる。

須恵器は3片出土したのみである。他には須恵器甕が1点ある。いずれも末野産。

住居の時期は熊野I期と考えられる。

C区第20号住居跡 (第381図)

C区第20号住居跡は28-17グリッドに位置する。重複する第16・19号住居跡を切り、第18号住居跡に切られていた。また、第6号溝跡が覆土上部を貫流し

ている。第18号住居跡は本住居跡を埋めて構築されており、床面は残存している。両住居跡は主軸もほぼ揃い、时期的にも近接していることから本住居跡から第18号住居跡に建て替えられた可能性が高いものと考えられる。

平面形態は方形で、規模は長軸長4.86m、短軸長4.44m、深さ0.65mである。主軸方位はN-65°-Eを指す。

床面は凹凸があるが、全体的に堅く踏み固められていた。埋土はロームブロックを少量含む暗褐色土と黒褐色土を基調としていた。

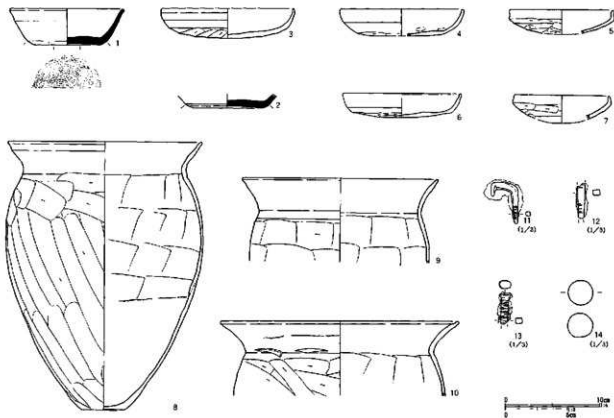
カマドは東壁の南端に寄った位置に設けられていた。燃焼部は壁を切り込んで構築され、側壁には粘土が貼ってある。埋土は第10・11層が天井崩落土、第12層が灰層に相当しよう。軸は灰褐色粘土を積み上げて構築されていたが、遺存状態はあまり良くない。

ピットは2本検出されたが、いずれも柱穴とはならない。土塊は2基検出された。いずれも上面に貼床され、床下土塊と考えられる。

壁溝はカマドを除きほぼ全周するが、西壁部で食い違い、一方の壁溝は間仕切り状の溝に連続している。この溝跡は東壁方向に断続的に延びている。

出土遺物は土師器環・甕、須恵器環、鉄釘、土玉がある(第383図)。1・2は須恵器環。いずれも末野産

第383図 C区第20号住居跡出土遺物



第146表 C区第20号住居跡出土遺物観察表 (第383図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵器	(11.9)	3.8	7.0	B片	A	黒灰色	30%	SKI内。末野産。底部B3d手法
2	須恵器		1.5	7.0	B片	C	灰色	30%	No17。床面。末野産。底部B3c手法
3	土師器	(14.0)	3.1		AB	A	赤褐色	25%	No10。覆土下層
4	土師器	(13.0)	2.8		AB	A	褐色	20%	カマド
5	土師器	(11.0)	2.5		ABD	A	赤褐色	15%	覆土
6	土師器	(12.4)	2.5		AB	A	赤褐色	30%	SKI内
7	土師器	(10.0)	2.5		BG	A	赤褐色	15%	壁溝内
8	土師器	20.2	28.4	4.4	ABD	B	茶赤褐色	75%	No7。床面
9	土師器	(20.6)	8.8		B	B	茶赤褐色	20%	覆土上層
10	土師器	(25.0)	7.8		BG	A	赤褐色	15%	No13。床面
11	釘	No2。覆土下層。残長3.3cm。鉤若しく形状推定。木質付着							
12	釘	No3。床面。残長2.6cm。木質付着							
13	釘	No1。覆土下層。残長2.3cm。木質付着							
14	土玉	カマドNo10。最大径1.9cm。重量5.58g。胎土ABD。淡褐色。残存100%							

で、1は底部回転糸切り後、周辺部と体部下端が回転ヘラケズリ調整される。2は底部全面と体部下端が回転ヘラケズリ調整。3～7は土師器。3はやや丸底風、4・5は平底風である。5・7は混入品。8～10は土師器。8はカマド前面の床面から出土した。口縁部上端の屈曲がやや強く、胴部上位に膨らみをもつ。9は口縁部の屈曲は弱い。10は混入か

もしれない。11～13は鉄釘。第2号土壌上の床面付近からまとまって出土した。14はカマド内底面から出土した土玉である。

須恵器は73片出土し、内訳は坏が57点(末野55・南比企2)、高台桶が5点(末野4・不明1)、甕が6点(末野)、壺が2点(末野)、蓋が3点(末野)である。

住居の時期は熊野IV期と考えられる。

C区第21号住居跡 (第384・385図)

C区第21号住居跡は29-17グリッドに位置する。第22・23・26号住居跡を切り、第35号土壇、第6号溝跡に削平されていた。第26号住居跡は主軸及び壁ラインがほぼ一致することから、第26号住居跡から本住居跡に直接建て替えられたものと推定される。

平面形態は方形で、規模は長軸長4.80m、短軸長4.62m、深さ0.48mである。主軸方位はN-59°-Eを指す。

床面は凹凸があるが、全体に堅く踏み固められていた。埋土は焼土粒子と炭化物粒子を多量に含む暗褐色土を基調としており、二次的に投棄された可能性が高い。

カマドは北東壁に2基設けられていた。断面観察及び粘土の遺存状態から2号カマドから1号カマドに付け替えられたものと考えられる。1号カマドは東コーナーに寄った位置にある。燃焼部は壁を切って掘り込まれ、側壁には粘土が貼られていた。この粘土は壁に沿って2号カマドまで延びており、貼壁状を呈していた。燃焼部底面は皿状をなし、小ピットが掘り込まれていた。埋土は第1～3層が天井部崩落土、第4層が天井部崩落土と灰層が混在する層であろう。袖は灰白色粘土を積み上げて構築されていた。2号カマドは1号カマドの西側に隣接する。燃焼部は壁を切り込み、焼土と粘土が多量に詰まっていたが、袖は削平されていた。

ピットは3本検出されたが、柱穴とはならぬであろう。壁溝は途切れる部分がある。

出土遺物は極めて多い。全て破片で、上層から床面まで分布している。おそらく焼土混じりの土と共に投棄された遺物が大半を占めるものと推定される。器種としては土師器・杯・碗・暗文・甕・小型甕・鉢・須恵器・壺・高台碗・壺・甕・鉢、石製紡錘車、土製紡錘車、鉄製品、土錘がある(第388～391図)。

1～8は北武蔵型である。扁平な器形で、弱い丸底風のものや平底化したものがある。9・10は平底暗文杯と同一器形・胎土であるが、内面の暗文が省略

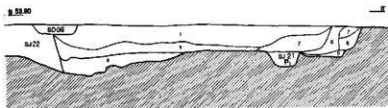
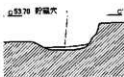
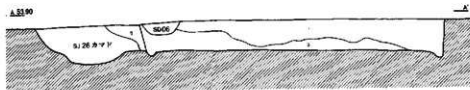
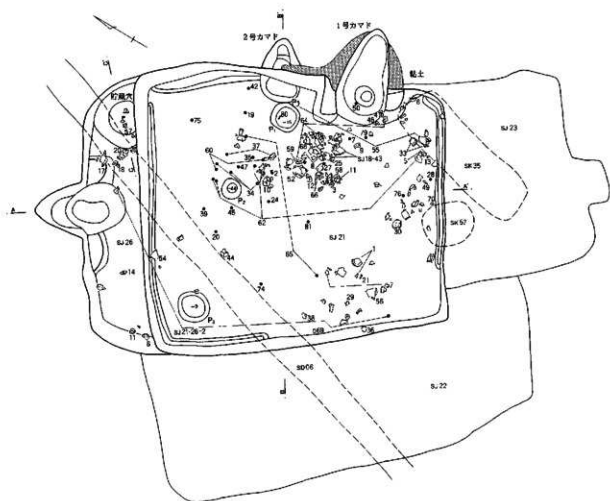
されている。11は碗で、混入か。12～15は平底暗文杯である。内面に放射暗文と螺旋暗文が施文されている。

16～24は須恵器蓋。16～19は内凹みのつまみ。19～22は内面にかえりをもつ蓋で、混入資料と考えられる。19は小型のかえり蓋。つまみは小さな宝珠形。天井部は回転ヘラケズリ後ナデしており、ヘラケズリ痕は不明瞭。末野産である。20は緻密な胎土で、硬質に焼き上がったかえり蓋。金属的な質感をもち、かえりはシャープである。東海産と考えられる。23・24は無かえりの蓋で碗蓋と思われる。25～28は高台碗。25は内面体部の立ち上がり部分が沈線状に窪む。底部は回転糸切りである。26は重厚なつくり。底部は回転糸切り後、周辺部と体部下端を回転ヘラケズリ調整している。27は底部回転ヘラケズリ痕が残るが、ケズリの有無は不明。28は高台は細く、底部は回転糸切り後周辺部を回転ヘラケズリ調整。

29～50は須恵器杯である。29・44は混入と思われ除外すると、口径は12.6cm～13.6cm、底径は6.6cm～8.8cmに分布する。30・33・35・36・38・40・48は南比企産である。30は底部に「X」のヘラ記号がある。底部は回転糸切り後、全面または周辺部が回転ヘラケズリ調整されている。32は肌目細かく粉っぽい胎土で、前内出窯の製品に酷似する。東金子産と考えておきたい。底部は全面回転ヘラケズリ調整。31・34・37・39・41・42・45～47・49・50は末野産である。末野産の製品は南比企産に比して、器壁が厚く、体部下端まで調整するものが多い。31は底部糸切り後周辺と体部下端を回転ヘラケズリ。34は底部糸切りの弧が大きく、あるいは静止糸切りか？。底部の一部と体部下端を手持ちヘラケズリ調整し、器形の扁平度も強く末野産の杯としてはやや異質といえる。粗粒の片岩粒が含まれるため末野産としたが、形態や技法は秋間系に近い。秋間産の可能性もあろう。いずれにせよ、本住居に伴うか否かは一考を要する。50は唯一回転糸切り後無調整である。

51は須恵器瓶類で湖西産か。52は小型の鉢。底部

第384図 C区第21・26号住居跡

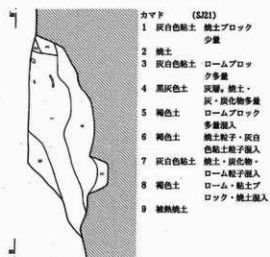
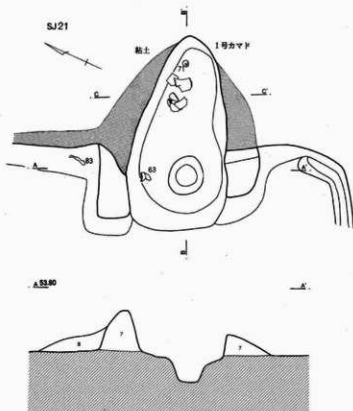


SJ 31・26

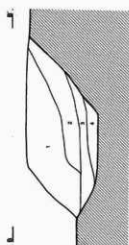
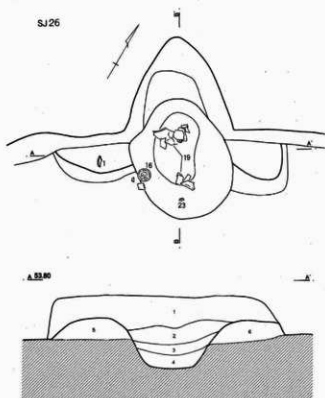
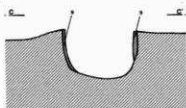
- 1 暗褐色土 粘土・炭化物多量
 - 2 褐色土 ローム粒子・焼土粒子多量
 - 3 暗褐色土 焼土粒子やや多量
ローム粒子少量
 - 4 暗褐色土 焼土粒子・ロームブロック混入
 - 5 暗褐色土 ロームブロック多量
 - 6 暗褐色土 焼土ブロック・灰褐色粘土混入
 - 7 暗褐色土 焼土粒子・焼土ブロック・灰褐色粘土多量
 - 8 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子多量
 - 9 灰褐色土 灰褐色土・ロームブロック混入
- 野燻穴
1 暗褐色土 ロームブロック多量

0 2m

第385図 C区第21・26号住居跡カマド



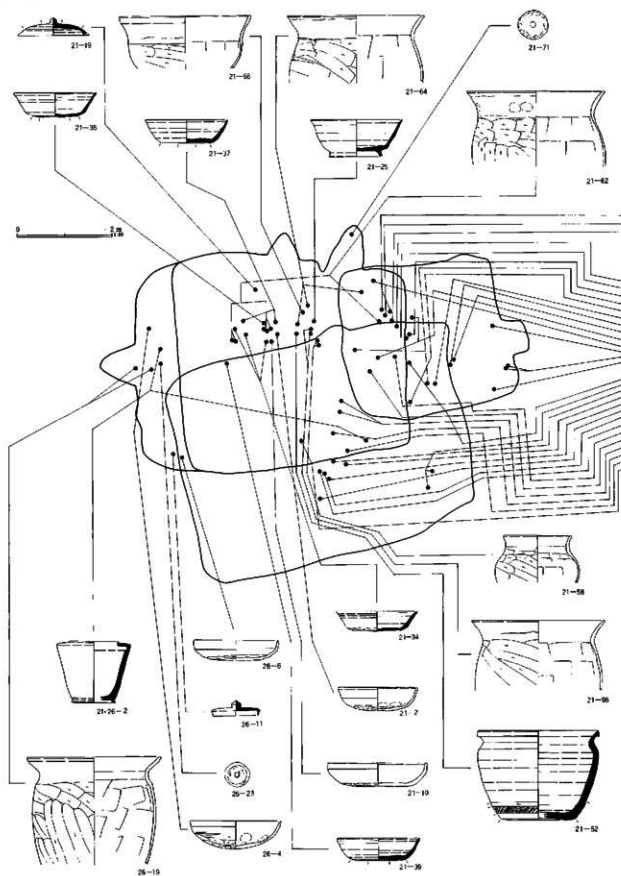
- カマド (SJ21)
- 1 灰白色粘土 焼土ブロック少量
 - 2 焼土
 - 3 灰白色粘土 ロームブロック多量
 - 4 黒灰色土 灰層、焼土、灰、炭化物多量
 - 5 褐色土 ロームブロック多量混入
 - 6 褐色土 焼土粒子・灰白色粘土粒子混入
 - 7 灰白色粘土 焼土・炭化物、ローム粒子混入
 - 8 褐色土 ローム、焼土ブロック、焼土混入
 - 9 被熱焼土



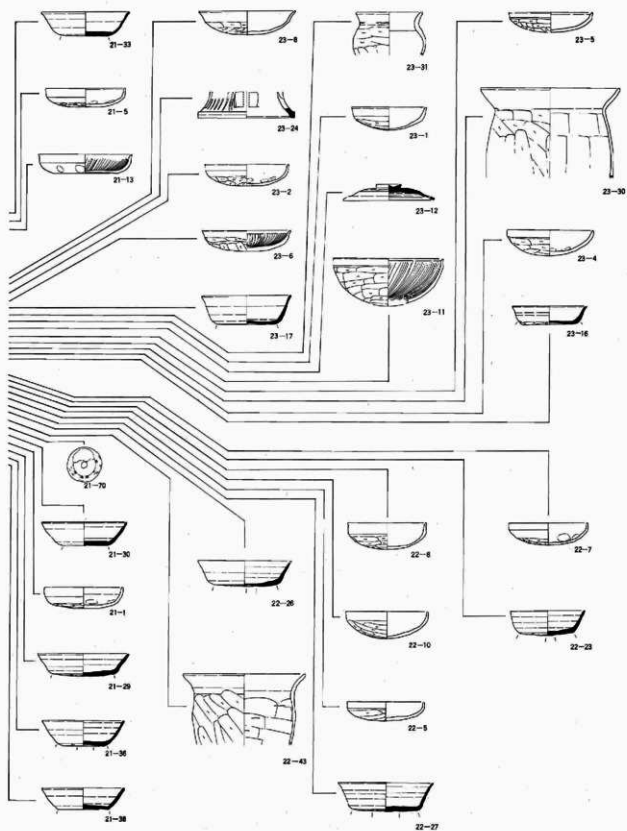
- カマド (SJ26)
- 1 黒褐色土 ロームブロック多量
 - 2 暗褐色土 焼土粒子・ブロック多量
 - 3 黒褐色土 焼土粒子・灰
 - 4 暗褐色土 ロームブロック多量
 - 5 暗褐色土 ローム粒子・灰白色粘土ブロック混入
 - 6 灰白色粘土

0 1m

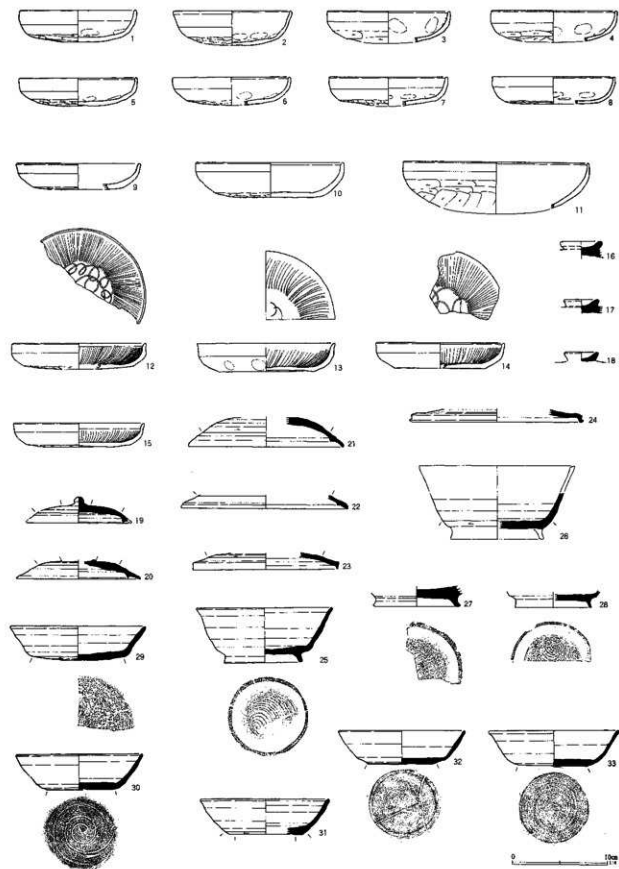
第386图 C区第21-22-23-26号住居跡遺物分布图(1)



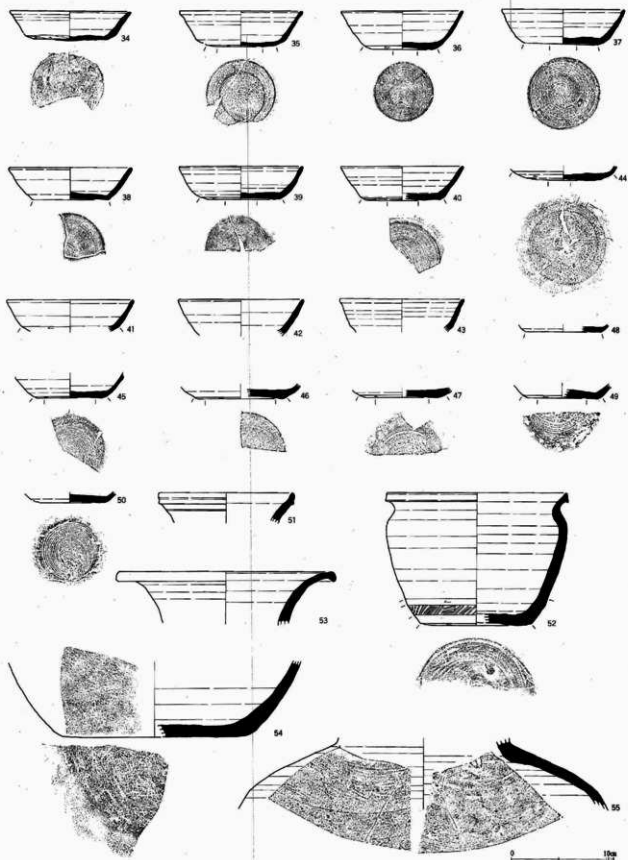
第387图 C区第21·22·23·26号住居跡遺物分布图(2)



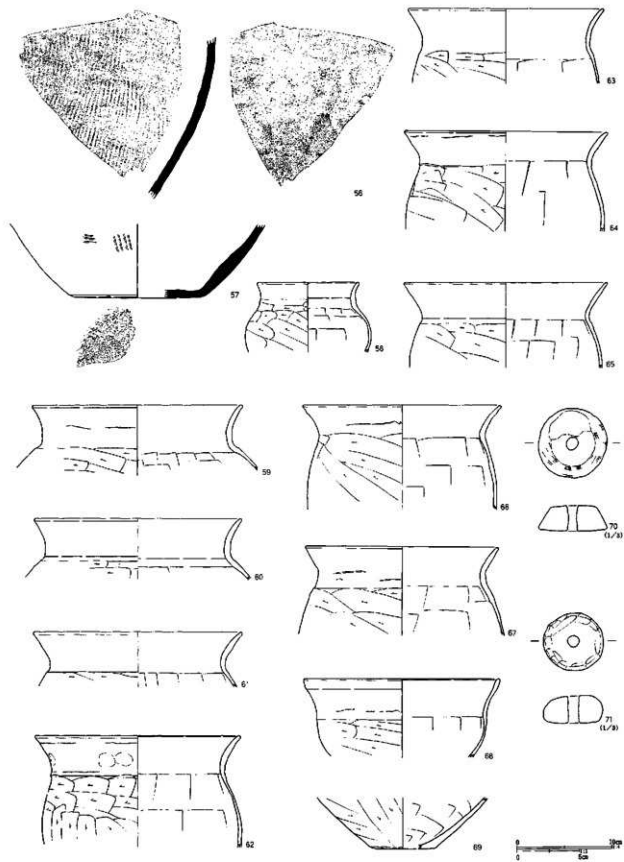
第388图 C区第21号住居跡出土遺物(1)



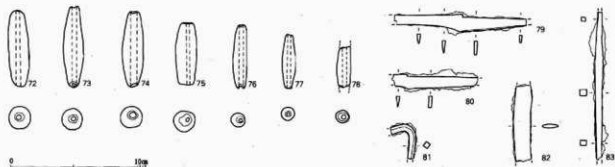
第389图 C区第21号住居跡出土遺物(2)



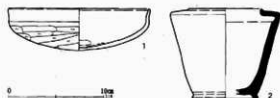
第390图 C区第21号住居跡出土遺物(3)



第391図 C区第21号住居跡出土遺物(4)



第392図 C区第21・26号住居跡出土遺物



中央が凹む。胴部は平行叩き後、ロクロ調整、下端は回転ヘラケズリ調整される。54~57は甕。54の胴部と底部外面には葉脈痕が見える。

58は土師器小型甕。59~61・69は壺である。62~67は甕。口縁部は弓状に緩やかに延びる。68は鉢か。70は石製紡錘車、71は土製紡錘車。土師質。ヘラで加工されている。72~78は土錘。79・80は鉄製刀子。

81~83は不明鉄製品である。

須恵器は314片出土し、内訳は坏が193点(末野142・南比企44・東金子1・不明6)、高台椀13点(末野)、蓋29点(末野26・東海2・不明1)、壺瓶類13点(末野10・群馬1・湖西1・不明1)、甕54点(末野)、鉢11点(末野)、高盤1点(末野)である。

出土遺物は熊野Ⅲ期後半を主体にⅣ期のものを含む。住居の構築時期は熊野Ⅲ期と考えられる。

C区第21・26号住居跡出土遺物(第392図)

第392図には第21号住居跡と第26号住居跡2軒からまたがって出土した遺物を掲載した。1は土師器坏。底部の丸味が強く混入の疑いがある。2は須恵器短頸壺。焼きは非常に甘い。末野産である。

第147表 C区第21号住居跡出土遺物観察表(第388~391図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師坏	12.1	3.3	10.8	ABG	A	褐色	80%	No.310-311. 覆土下層。外面底部ケズリ
2	土師坏	12.2	3.6	9.8	AB	B	淡褐色	70%	SJ21 (No.80) + SJ22 (覆土)。覆土上層
3	土師坏	(12.8)	3.2	(11.6)	AD	B	褐色	25%	No.230. 覆土中層。外面底部黒く変色あり
4	土師坏	13.1	3.2		ABG	B	褐色	45%	覆土一拵。外面体部に一部黒斑あり
5	土師坏	(12.4)	2.9		AB	B	褐色	30%	SJ23No.59. 覆土中層
6	土師坏	(12.3)	2.9		AB	B	褐色	40%	SJ23No.70. 覆土中層
7	土師坏	(12.3)	3.0	(10.5)	AB	A	褐色	25%	No.31. 覆土上層
8	土師坏	(12.8)	3.0	(10.1)	AG	B	褐色	25%	No.253・274. 覆土下層+ほぼ床面
9	土師坏	(13.0)	2.7	(9.6)	ABG	A	橙褐色	20%	No.219 (覆土中層) + 1号カマド。暗文环タイプだが無文
10	土師坏	15.5	3.7	11.5	ABG	B	茶褐色	90%	No.279. 床面。暗文环タイプだが無文
11	土師碗	(19.5)	4.8		AB	B	褐色	20%	No.237 (覆土中層) + 確認面。
12	土師暗文杯	(13.9)	2.7	(11.6)	ABG	A	橙褐色	40%	No.269. 覆土下層。内面放射(下→上) + 螺旋暗文右回り
13	土師暗文杯	14.5	3.0	10.0	AB	B	茶褐色	45%	No.58. 覆土中層。内面見込部螺旋暗文僅かに残る
14	土師暗文杯	(13.3)	2.7	(9.5)	A	A	褐色	25%	覆土。放射(下→上) + 螺旋暗文右回り
15	土師暗文杯	(13.7)	2.5	10.9	BDF	B	褐色	25%	確認面。内面放射暗文(下→上)。螺旋暗文不明瞭
16	須恵蓋		1.8		C片	B	灰色	80%	覆土。末野産。つまみ径4.0cm
17	須恵蓋		1.4		BDF	B	褐色	90%	覆土。末野産
18	須恵蓋		1.0		B	B	灰褐色	100%	覆土。末野産。つまみ径3.4cm
19	須恵蓋		2.7		B C片	A	灰色	80%	No.35. 覆土上層。末野産

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存	備考
20	須恵壺	(13.0)	2.0		B F	A	明灰色	30%	No212. 覆土中層。東海産。素地土織密で盛装感
21	須恵壺	(16.2)	3.1		C F片	C	黄灰色	20%	No312. 覆土下層。未野産
22	須恵壺	(17.4)	1.4		C F	A	明灰色	10%	覆土。群馬(秋田産か)。外面乳白色の自然釉
23	須恵壺	(15.4)	1.7		B C	A	青灰色	15%	覆土。未野産か
24	須恵壺	(17.8)	1.3		C片	A	青灰色	10%	No16. 覆土上層。未野産
25	須恵高台碗	14.2	5.8	8.2	B C片	B	灰色	65%	SJ21 (No250)+SJ23 (西)。覆土中層。未野産
26	須恵高台碗		3.8		C片	A	灰色	40%	覆土。未野産。高台欠落。体部下端回転ヘラケズリ
27	須恵高台碗		2.1	9.2	B C片	A	暗灰色	40%	No107. 覆土上層。未野産
28	須恵高台碗		1.8	8.0	C片	A	暗灰色	50%	No186. 覆土中層。未野産。底部B3手法
29	須恵環	(14.2)	3.6	(9.6)	C片	B	淡灰褐色	40%	No303. 覆土下層。未野産。底部B3手法
30	須恵環	13.2	3.8	7.0	B C針	A	青灰色	65%	SJ23No15. 上層。南比企産。へう記号。底部B3手法
31	須恵環	(13.4)	3.7	(7.8)	B片	A	淡灰色	35%	SJ23 (西・覆土) から編入。未野産。底部B3手法
32	須恵環	13.2	3.5	7.2	D	B	淡褐色	70%	覆土。東金子産。肌目細かい胎上。底部B3手法
33	須恵環	13.6	3.8	7.3	B針	A	暗青灰色	70%	SJ23No79-78. 中層+下層。南比企産。底部B3手法
34	須恵環	(12.6)	3.0	7.6	B片	A	青灰色	40%	No63-75-78. 上層。未野産? 底部B2d手法
35	須恵環	12.8	3.8	7.2	C E針	B	灰白色	50%	No73. 覆土上層。南比企産。底部B3手法
36	須恵環	12.7	4.0	6.3	B C針	B	灰白色	70%	SJ21No317+SJ22. 上層。南比企産。底部B3d手法
37	須恵環	12.9	3.6	7.7	C片	B	褐色	85%	No66-287. 覆土上層+下層。未野産。底部B3手法
38	須恵環	12.8	3.4	8.0	B C針	A	灰色	40%	No299 SE01. 覆土下層。南比企産。底部B3手法
39	須恵環	(13.0)	3.5	7.0	C片	B	灰白色	40%	No89. 覆土上層。未野産。底部B3手法
40	須恵環	(12.8)	3.6	(8.0)	C針	A	灰色	25%	覆土。南比企産。底部B3手法
41	須恵環	(13.0)	3.3		B片	B	灰色	25%	SJ23No62. 覆土上層。未野産。体部下端回転ヘラケズリ
42	須恵環	(13.1)	3.8		B C片	B	灰色	40%	No117. 覆土中層。未野産
43	須恵環	(13.0)	3.5		B F	C	淡青灰色	45%	覆土。産地不明。素地土粗く白色粒子和黒色粗粒多
44	須恵環	1.5	8.1	B片	B	灰褐色	95%	No294. 覆土下層。未野産。底部A3手法	
45	須恵環	2.7	(8.8)	片	B	黄灰色	40%	No83. 覆土上層。未野産。底部B3d手法	
46	須恵環	1.6	(8.8)	B片	A	青灰色	25%	SJ23No5. 覆土上層。未野産。底部B3d手法	
47	須恵環	1.0	(7.6)	B片	A	灰色	45%	No74. 覆土中層。未野産。底部B3d手法	
48	須恵環	0.8	(8.0)	針	B	灰白色	40%	覆土。南比企産。底部回転ヘラケズリ	
49	須恵環	1.6	(7.2)	B C片	B	黄灰色	35%	SJ23No2. 覆土上層。未野産。底部B3d手法	
50	須恵環	1.2	6.3	B C片	A	灰色	95%	No172. 覆土上層。未野産。底部B0手法	
51	須恵長頸瓶?	(14.0)	3.2		B F	A	明灰色	15%	覆土。瀬西産か
52	須恵鉢	(18.8)	14.0	(11.7)	B C片	A	暗灰色	45%	No270. 覆土下層。未野産。外面下部平行叩き
53	須恵口鉢	(22.4)	5.5		C片	A	暗灰色	10%	覆土。未野産
54	須恵壺		7.9	19.6	B片	A	灰色	25%	No296. 覆土下層。未野産。外面葉痕痕。56と同一個体
55	須恵壺		7.5		B片	A	青灰色	20%	SJ21 (No292)+SJ23 (No76)。覆土中層。未野産
56	須恵壺				B片	A	暗褐色		No307. 54と同一個体。覆土下層
57	須恵壺		7.7	(13.4)	C片	A	灰色	20%	No308-316+SE01. 覆土下層。未野産
58	土師小型壺	(10.6)	7.4	ABC	B	褐色	25%	No235-233. 覆土中層。全体に黒炭	
59	土師壺	22.0	6.9	ABG	B	褐色	20%	No153. 覆土中層+確認面	
60	土師壺	(21.6)	6.4	ABD	B	橙褐色	10%	No61-143. 覆土上層+中層	
61	土師壺	(21.9)	5.8	ABG	B	褐色	15%	覆土	
62	土師壺	21.5	11.7	AB	B	橙褐色	60%	SJ21 (No59-139他)+SJ23 (No61)。覆土中層+下層	
63	土師壺	(20.4)	7.8	AB	B	褐色	30%	カムド内No8	
64	土師壺	(21.3)	10.5	AB	A	明褐色	30%	No267-273. SJ23No63と接合。覆土下層	
65	土師壺	(21.4)	9.0	ABG	B	褐色	25%	No6-105. 覆土上層+中層	
66	土師壺	(20.8)	11.0	ABG	B	褐色	20%	No249-248. 覆土中層	
67	土師壺	(20.2)	9.3	ABG	B	褐色	25%	覆土	
68	土師鉢	20.6	8.3	ABG	A	褐色	20%	No262. 覆土下層	
69	土師壺		5.5	(7.0)	B G	B	赤褐色	25%	SJ22 (No51-粘採)。覆土中層。外面黒斑あり
70	石製紡錘車土製紡錘車土舗	SJ23No23. 覆土上層。最大径5.5cm。孔径1.0cm。重さ78.5g							
71		1号カムド内No1. 最大径4.7cm。高さ2.2cm。孔径0.9cm。重さ51.9g							
72		覆土。長さ6.0cm。最大径1.7cm。孔径0.4cm。重さ16.28g。胎土A B F。焼成B。茶褐色。残存100%							

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
73	土罐	カマド周辺。長さ6.4cm。最大径1.6cm。孔径0.4cm。重さ12.20g。胎土A B。焼成B。褐色。残存100%							
74	土罐	No206。覆土中層。長さ6.0cm。最大径1.7cm。孔径0.5cm。重さ14.13g。胎土A B F。焼成B。淡褐色。残存100%							
75	土罐	No123。覆土中層。長さ4.9cm。最大径1.7cm。孔径0.25cm。重さ13.45g。胎土B。焼成B。褐色。残存100%							
76	土罐	No188。床面。長さ5.1cm。最大径1.1cm。孔径0.3cm。重さ5.62g。胎土B F。焼成B。褐色。残存100%							
77	土罐	SJ21 (SE-01)。長さ4.2cm。最大径1.05cm。孔径0.25cm。重さ4.26g。胎土A B。焼成B。褐色。残存100%							
78	土罐	覆土。長さ3.2cm。最大径1.1cm。孔径0.35cm。重さ3.49g。胎土A B。焼成B。褐色。残存100%							
79	刀子	No169。覆土中層。残長10.3cm							
80	刀子	No318。床面。残長6.7cm							
81	不明鉄製品	No13。覆土上層。残長2.7cm。棒状							
82	不明鉄製品	SE01。残長5.9cm。板状。刀はつかない							
83	不明鉄製品	No319。覆土下層。残長11.6cm。棒状							

第148表 C区第21・26号住居跡出土遺物観察表 (第392図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師環	(14.8)	4.4		B	B	褐色	40%	掘り方
2	須恵短頸壺	(7.4)	9.6	(6.7)	B/C片	B	黄灰色	45%	SJ21 (No1) SJ26 (No18)。覆土上層+中層。末野産

C区第22号住居跡 (第393図)

C区第22号住居跡は29-17-18グリッドに位置する。第15・21・23・26号住居跡、第57号土塊、第6号溝跡に切られており、重複する遺構群のなかで最も古い。

平面形態は横長の長方形で、規模は長軸長6.10m、短軸長4.55m、深さ0.42mである。主軸方位はN-42°-Eを指す。

床面はやや凹凸があり、全体に堅く踏み固められていた。埋土は第2層に焼土粒子と炭化物粒子が、第3層にはロームブロックが多量に含まれており、人為的に埋め戻された可能性が高い。

カマドは北東壁の中央部に設置されたものと思われるが、上面を第21号住居跡に削られ、詳細は不明である。

ピットは12本検出された。Pit 1・2・4・6が主柱穴に相当しよう。他のピットの帰属は不明確である。

土塊は住居中央部から4基検出された。不整形土塊の集合体で、掘り込みも不規則である。当初住居を切る井戸跡の可能性を考えたが、断面観察により住居埋土の第2層が土塊内に落ち込んでいることが判明した。また、埋土下層にはロームブロック混じりの土が堆積していたことから、住居廃絶直後に掘り込まれた粘土採掘用の土塊と判断した。

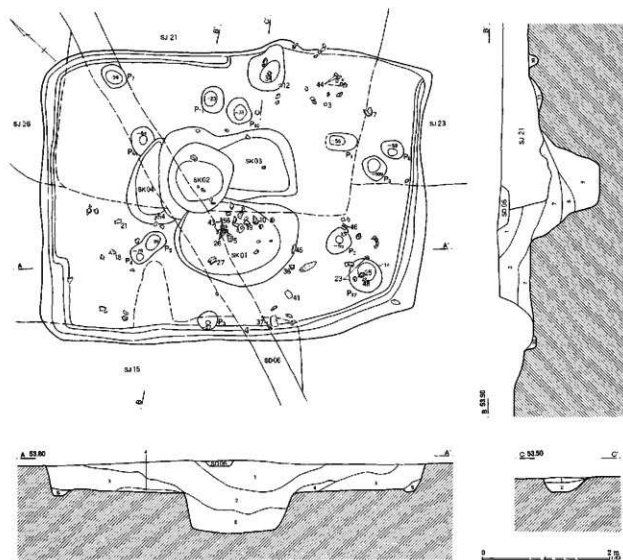
壁溝は北東壁の一部を除き巡っていた。

出土遺物は比較的多い。焼土混じりの土と主に、住居覆土から土塊内に落ち込んだ状態で出土しており、大半は投棄されたものと考えられる。器種としては土師器環・碗・皿・暗文環・甕・小型甕・壺、須恵器環・碗・蓋・壺、土鏝、鉄製品がある(第394・395図)。1~11は土師器環。丸底の北武蔵型環で、口縁部が内屈・内増するものと直立するものがある。12-13は丸底の暗文環で、内面放射暗文が施文される。14は斜格子暗文の皿か。15~18は皿。

20~30は須恵器環である。20は湖西産のいわゆる環H。胎土は精良である。21~23は小型環で、口径10.9cm~11.6cm。底部は回転ヘラケズリ調整される。24~27は相対的に大型で、口径14.6cm~14.8cm。底部は回転ヘラケズリ。29は最も大型の環で推定口径19.6cmである。28は無台碗。第17号住居跡(第 図)14と接合することが判明した。31~40は須恵器蓋である。いずれも内面にかえりをもつ。41は須恵器壺。外面平行叩き、内面には同心円当てで具痕が残る。42は土師器甕の胴部片で、内面に墨痕が付着する。52は鉄製釘、56は鉄製刀子である。その他円面硯が1点出土している。第10号住居跡出土の破片と接合したため、第361図に掲載した。

須恵器は178片出土し、内訳は環が91点(末野80・南比企10・湖西1)、碗1点(末野)、蓋54点(末野53・湖西1)、壺瓶類7点(末野6・南比企1)、甕23点(末

第393図 C区第22号住居跡



SJ22

1 褐色土 ローム散子・ロームブロックやや多量
焼土少量

2 黒色土 焼土・炭化物多量

3 暗褐色土 ローム散子・ロームブロック散入

4 褐色土 粘質土・ロームブロック散入

5 褐色土 ロームブロック

6 褐色土 ローム散子少量、炭化物・焼土散子やや多量

7 茶褐色土 ロームブロック・茶褐色粘質土ブロック散入

8 褐色土 ロームブロック多量

9 茶褐色土 ローム散子多量

10 暗褐色土 ローム散子多量

11 褐色土 ローム散子・焼土散下侵入

カマド (SJ22)

1 茶褐色土 ロームブロック多量

2 暗褐色土 焼土散子・ブロック多量、炭化物散入

野)、鉢1点(末野)、円面硯1点(末野か)である。

出土遺物は熊野Ⅱ期古段階と思われる。

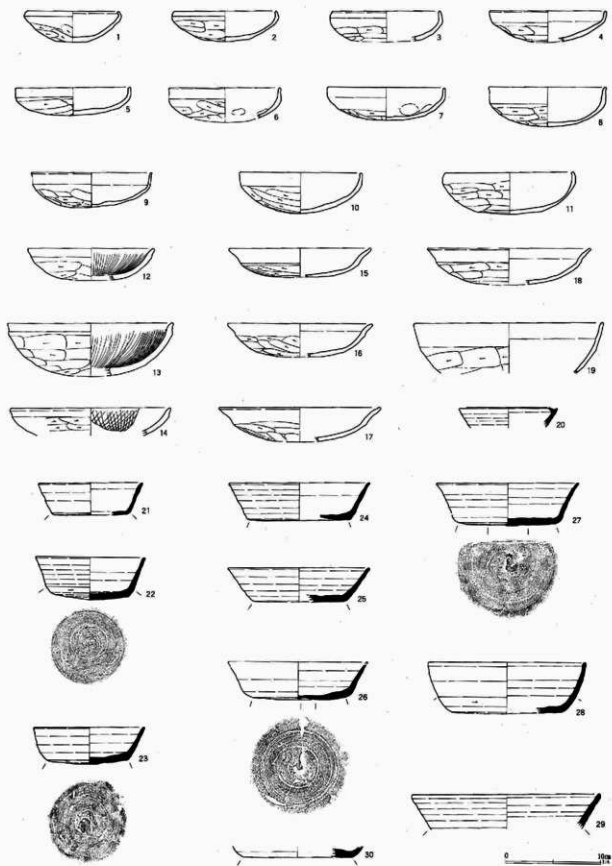
C区第23号住居跡 (第396図)

C区第23号住居跡は29-17-18グリッドに位置する。重複する第22号住居跡を切り、第21号住居跡、第32-33-35-57号土壌に上面を削平されていた。

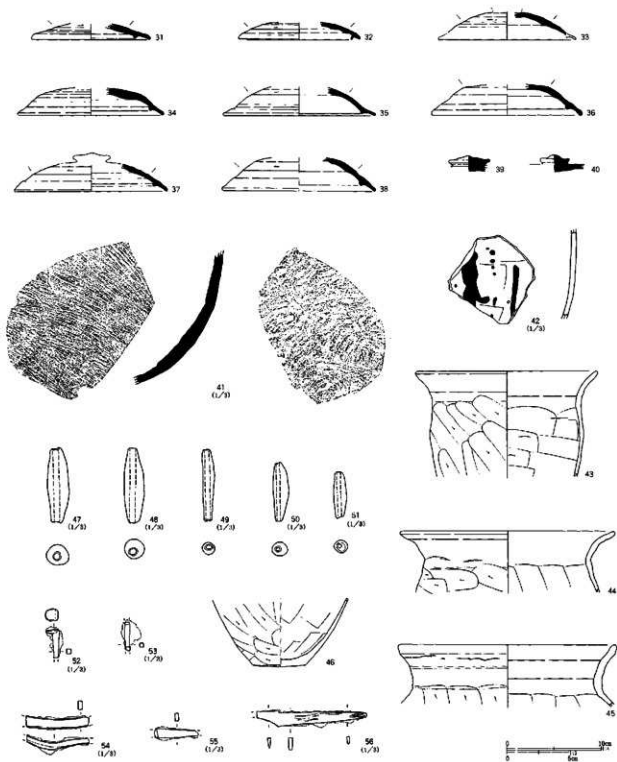
平面形態は方形と推定され、規模は長軸長3.54m、短軸長3.24m、深さ0.48mである。主軸方位はN-145°-Eを指す。

床面は第22号住居跡を埋めているために西壁に向かって沈下していた。断面観察によれば、第21号住居跡床面とほぼ同一で、西壁の立ち上がりは不明確

第394图 C区第22号住居跡出土遺物(1)



第395图 C区第22号住居跡出土遺物(2)

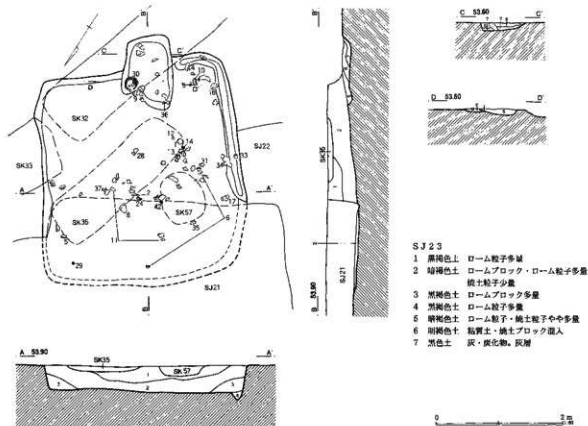


第149表 C区第22号住居跡出土遺物觀察表 (第394・395图)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師環	(9.6)	3.4		AB	A	褐色	20%	SK03
2	土師環	10.8	3.2		ABC	A	明褐色	45%	SK02
3	土師環	(11.2)	3.1		AB	B	明赤褐色	40%	N672. 羅り方
4	土師環	12.2	3.2		ABG	B	茶褐色	45%	羅り方

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
5	土師環	12.0	2.9		ABG	B	淡赤褐色	50%	No70. SK01内
6	土師環	(11.7)	3.2		B	B	茶褐色	40%	SK01-04(採掘場内 西)
7	土師環	12.3	3.4		AB	B	褐色	80%	No71. 掘り方
8	土師環	12.3	4.1		AB	A	明褐色	50%	No61. SK01-04(採掘場内)
9	土師環	12.6	3.6		BF	B	明褐色	65%	SK01-04(採掘場)。外面に黒斑あり
10	土師環	12.8	4.3		AB	A	褐色	75%	No66. SK01内
11	土師環	13.5	4.3		A	B	明褐色	45%	掘り方
12	土師暗文環	(13.3)	3.3		AB	B	橙褐色	15%	No90. 掘り方
13	土師暗文環	(17.4)	5.6		AB	B	橙褐色	40%	SK01-04内。内面放射状暗文(下→上)
14	土師暗文皿?	(16.8)	2.9		AB	A	橙褐色	10%	覆土(西)。内面斜格子暗文(右→左上)の順
15	土師皿	(14.8)	3.0		A片	A	明褐色	15%	掘り方
16	土師皿	(15.2)	3.5		AB	A	黄褐色	20%	掘り方
17	土師皿	16.8	3.6		AB	B	明赤褐色	45%	覆土(東)
18	土師皿	17.0	3.8		B	B	赤褐色	50%	No34(西)。覆土上層
19	土師碗	(19.8)	5.4		AB	A	明褐色	20%	No64. SK01内
20	須恵環	(8.7)	2.0		B	A	明灰色	5%	覆土。西面
21	須恵環	10.9	3.2	(7.5)	BC片	B	灰色	35%	No97(西)。掘り方。未野産か。底部A3a手法か
22	須恵環	11.4	4.5	7.6	BCF片	B	淡黄灰色	80%	掘り方。未野産。底部A3c手法
23	須恵環	11.6	3.9	8.4	BC片	B	灰白色	70%	No9-13(西)。覆土中層。未野産。底部A3a手法
24	須恵環	(14.6)	4.0	(10.2)	C片	D	橙褐色	15%	SK02. 未野産。底部3a手法
25	須恵環	14.7	3.6	9.8	BC	B	黄灰褐色	70%	No12(覆土上層)+採掘場。未野産か。底部A3a手法
26	須恵環	(14.4)	3.7	9.8	BC片	B	黄灰褐色	70%	No42(SK01)+確認区。未野産。底部A3b手法
27	須恵環	14.8	4.5	10.2	B片	A	灰褐色	50%	No48. SK01内。未野産。底部A3a手法
28	須恵碗	16.4	5.4	(11.6)	C片	C	灰褐色	15%	SK02. 未野産。全体に風化。底部3c手法
29	須恵環	(19.6)	3.6		C片	A	青灰色	25%	掘り方・SK01-04。未野産
30	須恵環		1.2	(11.5)	B片	B	灰色	10%	覆土(西)+SK01-04。未野産。底部回転ヘラケズリ
31	須恵蓋	(12.4)	1.7		A片	C	灰褐色	25%	覆土(東)。未野産
32	須恵蓋	(12.6)	1.8		B片	A	紫灰色	20%	覆土(東)。未野産
33	須恵蓋		2.4		D片	C	暗黄褐色	40%	確認区。未野産
34	須恵蓋	(15.2)	2.9		BC片	B	茶灰色	20%	SJ22(掘り方No89)+SJ21(1号カマF)。未野産
35	須恵蓋	(16.0)	3.1		C片	B	灰褐色	30%	SK01-04。未野産
36	須恵蓋	(15.5)	3.3		BC片	A	灰色	15%	No24. 覆土下層。未野産
37	須恵蓋	(16.0)	2.9		BC片	B	灰色	40%	No22(床面)+SK01-04。未野産
38	須恵蓋	(16.0)	3.5		B片	B	灰色	10%	覆土(西)+確認区+SK01-04。未野産
39	須恵蓋		1.7		B片	A	灰色	95%	覆土(東)。未野産。つまみ径4-4cm
40	須恵蓋		1.7		B片	A	灰色	90%	覆土。未野産。つまみ径3-1cm
41	須恵蓋				BC片	A	青灰色		No18. 床面。未野産
42	土師甕				B	B	暗褐色		覆土。崩壊付着
43	土師小型甕	(19.1)	11.2		AB	A	明褐色	20%	No69. SK01内
44	土師甕	(22.3)	6.5		AB	A	明褐色	30%	No76-79-81. 掘り方
45	土師甕	22.8	6.5		B	A	明褐色	30%	No25. 床面
46	土師甕		7.3	5.5	AB	A	褐色	100%	No4. 覆土中層
47	土鍋	覆土。長さ5.9cm。最大径1.6cm。孔径0.45cm。重さ15.12g。胎土B片。焼成A。淡褐色。残存率100%							
48	土鍋	No14. 覆土中層。長さ5.9cm。最大径1.6cm。孔径0.5cm。重さ12.55g。胎土B。焼成A。淡褐色。残存率100%							
49	土鍋	掘り方。長さ5.7cm。最大径0.95cm。孔径0.45cm。重さ4.53g。胎土B。焼成A。淡褐色。残存率100%							
50	土鍋	掘り方。長さ4.7cm。最大径1.05cm。孔径0.3cm。重さ5.7g。胎土B。焼成A。褐色。残存率100%							
51	土鍋	掘り方。長さ3.7cm。最大径1.0cm。孔径0.3cm。重さ3.66g。胎土B。焼成A。明褐色。							
52	釘	掘り方。残長2.3cm							
53	不明鉄製品	掘り方。残長2.3cm。棒状							
54	不明鉄製品	No36. 覆土上層。残長4.9cm。棒状							
55	不明鉄製品	掘り方。残長3.4cm。棒状							
56	刀子	No68. 採掘場内。残長8.7cm。木質付着							

第396図 C区第23号住居跡



であった。埋土はローム混じりの暗褐色色を基調としており、埋め戻された可能性がある。

カマドは南東壁に設けられていたが、上面を第32号土壌に削平され遺存状態は良くない。燃焼部は方形で、壁を切り込んでいた。埋土は第6層が天井部崩落土、第7層が灰層である。袖部は検出されなかった。

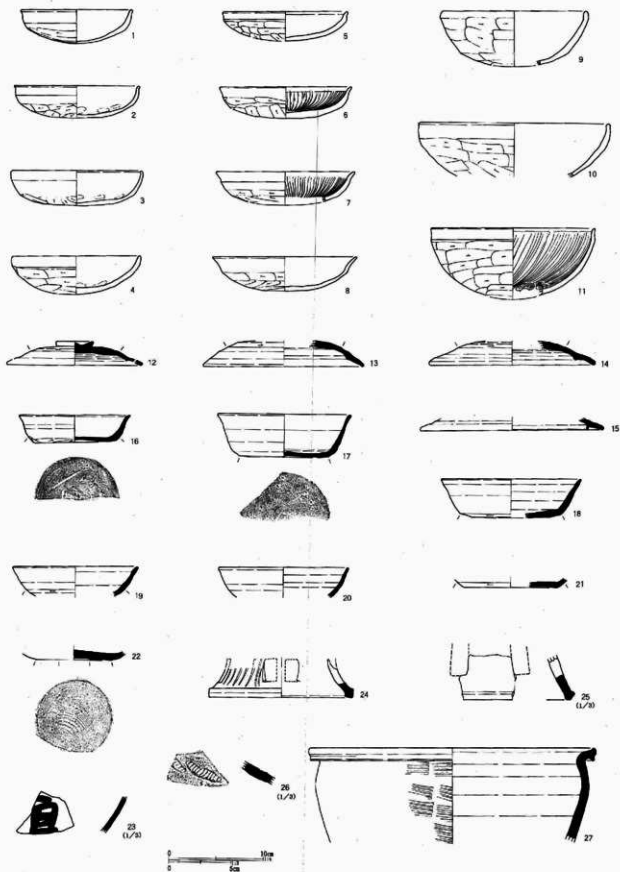
ピットは検出されなかった。壁溝は南西壁を中心に巡っており、全周しない。

出土遺物は土師器環・柄・皿・暗文環・暗文碗・甕・小型甕、須恵器環・蓋・円面甕・甕・瓶、土錘、鉄製品がある(第397・398図)が、第21号住居跡に帰属するであろう遺物が混入している。1～4は北武蔵型環。3は第21号住居跡に帰属するであろう。5は暗文環系の環で無文。6・7は丸底暗文環。内面に放射暗文が施文される。8は皿。9は大振りの環である。10は柄、11は暗文碗で、内面に放射暗文と中心部に螺旋暗文が施文される。第22号住居跡の破片と接合し、

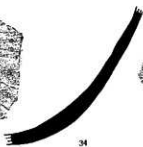
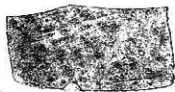
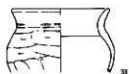
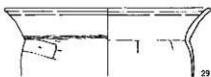
第22号住居跡に伴うと見た方が良からう。

12～15は須恵器蓋で小型(12)と大型(13～15)の2種がある。12は黄色味を帯びた灰白色を呈し、素地土は非常に細かい。やや軟質の焼き上がりで表面の胎土が手に付く、粉っぽい土器である。産地は不明、群馬産か? 15は灰白色で、黒色粒子が吹き出している。秋間産か。16～21は須恵器環、22は無台碗である。19・20・22は混入で、第21号住居跡に帰属するものと考えられる。16は体部下端が厚く、口縁部は外反する。底部はヘラ切りで、周辺と体部下端が手持ちヘラケズリ調整される。秋間産の可能性がある。17・18は未野産、底部は回転ヘラケズリ調整。23は環の外面に墨書がある。24・25は円面視脚部である。24は方形透十沈線、25は方形透で加飾されている。26は瓶肩部で櫛歯状工具の押し引き文がある。27・32は鉢で混入と思われる。28～30は土師器甕、31は小型甕である。33・34は須恵器甕、35は鉄製刀子で鋸が残る。38～42は土錘である。

第397图 C区第23号住居跡出土遺物(1)



第398图 C区第23号住居跡出土土器(2)



第150表 C区第23号住居跡出土土遺物観察表 (第397-398図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師環	11.5	3.6		A	B	淡褐色	55%	No.35. 覆土中層. 釜みあり
2	土師環	(13.0)	3.4		AB	B	淡褐色	30%	No.54. 覆土中層. 底部黒斑あり
3	土師環	(13.6)	3.6		AG	B	褐色	35%	覆土. 混入
4	土師環	13.4	4.1		ABD	B	褐色	70%	No.98-99. 床面十はば塚床面
5	土師陶文環	13.0	3.1		ABD	A	橙褐色	60%	No.68胎. 覆土中層. 内面風化著しい
6	土師陶文環	13.8	3.3		ABD	A	橙褐色	55%	SJ21(覆土)+SJ23(No.11-47-西). 覆土上層+中層
7	土師陶文環	(14.4)	3.1		AB	A	黄褐色	20%	カマド. 内面放射陶文(下→上) 使用痕跡あまりない
8	土師皿	(15.0)	3.7		AB	C	淡褐色	30%	No.55. 床面
9	土師環	(15.0)	5.7		AB	A	淡褐色	25%	No.102?. 覆土中層
10	土師輪	(19.8)	5.6		AB	B	褐色	20%	No.96. 覆土下層
11	土師陶文輪	(17.2)	7.1		ABD	A	橙褐色	30%	SJ22(掘り方No.73)+SJ23(No.83-西・東). 覆土中層
12	須恵蓋	(14.0)	(2.6)		A	C	黄灰白色	50%	No.43. 覆土下層. 群馬産か?. 粉っぽい土
13	須恵蓋	(16.6)	2.8		C片	B	灰褐色	25%	SJ23(No.39)+SJ21-SJ22. 覆土中層. 末野産
14	須恵蓋	17.2	2.5		CF	B	灰白色	20%	SJ21 (No.182). 覆土下層. 末野産
15	須恵蓋	(19.1)	1.2		B	A	灰白色	10%	覆土. 群馬(秋田産か). 黒色粒子吹き出しあり
16	須恵蓋	(11.6)	3.0	8.7	B	A	淡青灰色	50%	No.33. はば塚床面. 秋田産. 底部A2d手法
17	須恵環	(13.8)	4.6	9.3	B/C片	B	暗灰色	30%	No.28. 覆土中層. 末野産. 底部A3a手法
18	須恵環	14.6	4.1	(10.6)	C片	B	灰色	20%	覆土. 末野産. 底部3a手法
19	須恵環	(13.0)	3.2		C片	B	灰色	20%	覆土. 末野産. 体部下位回転ヘラケズリ
20	須恵環	(13.5)	3.2		針	A	暗青灰色	15%	覆土. 南比企産
21	須恵環	1.0	(9.6)		B/F片	C	明灰色	40%	覆土. 末野産. 底部+体部下端回転ヘラケズリ
22	須恵輪	1.1	7.9		B/C針	A	淡青灰色	70%	覆土. 南比企産. 底部B3a手法
23	須恵環				B/C	C	黄灰色		覆土. 末野産. 坯体部外面黒書. 「鳥」又は「鳥」か?
24	須恵円面碗		4.0	(15.0)	B/C	B	褐色	20%	No.3. 覆土上層. 群馬か末野産?. やや粗い質地土
25	須恵円面碗		3.6		片	C	黒灰色		覆土. 末野産か?. 脚部透孔2孔残る
26	須恵碗				B/C	A	青灰色		覆土. 群馬産か?. 外面磨鉢状工具の押引文
27	須恵鉢	(30.0)	10.0		C片	B	灰褐色	10%	覆土. 末野産. No.32と同一個体
28	土師壺	(23.8)	7.9		ABD	B	褐色	20%	No.91. 床面
29	土師壺	(21.5)	7.2		ABG	B	褐色	30%	SJ21(No.174) SJ22(東). 覆土中層
30	土師壺	21.7	14.0		AB	A	明褐色	50%	カマド内No.1
31	土師小型甕	(10.0)	6.7		AB	B	明褐色	25%	No.49. 覆土下層
32	須恵鉢	(28.4)	9.9		C片	C	灰褐色	10%	西. 末野産. 口縁部風化による摩滅
33	須恵壺				B/F	A	灰色		No.31. 覆土中層. 秋田産か. 外面平行叩き. 自然釉
34	須恵壺				B/C片	A	暗青灰色		No.29. 覆土中層. 末野産
35	刀子	No.25. 覆土上層. 残長9.9cm. 鋼残る							
36	不明鉄製品	No.92. 覆土下層. 残長4.6cm. 棒状							
37	不明鉄製品	No.89. 床面. 残長2.4cm. 棒状							
38	土罐	覆土. 長さ4.1cm. 最大径1.1cm. 孔径0.25cm. 重さ4.27g. 胎土B/H. 焼成A. 明褐色. 残存率95%							
39	土罐	覆土. 長さ5.4cm. 最大径1.8cm. 孔径0.6cm. 重さ15.11g. 胎土B/C/H. 焼成A. 橙褐色. 残存率100%							
40	土罐	覆土. 長さ5.7cm. 最大径1.7cm. 孔径0.5cm. 重さ15.0g. 胎土B/C/H. 焼成A. 褐色. 残存率95%							
41	土罐	覆土. 長さ6.1cm. 最大径1.8cm. 孔径0.6cm. 重さ15.45g. 胎土B/H. 焼成A. 淡褐色. 残存率100%							
42	土罐	SJ21(No.185). 覆土中層. 長さ6.2cm. 最大径1.8cm. 孔径0.4cm. 重さ17.28g. 胎土B/F. 焼成B. 褐色. 残存率100%							

須恵器は157片出土し、内訳は坏が119点(末野98・南比企19・湖西1・群馬1)、碗が1点(南比企)、高台坏が1点(末野)、蓋が4点(末野2・群馬2)、甕が25点(末野22・南比企1・群馬1・不明1)、鉢が2点(末野)、壺瓶類5点(末野4・群馬?1)である。

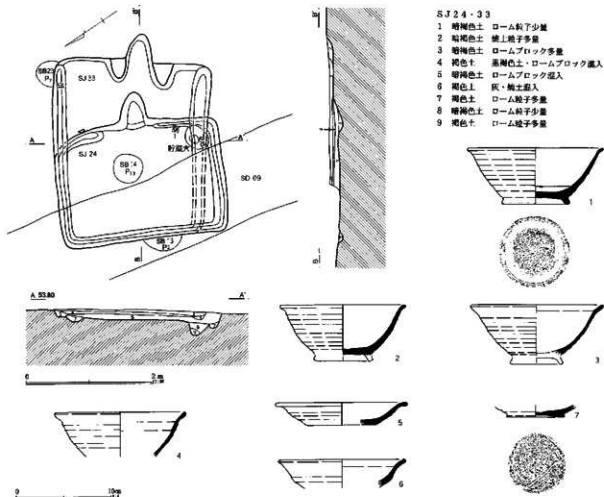
住居の時期は熊野Ⅱ期と考えられる。

C区第24号住居跡 (第399図)

C区第24号住居跡は29-18・19グリッドに位置する。重複する第13・14・23号掘立柱建物跡を切り、第33号住居跡、第9号溝跡に切られていた。第33号住居跡は本住居跡と2辺を共有しており、直接的に建て替えられたものと考えられる。

平面形態は横長の長方形で、規模は長軸長2.80m、

第399図 C区第24・33号住居跡・出土遺物



第151表 C区第24・33号住居跡出土遺物観察表 (第399図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵高台碗	14.3	5.9	7.0	BD片	D	淡紫褐色	90%	SJ24No1. 床面。未野産
2	須恵高台碗	(13.0)	5.2		BC片	D	明褐色	45%	SJ24貯蔵穴。未野産。高台欠夫
3	須恵高台碗	(13.9)	5.4		BCF片	D	灰黄褐色	15%	SJ24覆土。未野産
4	須恵高台碗	(13.6)	4.7		B片	B	黄褐色	15%	SJ33覆土。未野産
5	須恵皿	(13.4)	2.4	(7.3)	B CG片	B	褐色	20%	SJ33No1. 覆土下層。未野産
6	須恵皿?	(13.2)	3.0		BC片	B	灰色	40%	SJ33覆土。未野産。器種不明確
7	須恵皿		1.3	6.0	CG片	B	茶褐色	95%	SJ33カマド。未野産

短軸長1.86mと小型で、深さは0.15mである。主軸方位はN-117°-Eを指す。

床面は凹凸があるが非常に堅く踏み固められていた。カマド前面にある第14号掘立柱建物跡柱穴は上面がバリバリに硬化していた。埋土はロームブロック混じりの暗褐色土で埋められ、上面には第33号住居跡の床面が貼られていた。

カマドは南東壁に設けられているが、上面は削平

され遺存状態は良くない。燃焼部は壁を切り込んでおり、底面には灰・焼土混じりの褐色土が堆積していた。袖は遺存していなかった。

ピットはない。カマド右脇のコーナーには貯蔵穴が設けられていた。深さ約20cm。壁間はカマドを除きほぼ全周する。

出土遺物は少なく、器種としては須恵器高台碗が検出された(第399図)。1～3は高台碗である。口径

14cm前後で、口縁部は外反する。いずれも焼きは甘い。4～7は第33号住居跡出土遺物である。

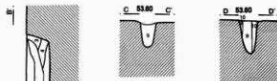
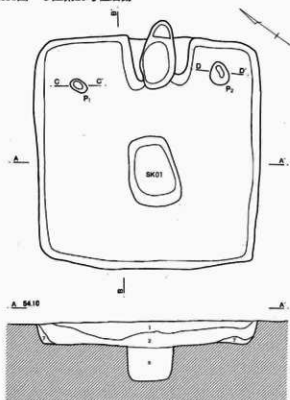
住居の時期は熊野Ⅵ期新段階～Ⅶ期と推定される。

C区第25号住居跡 (第400図)

C区第25号住居跡は30-17グリッドに位置する。

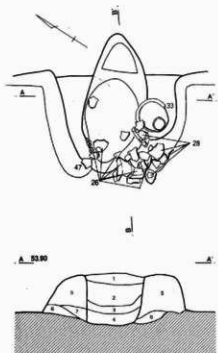
平面形態は方形で、規模は長軸長3.65m、短軸長

第400図 C区第25号住居跡



SJ25

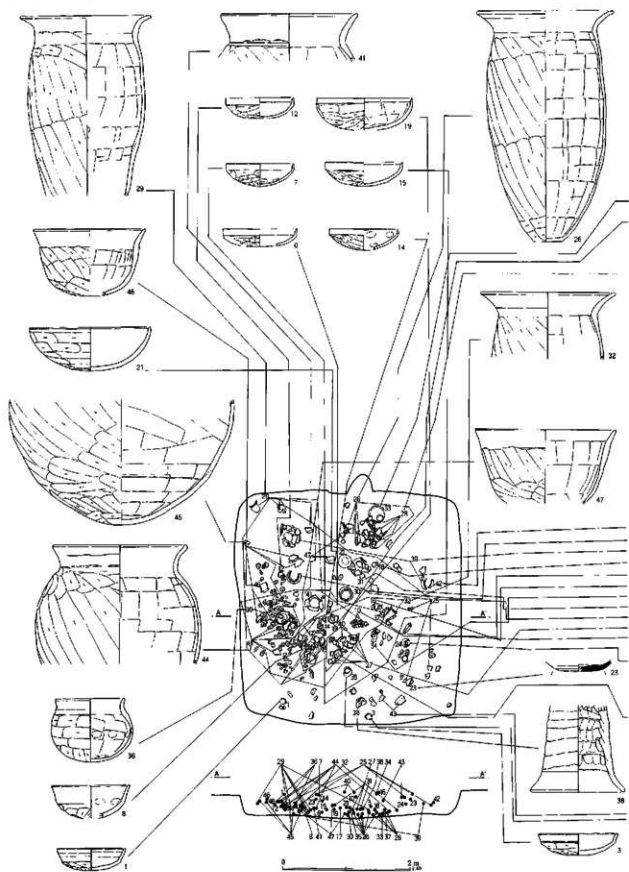
- 1 赤褐色土 ローム粒子多量、ロームブロック少量
- 2 黒褐色土 ローム粒子多量
- 3 褐色土 ローム粒子少量
- 4 暗褐色土 ロームブロック少量
- 5 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量
- 6 暗褐色土 ローム粒子多量
- 7 褐色土 ロームブロック多量
- 8 褐色土 ロームブロック混入
- 9 黒褐色土 ローム粒子混入
- 10 暗褐色土 ロームブロック多量



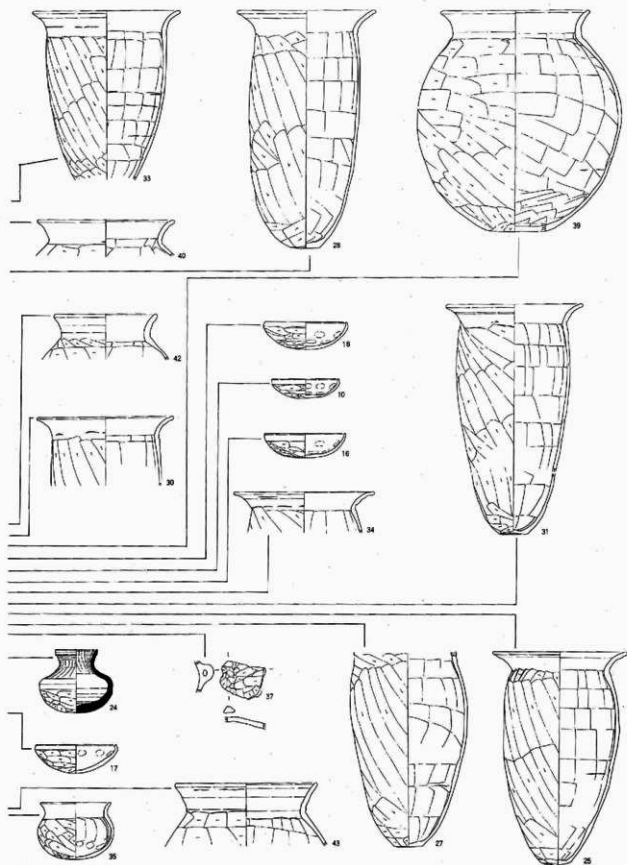
カマド

- 1 褐色土 ローム粒子・赤褐色粘質土混入
- 2 暗赤褐色土 焼土粒子ブロック多量
- 3 赤褐色土 焼土ブロック・炭化物混入
- 4 黒褐色土 灰・ロームブロック混入
- 5 褐色粘土 ロームブロック・焼土粒子混入
- 6 褐色土 ロームブロック多量
- 7 黒色土 炭化物混入

第401图 C区第25号住居跡遺物分布图(1)



第402图 C区第25号住居跡遺物分布图(2)



3.50m、深さ0.40mである。主軸方位はN-48°-Eを指す。

床面は凹凸があり、特に堅く踏み固められた箇所は認められなかった。埋土はローム粒子を多量に含む茶褐色土と黒褐色土をベースとしており、多量の遺物が投棄されていた。また、北西壁の中央付近には径5-10cm大の円礫が多量に投棄されていた。

カマドは北東壁の中央に設けられていた。燃焼部はほぼ壁内に納まり、煙道部は段差をもって壁外に延びている。埋土は第1-3層が天井部崩落土、第4層が灰層である。袖は褐色粘土を積み上げて構築されていた。右袖には土師器甕が伏せた状態で据えられていた。袖の芯にしたものと考えられる。

ピットは2本検出された。柱穴と考えても良いが、対応する南西壁側の柱穴は検出されなかった。土壌は1基、住居中央部から検出された。上面に床面が貼られており、床下土壌と思われる。埋土はロームブロック混じりの褐色土である。

壁溝は検出されなかった。

出土遺物は非常に多い。東コーナー付近に少ない傾向にあるが、ほぼ満遍なく出土している。出土状態を見ると、壁際の遺物が高く、中央部のそれが低いことがわかる(第401図)。住居廃絶後、一次堆積土が形成された後に投棄されたことを示している。土層との対比は概ね第2層に相当しよう。

出土遺物は土師器環・碗・甕・壺・鉢・丸底鉢・須恵器環・小型壺・甕、土製支脚の他、土師器不明製品がある(第403-405図)。1-19は土師器環である。1-2は有段口縁環。小型で段は退化している。3-12-15は横俵環である。口径10-11cm大の小振りの製品が主体を占める。3は口縁下の稜がしっかりしており、口径も12.2cmと大きく、これらの中では古相を示す。15は口径12cmと大きい。口縁下の稜は失われ、ケズリによって僅かに表現されるのみである。8は横俵環としたが、器高が深く他の土器とは別系統である。4-6-12は強いヨコナデにより稜を表現している。7-9-11は体部のケズリにより稜を作り

出すタイプである。

13-14-17-18は北武蔵型環。口縁部は短く内屈する深碗タイプである。口径10cm大の小型のもの、12cm大の一回り大きいものがある。16は丸椀風の環。19は暗文環と同一器形と胎土であるが、内面の暗文は施文されない。20は小型の皿。21は椀である。

22は小振りの須恵器環で、環Gと思われる。末野産か。23は丸底風の環または壺底部である。回転ヘラケズリ調整される。末野産。24は小型の丸底壺。頸部を絞り込んでつくられ、口縁から頸部にかけて絞り目が残る。胴部下半は手持ちヘラケズリ調整。末野産である。

25-34は土師器甕。全て長胴甕である。26-28はカマド焚口部に潰れた状態出土し、天井部の架構材に使用された可能性がある。33はカマド右袖の芯に用いられていた。35-36は土師器小型鉢(壺)。37はリング状の把手(つまみ)が付くものであるが、器種は不明。外面はヘラケズリ調整。内面はヘラナデである。38は土製支脚。39-45は土師器壺。46-47は鉢である。48は須恵器甕。外面平行叩き後ナデ、内面同心円当て具。

須恵器は7片出土したのみである。環が4点、甕2点、小型壺1点で、全て末野産またはその可能性の高いものである。

住居の時期は熊野I期古相と考えられる。

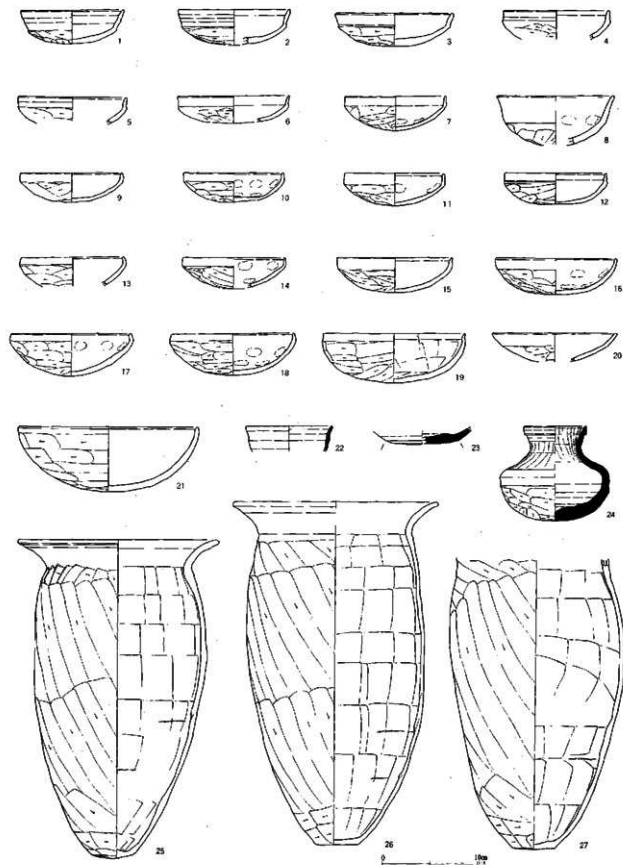
C区第26号住居跡(第384・385図)

C区第26号住居跡は28・29-17グリッドに位置する。重複する第22号住居跡を切り、第21号住居跡に切られていた。また、第6号溝跡に上面を削平されていた。第21号住居跡は本住居跡と壁ラインと主軸がほぼ一致し、直接的に建て替えられたものと考えられる。カマド周辺が遺存するのみで、詳細は不明確である。

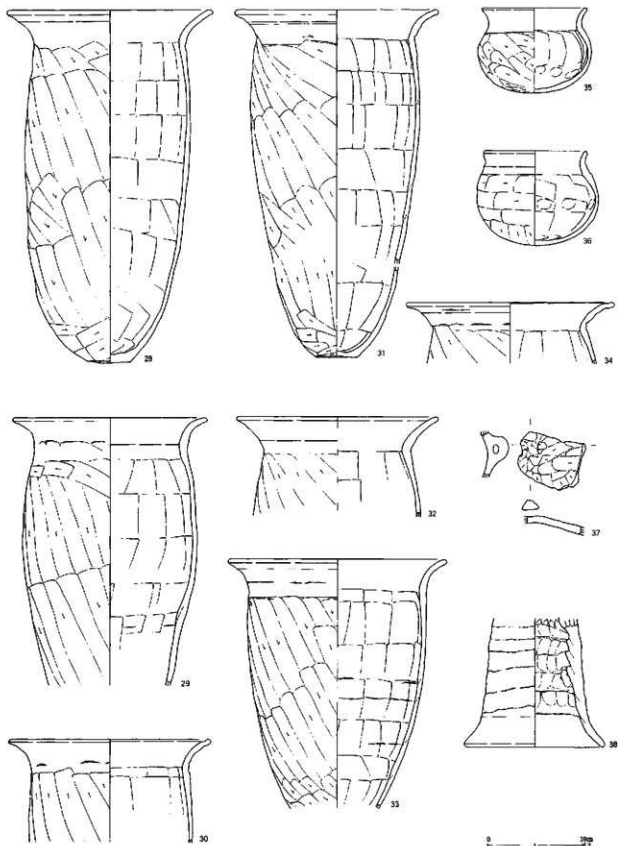
平面形態は方形系と推定される。残存規模は長軸長4.44m、短軸長0.96m、深さ0.40mである。主軸方位はN-32°-Wを指す。

床面は凹凸があるが堅く締まっていた。埋土には

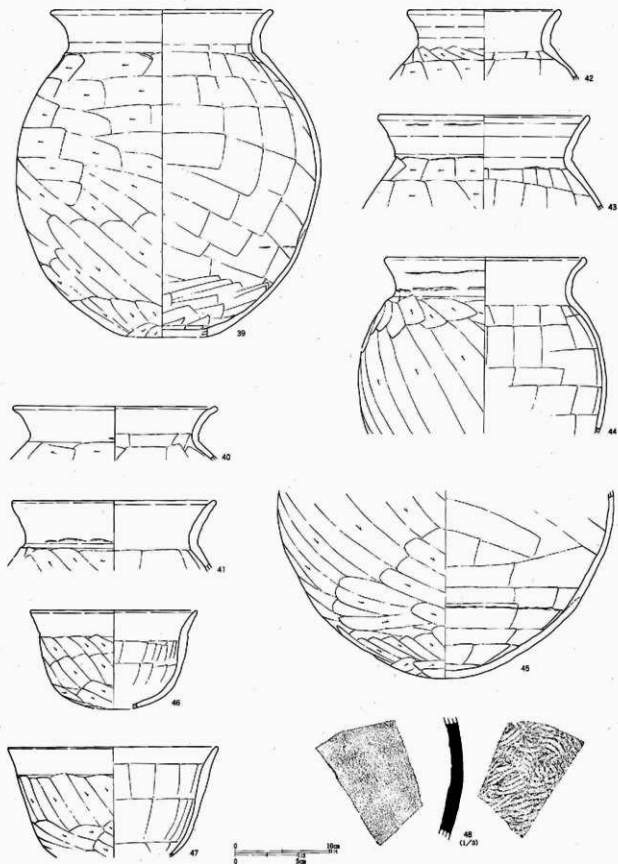
第403图 C区第25号住居跡出土遺物(1)



第404图 C区第25号住居跡出土遺物(2)



第405图 C区第25号住居跡出土遺物(3)



第152表 C区第25号住居跡出土土物類表(第403~405図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師環	10.7	3.5		A B	B	褐色	90% No114. 覆土上層。有段口縁	
2	土師環	(11.7)	3.6		A B G	B	橙褐色	35% 覆土。外面風化。有段口縁	
3	土師環	12.2	3.5		A B G	B	暗褐色	100% No59. 覆土下層。口縁部油滲り著。横紋環	
4	土師環	(11.0)	3.0		A B	A	明褐色	15% 覆土。横紋環	
5	土師環	(11.3)	2.8		A B	B	明褐色	15% 覆土。横紋環	
6	土師環	(11.6)	2.7		A B	B	橙褐色	10% No85. ほぼ床面。横紋環	
7	土師環	10.5	3.6		A B	B	褐色	60% No86. 覆土上層。横紋環	
8	土師環	12.2	5.1		A B	B	淡褐色	55% No97. 覆土下層。横紋環か	
9	土師環	(10.6)	3.1		A B G	B	淡褐色	25% 覆土。横紋環	
10	土師環	10.4	3.1		A B	B	褐色	100% No35. 覆土上層。横紋環	
11	土師環	(10.4)	3.4		A B	B	褐色	35% 覆土。横紋環	
12	土師環	10.6	3.2		A B	B	橙褐色	60% No10. 覆土下層。横紋環	
13	土師環	(10.7)	3.1		A B	B	褐色	15% 覆土。北武蔵型環	
14	土師環	10.7	3.2		A B	B	褐色	45% No82. 覆土中層。北武蔵型環	
15	土師環	12.0	3.7		A B G	A	明褐色	95% No89. 覆土下層。	
16	土師環	(12.5)	3.9		A B	A	明褐色	35% No27. 覆土上層。丸縁タイプ	
17	土師環	12.5	4.5		A B	B	暗褐色	85% No55. 覆土中層。北武蔵型環	
18	土師環	12.8	4.4		A B	B	暗黒褐色	50% No20. 覆土下層。北武蔵型環	
19	土師環	(14.8)	5.2		A B	A	明橙褐色	40% No80. 覆土下層。断面還元層あり。暗文環系無文土器	
20	土師皿	(13.0)	3.0		A B	B	褐色	10% 覆土	
21	土師碗	18.8	6.8		A B G	B	淡黄褐色	95% No18. 覆土下層	
22	須恵環	(9.0)	2.7		B	B	灰褐色	10% 覆土。未野産か	
23	須恵環		1.8	(7.7)	B C 片	B	暗灰色	30% No51. 覆土中層。未野産	
24	須恵小型壺	6.4	9.9		B C G 片	A	褐色	100% No41. 覆土下層。未野産。口縁一部段紋り目	
25	土師壺	20.8	33.4	4.7	A B	B	褐色	65% No2-7-34-47-53. 覆土中層+下層	
26	土師壺	21.2	36.1	4.4	A B	B	褐色	65% カマド内No2-4・5・6・9・16・19	
27	土師壺		30.7	4.4	A B	B	褐色	55% No66-70-71. 覆土中層+下層	
28	土師壺	21.3	37.0	4.6	A B	B	褐色	70% カマド内No11-15-18-20+カマド覆土	
29	土師壺	20.2	28.2		A B	B	淡褐色	65% No1-3-9-36-94-126+カマド覆土。覆土中層+床面	
30	土師壺	21.0	10.9		A B	B	褐色	70% No15. 覆土下層	
31	土師壺	21.0	36.6	4.5	A B	B	褐色	75% No20. 覆土下層	
32	土師壺	(21.0)	10.5		A B	B	褐色	25% No30-96. 覆土下層	
33	土師壺	22.8	26.2		A B	B	褐色	95% カマド右袖内No21	
34	土師壺	21.7	6.4		A B	B	褐色	65% No37. 覆土上層	
35	土師小型壺	10.9	8.9		A B	B	褐色	95% No64. 覆土下層	
36	土師小型壺	10.6	9.9		A B	B	明褐色	75% No80-101-108. 覆土中層+下層	
37	土師不明				A B	B	淡褐色	No33. 覆土下層。環状の「つまみ」。孔径0.6~0.8cm	
38	土師支脚		13.6	(14.4)	A B	B	淡褐色	35% No60. 覆土下層	
39	土師壺	22.8	34.3		A B	B	淡褐色	95% No4-25. 覆土下層+床面。内面黒色有材物付着	
40	土師壺	21.2	5.7		A B	B	褐色	75% No67-69-87. 覆土上層	
41	土師壺	21.2	7.5		A B	B	褐色	75% No13. 覆土下層	
42	土師壺	15.7	7.2		A B	B	淡褐色	60% No25. 覆土下層	
43	土師壺	(22.0)	9.9		A B	B	橙褐色	35% No55-56. 覆土中層	
44	土師壺	20.7	18.6		A B	B	褐色	60% No81-103-105-111. 覆土中層+下層+床面	
45	土師壺		19.8		A B	B	褐色	35% No5-6-109-110-128. 覆土中層+下層	
46	土師鉢	(17.4)	10.4		A B	B	淡褐色	30% No11. 覆土中層。外面黒斑あり	
47	土師鉢	(22.0)	11.6		A B	B	褐色	35% No17-95 カマド内No1. 覆土中層+下層	
48	須恵壺				B	B	灰色	No129. 覆土下層。未野産か。外面平行叩き後ナデ	

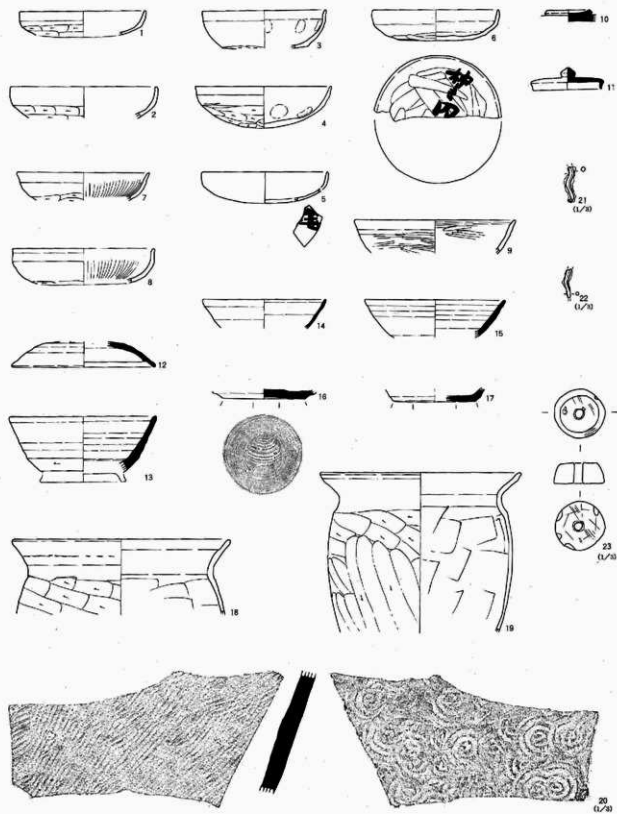
ロームブロックが多量に含まれていた。

カマドは北西壁に設けられていた。燃焼部は壁を

切り込んで掘り込まれ、先端は斜め上方に立ち上が

る。埋土は第2層が天井部崩落土、第3層が灰層で

第406图 C区第26号住居跡出土遺物



第153表 C区第26号住居跡出土遺物観察表(第406図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師環	(13.3)	2.5		AB	A	明褐色	45%	カマド内No1
2	土師環	(15.3)	3.3		AB	A	褐色	25%	カマド
3	土師環	(13.0)	4.0		AB	A	橙褐色	20%	覆土
4	土師環	14.3	4.3		AB	B	褐色	55%	No15. 覆土上層
5	土師環				AB	A	明褐色		覆土。底部外面墨書「神」
6	土師環	(13.2)	3.1		AF	A	明褐色	50%	No22. 覆土下層。外面墨書「神主内」
7	土師暗文環	(13.9)	2.9		AB	A	明褐色	15%	No7. 覆土中層。内外放射暗文
8	土師暗文環	(14.9)	3.7		AB	A	橙褐色	10%	カマド。平底暗文環か
9	土師環	(16.8)	3.6		AB	A	赤褐色	10%	覆土。内外面ヘラミガキ加える
10	須恵蓋		1.2		BC	A	青灰色	50%	覆土。群馬産。リングつまみ
11	須恵蓋	7.1	2.4		BC針	A	灰色	80%	No21. 覆土中層。南比企産。天井部外面自然軸
12	須恵蓋	(14.9)	2.7		C片	B	黒褐色	10%	覆土。末野産
13	須恵高台碗	(15.4)	5.9		BC片	A	灰色	15%	確認面一括。末野産
14	須恵環	(12.9)	3.1		C針	A	明灰色	20%	No19. 覆土中層。南比企産
15	須恵環	(14.7)	3.9		BC	A	明灰色	15%	確認面。末野産
16	須恵碗		1.0	8.4	C針	A	青灰色	100%	カマド内No2. 南比企産。内面やや磨滅
17	須恵環		1.4	(8.8)	C針	A	淡灰色	30%	No16. 覆土上層。南比企産。底部B3手法
18	土師甕	(22.5)	8.0		AB	B	橙褐色	20%	カマド内No18-14
19	土師甕	(21.0)	17.0		AB	B	橙褐色	30%	カマド内No7-5
20	須恵甕				C片	A	青灰色		No12. 覆土中層。末野産。外面平行(縦格子)叩き
21	釘	カマド。残長2.7cm。先端か?							
22	釘	カマド。残長2.3cm。先端か?							
23	石製紡錘車	カマドNo9。高さ1.6cm。重さ42.55g。残存100%。							

ある。袖は灰白色粘土で構築されていた。

貯蔵穴は北コーナー内側に掘り込まれていた。深さ15cm。壁溝は検出されなかった。

出土遺物は土師器環・暗文環・甕、須恵器環・碗・高台碗・蓋・甕、石製紡錘車がある(第406図)。1～6は土師器北武蔵型環である。4は深身の丸底形態で混入であろう。3は深身で底部平底。伴う可能性は低い。1・2・6は弱い丸底風の形態である。6の底面には「神主内」と墨書が記されていた。住居西コーナー内側の覆土下層から出土した。5の環底面にも「神」の墨書が残っていた。7・8は暗文環で、7は混入、8は平底風となろう。9は土師器環または碗で、体部外面はヘラケズリ後ミガキ、内面もミガキが入る。10は須恵器蓋。リング状で端面が面取りされている。群馬産。11は蓋甕。宝珠つまみで天井部には自然軸が付着する。南比企産。12は須恵器蓋。内面のかえりから天井部にかけて、黒色有機物が付着している。漆の可能性ある。13は碗。おそらく高台が付くものと推定される。厚手で、体部下位を

回転ヘラケズリ調整。末野産。14・15・17は須恵器環。

17は底部回転糸切り後周辺部を回転ヘラケズリ調整されている。16は無台碗。底部回転糸切り後、周辺部回転ヘラケズリ調整。南比企産。18・19は土師器甕。18は口縁部が緩やかに立ち上がるが、19は毛部の屈曲が大きい。21・22は鉄釘か。23は石製紡錘車。カマド内から出土した。

須恵器は65片出土し、内訳は環が33点(末野30・南比企3)、碗が1点(南比企)、高台碗が2点(末野)、蓋が5点(末野3・南比企1・群馬1)、甕類6点(末野)、甕18点(末野)である。

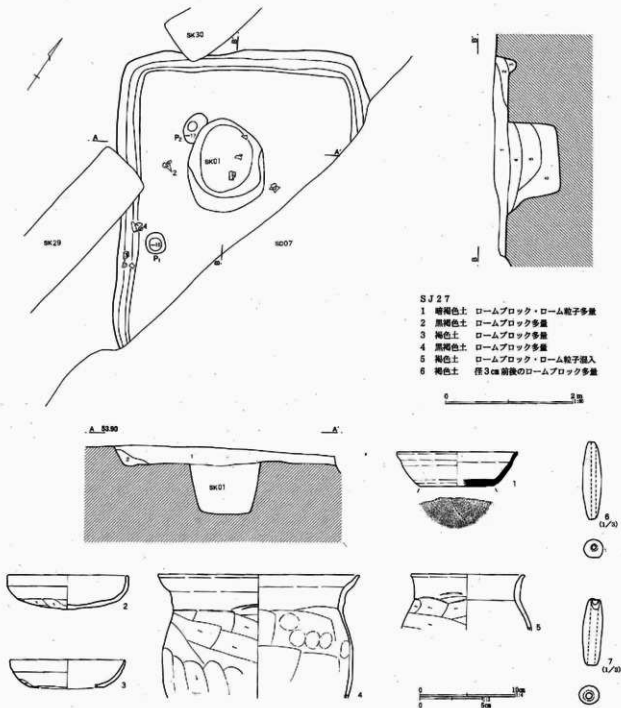
住居の時期は出土遺物及び第21号住居跡との関係から熊野Ⅲ期と考えられる。

C区第27号住居跡(第207図)

C区第27号住居跡は28・29-18グリッドに位置する。重複する第7号溝跡、第29・30号土壌に削平され、遺構の遺存状態は良くない。

平面形態は長方形と推定され、残存規模は長軸長4.68m、短軸長3.96m、深さ0.30mである。主軸方

第407図 C区第27号住居跡・出土遺物



SJ 27

- 1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量
- 2 黒褐色土 ロームブロック多量
- 3 褐色土 ロームブロック多量
- 4 黒褐色土 ロームブロック多量
- 5 褐色土 ロームブロック・ローム粒子混入
- 6 褐色土 径3cm前後のロームブロック多量

第154表 C区第27号住居跡出土遺物観察表 (第407図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵环	(12.5)	3.6	7.9	C片	B	淡灰色	25%	覆土。末野産。底部B3a手法
2	土師环	12.6	3.5		AB	A	褐色	45%	No7・8。覆土中層
3	土師环	(12.0)	2.9		BG	A	明褐色	15%	覆土
4	土師甕	(21.2)	13.0		AB	B	明褐色	15%	No9。床面
5	土師小笠甕	(11.5)	5.8		AB	A	褐色	20%	SK01
6	土鉢	覆土。長さ6.1cm。最大径1.4cm。孔径0.3cm。重さ12.0g。胎土B片。焼成A。橙褐色。残存率95%							
7	土鉢	覆土。長さ5.2cm。最大径1.4cm。孔径0.55cm。重さ10.32g。胎土B。焼成B。黒褐色。残存率95%							

位はN-30° -Wを指す。

床面は凹凸が目立つが、全体に堅く踏み固められていた。埋土にはロームブロックが多量に含まれており、人為的に埋め戻された可能性が高い。

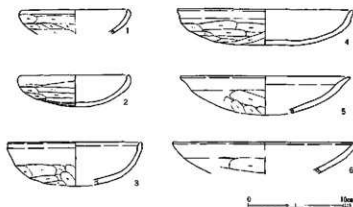
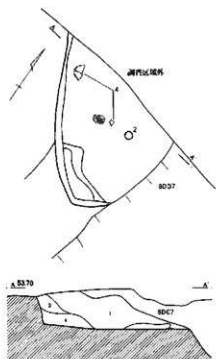
カマドは検出されなかった。削平された部分に存在したものであろう。

ピットは2本検出されたが、主柱穴にはならないであろう。住居跡中央付近の床面から土壌が1基検出された。上面はやや陥没していたが堅い床面が乗っていた。深さは0.84mと非常に深く、埋土にはロームブロックが混在していた。いわゆる床下土壌と考えられる。壁溝は全周する。

出土遺物は少ない。土師器環・甕・小型甕、須恵器環、土錘がある(第407図)。1は須恵器環。推定口径12.8cm。底部は全面回転ヘラケズリ調整される。末野産。2・3は土師器環。丸底風のもの(2)と平底風のもの(3)がある。4は土師器甕で、口縁部上端が外方に折れている。5は小型甕。6・7は土錘。

須恵器は29片出土し、内訳は坏が17点(末野14・南比企3)、蓋が6点(末野)、壺瓶類が2点(末野)、甕が4点(末野)である。

第408図 C区第28号住居跡・出土遺物



SJ28

- 1 緑褐色土・ロームブロック・ローム粒子多量
焼土粒子混入
- 2 褐色土・ロームブロック
- 3 黒褐色土・ローム粒子多量
- 4 茶褐色土・ロームブロック多量、炭化物混入

0 2.5

住居の時期は熊野Ⅲ期～Ⅳ期と推定される。

C区第28号住居跡(第408図)

C区第28号住居跡は28-18グリッドに位置する。調査区北端にあり、北側は調査区外、東側は第7号溝跡に削平され、遺構の詳細は不明である。

平面形態は方形采と推定され、残存規模は長軸長2.76m、短軸長1.85m、深さ0.54mである。主軸方位はN-32° -Wを指す。

床面は概ね平坦で、特に堅く踏み固められた形跡は認められなかった。埋土にはロームブロックの混入が目立った。

カマドやPitなどの付属施設は検出されなかった。出土遺物は少なく、土師器環と皿がある(第408図)。1・2は北武蔵型環で、口縁部は小さく内屈する。3は暗文環采の土器であるが、内面の暗文は確認できない。4～6は皿。4は口縁部が小さく外反するタイプで、つくりは「寧」である。5は口縁部が開くタイプ、6は直線的に延びるものである。

須恵器は環と甕の破片が各1片出土したのみである。いずれも末野産。住居の時期は熊野Ⅰ期新相中心と考えられる。

第155表 C区第28号住居跡出土遺物観察表 (第408図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師環	(11.2)	2.5		AB	A	淡橙褐色	15%	覆土
2	土師環	11.5	3.3		AB	A	明橙褐色	100%	No.4. 覆土下層
3	土師環	(14.0)	4.5		AB	A	橙褐色	15%	覆土。暗文坏系。内面無文
4	土師皿	18.5	3.7		ABG	A	橙褐色	80%	No1-3. 覆土下層
5	土師皿	(17.8)	3.9		AB	A	淡褐色	5%	覆土
6	土師皿	(19.4)	3.3		AB	A	淡褐色	10%	覆土

C区第29号住居跡 (第409図)

C区第29号住居跡は28-19グリッドに位置する。調査区北端にあり、北側は調査区外に延びる。第41号住居跡を切り、覆土上面は第9号溝跡に削平されていた。

平面形態は方形系と推定され、残存規模は長軸長2.76m、短軸長2.58m、深さ0.35mである。主軸方位はN-109° -Wを指す。

床面は凹凸が顕著であるが、全体に堅く踏み固められていた。埋土は茶褐色粘質土の上部にロームブロックを多量に含む暗褐色土が堆積していた。上層に関しては故意に埋められた可能性がある。

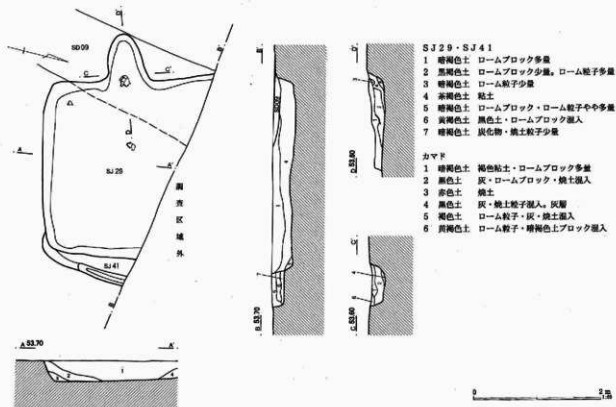
カマドは西壁に設けられていた。燃焼部は壁を切り

り込み、底面は平坦である。埋土は第1-3層が天井部崩落土、第4層が灰層に相当しよう。袖は精査したものの検出されなかった。住居廃絶時に除去された可能性がある。

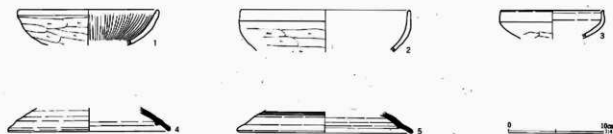
ピット、壁溝などの付属施設は検出されなかった。出土遺物は少なく、土師器環・碗・暗文環、須恵器蓋がある(第410図)。1は暗文環。口縁部内面に沈線が1条巡り、放射暗文が施文される。2は碗。3は北武蔵型環で、口縁部は直立気味である。4は末野産のかえり蓋。焼きは甘い。5は天井部にカキ目を施す須恵器蓋。胎土は緻密で堅緻に焼き上がっている。東海産(湖西産?)と推定される。

須恵器は8片出土し、内訳は坏が3点、蓋が3点、

第409図 C区第29・41号住居跡



第410図 C区第29号住居跡出土遺物



第156表 C区第29号住居跡出土遺物観察表 (第410図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師陶文環	(14.6)	3.7		AB	A	橙褐色	20%	カマド内。内面放射線文
2	土師陶	(17.8)	4.3		AB	A	褐色	10%	覆土
3	土師環	(10.8)	2.9		B	B	褐色	10%	覆土
4	須恵蓋	(16.8)	2.4		B片	A	明灰色	10%	覆土。末野産
5	須恵蓋	(18.2)	2.2		B	A	灰色	5%	覆土。天井部カキ目施す。胎土良く堅緻。東海産か

甕が2点である。1点を除き末野産。

住居の時期は熊野Ⅱ期と推定される。

C区第30号住居跡 (第411図)

C区第30号住居跡は28-19グリッドに位置する。調査区北端にあり、第40号住居跡が西側に近接している。遺構の北半は調査区外にあり、詳細は不明確である。

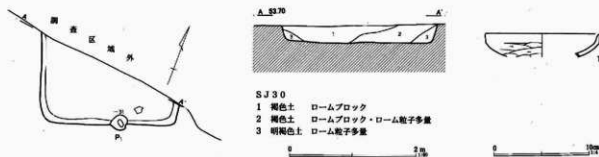
平面形態は方形系と推定され、残存規模は長軸長2.22m、短軸長1.45m、深さ0.25mである。主軸方位はN-19°-Wを指す。

床面は平坦で強く踏み固められていた。埋土はロームブロックを多量に含む褐色土を基調としており、人為的に埋め戻された可能性が高い。

カマドは検出されなかった。

ビットは1本壁に掛かって検出されたが、遺構に伴うものではない。壁溝はない。

第411図 C区第30号住居跡・出土遺物



出土遺物は少なく、図化できたのは土師器環1点である(第411図)。1は土師器模倣環である。口縁部の立ち上がりは短い。断面はサンドイッチ状に青灰色に還元している。推定口径12.0cm、残存高2.4cm。胎土に白色粒子と雲母状の微粒子を含み、焼成は良好である。色調は淡褐色で、約10%残存する。覆土出土。

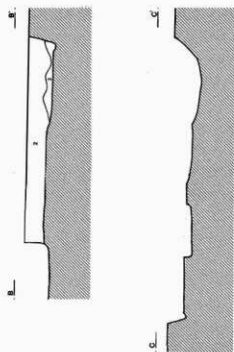
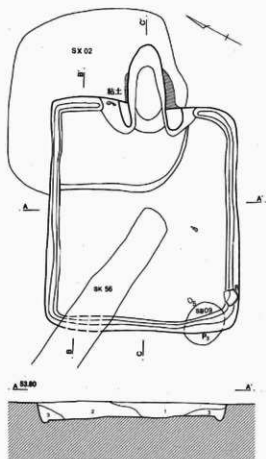
須恵器は甕の破片が1片出土したのみである。末野産。

出土遺物は熊野Ⅰ期と考えられるが、住居に伴う保証はない。住居の時期は不明としておきたい。

C区第31号住居跡 (第412図)

C区第31号住居跡は29-19・20グリッドに位置する。重複する第2号特殊遺構と第9号掘立柱建物跡を切り、第56号土壌に床面を削平されていた。第8号掘立柱建物跡との関係は、床面に掘立柱建物跡柱

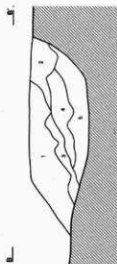
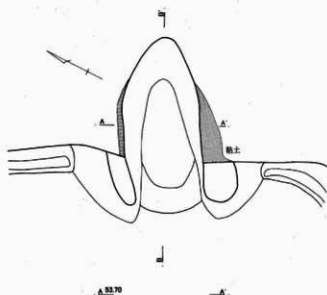
第412図 C区第31号住居跡



SJ31

- 1 褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量
- 2 暗褐色土 ロームブロック多量
- 3 黒褐色土 ロームブロック少量

0 2m

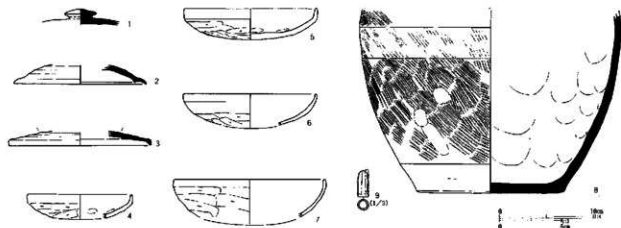


カマド

- 1 暗褐色土 ロームブロック多量、
粘土・焼土粒子少量
- 2 灰白色粘土 焼土・焼土粒子少量
- 3 灰白色粘土 焼土多量
- 4 暗褐色土 焼土粒子多量
- 5 黒色土 灰・焼土多量
- 6 暗褐色土 焼土粒子多量

0 1m

第413図 C区第31号住居跡出土遺物



第157表 C区第31号住居跡出土遺物観察表 (第413図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵蓋		1.7		B	C	灰色	50%	覆土。未野産
2	須恵蓋	(14.0)	2.0		F片	C	灰白色	20%	覆土。未野産
3	須恵蓋	(15.0)	1.5		F片	A	灰色	10%	覆土。未野産
4	土師環	(11.0)	2.5		AB	A	褐色	15%	覆土
5	土師環	(14.0)	3.2		AB	A	褐色	50%	No.2. 床面
6	土師環	(14.0)	3.3		AB	A	褐色	15%	カマド内
7	土師環	(16.0)	4.0		B	A	橙褐色	10%	覆土
8	須恵甕		19.4	15.7	B.C針	A	紫灰褐色	45%	No.1. 床面。南比企産。胴部下位回転ヘラケズリ
9	不明鉄製品	覆土。径1.8cm。長さ2.1cm。キャップ状							

穴が検出されず、また第8号掘立柱建物跡が第2号特殊遺構に切られていたことから、本住居跡の方が新しいことは確実である。

平面形態は長方形で、規模は長軸長3.70m、短軸長3.15m、深さ0.30~0.40mである。主軸方位はN-59°-Eを指す。

床面は第2号特殊遺構の上部に相当するカマド周辺が陥没していたが、全体に堅く踏み固められていた。埋土にはロームブロックが多量に含まれ、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

カマドは北東壁の中央に設けられている。燃焼部は壁を大きく切り込んで構築され、底面は皿状に窪む。埋土は第1~4層が天井部崩落上、第5層が灰層に相当する。袖と燃焼部側壁の周囲には灰白色粘土が貼られていた。

ピットは検出されなかった。充填は全周する。

出土遺物は非常に少ない。住居廃絶時に片づけられた可能性があろう。土師器環、須恵器蓋・甕、不明

鉄製品が出土した(第413図)。1~3は須恵器蓋である。1は擬宝珠つまみが付く。2はかえり蓋。3は無かえりの蓋で、扁平な器形である。いずれも未野産。4~7は土師器環。丸底または扁平な丸底を呈する北武蔵型である。8は平底甕。外面は平行叩き一部ナデ消している。胴部下端は回転ヘラケズリ調整。南比企産である。

須恵器は28片出土し、内訳は坏が6点(未野)、蓋が15点(未野)、甕が7点(南比企)である。

出土遺物の中で、未野産の無かえり蓋(3)は熊野Ⅲ期以降である。5の坏はⅡ期~Ⅲ期古段階。南比企産の平底甕(8)は同種の甕の中でも、底部が大きく古式に属するものと推定される。住居の時期は不明であるが熊野Ⅱ期~Ⅲ期古相を中心とした時期と考えておきたい。

C区第32号住居跡 (第414図)

C区第32号住居跡は31-17・18グリッドに位置する。住居南西部は調査区外に延び、北辺は第7号溝

跡に削平されている。また、第67・70号土壌の攪乱を受けていた。

平面形態は方形と推定され、規模は長軸長7.62m、短軸長7.14m、深さ0.18mである。主軸方位はN-22°-Wを指す。

床面は凹凸が目立ち、中央部は非常に堅く踏み固められていたが、壁際はやや軟弱であった。

埋土はローム粒子を含む褐色土と暗褐色土を基調としており、特に埋め戻されたような痕跡は認められなかった。

カマドは残存部には検出されなかった。第7号溝跡に削平されたものであろう。

ピットは4本検出された。Pit 3は底面まで掘削できなかったが、他のピットは深さ70cmを越え、4本主柱穴と考えて良いものである。

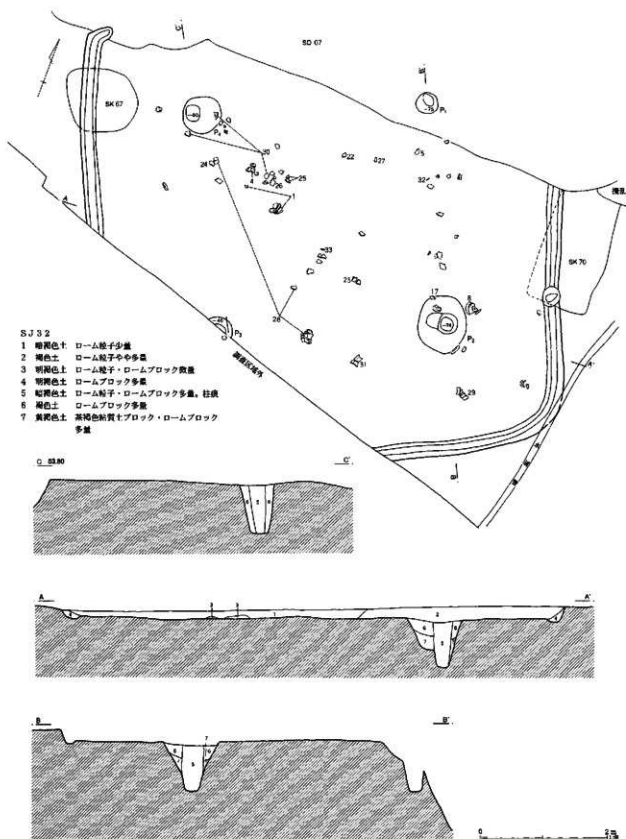
壁溝は残存部では巡っていた。

出土遺物は土師器・黒・内黒・暗文・暗文皿・甕・須恵器・蓋・高台・椀・盤・脚付盤・土製支脚、鉄製品がある(第415-416図)。1・2は須恵器蓋で、内面にかえりが付く。1は小型で、口径10-10.5cmの坏とセットとなろう。片岩を多量に含み末野産である。3は小型坏でいわゆる坏Gと思われる。4は坏底部片。底部と体部下端は手持ちヘラケズリ調整されている。5は高台椀か。器壁が厚く、踵立ち状

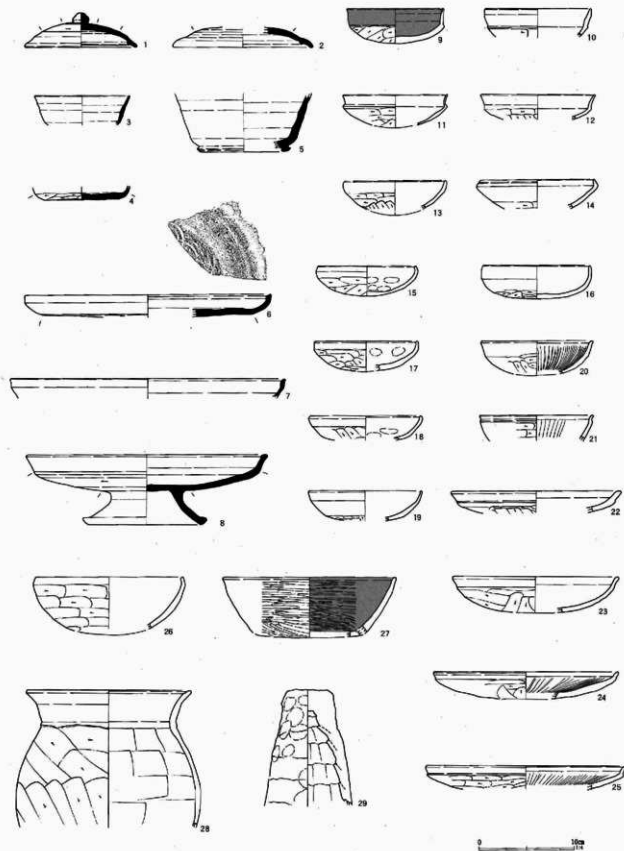
第158表 C区第32号住居跡出土遺物観察表(第415-416図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵蓋	11.6	3.5		B/C片	A	灰色	70%	No.12-29. 覆土下層十ほほ床面。末野産
2	須恵蓋	(14.4)	2.1		B片	A	灰白色	20%	覆土。末野産
3	須恵坏	(10.0)	3.1		B/F	A	灰黄白色	10%	覆土。末野産
4	須恵坏		1.4	7.7	B/G	B	灰色	25%	No.14. 覆土上層。末野産。底部手持ちヘラケズリ
5	須恵高台椀		6.1	(8.3)	B片	A	灰色	10%	No.32. 床面。末野産
6	須恵蓋	(26.0)	2.3	(22.2)	B片	A	淡茶褐色	15%	覆土。末野産。内面に当具痕あり
7	須恵蓋	28.7	2.1		B/C片	A	灰白色	10%	覆土。末野産
8	須恵脚付盤	25.1	7.4	11.8	H	A	灰白色	60%	No.58. ほほ床面。群馬産(藤岡産か)。黒色砂粒多い
9	土師坏	10.0	3.6		C/D	A	明褐色	95%	No.63. 覆土下層。縦比金型。赤彩(口縁部外面、内面)
10	土師坏	(11.0)	3.0		B/D	B	淡茶色	10%	覆土。有段口縁。内外面黒色処理か
11	土師坏	(10.9)	3.2		AB/G	B	褐色	15%	覆土
12	土師坏	(11.8)	2.5		AG	B	褐色	10%	覆土
13	土師坏	(10.6)	3.0		B/G	B	褐色	15%	覆土
14	土師坏	(11.8)	3.0		AD	B	褐色	10%	覆土
15	土師坏	10.2	3.2		AG	B	褐色	50%	覆土
16	土師坏	(11.1)	3.5		AG	B	褐色	40%	覆土
17	土師坏	(10.6)	3.1		AG	A	褐色	30%	No.44. 覆土下層
18	土師坏	(11.5)	2.5		AG	B	褐色	10%	覆土
19	土師坏	(11.7)	3.1		AB	B	橙褐色	15%	覆土
20	土師暗文坏	(11.5)	3.5		AB	B	明褐色	15%	覆土。内面放射暗文(下→上)
21	土師暗文坏	(11.7)	2.7		AB	B	褐色	10%	覆土。内面放射暗文(下→上)
22	土師皿	(17.6)	2.3		AD	B	橙褐色	15%	No.30. 覆土上層。内面暗文確認できない
23	土師皿	(17.2)	3.8		AB/D	A	褐色	20%	No.48. 覆土上層
24	土師暗文皿	(19.4)	2.8		AB	B	橙褐色	10%	No.10. 覆土中層。内面放射暗文(下→上)。外面底部黒斑
25	土師暗文皿	(20.8)	2.5		AG	B	橙褐色	20%	No.23-24. 覆土上層。放射暗文(下→上)
26	土師坏	(15.4)	5.5		G	B	橙褐色	20%	No.21. 覆土上層
27	土師内黒椀	(18.0)	(6.3)		B	B	褐色	15%	No.31. 覆土上層。内面黒色処理。内外面ミガキ
28	土師甕	17.0	14.5		AB	B	灰茶色	40%	No.9-55-56. 覆土中層十ほほ床面十床面
29	土師支脚		12.3		AB/D	B	灰茶色	90%	No.62. 覆土中層
30	土師甕	(24.2)	9.5		AB	B	明赤褐色	25%	No.2-4-18. 覆土上層十下層十ほほ床面
31	土師甕	(23.4)	11.8		AB	B	褐色	25%	No.57. ほほ床面
32	不明鉄製品	No.38. 床面。残長6.0cm。棒状							
33	鉄鏝か?	No.50. 覆土中層。残長9.1cm							

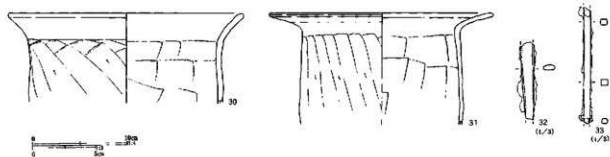
第414図 C区第32号住居跡



第415图 C区第32号住居跡出土遺物(1)



第416図 C区第32号住居跡出土土遺物(2)



の高台が付く。6は無台盤。口縁部は内斜し、端部は鋭い。底部は回転ヘラケズリ調整。内面中心部寄りには同心円文当て具痕が残っている。7も盤。8は脚付盤である。坏部はやや深く底面回転ヘラケズリ調整。内面はロクロナデ後の不定方向ナデ。脚部は低脚である。胎土はやや粗く、黒色砂粒が多く含まれる。群馬産(藤岡産か)と思われる。

9~19・26は土師器环。9は純比企型环である。模倣环の形態で、口縁部内面に凹線が巡る。内面と口縁部外面は赤彩される。比企・入間地域からの搬入品である。10は有段口縁环。口縁部の稜は退化している。内外面黒色処理をした可能性がある。11・12は模倣环。器壁は薄く、口縁部の立ち上がりは短い。13は椀タイプの小型环。14~19・26は北武蔵型环。14は口縁部が鋭く内屈する。15・18・19は口縁部が小さく内彎する。26は大振りの椀タイプである。20・21は暗文环で、内面に放射暗文が施文される。

22・23は皿。24・25は暗文皿で、内面に放射暗文が施文される。27は内黒椀。口縁部と底部片は接合しないが、おそらく無台であろう。内外面丁寧なヘラミガキで、内面黒色処理。系譜不明の土器である。28は壺。30・31は甕である。31は口縁部が大きく水平方向に屈曲する。32・33は不明鉄製品。33は棘冠被状の突起があり、鐵茎部の可能性がある。

須恵器は51片出土し、内訳は坏が26点(末野22・南比企4)、高台碗が1点(末野)、蓋が9点(末野)、甕が9点(末野)、脚付盤が6点(群馬)である。

住居の時期は熊野Ⅰ期新段階と考えておきたい。

C区第33号住居跡(第399図)

C区第33号住居跡は29・18・19グリッドに位置する。第24号住居跡の床面を埋めて構築されている。北東壁と北西壁は共有するため、第24号住居跡から本住居跡に建て替えられたものと考えられる。また、第13・14・23号掘立柱建物跡は本住居跡に切られていた。西部は第9号溝跡に削平されている。

平面形態は長方形で、規模は長軸長3.00m、短軸長2.52m、深さ0.05mである。主軸方位はN-124°-Eを指す。

床面は概ね平坦で、貼床されていた。埋土はローム粒子混じりの暗褐色土が堆積していた。

カマドは南東壁に設けられていた。燃焼部は壁を切り込み、底面はほぼ平坦である。埋土は焼土粒子を多量に含む暗褐色土で、天井部崩落土であろう。明確な灰層は形成されていなかった。袖に相当する部分には灰色の粘質土が堆積していたが、あまり明確なものではない。

ビットは検出されなかった。壁溝はカマドのある南東壁を除き巡っていた。

出土遺物は少なく、須恵器高台碗と皿が検出されたのみである(第399図4~7)。重複する第24号住居跡と器種組成は同一である。

住居の時期は熊野Ⅵ期新段階~Ⅶ期と考えられる。C区第34号住居跡(第417図)

C区第34号住居跡は30・31-18・19グリッドに位置する。重複する第19号掘立柱建物跡、第59号土壇、第9号溝跡に切られていた。第1号ビット列との関係は不明瞭であった。

平面形態は長方形で、規模は長軸長3.52m、短軸

長2.94m、深さ0.15mである。主軸方位はN-45°-Eを指す。

床面は概ね平坦で、南西壁周辺がやや軟弱である他は、堅く踏み固められていた。埋土はローム粒子を多量に含む暗褐色土を基調としていた。

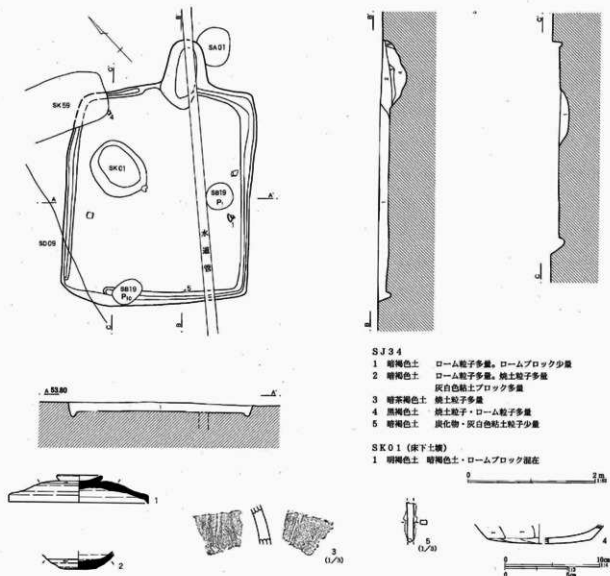
カマドは北東壁に設けられていた。燃焼部は壁を切り込んで構築され、底面は皿状に掘り込まれていて

た。埋土は第2～5層が天井部崩落土、明確な灰層は形成されていなかった。袖は検出されなかった。住居廃絶時に除去された可能性がある。

ピットは検出されなかった。土壌は1基検出された。上面に貼床されており、住居に伴う床下土壌と考えられる。壁溝は一部途切れていた。

出土遺物は少なく、土師器壺、須恵器蓋・坏、陶棺、

第417図 C区第34号住居跡・出土遺物



SJ34

- 1 暗褐色土 ローム粒子多量、ロームブロック少量
- 2 暗褐色土 ローム粒子多量、焼土粒子多量
灰白色粘土ブロック多量
- 3 暗茶褐色土 焼土粒子多量
- 4 黒褐色土 焼土粒子・ローム粒子多量
- 5 暗褐色土 炭化物・灰白色粘土粒子少量

SK01 (床下土壌)

- 1 明褐色土 暗褐色土・ロームブロック混在

第159表 C区第34号住居跡出土遺物観察表 (第417図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵蓋	(14.8)	2.9		BF	A	灰色	30%	No.1. 覆土中層。林間産。内面磨減、転用説か
2	須恵坏		1.8	(3.5)	B	A	灰色	20%	覆土。湖西産。坏自身と思われる
3	陶棺か								覆土。胎土B片。焼成A。褐色。土師質の焼き上がり。外面平行叩き後ナデ。内面ナデ
4	土師壺		2.0	(11.0)	DC	B	明褐色	15%	No.3. 覆土下層。外面黒斑あり
5	不明鉄製品	No.6.	床面。	残長3.0cm。	棒状				

鉄製品がある(第417図)。1は須恵器蓋。身厚で、重量感がある。つまみは内窪みで、かえりはない。内面は磨減しており、転用規として使用された可能性がある。胎土は緻密で、黒色粒子が吹き出している。秋間産と推定される。2は坏H身か。底部へラ切り後体部下端にかけて回転ヘラケズリ調整される。胎土は緻密で、堅緻。湖西産。3は土師質の焼きで、外面平行叩き後ナデ、内面ナデ調整。D区第6号住居跡から出土した陶棺と思われる土器と酷似しており、同一個体の可能性がある。4は土師器壺、5は角棒状の鉄製品。

須恵器は17片出土し、内訳は坏が9点(末野7・湖西1・不明1)、蓋4点(末野3・秋間1)、甕4点(末野)である。

図化した以外の蓋は内面にかえりが付く。坏は底部から体部下端にかけて回転ヘラケズリが施されるものである。出土遺物は熊野Ⅰ期～Ⅲ期までのものが含まれるようである。住居の時期は不明確であるが、熊野Ⅱ期～Ⅲ期古段階を中心とした時期と考えておきたい。

C区第35号住居跡(第418図)

C区第35号住居跡は調査区北東端部29-21グリッドに位置する。遺構の大半は調査区外にあるため、詳細は不明である。また、第5号溝跡が住居中央部を南北に貫通していた。

平面形態は方形系と推定され、残存規模は長軸長6.00m、短軸長4.20m、深さ0.65mである。主軸方位はN-25°-Eを指す。

床面は平坦で全体に堅く踏み固められていた。埋

土は第3・4層にロームブロックが目立った。

カマドは検出されなかった。

ビッドは3本検出された。Pit1は主柱穴になる可能性もあるが、やや深度が浅い。壁溝は検出されなかった。

出土遺物は土師器坏、須恵器蓋・甕、鉄製品がある(第418図)。1は有段口縁坏、2は丸底の碗形態。3・4は内増口縁の北武蔵型坏である。5はやや扁平な丸底形態。6は須恵器甕で、口縁部に櫛描波状文が施文される。末野産。7は須恵器いわゆる坏H蓋。天井部回転ヘラケズリ調整される。湖西産。8は鉄鎌か。鍔筈被が付く。

須恵器は8片出土し、内訳は蓋が2点(末野1・湖西1)、甕が5点(末野4・不明1)、高台盤?1(末野)である。

出土遺物が少なく、時期決定には材料不足であるが、熊野Ⅰ期が主体で、5はⅡ期に降るものであろう。住居の時期は熊野Ⅰ期～Ⅱ期と考えておきたい。C区第36号住居跡(第419-420図)

C区第36号住居跡は30-21グリッドに位置する。捜査により、住居北西部が失われ、第5号溝跡に覆土上層を削平されていた。遺構の遺存状態はあまり良くない。

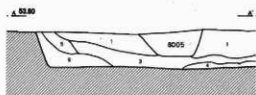
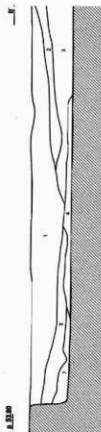
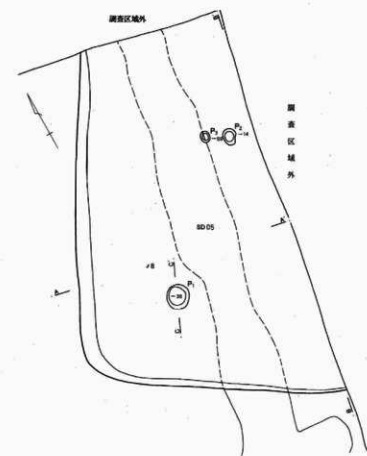
平面形態は方形系と推定され、残存規模は長軸長3.57m、短軸長3.18m、深さ0.45mである。主軸方位はN-60°-Eを指す。

床面は概ね平坦で堅く踏み固められていた。埋土は南コーナー付近に焼土・炭化物混じりの土が投棄された状態で堆積していた他は、特に埋め戻された形跡は認められなかった。

第160表 C区第35号住居跡出土遺物観察表(第418図)

番号	器種	口径	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師坏	(11.4)	3.6			B	A	淡褐色	15%	覆土。有段口縁坏
2	土師坏	12.0	4.5			B	B	明褐色	80%	覆土。底部外面磨斑あり
3	土師坏	(11.0)	3.0			A B	B	磨褐色	15%	覆土
4	土師坏	(13.0)	3.6			B	A	淡褐色	15%	覆土
5	土師坏	(16.9)	4.0			A B	A	明褐色	15%	覆土
6	須恵甕	(29.5)	3.1			B片	A	黒灰色	10%	覆土。末野産。外面櫛描波状文
7	須恵甕	(10.8)	3.1			B	A	灰色	10%	覆土。湖西産
8	鉄鎌か?	No1.								覆土下層。残長3.7cm。鍔筈被

第418図 C区第35号住居跡・出土遺物



SJ35

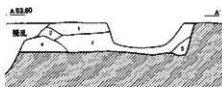
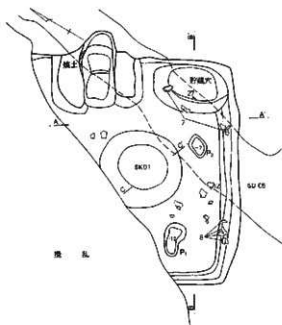
- 1 褐色土 ローム粒子微量
- 2 褐色土 ローム粒子・粘土粒子少量
- 3 褐色土 ローム粒子・ロームブロックやや多量
黒色土ブロック混入
- 4 明褐色土 ロームブロック多量
- 5 暗褐色土 ローム粒子少量
- 6 暗褐色土 ローム粒子やや多量
黒色土ブロック少量
- 7 暗褐色土

ビット1

- 1 暗褐色土
- 2 褐色土 ロームブロック多量

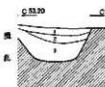


第419図 C区第36号住居跡



SJ36

- 1 褐色土 ローム粒子・焼土多量
- 2 黒褐色土 焼土粒子・炭化物多量
- 3 暗褐色土 焼土・ロームブロックや多量
- 4 暗褐色土 焼土多量
- 5 褐色土 ローム粒子や多量



SK01 (床下土層)

- 1 暗褐色土 焼土・ロームブロック (貼床)
- 2 褐色土 ロームブロックや多量
- 3 褐色土 ロームブロック混入

0 2m

カマドは北東壁に設けられ、上面は第5号溝跡の攪乱を受けている。燃焼部はほぼ壁内に納まり、先端は斜め上方に立ち上がる。側壁上部は部分的に被熱していた。埋土は第2～4層が天井部崩落土、第5層が灰層である。袖は褐色粘土を主体に構築されていた。左袖内には土師器長胴甕が、右袖内には土師器壺が伏せた状態で埋置されていた。袖の補強材として使用されたものと考えられる。また、燃焼部には土師器甕が3個体連結した状態で潰れていた。天井部の補強材として使用されたものであろう。

カマド右脇には貯蔵穴が穿たれていた。深さは35～45cm。底面に焼上と粘土混じりの土が堆積し、その上部に底部を欠いた土師器甕2個体と壺が1個体、正位に据え置かれた状態で出土した。用途は不明確であるが、貯蔵穴を埋め戻した後、甕と壺を据え、置き台として使用された可能性があらう。

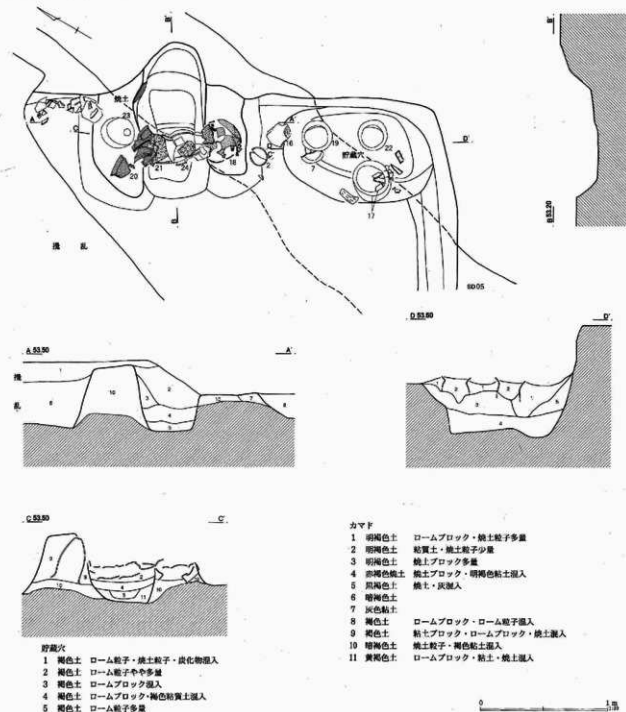
ピットは2本検出されたが、柱穴ではない。土壌は1基中央部から検出された。上面に貼床されてお

り、床下土壌と考えられる。壁溝は巡っていた。

遺物は、カマドと貯蔵穴周辺からまとまって出土している。器種としては土師器環・皿・暗文環・壺・鉢・須恵器環・蓋・磨鉢、鉄製品がある(第421・422図)。1～4は丸底の北武蔵型環。2はカマド脇の床面から出土した。完形品である。口縁部は内彎気味に納め、口縁直下からヘラケズリされている。5・6は暗文環、7～9は皿である。7は完形で壁際の床面から出土した。8は暗文皿系の無文皿と思われ、投棄されたような状態で出土した。

10は小振りの環G蓋。木野産である。つまみを欠くが灰色で堅く焼き上がっている。11・12は大振りの須恵器蓋、13は大振りの環である。14は磨鉢。15・16は土師器鉢。17・18は壺である。17は貯蔵穴内に据え置かれていた。胴部中位以下は欠失。18はカマド右袖内出土。19～24は甕である。19・22は貯蔵穴内出土。17同様胴部中位以下が欠かれていた。20・21・24はこの順に重ねられ、天井部の架構材として使用された

第420図 C区第36号住居跡カマド・貯蔵穴



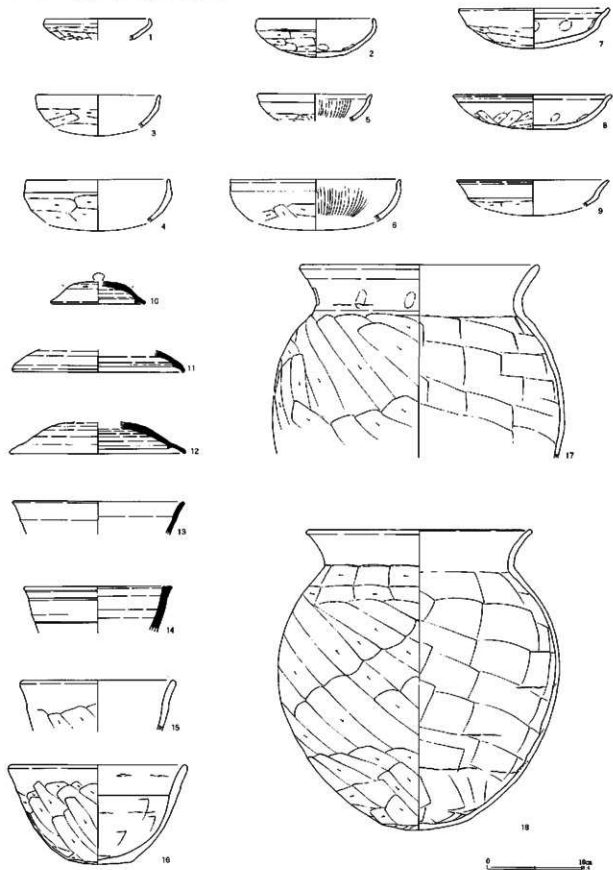
ものと考えられる。23はカマド左袖内に補強材として据えられたものである。器高は31~35cm前後で、頸部の括れは弱い。胴部は斜めケズリが主体である。

須恵器は63片出土し、内訳は坏が27点、蓋28点、盤1点、磨鉢1点、甕6点である。いずれも末野産と推定される。

出土遺物は、大振り須恵器(蓋)と北武蔵型の皿を含む。土師器は、はや古相を呈する。

住居の時期は熊野Ⅰ期新相~熊野Ⅱ期古段階中心と考えておきたい。坏G蓋は残存するとみるべきか。

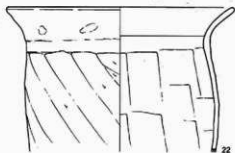
第421图 C区第36号住居跡出土遺物(1)



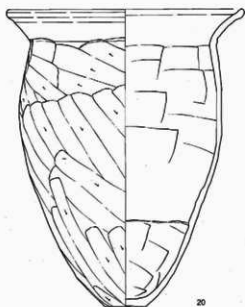
第422图 C区第36号住居跡出土遺物(2)



19



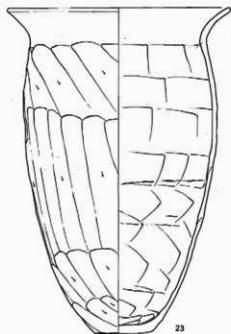
22



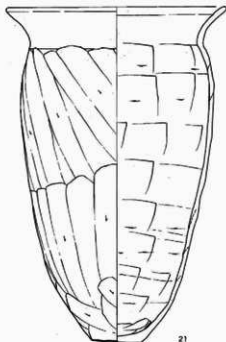
20



25
(1/3)



23



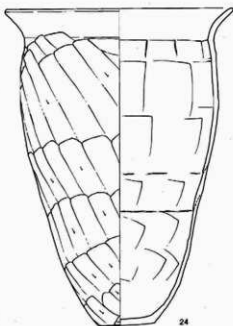
21



26
(1/3)



27
(1/3)



24

第161表 C区第36号住居跡出土遺物観察表(第421・422図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師環	(11.0)	2.3		B	A	淡褐色	10%	覆土
2	土師環	12.4	4.1		AB	A	淡褐色	100%	No.34, 床面
3	土師環	(13.0)	3.4		AB	A	褐色	20%	覆土
4	土師環	(15.0)	4.5		B	A	褐色	20%	SK1
5	土師暗文環	(12.0)	2.8		AB	A	淡褐色	15%	覆土, 内面放射暗文
6	土師暗文環	(18.0)	4.4		AB	A	赤褐色	15%	カマド, 内面放射暗文
7	土師皿	15.8	4.2		AB	C	赤褐色	100%	No.14(床面)+貯穴内No.22
8	土師皿	16.6	3.7		ABC	A	赤褐色	90%	No.7-8-9, 覆土上層
9	土師皿	(16.0)	2.7		AB	A	褐色	15%	覆土
10	須恵蓋	(9.8)	2.4		B片	A	灰色	25%	覆土, 末野産, ロクロ右回転
11	須恵蓋	(18.0)	2.3		H片	C	灰黒色	15%	覆土, 末野産
12	須恵蓋	(18.5)	3.4		B片	A	灰色	25%	No.12, 床面, 末野産
13	須恵環	(18.0)	3.5		B片	A	黒灰色	10%	覆土, 末野産
14	須恵磨鉢	(15.5)	4.9		B片	B	灰色	10%	覆土, 末野産
15	土師鉢	(16.0)	5.4		BG	A	褐色	20%	覆土
16	土師鉢	18.3	10.5	6.7	B	A	褐色	45%	No.35, 床面
17	土師蓋	24.8	20.3		AB	A	橙褐色	80%	貯蔵穴内No.17-21
18	土師蓋	23.4	31.7	9.1	AB	B	褐色	70%	カマド内No.9, カマド右袖内No.11
19	土師蓋	23.6	14.2		ABG	A	褐色	70%	貯蔵穴内No.15, 覆土下層
20	土師蓋	24.6	31.6	4.3	ABG	A	赤褐色	90%	カマド内No.1-2-3-4-5-6-8
21	土師蓋	22.8	35.3	5.1	ABG	B	褐色	95%	カマド内No.7-8-10
22	土師蓋	23.6	15.2		ABG	A	橙褐色	80%	貯蔵穴内No.16, 覆土下層, 全体に風化
23	土師蓋	23.0	34.6	6.0	ABG	A	赤褐色	100%	カマド左袖内No.12
24	土師蓋	23.7	33.4	5.9	ABG	A	赤褐色	95%	カマド内No.9-10-11
25	鉄鎌	覆土, 長さ4.5cm, 幅3.8cm, 刃部片							
26	鉄釘	覆土, 残長9.0cm							
27	鉄鎌か	貯蔵穴内No.18(No.17内), 覆土中層, 残長3.6cm, 鎌基部, 鎌被か。							

C区第37号住居跡(第423・424図)

C区第37号住居跡は30・31-19グリッドに位置する。第14号掘立柱建物跡が重複し、新旧関係は不明確であるが遺構確認段階に、柱穴は検出されなかったことから本住居跡の方が新しい可能性がある。

平面形態は横長の長方形で、規模は長軸長5.70m、短軸長3.38m、深さ0.65mである。主軸方位はN-56°-Eを指す。

床面は平坦で、全体に堅く踏み固められていた。埋土は第2層中にロームブロックが多量に含まれ、住居廃絶後、一定期間を置いた後に埋め戻されたものと思われる。

カマドは北東壁に設けられていた。燃焼部は壁を切り込んで掘り込まれ、先端は一段高い煙道部に続く。側壁上部は部分的に被熱していた。埋土は第2層が天井部崩落土、第3層が灰層に相当する。袖は明褐色から褐色の粘質土を積み上げて構築されていたが、かなり流出していた。また、右袖内には完形の土製紡錘車が埋め込まれた状態で検出されている。

ピットは4本検出されていたが、いずれも浅く住居の柱穴にはならないであろう。壁溝は全周する。

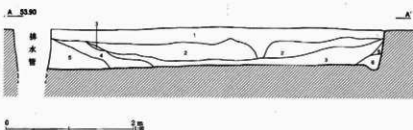
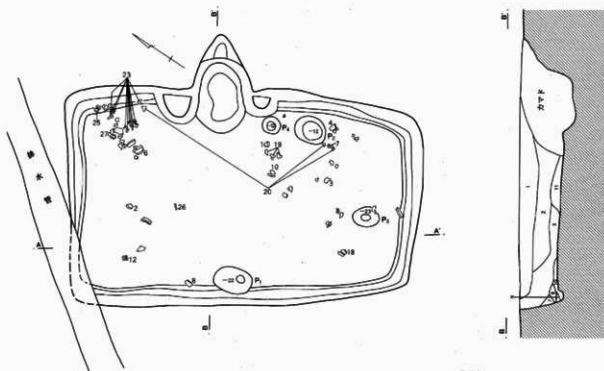
出土遺物はカマド内とその周辺から出土した。土師器環・皿・暗文環・甕・小型甕・壺・須恵器椀・蓋・脚付盤、鉄製鎌、鉄製刀子、青銅製鉸具?、土製紡錘車、土鍾がある(第425・426図)。

出土遺物はカマド内とその周辺から出土した。土師器環・皿・暗文環・甕・小型甕・壺・須恵器椀・蓋・脚付盤、鉄製鎌、鉄製刀子、青銅製鉸具?、土製紡錘車、土鍾がある(第425・426図)。

1-5・7・8は扁平丸底の北武蔵型環。口縁部は直立する。8は大振りの椀タイプ。6・9・10は暗文環。6は胎土が北武蔵型環と同一で、器壁も通常の暗文環に比して薄い。暗文は幅広のヘラ状工具を斜めに当てて施文する。施文部分は部分的である。9は中心部に螺旋暗文、周囲に放射状暗文が施文される。10は斜格子暗文を付ける椀である。

12-15は須恵器蓋。14・15にはかえりが付く。16は脚付盤と思われる。脚との接合部には螺旋状に溝

第423図 C区第37号住居跡

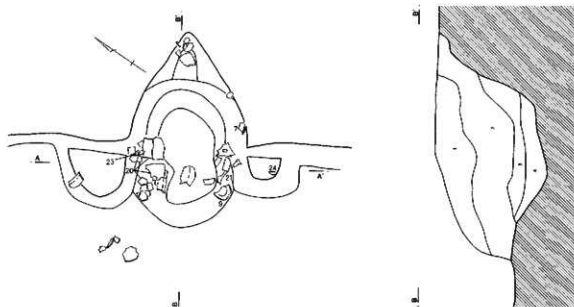


- SJ37
- 1 明褐色土 黄褐色ローム粒子多量
 - 2 明褐色土 ロームブロック多量
 - 3 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子
少量
 - 4 灰褐色土 炭化物・焼土粒子多量
 - 5 褐色土 ローム粒子少量
 - 6 黄褐色土 ローム粒子多量
 - 7 褐色土 ローム粒子多量
 - 8 暗褐色土
 - 9 黄褐色土 ローム粒子多量
 - 10 褐色土 炭化物・ローム粒子少量
 - 11 褐色土 粘質土・焼土・ロームブロック
混入

第162表 C区第37号住居跡出土遺物観察表 (第425・426図)

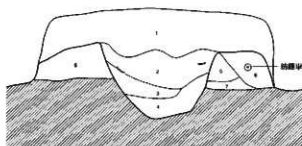
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師環	(11.8)	2.9		BG	B	淡赤褐色	35% No40. 覆土下層	
2	土師環	12.2	3.2		B	B	明赤褐色	75% No33. ほぼ床面	
3	土師環	(12.8)	2.7		BG	B	赤褐色	30% No49. 覆土。ほぼ床面	
4	土師環	(13.0)	3.2		B	A	暗褐色	30% No54. 覆土下層	
5	土師環	(13.2)	3.4		BG	B	赤褐色	25% カマF	
6	土師暗文環	(12.4)	3.4		BG	B	赤褐色	30% No29. 覆土下層	
7	土師環	13.2	3.8		BG	B	赤褐色	50% No53(覆土下層)+カマF内No21	
8	土師環	(16.3)	4.9		AB	A	褐色	20% No38. 覆土下層	
9	土師暗文環	14.2	3.4		AB	A	橙褐色	70% カマF内No16	
10	土師暗文環	(18.2)	5.4		AB	A	褐色	35% カマF+No44(床面)。内面斜格子暗文	
11	土師皿	(17.4)	3.2		ABG	D	橙褐色	40% カマF 覆土。全体に風化	
12	須恵蓋		2.4		B片	B	黄灰色	45% No35. 覆土下層。未野産	
13	須恵蓋		2.1		BC片	A	淡灰色	30% 覆土。未野産。天井部回転ヘラケズリ後ロクロナデ	
14	須恵蓋	(15.8)	2.6		B片	B	黄灰色	10% 覆土。未野産。天井部回転ヘラケズリ後ロクロナデ	
15	須恵蓋	(17.8)	2.4		BC	A	明灰色	10% 覆土。未野産	
16	須恵割付盤か		1.4		C	A	黄灰色	30% 覆土。未野産	
17	須恵碗	(16.4)	5.5		B片	A	明灰色	10% 覆土。未野産	

第424図 C区第37号住居跡カマド



A 53.80

—A—



カマド (5337)

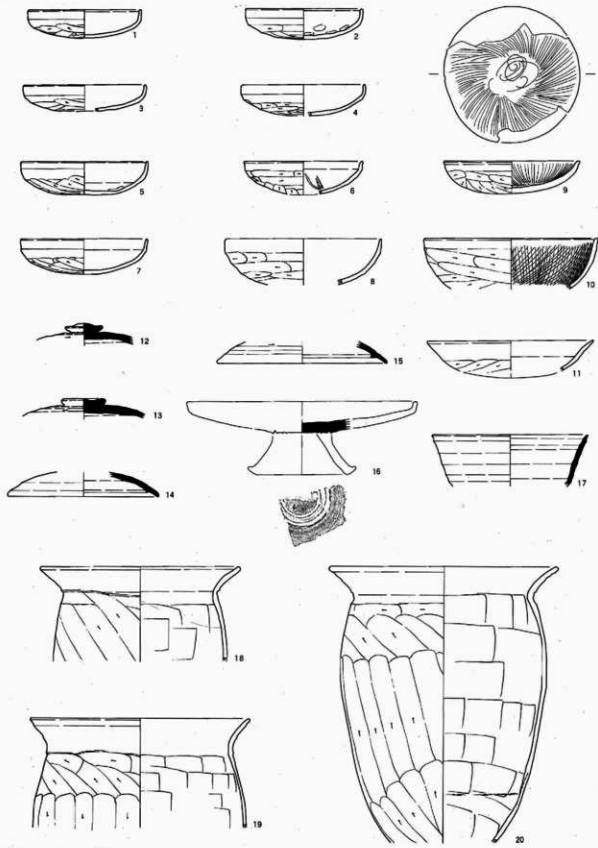
- 1 褐色土 ロームブロック多量、焼土ブロック少量
- 2 明褐色土 腐植色粘土主体、焼土ブロック少量
- 3 黒色土 灰・炭化物混入、焼土ブロック少量
- 4 褐色土 ロームブロック・焼土混入
- 5 明褐色粘土 ローム粘土少量
- 6 褐色土 粘土・ロームブロック混入
- 7 暗褐色土 ロームブロック・黒色土ブロック混入

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
18	土師甕	(20.7)	10.0		B G	B	赤褐色	20%	No61, 覆土下層
19	土師甕	(23.0)	11.5		A B	A	褐色	35%	No41-42-43, カマド, 覆土下層十床面
20	土師甕	23.8	29.0		A B C	A	明褐色	70%	カマド内No5-7-8-9-22-52-53
21	土師甕	(23.0)	6.2		A B	B	褐色	40%	カマド内No12
22	土師甕	(24.0)	14.5		A B	A	暗褐色	15%	覆土
23	土師小型甕	13.2	12.8	5.6	A B	A	褐色	80%	No7-9-10-14-18-20-21, 覆土下層カマド内No4
24	土製紡繰車	カマド内No24, 直径5.1cm, 高さ2.5cm, 孔径0.6cm, 重さ58.47g, 胎土B, 焼成A, 赤褐色, 残存100%							
25	青銅製品	No1, 覆土下層, 鉸具留具か							
26	刀子	No37, 覆土下層, 残長5.5cm,							
27	鎌	No30, 覆土下層, 長さ12.9cm, 幅3.1cm							
28	土鍋	覆土, 長さ5.4cm, 最大径1.6cm, 孔径0.4cm, 重さ12.93g, 胎土B, 焼成B, 暗褐色, 残存100%							
29	土鍋	覆土, 長さ4.0cm, 最大径1.1cm, 孔径0.3cm, 重さ5.62g, 胎土B, 焼成B, 暗褐色							

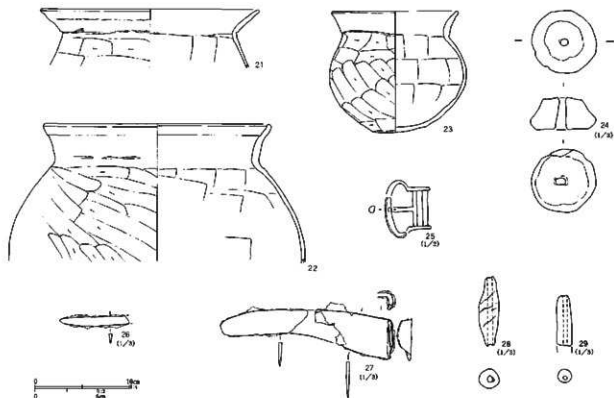
が切つてある。17は深身に椀となろう。高台椀になる可能性もある。18-21は土師器甕。20はカマド内出土。長胴器形で、胴部は上端がヨコ、以下斜め、縦のケズリが入る。22は壺、23はカマド脇から出土

した小型甕である。24は土製紡繰車。ナデ整形で土師質に焼き上がっている。カマド右袖内に埋め込まれたものと思われる。25は青銅製品の一部。帯金具鉸具の留具となる可能性がある。26は刀子、27は鎌

第425图 C区第37号住居跡出土遺物(1)



第426図 C区第37号住居跡出土遺物(2)



である。湾曲が少なく、基部全体が折り返されている。28・29は土錘である。

須恵器は53片出土し、内訳は坏が27点、蓋11点、甕14点、脚付盤1点である。いずれも末野産。

住居の時期は熊野Ⅱ期と考えられる。

C区第38号住居跡(第427図)

C区第38号住居跡は29-20グリッドに位置する。住居中央部に配水管と水道管で寸断され、第58号土壌にも切られており、遺構の遺存状態は悪い。第6号掘立柱建物跡との新旧関係は不明確であるが、本住居の方が新しい可能性が高い。

平面形態は長方形で、規模は長軸長4.00m、短軸長3.18m、深さ0.24mである。主軸方位はN-56°-Eを指す。

床面は凹凸をもつが、全体に堅く締まっていた。埋土は焼土粒子混じりの褐色土を基調としていた。

カマドは北東壁に設けられる。燃燒部は壁を切り込み、底面は皿状に窪んでいた。埋土は第2・3・5層が天井部崩落土、第4層が灰層である。袖は灰白

色粘土を積み上げて構築されていた。

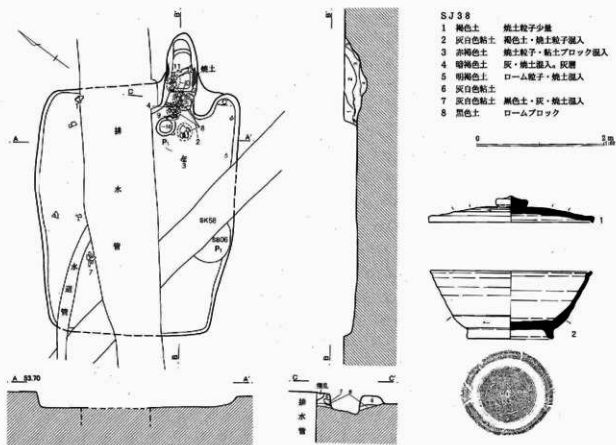
ビットは1本カマド前面から検出されたが、柱穴となるものではない。壁溝は検出されなかった。

出土遺物はカマドとその前面から主に出土している。土師器坏・暗文坏・甕・壺、須恵器高台碗・蓋、鉄製品がある(第427図)。1は須恵器蓋。天井部は扁平で擬宝珠つまみが付く。2は須恵器高台碗。口唇部は内傾する面を作り出し、底部から体部下位は回転ヘラケズリ調整。3-5は扁平丸底風の北武蔵型坏。6は平底暗文坏。体部と底部はヘラケズリ、内面は中心部に螺旋暗文、その周囲は放射暗文が施文される。7・10は土師器壺、8・9・11は土師器甕である。8は器形が判明する資料である。口縁部はくの字状に外傾し、胴部はまだ長胴気味である。12は不明鉄製品。角棒状で、環が付く。

須恵器は15片出土し、内訳は坏が4点、蓋7点、高台碗1点、甕3点である。いずれも末野産。

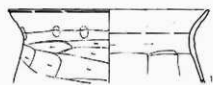
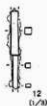
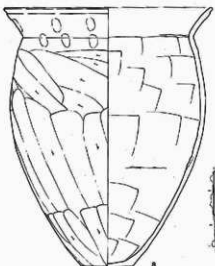
住居の時期は熊野Ⅲ期と考えられる。

第427図 C区第38号住居跡・出土遺物



SJ38

- | | |
|---------|---------------|
| 1 褐色土 | 焼土粒子少量 |
| 2 灰白色粘土 | 褐色土・焼土粒子混入 |
| 3 赤褐色土 | 焼土粒子・粘土ブロック混入 |
| 4 暗褐色土 | 灰・焼土混入。灰層 |
| 5 明褐色土 | ローム粒子・焼土混入 |
| 6 灰白色粘土 | |
| 7 灰白色粘土 | 黒色土・灰・焼土混入 |
| 8 黒色土 | ロームブロック |



第163表 C区第38号住居跡出土遺物観察表 (第427図)

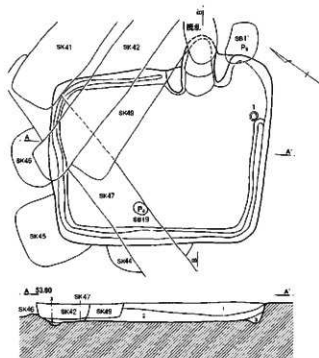
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考	
1	須恵蓋	17.4	2.7		B/C片	A	灰色	40%	No9-10. 覆土中層. 未野産	
2	須恵高内輪	17.0	7.2	8.7	B片	B	黒灰色	50%	カマド内No7. 未野産	
3	土師環	12.4	2.9		A/B	A	淡褐色	60%	No4. 床面	
4	土師環	(13.0)	2.7		B	A	暗褐色	15%	カマド内No4	
5	土師環	(13.0)	3.0		A/B	A	淡褐色	25%	覆土	
6	土師暗文環	(14.0)	3.5		A/B	B	淡褐色	30%	覆土. 内面放射暗文(ドー上)後ラセン暗文	
7	土師蓋	(18.0)	6.6		A/B	A	淡褐色	25%	No5. 床面	
8	土師蓋	(21.6)	27.3	5.5	A/B/G	B	褐色	40%	カマド内No2-5-8-9	
9	土師蓋	(21.8)	5.7		A/B	A	暗褐色	30%	カマド内No5	
10	土師蓋	(19.8)	8.5		A/B	A	淡褐色	40%	カマド内No9-13-17-18	
11	土師蓋	(21.0)	7.7		A/B	A	淡褐色	45%	カマド内No15	
12	不明鉄製品	カマド内No1. 残長6.1cm								

C区第39号住居跡 (第428図)

C区第39号住居跡は31-18-19グリッドに位置する。第41-42-44-47-49号七旗に覆土上面を削平されていた。また、第11号掘立柱建物跡柱穴と重複し、カマド袖が壊されており本住居跡の方が古いことが判明した。

平面形態は不整形で、規模は長軸長3.48m、短軸長3.00m、深さ0.30mである。主軸方位はN-54°-Eを指す。

床面は概ね平坦で、全体に非常に堅く踏み固められていた。埋土にはローム粒子とロームブロックが第428図 C区第39号住居跡・出土遺物

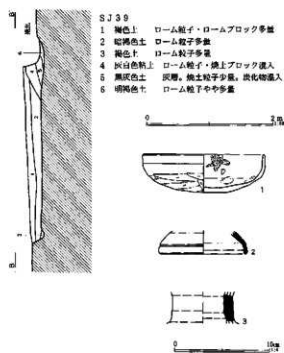


多量に混じり、埋め戻された可能性が高い。

カマドは北東壁に設けられている。燃焼部先端は攪乱を受けていた。埋土は第4層が天井部崩落土、第5層が灰層である。袖は灰白色粘土を積み上げているが、遺存状態はあまり良くない。

ビツは検出されなかった。壁溝は東コーナーを除き巡っていた。

出土遺物は少なく、土師器環、須恵器蓋・長頸瓶が検出された(第428図)。1は土師器北武蔵型環で、やや扁平な丸底を呈する。口縁部内面には油煙が付着する。2は坏日蓋。湖西産。混入か。3は長頸瓶頸



第164表 C区第39号住居跡出土遺物観察表 (第128図)

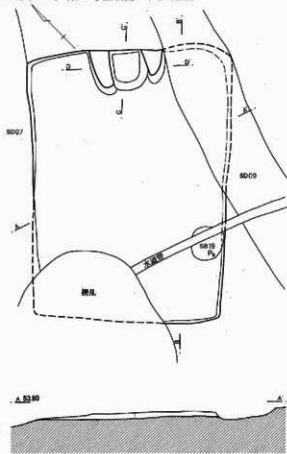
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師環	12.7	4.0		ABG	B	赤褐色	95%	No.1. 覆土下層。口縁内面油煙付着
2	須恵器	(9.0)	2.4		B	A	灰色	5%	覆土。湖西産
3	須恵長頸瓶		3.3		BF	A	灰白色	20%	覆土。湖西産

部片。やはり湖西産と思われる。

須恵器は17片出土し、内訳は坏が6点(末野)、蓋が4点(末野3・湖西1)、盤1点(末野)、鉢1点(末野)、長頸瓶2点(末野1・湖西1)、甕3点(末野)である。

住居の時期は覆土下層から出土した土師器坏から熊野Ⅱ期と考えておきたい。

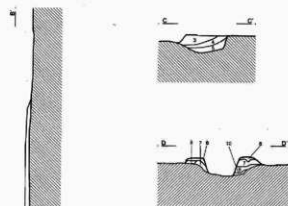
第429図 C区第40号住居跡・出土遺物



C区第40号住居跡 (第429図)

C区第40号住居跡は30・31-18グリッドに位置する。第7・9号溝跡と現代の攪乱により、床面は削平されており、遺存状態は悪い。第19号掘立柱建物跡は住居床面を切っており、本住居跡の方が古いことが判明した。

平面形態は長方形で、規模は長軸長4.38m、短軸



SJ40

- 1 黒褐色土 ロームブロック多量
- 2 褐色土 ロームブロック多量
- 3 黒褐色土 ローム粒子多量
- 4 暗赤褐色土 焼土粒子多量
- 5 黒褐色土 灰層
- 6 黒褐色土 焼土・粒土・ロームブロック混入
- 7 灰白色粒土 焼土ブロック混入
- 8 灰白色粒土
- 9 明褐色土 褐色土・ローム粒子混入
- 10 明褐色土

0 3m



0 10cm

第165表 C区第40号住居跡出土遺物観察表 (第429図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師環	(11.4)	2.8		BG	A	淡褐色	20%	覆土
2	土師環	(11.8)	2.4		BC	A	褐色	15%	覆土
3	土師環	(9.0)	1.8		AB	B	明褐色	15%	覆土

長3.06m、深さ0.12mである。主軸方位はN-40°-Eを指す。

床面は概ね平坦で、カマド前面から住居中央部周辺が堅く踏み固められていたが、壁際はやや軟弱であった。埋土はロームブロックを多量に含む黒褐色土が堆積しており、埋め戻された可能性もあるが覆土が浅く判然としない。

カマドは北東壁に設けられていた。燃焼部は壁内に納まる。埋土は第3・4層が天井部崩落土、第5層が灰層である。袖には灰白色粘土が遺存していた。

ピット・壁溝は検出されなかった。

出土遺物は極めて少なく、土師器北武蔵型環が3点検出されたに留まる(第429図1~3)。

須恵器は3片出土し、内訳は坏、蓋、壺が各1点出土した。いずれも末野産と思われる。

住居の時期は不明確であるが、熊野I期と考えておきたい。

C区第41号住居跡(第409図)

C区第41号住居跡は調査区北端の28-19グリッドに位置する。重複する第29号住居跡に大半を切られ、北側は調査区外に延びているため詳細は不明である。

平面形態は方形系と推定され、残存規模は長軸長1.38m、短軸長0.48m、深さ0.18mである。

残存する床面は僅かであるが、平坦で堅く締まっていた。

カマドその他の付属施設は検出されなかった。

出土遺物は全て小片で、土師器暗文坏が6点、土師器甕が3点、須恵器甕(末野産)が1点検出された

のみである。

住居の時期は不明確であるが、重複する第29号住居跡との関係から熊野I期-II期の範疇に納まるもとの推定される。

C区第42号住居跡(第430・431図)

C区第42号住居跡は30・31-15・16グリッドに位置する。重複する第43号住居跡を切り、第7号溝跡に切られていた。また、南半は調査区外に延びており、全容は不明である。

平面形態は方形系と推定され、残存規模は長軸長4.00m、短軸長3.36m、深さ0.50mである。主軸方位はN-31°-Wを指す。

床面は平坦で非常に堅く踏み固められていた。埋土はロームブロックが多量に含まれ、人為的に埋め戻された可能性がある。

カマドは北西壁に設けられていた。燃焼部はほぼ壁内に納まり、先端が僅かに壁外に延びている。埋土は第2・3層が天井部崩落土、4層は掘り方埋土か。第3層下面が火床面と思われる、底面中央部は弱く被熱していた。袖はロームを掘り残した上に灰褐色粘質土を積んでいた。

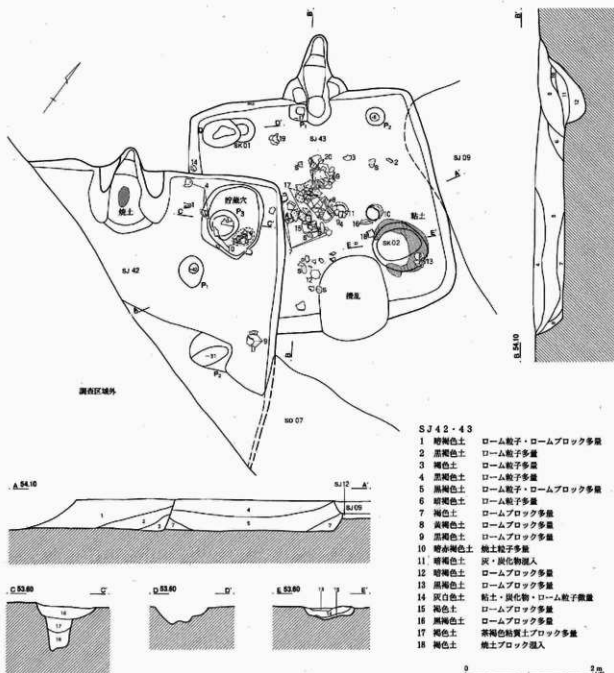
ピットは3本検出された。Pit 1・2は主柱穴を構成すると思われるが、配置が不規則である。貯蔵穴下にもピットが検出され、Pit 2はそれと組み合わせる可能性もあろう。

壁溝は検出されなかった。

出土遺物は土師器坏・碗・皿・鉢・甕・瓶、須恵器坏がある(431図)。1~3は須恵器坏で、大・中・小、3

第166表 C区第42号住居跡出土遺物観察表(第431図)

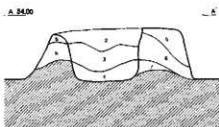
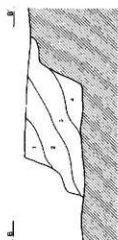
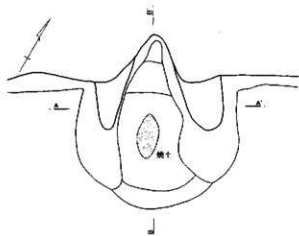
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼色	残存	備考
1	須恵器坏	(16.6)	4.4	(10.3)	BC	B	25%	No.8. 覆土中層。末野産。底部A3c手法
2	須恵器坏		2.4	9.0	B/F片	B	50%	覆土。末野産。底部A3a手法
3	須恵器坏		1.4	6.0	B/F片	A	50%	覆土。末野産。底部A1手法+体部下層ヘラズリ
4	土師皿	18.6	3.4		ABD	A	90%	No.7-9. 覆土下層。底部ケズリ後ヘラミガキ
5	土師坏	(11.6)	3.4		AB	B	25%	覆土
6	土師坏	(10.9)	2.0		BFG	A	10%	覆土
7	土師鉢か	(12.4)	6.0		ABG	B	25%	覆土。内面放射暗文(下上)
8	土師碗	(12.8)	4.2		ABG	D	30%	覆土
9	土師甕	(21.6)	10.4		AB	A	25%	No.1. 覆土下層
10	土師瓶	(27.2)	25.0		AB	B	50%	No.3-6. 覆土下層+床面



種が揃う。1は大振り of 須臾器環で、推定口径16.6 cm。底部から体部下端にかけて回転ヘラケズリ調整される。2は中型環、底部は全面回転ヘラケズリ。3は小型環。底部はヘラ切り後ナデ調整。体部下端は回転ヘラケズリしている。4は暗文皿系の皿であるが、内面に暗文はない。底部外面はヘラケズリ後数条のヘラミガキが施されている。5は暗文環系の

環であるが、内面の暗文はない。6は模倣環。口縁下の稜はケズリで表現され、退化的な様相がある。7は鉢か。内面は沈線で暗文状の意匠が表現されている。8は碗か。7・8は系統不明。混入の疑いがある。9は土師器甕。口縁部は大きく開き、胴部上位に膨らみをもつ。10は瓶か。須臾器は18片出土し、内訳は環が13点(末野12・南比

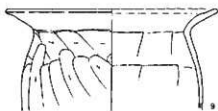
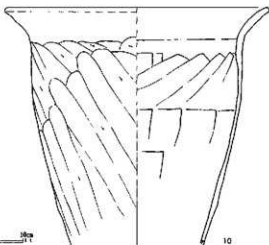
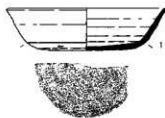
第431図 C区第42号住居跡カマド・出土遺物



カマド

- | | |
|--------|-------------------|
| 1 緑褐色土 | ローム粒子多量 |
| 2 灰褐色土 | 焼土粒子混入。火井部粘土 |
| 3 緑褐色土 | 焼土粒子・粘土ブロック多量。炭少量 |
| 4 暗褐色土 | ローム粒子多量 |
| 5 暗褐色土 | ローム粒子混入 |
| 6 灰褐色土 | 粘土・炭粒子少量 |
| 7 褐色土 | 焼土粒子混入 |

0 1m



0 1m

企1)、壺3点(末野)、壺2点(末野)である。

住居の時期は館野Ⅱ期と考えられる。

C区第43号住居跡 (第430図)

C区第43号住居跡は30・15・16グリッドに位置する。重複する第9・12号住居跡、第42号住居跡に切られ、南東壁には攪乱が入り、遺存状態はあまり良くない。

平面形態は方形で、規模は長軸長3.84m、短軸長3.75m、深さ0.48mである。主軸方位はN-40°-Wを指す。

床面は概ね平坦で、住居中央部は堅く踏み固められていたが、壁際が軟弱であった。埋土には多量のロームブロックとローム粒子が含まれ、人為的に埋め戻された可能性が高い。

カマドは北西壁に設けられていた。燃焼部は壁を僅かに切り込み、煙道部は斜め上方に長く延びる。燃焼部両側の側壁は挟り込まれていた。埋土は第9層は住居埋土、第10層は天井部崩落土、第11層が灰層と思われる。袖は全く遺存しておらず、住居廃絶時に取り壊されたものと推定される。

ピットは2本検出されたが浅い。土壌は2基検出

されている。1号土壌は両コーナーにあり、深さ25cm。貯蔵穴の可能性もあるが、掘り込みがやや不定形である。2号土壌は東コーナー付近にあり白色粘土が詰まっていた。床面では馬蹄形状にやや盛り上がり、貯蔵穴または炉跡の可能性を想定したが、被熱痕跡はなく、性格は不明である。

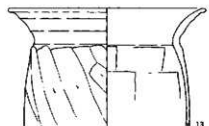
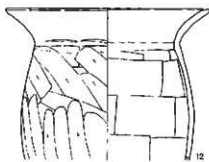
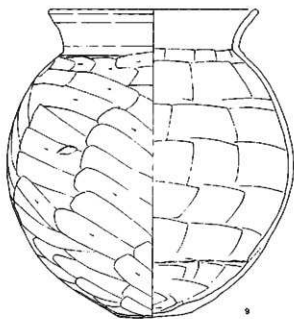
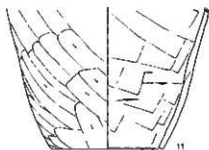
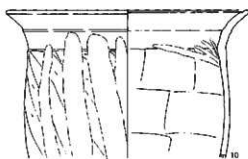
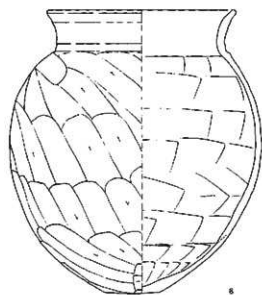
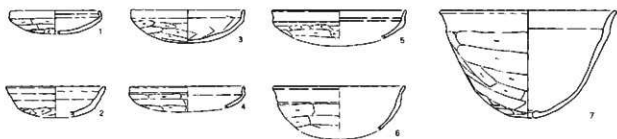
壁溝は検出されなかった。

出土遺物は住居中央部周辺からまとめて検出された。中央部の遺物は覆土下層のものが多く、壁際のそれは高い位置から出土する傾向にあり、住居廃絶後に周囲から投棄されたものが多いことを示している。土師器・杯・碗・壺・瓶・小型甕・鉢と棒状物が出土している(第432・433図)。1は内屈口縁の北武蔵型環。2は有段口縁環であるが、段は痕跡程度に退化している。内外面黒色処理された可能性がある。3~5は模倣環。口縁部の立ち上がりが短く退化的な様相である。6は碗か。7は小型の瓶である。8・9・16・17は壺。10・11は瓶。10は胴部ヘラケズリ後ナデが加わる。12~15は甕で、器壁は厚く長胴形態である。18は鉢。19・20は小型甕。20の底部は二次被熱を受け器表面が剥落している。

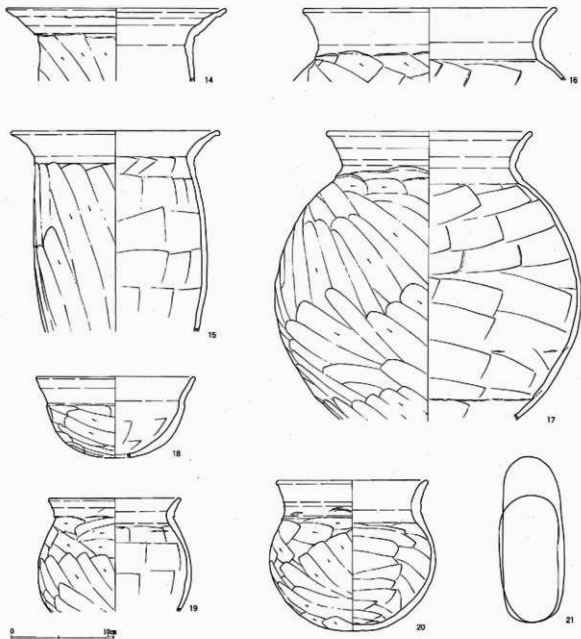
第167表 C区第43号住居跡出土遺物観察表 (第432・433図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師環	(9.4)	2.5		AG	B	橙褐色	20%	覆土
2	土師環	(10.4)	3.1		AB	B	赤褐色	35%	No.41. 覆土中層。内外面黒色処理か
3	土師環	11.9	3.5		BG	B	橙褐色	90%	No.39. 床面
4	土師環	(12.0)	2.3		G	B	橙褐色	20%	No.19. 覆土下層
5	土師環	(14.0)	3.0		BG	B	暗橙褐色	30%	カマド
6	土師碗?	(13.6)	4.6		ABG	B	橙褐色	15%	覆土
7	土師瓶	18.4	11.3		ADG	A	褐色	75%	No.22・27・29. 覆土下層+ほぼ床面。孔径2・1cm
8	土師壺	19.4	29.8	5.8	AB	A	橙褐色	90%	No.30. 覆土下層。胴部下半器面荒れる
9	土師壺	21.4	32.5	7.7	BG	B	橙褐色	90%	No.32. 覆土下層。内面剥落部あり
10	土師瓶か	25.2	15.5		ABC	B	明褐色	65%	No.2. 覆土下層。胴部ヘラケズリ後ナデ
11	土師瓶	15.1	11.8		ABG	B	黄褐色	25%	No.31. 覆土下層。孔部付近黒斑あり
12	土師甕	(21.2)	16.0		ABG	B	赤褐色	45%	No.6. 覆土下層
13	土師甕	(20.6)	12.5		ABG	B	明赤褐色	40%	No.1. 覆土上層
14	土師甕	(22.6)	7.7		ABG	B	橙褐色	20%	No.37. 覆土中層
15	土師甕	21.6	21.1		BG	B	橙褐色	85%	No.25. ほぼ床面
16	土師壺	(26.0)	7.6		BG	B	明褐色	20%	No.18. 覆土下層
17	土師壺	21.1	30.5		BG	B	橙褐色	85%	No.24・25・30・33. 覆土下層+ほぼ床面
18	土師鉢	(16.4)	8.5		BG	B	暗褐色	25%	No.17. 覆土下層。内面全体黒色
19	土師小型甕	(13.4)	12.0		AB	B	赤褐色	45%	No.36. 覆土下層
20	土師小型甕	15.4	15.9		AB	D	褐色	80%	No.33・34. ほぼ床面。底部周辺二次被熱

第432图 C区第43号住居跡出土遺物(1)



第433図 C区第43号住居跡出土遺物(2)



須恵器は細片が3片出土したのみで、図化可能なものはない。内訳は環が2点、甕が1点、いずれも末野産と思われる。

住居の時期は熊野I期と考えられる。

C区第44号住居跡(第434図)

C区第44号住居跡は31-16・17グリッドに位置する。第45号住居跡と第7号溝跡に切られ、南部は調査区外に延びるため、遺構の詳細は不明である。

平面形態は方形系と推定されるが不明。残存規模

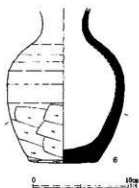
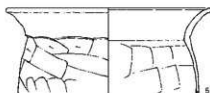
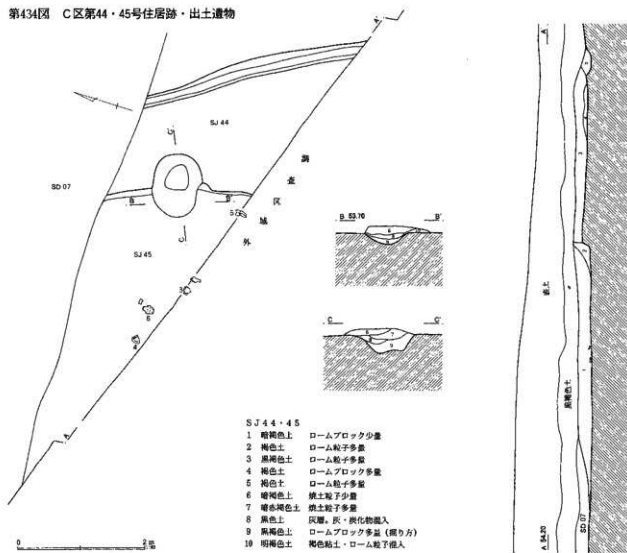
は長軸長3.60m、短軸長2.00m、深さ0.05mである。主軸方位は東辺を基準にN-32°-Wを指す。

床面は第45号住居跡に寄った部分は堅く締まるが、壁際は軟弱である。埋土はローム粒子を多量に含む黒褐色土を基調としていた。

カマド他の付属施設は検出されなかった。

出土遺物は土師器環と須恵器蓋がある(第434図1・2)。いずれも細片で、1は内嚮口縁の北武蔵型環、2は内面にかえりをもつ蓋である。住居の時期

第434図 C区第44・45号住居跡・出土遺物



は第45号住居跡との関係から熊野Ⅰ～Ⅱ期に納まるであろう。

C区第45号住居跡 (第434図)

C区第45号住居跡は31-16・17グリッドに位置する。重複する第44号住居跡を切り、第7号溝跡に切

られていた。大半は調査区外に延び、遺構の詳細は不明な点が多い。

平面形態は方形系と推定されるが、不明確である。残存規模は長軸長4.50m、短軸長3.60m、深さ0.25mである。主軸方位は東辺を基準にするとN-18°

第168表 C区第44・45号住居跡出土遺物観察表 (第434図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師環	(12.6)	2.5		AB	A	明褐色	10%	SJ44履土
2	須恵蓋	(13.7)	1.6		B片	A	灰色	5%	SJ44履土。末野産
3	土師環	(14.0)	3.6		AB	B	淡褐色	30%	SJ45No1。床面
4	土師暗文環	(14.6)	3.0		ABG	A	淡褐色	35%	SJ45No1。床面
5	土師甕	(21.0)	9.0		AB	A	暗褐色	25%	SJ45No6。ほぼ床面
6	須恵細頸瓶		16.3		BC片	A	黄灰色	100%	SJ45No3。ほぼ床面。末野産

—Wを指す。

床面は平坦で堅く踏み固められていた。埋土はロームブロックを少量含む暗褐色土で、埋め戻された足跡は認められなかった。

カマドは東壁に設けられていた。燃焼部は壁を切り込んでおり、埋土は第7層为天井部崩落土、第8層が灰層である。袖は検出されなかった。

ピット、壁溝などの付属施設は検出されなかった。

出土遺物は少なく、土師器環・暗文環・甕、須恵器細頸瓶がある(第434図3～6)。3は扁平丸底の北武

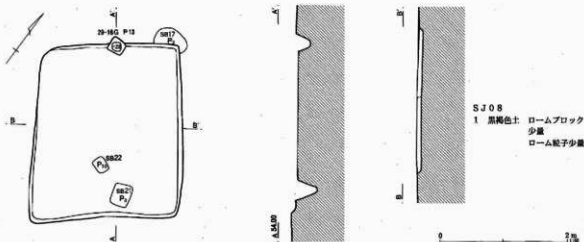
(2) 竪穴状遺構 (中世)

C区からは2軒の竪穴状遺構が検出された。いずれも方形館(SD07)の内側にあり、主軸はそれぞれ異なる。カマドをもたない竪穴遺構で、時期は不明確であるが、中世の竪穴状遺構となる可能性がある。

C区第8号住居跡 (第435図)

C区第8号住居跡は29-16グリッドに位置する。重複する第17号掘立柱建物跡を切り、第21・22号掘立柱建物跡に切られていた。

第435図 C区第8号住居跡



蔵型環。4は底部がやや平底風になるが、丸底暗文環の系譜下にある。内面放射暗文が施文される。5は甕。口縁下端はケズリにより段が付く。6は平底の細頸瓶。口縁部を欠き、長頸となるか否か不明。胴部下位はヘラケズリ調整される。全体に厚手で、ぼったりした作りである。末野産。

須恵器は9片検出され、内訳は環が2点、蓋2点、壺瓶類2点、甕3点である。いずれも末野産。

住居の時期は熊野Ⅱ期と考えられる。

平面形態は長方形で、規模は長軸長2.76m、短軸長2.40m、深さ0.05mである。主軸方位はN-36°-Wを指す。

床面は平坦で、特に南西壁周辺が非常に堅く踏み固められていた。埋土はロームを少量含む黒褐色土である。

ピットは1本、北西壁に掛かって検出されたが、伴うか否か不明である。

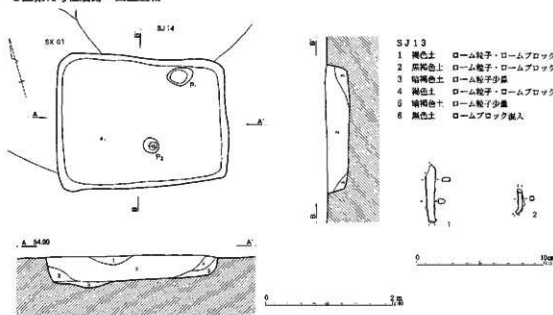
出土遺物は土師器・須恵器の細片が少量検出されたのみである。時期は不明であるが、カマドを付設した痕跡はないため中世と考えておきたい。

C区第13号住居跡 (第436図)

C区第13号住居跡は29-16グリッドに位置する。重複する第1号特殊遺構と第14号住居跡を切っていた。

平面形態は長方形で、規模は長軸長2.70m、短軸長2.10m、深さ0.40mである。主軸方位はN-105°-Eを指す。

床面は非常に堅く踏み固められているが、第1号特殊遺構の上面はやや陥没していた。壁の立ち上がりはやや緩やかである。埋土にはロームブロックが



(3) 掘立柱建物跡 (古代)

C区からは23棟の掘立柱建物跡が検出された。調査区西城、中央部、東部の大きく3ブロックに集中する傾向がある。特に東部では13棟の建物が重複あるいは、近接して構築されていた。時期的には古代と中世の大きく2時期に分かれる。古代の掘立柱建物跡は18棟検出された。最大は第8号掘立柱建物跡で、5×3間、第14・16号掘立柱建物跡も5×2間で、占有面積はほぼ同じである。最小の建物は第13・15号掘立柱建物跡で、1×1間である。

多量に含まれ、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

ビットは2本検出されたが、いずれも上面に床面が乗っており、遺構に伴うものではない。

出土遺物は土師器・須恵器の細片が少量検出されたが、図化可能なものはない。その他鉄器が2点検出されている(第436図)。1は不明鉄製品。取り上げNo.1。残長4.6cm。板状をなし、一端がやや幅広い。覆土中層出土。2は鉄釘か。残長2.0cm。角棒状で屈曲している。覆土出土。

時期は不明確であるが、中世の竅穴状遺構と考えておきたい。

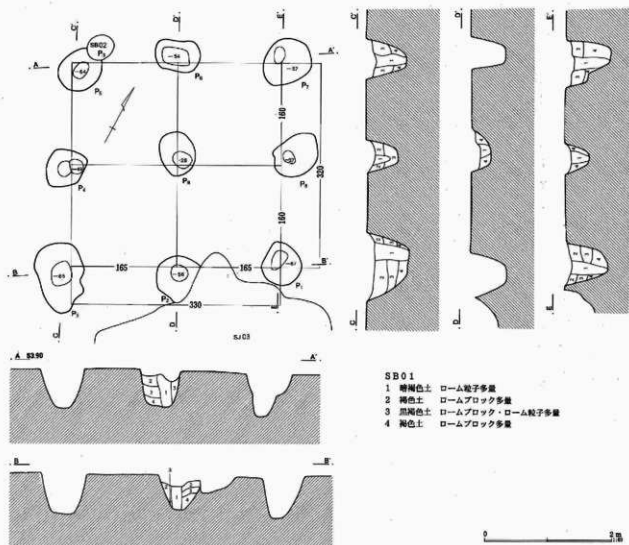
中世の建物は5棟あり、いずれも方形館(SD07)の内側に位置するが、主軸は揃わない。

C区第1号掘立柱建物跡 (第437図)

C区第1号掘立柱建物跡は28-29-14・15グリッドに位置する。重複する第3号住居跡と第2号掘立柱建物跡に切られていた。また、Pit 2・7上面には第2号溝跡が薄く残っていた。

2×2間の総柱建物で、規模は桁行長3.30m、梁行長3.20mである。主軸方位はN-27°-Wを指す。

第437図 C区第1号掘立柱建物跡



柱間は桁行1.65m、梁行1.60mにほぼ揃う。柱穴は円形または楕円形で、深さは隅柱が65cm前後と深く、中間柱がやや浅い。柱痕は全ての柱穴で確認された。掘り方埋土はローム混じりの褐色土と黒褐色土を互層に積んでいた。

出土遺物は土師器模倣環・甕、須恵器かえり蓋の小片が検出されたが、凶化可能な遺物はない。Pit 2・7からは9世紀後半頃の須恵器高台碗と土師器甕の破片が少量混じるが、おそらく第2号溝跡から出土したものと思われる。建物の時期は重複する第3号住居跡との関係及び出土遺物から熊野Ⅰ期～Ⅱ期と考えられる。

C区第4号掘立柱建物跡(第438図)

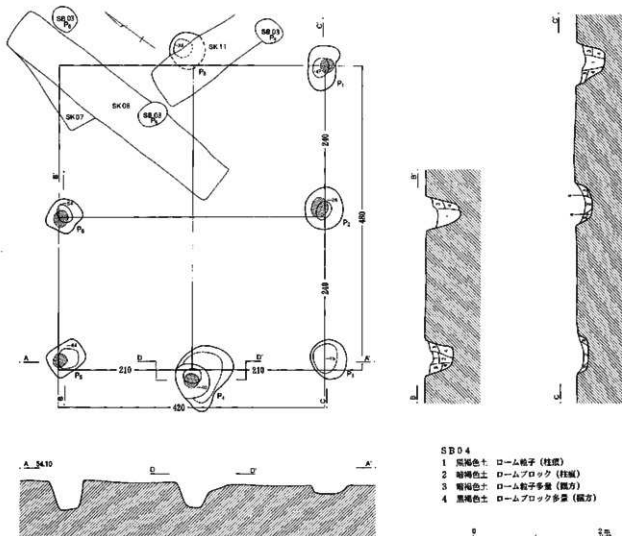
C区第4号掘立柱建物跡は29-13-14グリッドに位置する。重複する第8・11号土壌に削平され、Pit 7は検出できず、Pit 8は約半分が残存していた。

2×2間の側建物で、規模は桁行長4.80m、梁行長4.20mである。主軸方位はN-54°-Eを指す。柱間は桁行2.40m、梁行2.10m等間にほぼ揃うが、Pit 4・8は柱筋からやや外側にずれ気味である。柱穴は円形、楕円形、方形のものが有り、深さは40cm～54cm程が主体となるが、Pit 2とPit 3が浅い。

柱痕または柱抜き取り痕はPit 1・2・4～6で確認された。掘り方埋土はローム混じりの暗褐色土と黒褐色土が互層に積まれていた。

出土遺物は内屈口縁の北武蔵型環、厚手の甕胴部

第438図 C区第4号掘立柱建物跡



片、内面に同心円文当て具痕を残す須恵器甕片が検出されている。時期は不明確であるが、出土遺物から見る限り、熊野Ⅰ～Ⅱ期が相当と思われる。

C区第5号掘立柱建物跡 (第439図)

C区第5号掘立柱建物跡は29・30-14・15グリッドに位置する。第3号住居跡と重複し、断面観察の結果、本建物跡の方が古いことが判明した。

3×2間の側柱建物で、規模は桁行長6.75m、梁行長4.80mである。主軸方位はN-35°-Wを指す。

柱間は桁行2.25m、梁行2.40m等間にほぼ揃う。柱穴は円形または楕円形で、直径38cm～95cm、深さは37cm～72cmである。柱痕はほとんどの柱穴で確認された。掘り方土はローム混じりの褐色土と黒色

土を互層に積んでいた。

出土遺物は縄文土器片が1片検出されたのみである。建物の時期は重複する第3号住居跡との関係から熊野Ⅲ期が下限となる。熊野Ⅰ～Ⅱ期と考えて良からう。

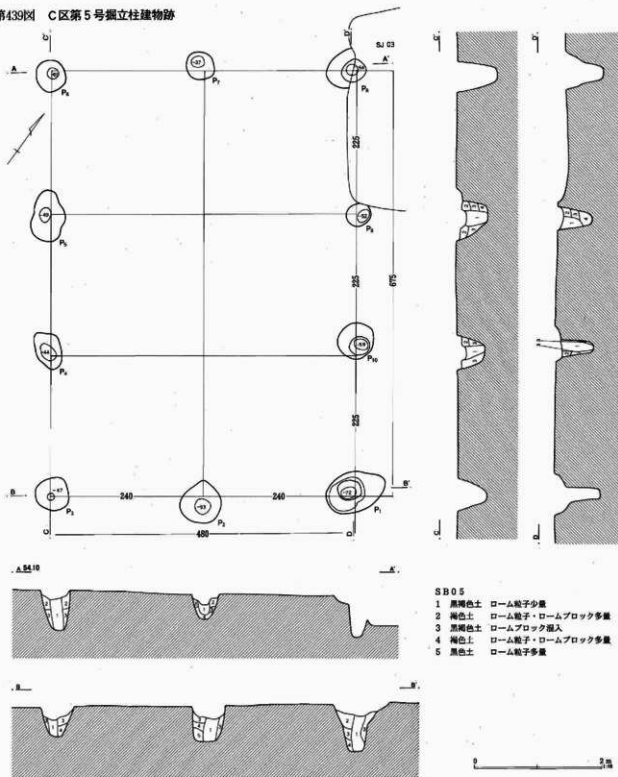
C区第6号掘立柱建物跡 (第440図)

C区第6号掘立柱建物跡は29・30-20グリッドに位置する。排水管の攪乱を受ける他、第58号土壌に切られていた。また、第38号住居跡とも重複するが、新旧関係は不明瞭である。

3×2間の側柱建物で、規模は桁行長6.40m、梁行長4.60mである。主軸方位はN-18°-Wを指す。

柱間は桁行2.10m、梁行2.30mとなるが、実際の

第439図 C区第5号掘立柱建物跡

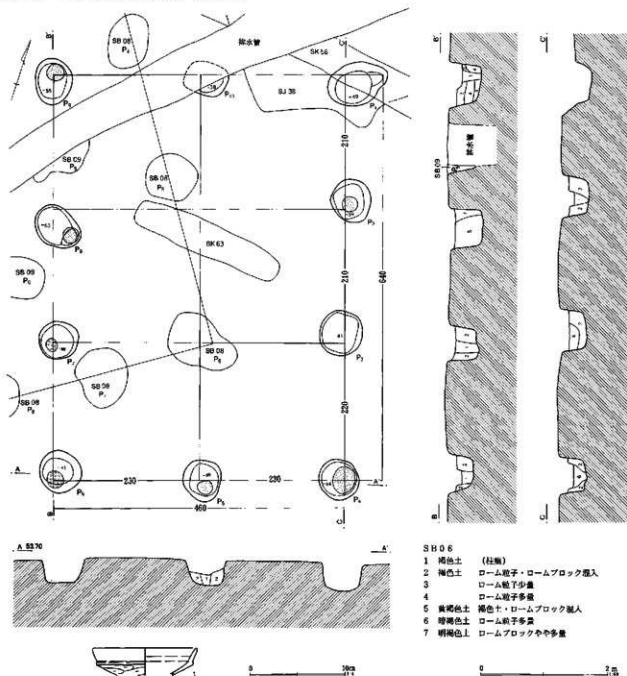


柱痕位置はずれるものがある。柱穴は円形または楕円形で、深さは40cm前後～55cmである。柱痕または柱抜き取り痕はPit 2・4・5・7～9で検出された。柱筋は概ね揃うが、Pit 5とPit 8はずれている。

出土遺物は土師器模倣坏が2点と内屈口縁の北武

藏型坏、器壁の厚い土師器壺片が出土した。Pit 9から出土した土師器坏を図化した(第440図1)。1は土師器模倣坏である。口縁部の立ち上がりは短いが稜はしっかりしている。推定口径10.9cm、残存高2.9cm。胎土に白色粒子と雲母状微粒子を含み、焼成は良好。

第440図 C区第6号掘立柱建物跡・出土遺物



色調は淡褐色で、約20%残存する。

出土遺物は熊野Ⅰ期、幅をみてもⅠ期～Ⅱ期に比定される。建物時期は不明確であるが、遺物から見る限り熊野Ⅰ期～Ⅱ期に遡ることになる。

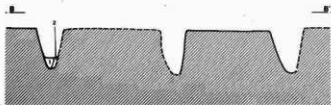
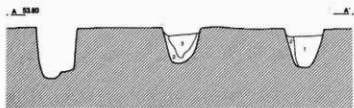
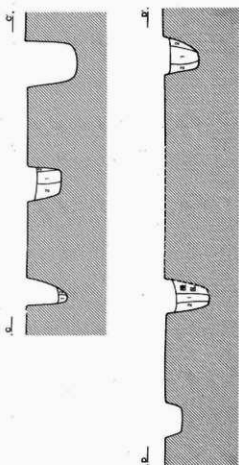
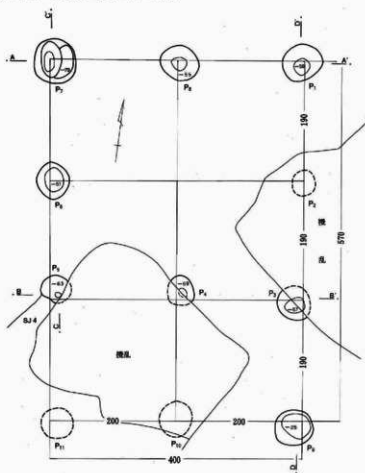
C区第7号掘立柱建物跡 (第441図)

C区第7号掘立柱建物跡は30-20グリッドに位置する。倒木痕を切って構築され、第4号住居跡に切られていた。また、攪乱を受けており詳細について

は不明な点がある。

当初、2×2間の側柱建物と考えたが、東側柱列の延長上にPit9が発見され、3×2間の建物となる可能性が生じた。但し、Pit9は深度が浅く、また、Pit10・11は攪乱と第4号住居跡に破壊され、存否は不明である。ここでは3×2間の建物として扱うことにする。規模は桁行長5.70m、梁行長4.00mである。Pit4が帰属するとすれば高床または一部床張り

第441図 C区第7号掘立柱建物跡



- SB07
 1 褐色土 ロームブロック少量
 2 褐色土 ロームブロック・褐色土やや多量
 3 暗褐色土 ローム粒子残質に混入



の建物となるかもしれない。主軸方位はN-8° - Wを指す。

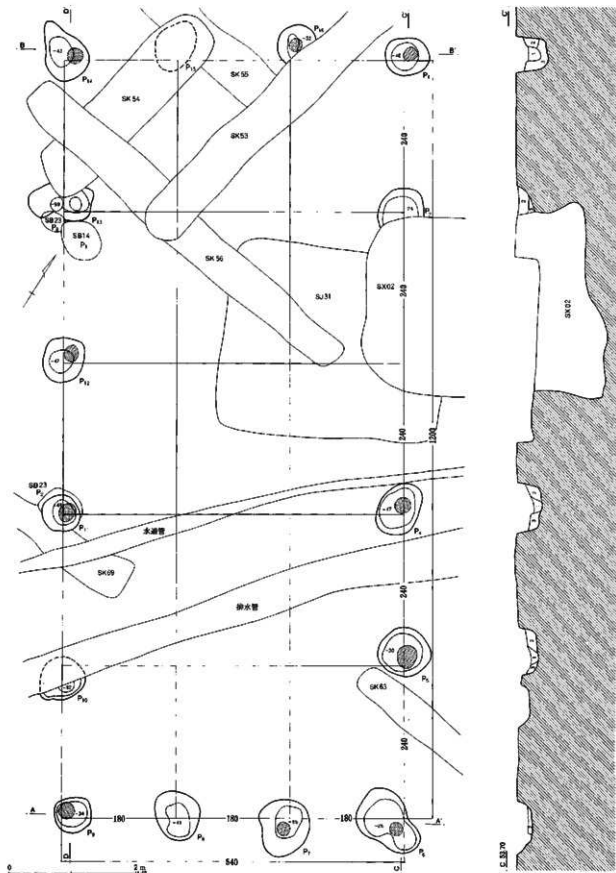
柱間は桁行1.90m、梁行2.00m等間となる。柱筋は概ね通っている。柱穴は円形で、深さは50cm~80cmと全体に深い、Pit9のみ25cmと浅かった。柱抜き取り痕はPit1・3・5・6で検出された。

出土遺物は土師器壺、丸底暗文环、須恵器盤の破片が検出された。出土遺物は熊野Ⅱ期前後と思われる。建物の時期は不明確であるが、第4号住居跡との関係から熊野Ⅰ期以前という限定は可能である。

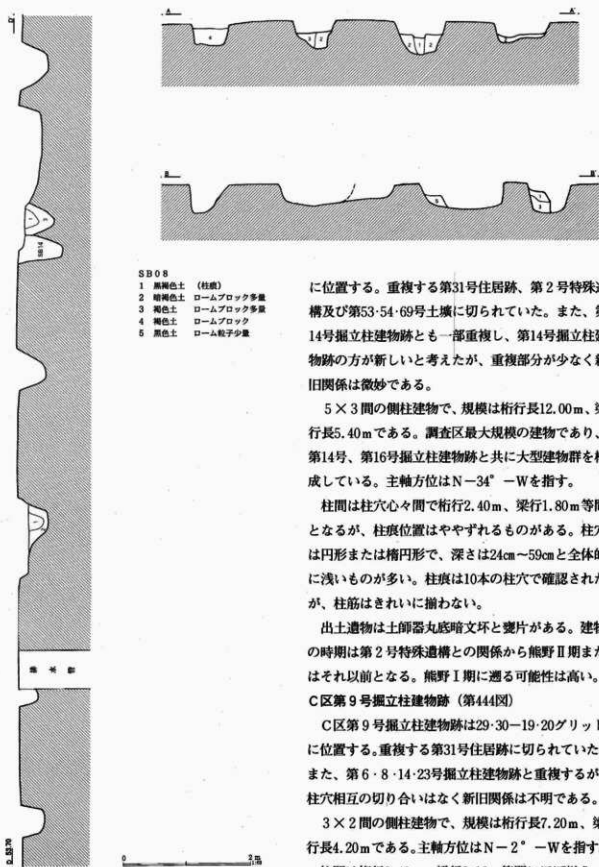
C区第8号掘立柱建物跡 (第442・443図)

C区第8号掘立柱建物跡は29・30-19・20グリッド

第442图 C区第8号孤立柱建物跡(1)



第443図 C区第8号掘立柱建物跡(2)



に位置する。重複する第31号住居跡、第2号特殊遺構及び第53・54・69号土壌に切られていた。また、第14号掘立柱建物跡とも一部重複し、第14号掘立柱建物跡の方が新しいと考えたが、重複部分が少なく新旧関係は微妙である。

5×3間の側柱建物で、規模は桁行長12.00m、梁行長5.40mである。調査区最大規模の建物であり、第14号、第16号掘立柱建物跡と共に大型建物群を構成している。主軸方位はN-34°-Wを指す。

柱間は柱穴心々間で桁行2.40m、梁行1.80m等間となるが、柱痕位置はややずれるものがある。柱穴は円形または楕円形で、深さは24cm～59cmと全体的に浅いものが多い。柱痕は10本の柱穴で確認されたが、柱筋はきれいに揃わない。

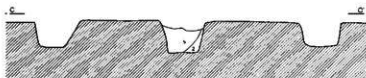
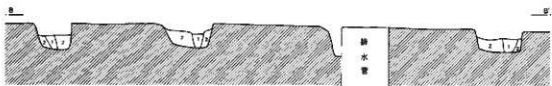
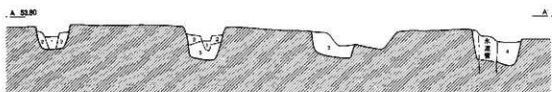
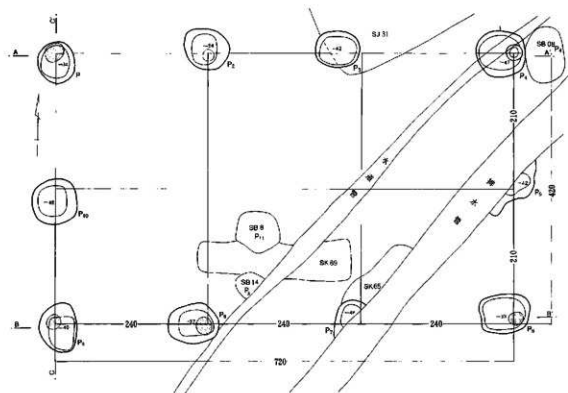
出土遺物は土師器丸底暗文杯と甕片がある。建物の時期は第2号特殊遺構との関係から熊野Ⅱ期またはそれ以前となる。熊野Ⅰ期に遡る可能性は高い。

C区第9号掘立柱建物跡 (第444図)

C区第9号掘立柱建物跡は29・30-19・20グリッドに位置する。重複する第31号住居跡に切られていた。また、第6・8・14・23号掘立柱建物跡と重複するが、柱穴相互の切り合いはなく新旧関係は不明である。

3×2間の側柱建物で、規模は桁行長7.20m、梁行長4.20mである。主軸方位はN-2°-Wを指す。柱間は桁行2.40m、梁行2.10m等間にほぼ揃う。

第444図 C区第9号掘立柱建物跡・出土遺物



S B 0 0

- 1 明褐色土 ローム粒少量（柱礎）
- 2 褐色土 ロームブロック・ローム粒子少量
- 3 褐色土 ロームブロック多量
- 4 明褐色土 粘土質（腐方）
- 5 褐色土 粘土質少量



0 10m

0 2m

柱筋も概ね通っている。柱穴は円形または楕円形で、深さは33cm～54cmである。柱痕はPit 1・2・6・8・9で検出された。

出土遺物はPit10から小型の須恵器蓋が検出された(第444図1)。凶化以外には、土師器甕、小振りの椀、湖西産の須恵器瓶、盤口縁がある。1は須恵器蓋。薄手で、かえりは鋭く高い。末野産の可能性がある。推定口径11.4cm。器高1.3cm。胎土に白色粒子と片岩?を含み焼成は良好。器表面は青灰色、器肉は褐色。10%残。

建物の時期は不明確であるが、第31号住居跡との関係から熊野Ⅲ期以前という限定はできる。出土遺物は熊野Ⅰ期～Ⅱ期相当と思われる。重複関係から見ても矛盾はない。

C区第10号掘立柱建物跡(第445図)

C区第10号掘立柱建物跡は調査区東端の31-20・21グリッドに位置する。第6号住居跡と重複するが、新旧関係は不明確である。Pit 5の延長線上に第6号住居跡を切るピットが1本検出されたが、柱間が広

くなってしまい、掘立柱建物跡の柱穴とは断定できなかった。

2×1間以上の側柱建物と推定される。規模は4.40m×2.20+αmである。主軸方位はN-4°-Eを指す。

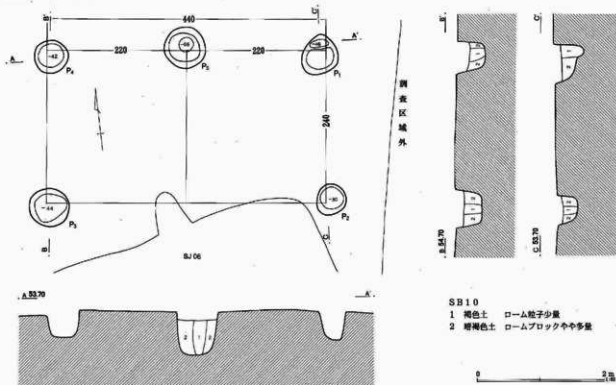
柱間は柱穴心々間で東西2.20m、南北2.40mとなる。柱穴は円形で、深さは30cm～68cm。柱痕は全ての柱穴に残る。掘り方埋土はローム混じりの暗褐色土である。

出土遺物は土師器杯・皿・甕、須恵器瓶類の破片が検出されている。杯は丸底形態のおそらく北武蔵型杯、甕は厚手で、胴部上端に斜めケズリが残るものである。出土遺物は熊野Ⅰ期～Ⅱ期相当のものと思われる。建物の時期は不明である。

C区第11号掘立柱建物跡(第446図)

C区第11号掘立柱建物跡は31・32-19グリッドに位置する。重複する第39号住居跡及び、第38-40号土壌に切られていた。第12号掘立柱建物跡とも重複し、切り合い関係は微妙であるが本建物跡の方が

第445図 C区第10号掘立柱建物跡

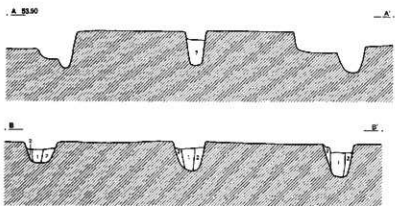
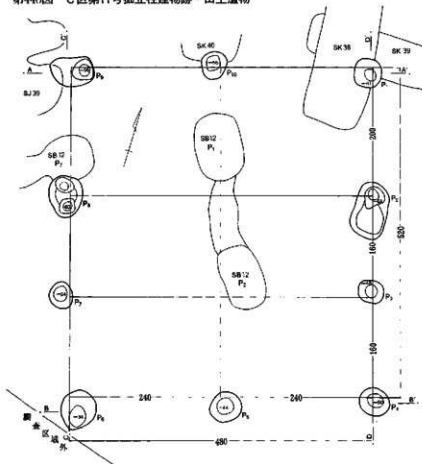


新しいと判断した。

3×2間の側柱建物で、規模は桁行長5.20m、梁行長4.80mである。主軸方位はN-17°-Wを指す。

柱間は桁行北から2.00m、1.60m、1.60m。梁行は2.40m等間になる。柱穴は円形または楕円形で、深さは24cm～63cmである。

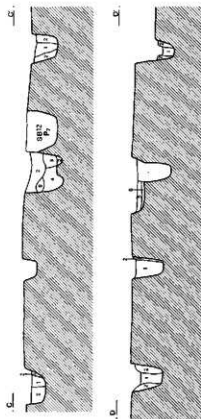
出土遺物は土師器環(第446図1)・甕と須恵器壺片がある。1は北武蔵型環。推定口径12.0cm、胎土に第446図 C区第11号掘立柱建物跡・出土遺物



白色粒子を含み、焼成は良好。色調は暗褐色。15%残。建物の時期は第39号住居跡との関係から熊野Ⅱ期以降と考えられる。

C区第12号掘立柱建物跡(第447図)

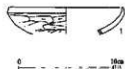
C区第12号掘立柱建物跡は31・32-19グリッドに位置する。南半は調査区外に伸び、全容は不明である。第11号掘立柱建物跡と重複し、断面観察の結果、本建物跡の方が古いものと判断した。



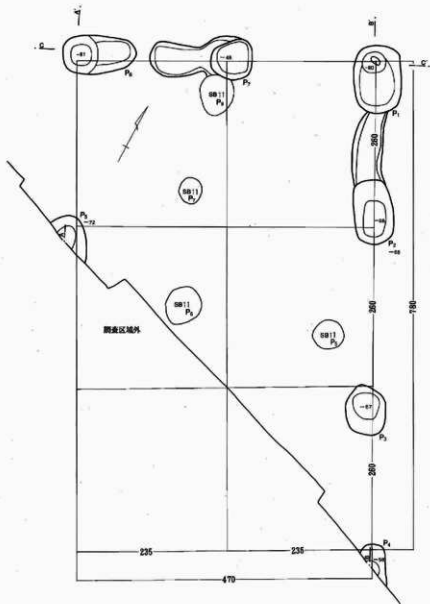
SB11

- 1 褐色土 ローム粉どばりなし
- 2 褐色土 ロームブロック多量
- 3 褐色土 ロームブロック・褐色土少量
- 4 褐色土 褐色土混入
- 5 暗褐色土 ローム粒子少量
- 6 暗褐色土 ローム主柱。褐色土混入
- 7 暗褐色土 ロームブロック少量
- 8 褐色土

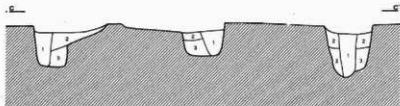
0 2.5m



第447図 C区第12号掘立柱建物跡・出土遺物



A. 壁90



SB 12

- 1 黒褐色土 ロームブロック少量
- 2 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量
- 3 暗褐色土 ロームブロック少量、ローム粒子多量
- 4 褐色土 ロームブロック混入



現状で3×2間の側柱建物で、Pit 1—Pit 2間、Pit 6—Pit 7間には溝が延びている。一部溝持ちの建物跡と考えられる。残存規模は桁行長7.80m、梁行長4.70mである。主軸方位はN—29°—Wを指す。

柱間は桁行2.60m、梁行2.35mに復元されるが、Pit 2とPit 3間はやや広がる。柱穴は不整形または隅丸長方形で、深さは48—81cm。柱痕はPit 1—3・6・7で検出された。

出土遺物はPit 7から須恵器高坏(第447図1)が検出された。他には土師器模倣坏・甕、須恵器瓶と須恵器坏がある。第447図1は須恵器高坏と思われる。口縁部は内面が窪み、坏部外面にも凹線が巡る。胎土から湖西産と推定される。C区第6号住居跡からおそらく同一個体と思われる高坏片が出土している(第352図71)。推定口径15.0cm、残存高4.5cm。胎土は白色粒子を少量含むが、極めて精良で、焼成は良好。色調は明灰色で、15%残存する。建物の時期は不明確であるが、出土遺物から熊野Ⅱ期と考えておきたい。

C区第13号掘立柱建物跡(第448図)

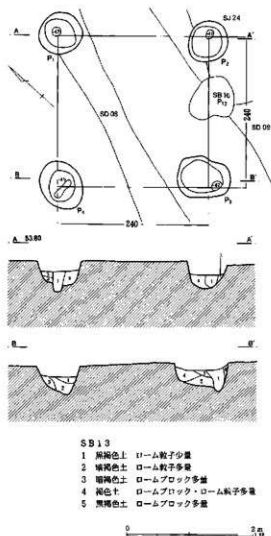
C区第13号掘立柱建物跡は29—18グリッドに位置する。重複する第24号住居跡、第7・8・9号溝跡に切られていた。また、第16号掘立柱建物跡とも重複するが柱穴相互の切り合いはない。

1×1間の小型方形建物である。周囲を精査したものの対応する柱穴は存在せず、小型建物として存在したと考えられる。規模は桁行長、梁行長共に2.40mである。主軸方位はN—49°—E(41°—W)を指す。

柱間は2.40m等間に揃う。柱穴は円形または楕円形で、深さ41—47cmとほぼ一定する。柱痕は全ての柱穴から検出された。

出土遺物は検出されなかった。時期は不明確であるが、重複する第24号住居跡との関係から熊野Ⅵ期以前という限定はできる。南方に位置する第15号掘立柱建物跡は本建物跡と同一規模で主軸も類似する。同建物跡が熊野Ⅰ期に比定されることから、ほぼ同

第448図 C区第13号掘立柱建物跡



時期に建てられた可能性が高い。

C区第14号掘立柱建物跡(第449—450図)

C区第14号掘立柱建物跡は29—30—19グリッドに位置する。第8号、16号掘立柱建物跡と共に大型建物群を構成する。重複する第8号掘立柱建物跡を切り、第24・33号住居跡、第37号住居跡、第69号土壇に切られていた。

5×2間の大型側柱建物で、桁行長12.00m、梁行長4.80mである。主軸方位はN—23°—Wを指す。

柱間は桁行、梁行共に2.40mを基本とするが、桁行の柱列でややずれ気味である。柱穴は円形で、直径60cm前後、深さはPit 13がやや浅い他は80—90cm前後といずれも深くしっかり掘り込まれている。柱痕

または柱抜き取り痕はPit1・3・5～7・9・11・13で検出された。

出土遺物は土師器模倣環・内彎口縁または直立気味の口縁をもつ北武蔵型環・暗文環系の無文環・甕の破片がある。出土遺物は熊野Ⅰ期～Ⅱ期相当と思われる。第450図1は暗文環系無文環。丸底となろう。内面は光沢をもつが暗文は施文されない。Pit10出土。推定口径12.0cm。胎土に角閃石・白色粒子・赤色粒子を含み、焼成は良好である。色調は明褐色で、約15%残存する。

建物の時期は熊野Ⅰ期～Ⅱ期に納まる可能性が高く、取えて言えばⅡ期となろうか。

C区第15号掘立柱建物跡 (第451図)

C区第15号掘立柱建物跡は30・18・19グリッドに位置する。重複する第62号土壌を切り、第9・10号溝跡に上面を削平されていた。

第13号掘立柱建物跡同様、1×1間の小型建物と考えられる。周辺を精査したものの対応する柱列は検出されなかった。規模は桁行長、梁行長共に2.25mとなる。主軸方位はN-35°-W(55°-E)を指す。

柱間は2.25m等間である。柱穴は方形で、深さは57cm～68cmと同規模である。柱痕はPit1を除き検出された。掘り方埋土はロームブロック混じりの褐色土と暗褐色土で埋め戻されていた。

出土遺物は土師器環と須恵器蓋がある(第451図)。1・3は内屈口縁の北武蔵型環。2は深椀タイプである。4はPit4掘り方から検出された須恵器環H蓋である。口径9.1cmと非常に小振りで、口縁部外面には1条の沈線が巡る。天井部は磨滅しており調整は不明瞭であるが、ナデか。回転ヘラケズリは施されていない。胎土は精良で湖西産と考えられる。図化した土器以外には土師器丸底暗文環、甕の破片が出土している。

建物の時期は熊野Ⅰ期と考えられる。

C区第16号掘立柱建物跡 (第452図)

C区第16号掘立柱建物跡は29・30-18・19グリッド

に位置する。重複する第7・8・9号溝跡の攪乱を受けていた。

第7号溝跡の深い攪乱を受け、Pit10・18は削平されていた。Pit15が浅いため、当初4×2間の身舎に妻廂が付く可能性を想定したが、5×2間の側柱建物と考えた方が自然であるため、Pit8は本来存在しない可能性が高い。Pit4・5は側柱筋に乗るが、伴う可能性は低であろう。Pit17については建物の中軸線上に在り、Pit3とPit11を結ぶラインにも概ね乗っている。建物に伴う可能性も残されている。

規模は桁行長10.80m、梁行長4.80mである。主軸方位はN-62°-Eを指す。

桁行の柱間は北東側3間が2.10m、南西側2間が2.25mで、等間には揃わない。梁行は2.40m等間である。柱筋は概ね通っている。柱穴は円形基調で、直径50～60cm前後のものが多い。深さは不揃いで、浅いものは13cm、深いものは78cmである。柱痕はPit1・3・7・9・11・13・14・16で検出された。

出土遺物は土師器環、須恵器長頸瓶・鉢?がある(第453図)。1は須恵器長頸瓶口縁部片。頸部上端に段が付く。内面には緑灰色の自然軸が掛かっている。緻密な胎土で焼きも堅緻。湖西産の長頸瓶と考えられる。2は口縁部が内彎する北武蔵型環である。深い丸底で、口縁直下からヘラケズリが加わる。3は須恵器鉢か。特殊な器形である。口縁部は水平方向に開き、体部下端は回転ヘラケズリ調整される。やや軟質の焼きで黄灰色を呈する。末野産?。

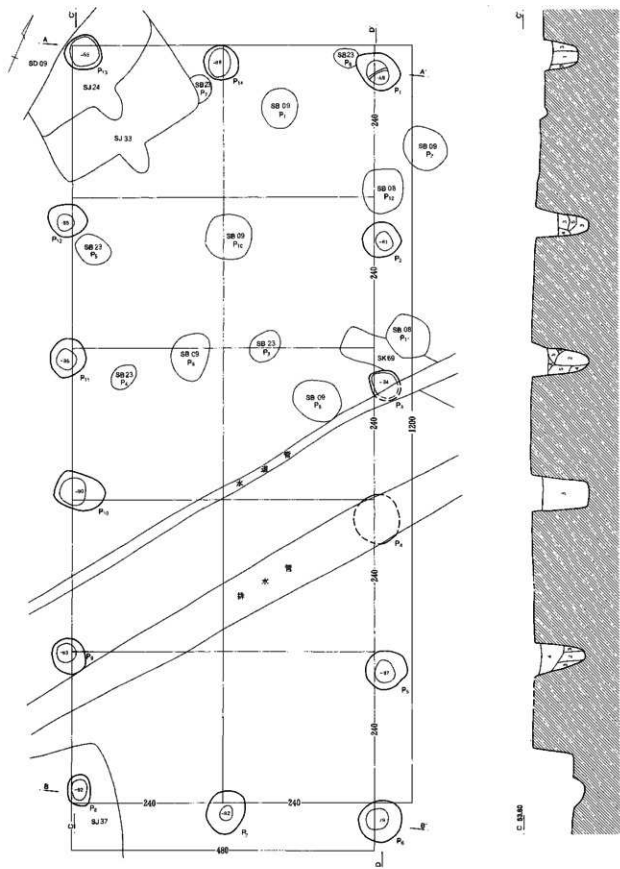
建物の時期は熊野Ⅰ期中心と考えておきたい。

C区第17号掘立柱建物跡 (第454図)

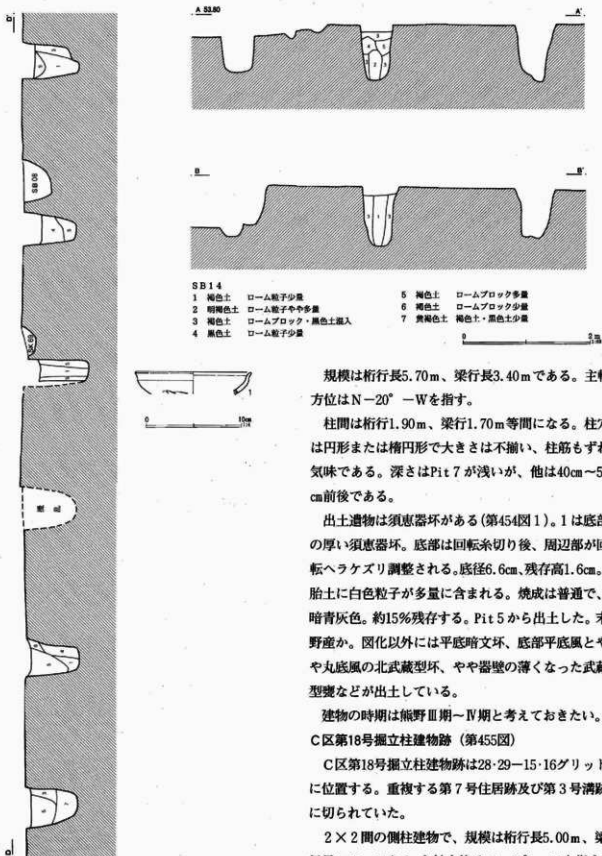
C区第17号掘立柱建物跡は28・29-16グリッドに位置する。重複する第11号住居跡を切り、第7・8号住居跡に切られていた。

3×2間、南北棟の側柱建物と考えられるが、Pit7-Pit9間には柱穴は検出されなかった。Pit8は柱筋からずれ、柱間も揃わず建物を構成する柱穴からは除外した方がよいであろう。また、Pit10は第7号住居跡に削平されていた。

第449图 C区第14号掘立柱建物迹(1)



第450図 C区第14号掘立柱建物跡(2)・出土遺物



規模は桁行長5.70m、梁行長3.40mである。主軸方位はN-20°-Wを指す。

柱間は桁行1.90m、梁行1.70m等間になる。柱穴は円形または楕円形で大きさは不揃い、柱筋もずれ気味である。深さはPit 7が浅いが、他は40cm~50cm前後である。

出土遺物は須恵器片がある(第454図1)。1は底部の厚い須恵器片。底部は回転糸切り後、周辺部が回転ヘラケズリ調整される。底径6.6cm、残存高1.6cm。胎土に白色粒子が多量に含まれる。焼成は普通で、暗青灰色。約15%残存する。Pit 5から出土した。末野産か。図化以外には平底暗文片、底部平底風とやや丸底風の北武蔵型片、やや器壁の薄くなった武蔵型片などが出土している。

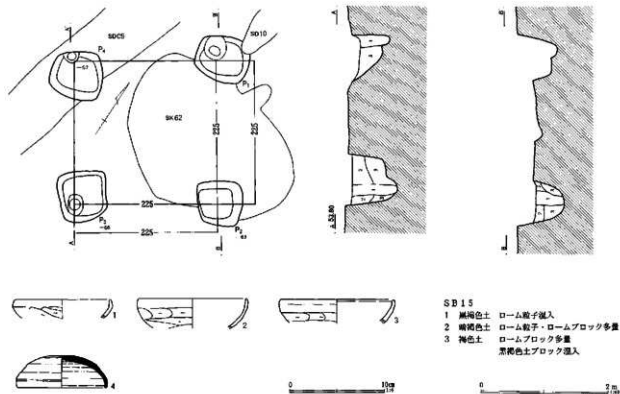
建物の時期は熊野Ⅲ期~Ⅳ期と考えておきたい。

C区第18号掘立柱建物跡(第455図)

C区第18号掘立柱建物跡は28・29-15・16グリッドに位置する。重複する第7号住居跡及び第3号溝跡に切られていた。

2×2間の側柱建物で、規模は桁行長5.00m、梁行長3.60mである。主軸方位はN-20°-Wを指す。

第451図 C区第15号獨立柱建物跡・出土遺物



第169表 C区第15号獨立柱建物跡出土遺物観察表 (第451図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師環	(10.0)	2.0		A B	A	橙褐色	10%	Pit3 掘り方
2	土師環	(11.3)	3.2		A	A	橙褐色	15%	Pit3 掘り方
3	土師環	(11.9)	2.5		A B	A	橙褐色	10%	Pit2 掘り方
4	須恵蓋	9.1	3.4		B	A	明灰色	55%	Pit4 掘り方。断西岸

柱間は桁行2.50m、梁行1.80m等間となるが、柱筋は桁行の中間柱がやや内側にずれ気味である。柱穴は円形または楕円形で、大きさにばらつきがある。深さは桁行の中間柱が42cm前後、他の柱穴は67cm～92cmと非常に深くしっかり掘り込まれている。Pit 2以外の柱穴からは柱痕が検出された。掘り方理上はローム泥じりの暗褐色土と褐色土を互層に積んでいた。

出土遺物は土師器環と皿がある(第455図)。1は北武蔵型環。口縁部は内彎気味に直立し、体部上位は無調整。弱い丸底となろう。推定口径13.0cm。胎土に白色粒子と雲母状微粒子を含む。焼成は普通で褐色。5%程度の小片。2は土師器皿。薄手で、口縁部は外反する。口縁直下は無調整。推定口径 16.0

cm。胎土に角閃石と白色粒子を含む。焼成は普通で褐色。5%残存。他には丸底暗文杯・壺・全面回転ヘラケズリを施す須恵器環と壺の破片が検出されている。

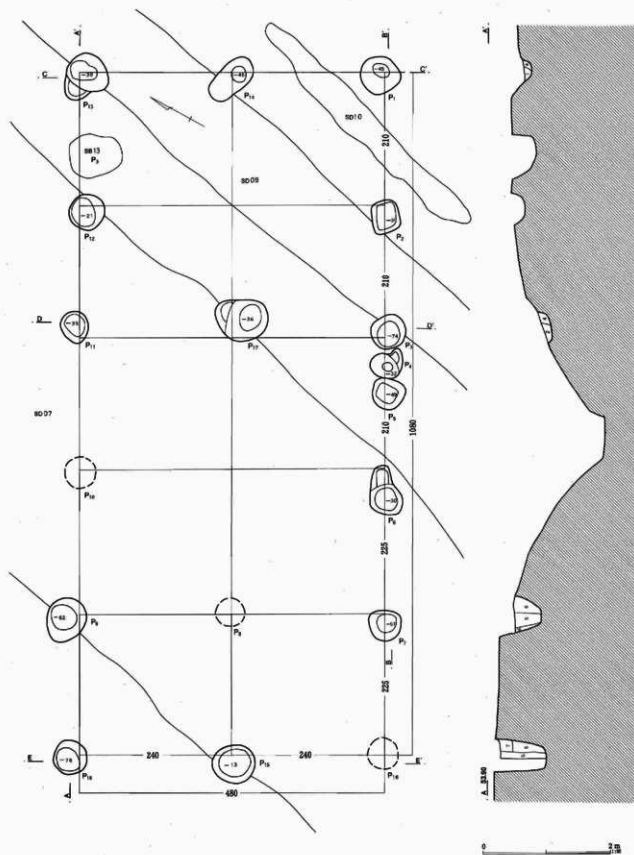
建物の時期は熊野Ⅱ期中心で、降ってもⅢ期と考えられる。

C区第19号獨立柱建物跡 (第456図)

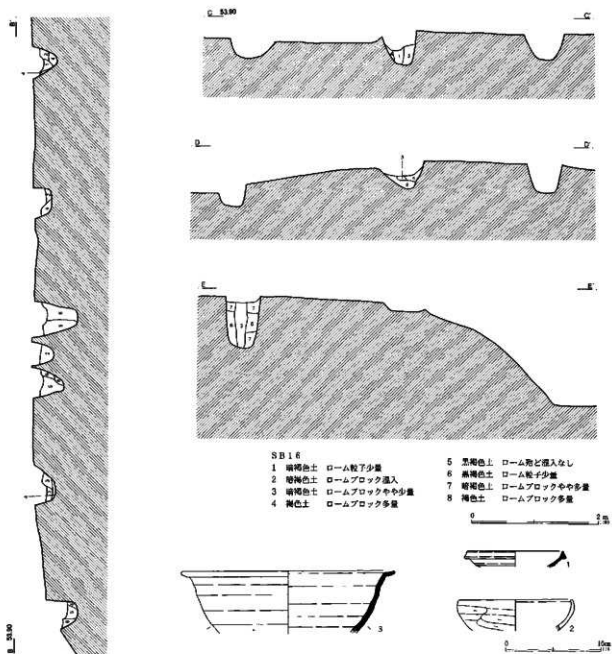
C区第19号獨立柱建物跡は31-18グリッドに位置する。重複する第34・40号住居跡を切り、第41・46・47号土塊、第9号溝跡に切られており、遺存状態は悪い。

3×2間、南北棟の側柱建物で、規模は桁行長6.45m、梁行長4.30mである。主軸方位はN-3°-Wを指す。

第452图 C区第16号掘立柱建物跡(1)



第453図 C区第16号掘立柱建物跡(2)・出土遺物



第170表 C区第16号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第453図)

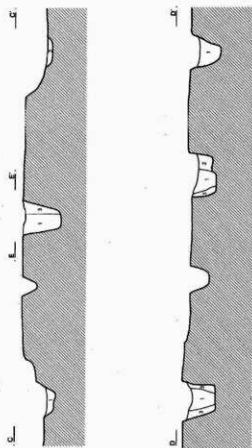
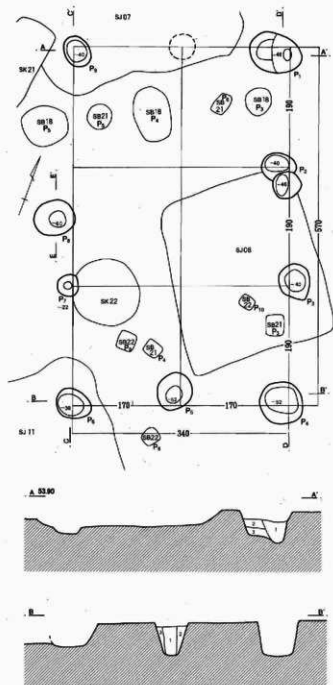
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色澤	残存	備考
1	須恵系須恵	(10.0)	1.7		B	A	淡灰色	10% Pit3, 湖西産。	
2	土師器	(11.8)	3.3		AB	A	橙褐色	10% Pit3	
3	須恵鉢?	(22.4)	6.7		BC	A	黄土色	10% Pit3, 木野産?	

柱間は桁行2.15m、梁行2.15m等間に揃う。柱筋は概ね通るが、西側柱筋はPit7・8がやや外側にずれている。柱穴は円形または楕円形で、深さは35cm～50cm前後のものが多い。

出土遺物は土師器環がある(第456図1)。1は内屈

口縁の北武蔵型環。推定口径9.8cm。胎土に白色粒子と角閃石を含み、焼成は良好。橙褐色で約15%残存する。Pit9から出土した。Pit9は第40号住居跡内にあり、この土器も本来は第40号住居跡に伴う可能性が大きいであろう。他には大振りの須恵器環、内

第454図 C区第17号掘立柱建物跡・出土遺物



SB17

- 1 黒褐色土 ローム粒子少量
- 2 暗褐色土 ロームブロック多量
- 3 暗褐色土 ロームブロック少量

0 2m



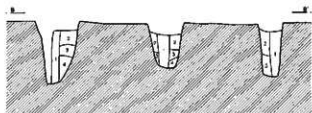
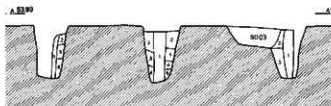
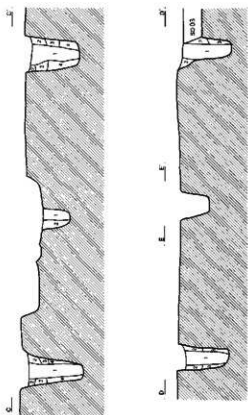
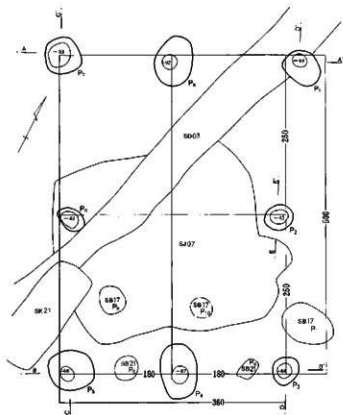
0 10cm

屈口縁の北武蔵型坏、丸底暗文坏、土師器壺片が検出されている。土師器壺は器壁がやや薄くなるものがある。出土遺物は概ね熊野Ⅰ期～Ⅱ期が主体と思われる。建物の時期は重複遺構との関係から熊野Ⅱ期～Ⅲ期古段階、またはそれ以降という限定はできる。Ⅴ期以降の破片は含まれず、Ⅲ期～Ⅳ期と見るのが妥当と思われる。

C区第23号掘立柱建物跡 (第457図)

C区第23号掘立柱建物跡は29・30-19グリッドに位置する。重複する第24・33号住居跡、第53・56土壌に切られていた。Pit 2が存在するとすれば、第8号掘立柱建物跡Pit11とほぼ重なる位置に相当する。断面観察からはPit 2の痕跡は認められず、その意味では第8号掘立柱建物跡の方が新しいと判断される。

第455図 C区第18号掘立柱建物跡・出土遺物



S B 18

- 1 黒褐色土 ローム粒子少量 (柱痕)
- 2 暗褐色土 ローム粒子少量
- 3 褐色土 ロームブロック多量
- 4 暗褐色土 ロームブロック多量
- 5 褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量

0 100



0 100

また第14号掘立柱建物跡とPit 8が重複するが、新旧関係は不明確であった。

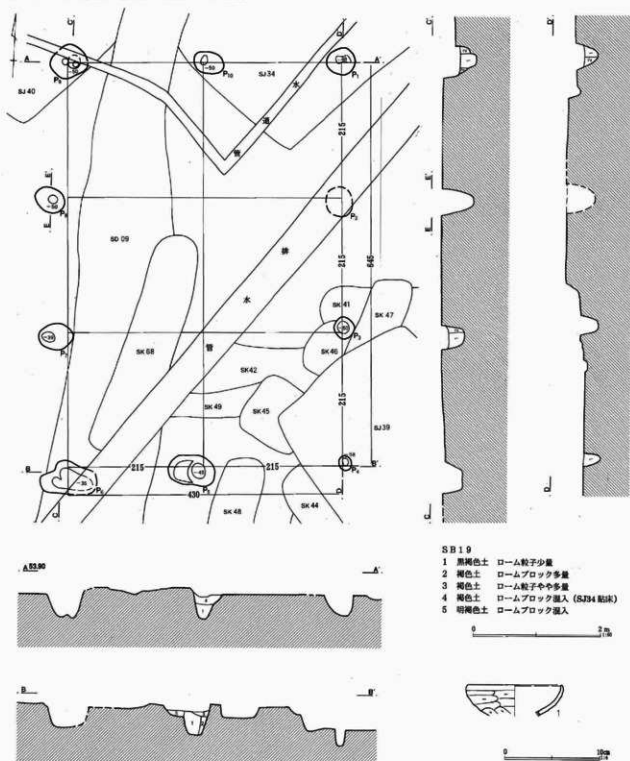
3×2間の側柱建物で、規模は桁行長6.90m、梁行長4.20mである。主軸方位はN-55°-Eを指す。

柱間は柱穴心々間で桁行2.30m、梁行2.10m等間に概ね揃うが隅柱のPit 9ははずれる。柱筋は概ね揃

うが、Pit 2が外側にずれてしまう。柱穴は円形で、直径40cm前後の小型のものが多く、深さはPit 9が86cmと深い。他の柱穴は25cm~45cm前後の比較的浅いものが多い。

出土遺物は土師器片が検出された(第457図1)。1は丸底の北武蔵型環で、口縁部は内屈する。推定口

第456図 C区第19号掘立柱建物跡・出土遺物

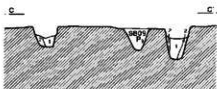
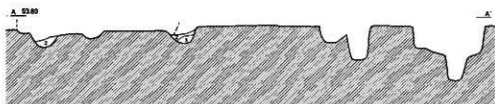
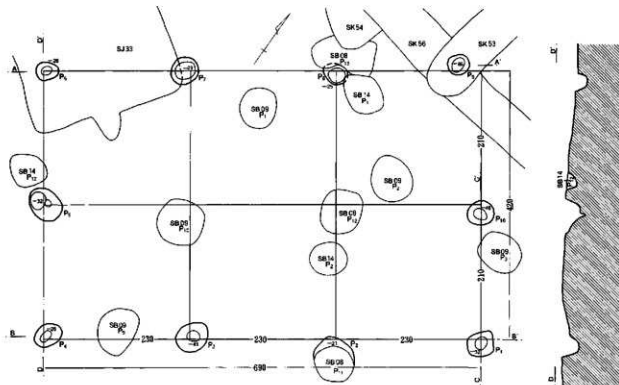


径10.7cm。胎土に角閃石・白色粒子を含み焼成は良好である。淡褐色で約15%残存する。Pit 9 出土。図化以外には土師器甕と須恵器甕の破片がある。

建物の時期に関しては第24・33号住居跡との新旧

関係から熊野Ⅵ期以前という限定は可能である。出土遺物から見ると熊野Ⅰ期と考えるも良いが、第8号掘立柱建物跡との関係が不明確である。

第457図 C区第23号掘立柱建物跡・出土遺物



- SJ33
- 1 黒色土 ローム粒子少量
 - 2 黒色土 ロームブロック少量
 - 3 黒色土 ロームブロック少量

0 10m

0 2m

(4) 掘立柱建物跡(中世)

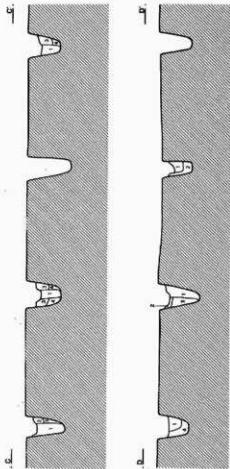
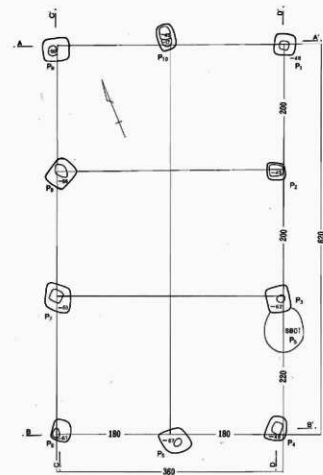
C区第2号掘立柱建物跡(第458図)

C区第2号掘立柱建物跡は28・29-14・15グリッドに位置する。重複する第1号掘立柱建物跡を切っていた。

3×2間、南北棟の側柱建物で、規模は桁行長6.20m、梁行長3.60mである。主軸方位はN-23°-Eを指す。

桁行の柱間は2.00mと2.20mがあり等間に揃わない。

第458図 C区第2号掘立柱建物跡



SB02

- 1 黒褐色土 ロームブロック・ローム粒子混入
- 2 黒褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量
- 3 黒褐色土 ロームブロック・黒褐色土多量
- 4 褐色土 ロームブロック多量

0 2m

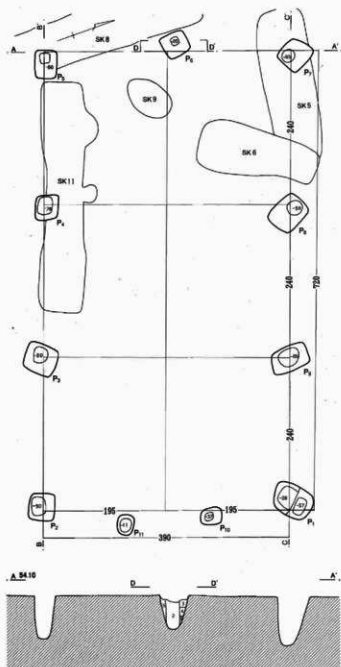
い。梁行は1.80mである。柱穴は方形で、一辺30cm～40cmと小型である。深さは45cm～65cm前後と深く掘り込まれている。埋土は黒褐色土を基調としている。

出土遺物は土師器・須恵器片が少量検出された。

建物の時期は小型方形の柱穴をもつという特徴から中世と考えられる。

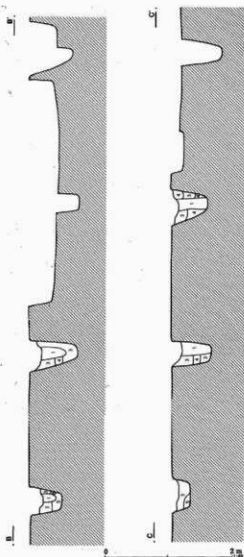
C区第3号掘立柱建物跡 (第459図)

第459図 C区第3号掘立柱建物跡・出土遺物



C区第3号掘立柱建物跡は29-13-14グリッドに位置する。重複する第5・11号土塊を確実に切って構築されていた。第8号土塊との関係は不明確であるが、おそらく掘立柱建物跡の方が新しいであろう。

3×2間、東西棟の側柱建物であるが、東妻には中間柱がない。Pit10とPit11を採ると東側梁行3間の建物となる。規模は桁行長7.20m、梁行長3.90mである。主軸方位はN-70°-Wを指し、第2号掘



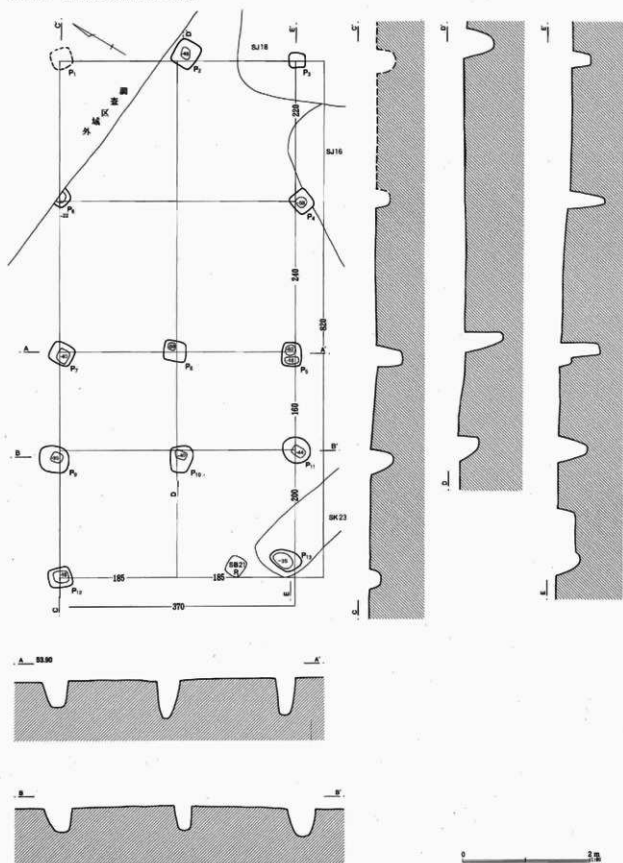
SB03

- 1 暗褐色土 ローム粒子微量
- 2 暗褐色土 ローム粒子やや多量
- 3 暗褐色土 ロームブロックやや少量
- 4 暗褐色土 ローム粒子多量
- 5 明褐色土 ローム主体。黒色土ブロック混入



0 10m

第460图 C区第20号掘立柱建物跡



立柱建物跡と直角近く軸がずれる。

桁行の柱間は2.40m等間に揃う。梁行は西妻が1.95m等間である。柱穴形態は方形で、一辺40～50cm前後、深さは50cm～80cmと深い。埋土は柱痕が暗褐色土、掘り方は黒褐色土を基調としていた。

出土遺物はPit 3から青磁碗の口縁部片が検出された(第459図1)。1は青磁碗。外面に蓮弁文が描出されている。緑灰色で、貫入が入る。龍泉窯系の製品と考えられる。

建物の時期は中世である。青磁碗の存在から13世紀後半以降と考えられる。

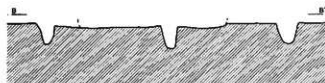
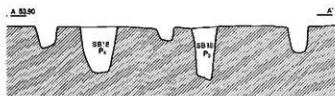
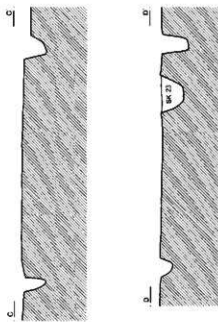
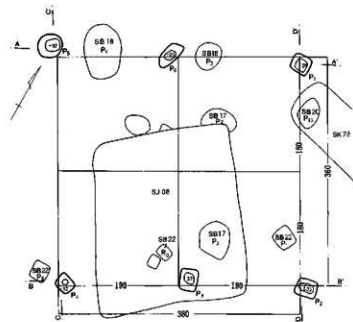
C区第20号掘立柱建物跡 (第460図)

第461図 C区第21号掘立柱建物跡

C区第20号掘立柱建物跡は28-16-17グリッドに位置する。重複する第16-18号住居跡を切り、一部は調査区外に延びている。第23号土壇との関係は不明である。

全体で4×2間の建物である。規模は桁行長8.20m、梁行長3.70mである。主軸方位はN-60°-Eを指す。

桁行の柱間は北東側から2.20m、2.40m、1.60m、2.00mと不揃いである。梁行は1.85m等間となるが、南西の梁行中間柱が検出されなかった。3×2間の表壇建物と見るべきかもしれない。Pit 6・10は中軸線上に乗っており、建物を構成する柱穴と考えられ



る。一部床張りの建物となろうか。

柱穴形態は方形で、深さは20cm～60cm前後である。

出土遺物は土師器環と甕の破片が少量検出されたが混入である。建物の時期は中世と考えられる。

C区第21号掘立柱建物跡 (第461図)

C区第21号掘立柱建物跡は28・29-16グリッドに位置する。重複する第8号住居跡を切っていた。

2×1間の側柱建物と考えたが、桁行の中間柱が検出されなかった。柱筋もややずれ気味である。規模は桁行長3.80m、梁行長3.60mである。主軸方位はN-60°-Eを指す。

桁行の柱間は1.90mであるが、Pit 3はややずれる。

第462図 C区第22号掘立柱建物跡・出土遺物

柱穴は方形で、一辺30cm前後、深さは20cm～40cm前後である。

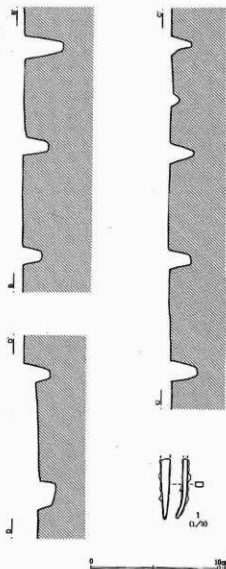
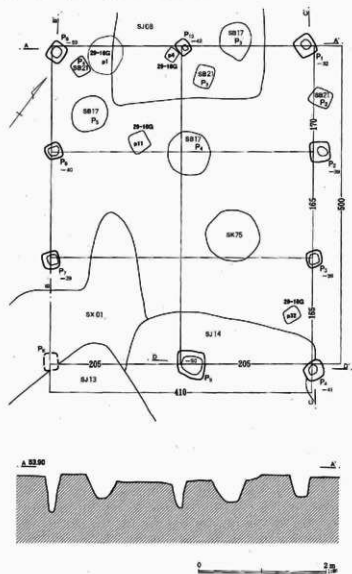
出土遺物は土師器環と甕が少量検出されたのみである。建物の時期は中世と考えられる。

C区第22号掘立柱建物跡 (第462図)

C区第22号掘立柱建物跡は29-16グリッドに位置する。重複する第8号住居跡、第14号住居跡を切っていた。第13号住居跡との関係は不明である。

3×2間の側柱建物で、規模は桁行長5.00m、梁行長4.10mである。主軸方位はN-36°-Wを指す。

柱間は桁行1.70m、1.65m、1.65mとなり、等間に揃わない。梁行のそれは2.05mである。柱筋は通



っている。柱穴は方形で、一辺20～30cm前後と小型である。深さは27cm～59cmである。

出土遺物は不明鉄製品がある(第462図1)。1は一

(5)ピット列

C区からはピット列が2条検出された。建物にはならないが、等間隔にPitが並ぶものである。

C区第1号ピット列(第463図)

C区第1号ピット列は30・31-19グリッドに位置する。3本のPitが約2.00m間隔に直線的に並ぶ。建物の可能性を考えて周囲を調査したが対応するピットは検出されなかった。ピットは円形で深さ20cm前後と浅い。柱痕はPit1とPit2から検出されている。

出土遺物はない。重複する第34号住居跡との関係

端の尖る板状製品。断面が長方形となり、刀子柄部の可能性がある。残存長4.8cm。Pit8出土。

建物の時期は中世と考えられる。

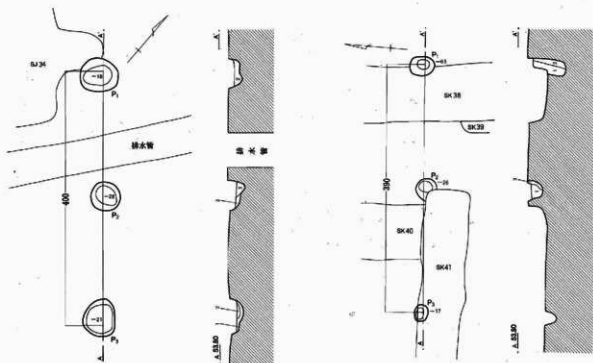
が不明であるため、時期は明らかにできない。

C区第2号ピット列(第463図)

C区第2号ピット列は31-19グリッドに位置する。東西方向に3本のピットが、約1.95m間隔で並ぶ。ピットは小規模で、深さは17cm～63cmと不揃いである。

出土遺物はない。第38・41号土壌に切られていたため、中世またはそれ以前となるがそれ以上の限定はできない。

第463図 C区第1・2号ピット列



SA01

- 1 黒色土 ロームブロック強入
- 2 暗褐色土 ロームブロック多量
- 3 褐色土 ローム粒子やや多量

SA02

- 1 暗褐色土 ローム粒子少量
- 2 褐色土 ローム粒子やや多量
- 3 暗褐色土 ローム粒子多量

0 2m

(6) 溝跡

C区からは10条の溝跡が検出された。

C区第1号溝跡(第464図)

C区第1号溝跡は調査区西端部の28・29-13・14グリッドに位置する。南西から北東方向に向かって途切れながら延び、北側は調査区外に抜けている。溝幅は0.50-0.70m、深さは0.10m前後と極めて浅い。埋土はローム混じりの黒褐色土である。中世のピットは確実に溝跡を切っていた。

出土遺物はない。時期は不明確であるが古代に遡る可能性はある。何らかの区画溝であろうか。

C区第2号溝跡(第464図)

C区第2号溝跡は29-15グリッドに位置する。第3号溝跡に直交する。確認段階では更に西に延び第1号掘立柱建物跡の上面までは確実に存在した。現状の長さは4.00m、幅0.80m、深さは5cm程度と非常に浅い。埋土はローム混じりの黒褐色土である。出土遺物はない。時期は不明確であるが、中世段階の可能性が高い。

C区第3号溝跡(第464図)

C区第3号溝跡は28-30-15・16グリッドに位置し、調査区を南北に横断している。重複遺構との新旧関係は、第7号住居跡、第18号掘立柱建物跡を切り、第17・20・21号土壌に切られていた。第16号土壌との関係は不明である。第4号溝跡は本溝跡から分枝して延びていた。

総延長23m、幅は0.50-1.00m、深さは0.30-0.35mで断面逆台形に掘り込まれていた。埋土はロームブロック混じりの黒褐色土を基調としていた。

出土遺物は須恵器円面硯、須恵器椀、温石がある(第469図1-3)。1は円面硯は脚部片で、方形透孔の間を7条の沈線で加飾している。第23号住居跡に同一意匠の円面硯が出土している(第397図24)。色調は異なるが同一個体の可能性がある。末野または群馬産か。3は提碁。板状をなし、小孔が貫通している。1・2は混入。

溝跡の時期は中世と考えられる。方形館を構成す

る第7号溝跡の東辺に平行しており、おそらく館跡内を分割する区画溝であろう。

C区第4号溝跡(第464図)

C区第4号溝跡は30-15グリッドに位置する。第3号溝跡から直角に分枝しており、両者は一体の溝跡と推定される。先端は第12号住居跡覆土上面を削平していたがその東側では消失していた。

残存長は3.50m、幅0.60m、深さ0.06cmである。

埋土は黒褐色土で第3号溝跡と類似していた。出土遺物はない。時期は中世と推定される。

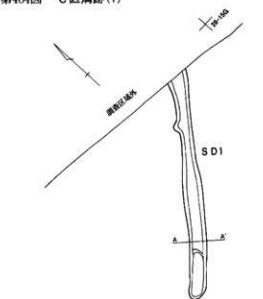
C区第5号溝跡(第465図)

C区第5号溝跡は調査区東端の29・30-21グリッドに位置する。L字状に屈曲し、北端と東端は調査区外に抜けている。重複する第35・36号住居跡、第14号土壌を切っていた。

規模は南北辺の長さ18.50m、東西辺1.80m、幅0.70-1.40m、深さ0.40-0.50mである。断面は逆台形に掘り込まれていた。埋土上層は灰褐色土を基調としており、多数の角閃石安山岩を主体とする人頭大の礫が投棄された状態で検出された。

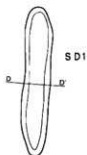
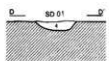
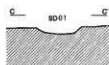
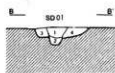
出土遺物は土師質の皿、内耳鍋、在地産播鉢、常滑系播鉢、石臼と多数の角閃石安山岩製加工礫がある(第469-472図)。4は瓦質の内耳鍋。外面に木口状工具による整形痕が残る。5・7は在地産の播鉢。5は外面指ナデ、内面は弧を描くように粗い掘り目が付けられている。胎土は雲母状微粒子と片岩を含み粗いが焼きは良い。7は瓦質である。内面に粗い掘り目が付く。6は常滑系の鉢と思われる。灰白色で焼きは堅緻。外面に正格子叩き、内面は自然軸が掛かる。8は土師質の皿か。底部回転糸切り後、板目状の圧痕が付く。9は須恵器甕で混入。10は安山岩製の石臼である。11-25は角閃石安山岩製の礫。いくつかのタイプがあり、直方体状に整形されるもの(11・12・17)、側面が丸味をもち上下両面が面取りされるもの(16・20・21)、側面は同様で片面のみ平坦面を作り出すもの(13・14・18・22・24・25)、上下両面

第464図 C区溝跡(1)

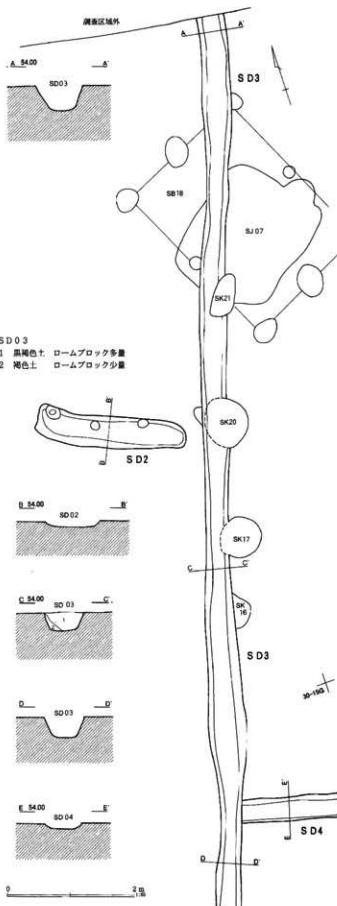


SD 01

- 1 黒色土 ローム粒子少量
- 2 褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量
- 3 暗褐色土 ローム粒子少量
- 4 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量

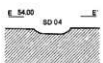
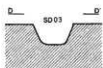
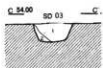
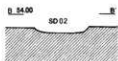
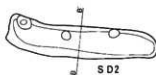


0 3.5m



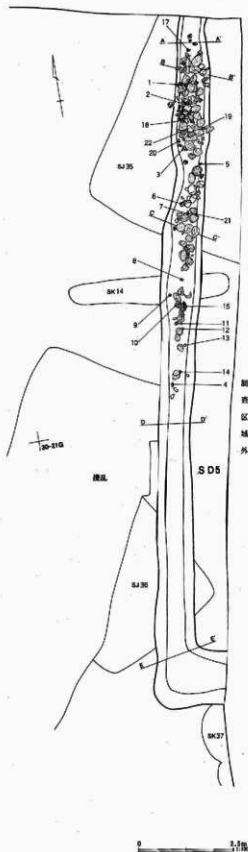
SD 03

- 1 黒褐色土 ロームブロック多量
- 2 褐色土 ロームブロック少量



0 2m

第465図 C区溝跡(2)



が緩やかに膨らむもの(19-23)、上下両面が大きく窪むもの(15)に分かれる。使用目的は不明である。遺物の時期は内耳鍋が14世紀後半～15世紀前半、播鉢が15世紀中頃の所産と推定される。大きく14世紀～15世紀にかけて機能した溝跡と考えておきたい。

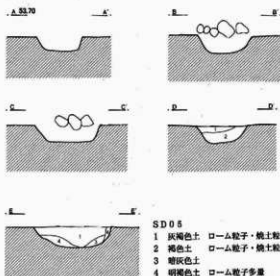
C区第6号溝跡(第466・467図)

C区第6号溝跡は28～30-17グリッドに位置する。第3号溝跡の東約16mにあり、ほぼ並行している。重複する古代の住居跡を全て切っていた。長さは19.0m、北側は調査区外に抜けている。幅は0.50m、深さは0.10～0.20m程である。埋土は黒褐色土で、ローム粒子とロームブロックが含まれていた。出土遺物は古銭が1枚検出されている(第図26)。北宋銭の祥符通寶である。時期は中世で、第3号溝跡同様館跡内の区画施設であろう。

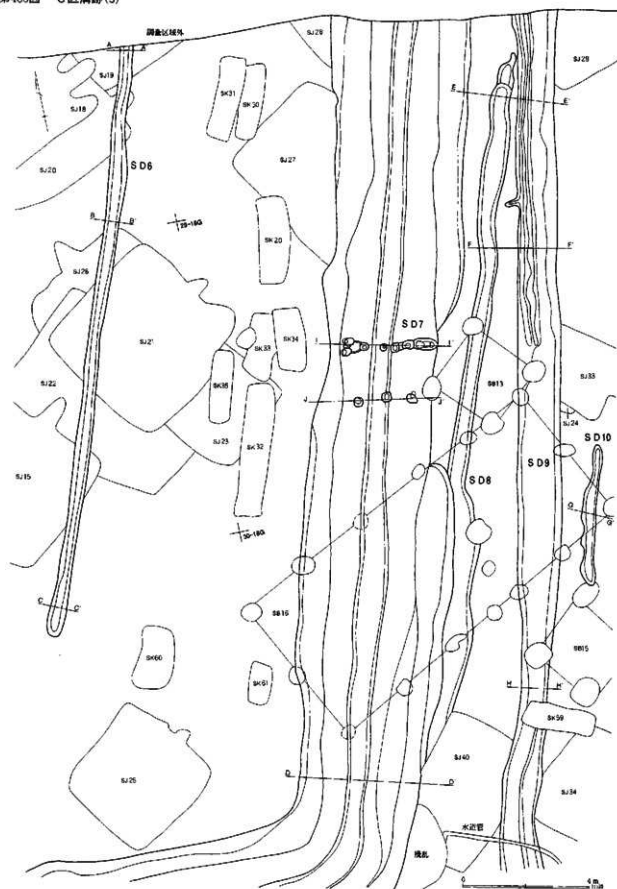
C区第7号溝跡(第466～468図)

C区第7号溝跡は調査区中央部にあり、L字状に屈曲する。北及び西部は調査区外に延びている。屈曲角度は105°前後でやや鈍角をなす。重複する古代の遺構を全て切っていた。

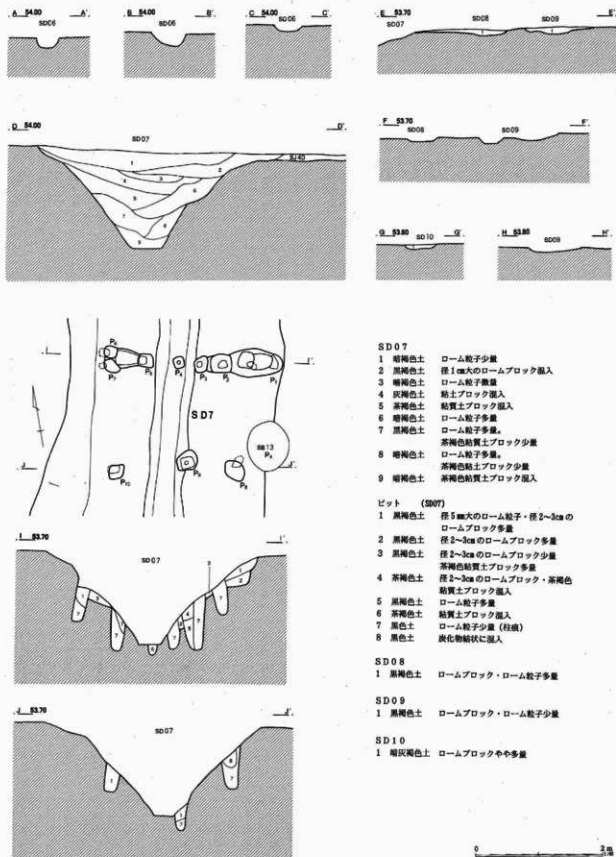
規模は南北辺27.5m、東西辺23.5mである。上幅



第466图 C区清跡(3)



第467図 C区溝跡(3)



は3.00~4.50m前後、深さは1.50~1.70m、断面箱葉研形に掘り込まれた大規模な溝跡である。北側延長部は町教育委員会によって調査され、西に向かって屈曲することが確認されており、方形館に伴う堀の跡と考えられる。埋土は溝の内外から交互に堆積した椽相が窺われ、少なくとも土壘の存在を窺わせるようなロームブロックを多量に含む埋土は認められなかった。北壁際の断面観察においても土壘の痕跡は見いだせなかった。

溝東辺(南北溝)の北から約10mの位置には、溝に直交する2列の柱穴列が検出された。柱列の間隔は1.50m。北側の柱列は柱穴が7本、ほぼ直線的に並び、最も西側の柱穴2本(Pit 6・7)は南北に並列していた。柱穴は溝底のもの(Pit 3~5)はほぼ直立するが、溝斜面に穿たれたものは底面が溝の外側に向く斜向Pitである。南側柱列は3本の柱穴からなり、Pit 9は直立、Pit 8・10は斜向Pitである。性格としては橋脚の痕跡と考えた。館跡に出入りする橋がこの位置に架けられていたものと思われる。

出土物はかなり多い。周辺以降から流入した古代の遺物も目立つ。器種としては土師質皿、瀬戸緑釉小皿、天目茶碗、折縁深皿、白磁碗、常滑甕、在地系の片口鉢、盤(火舎)、内耳鍋、古銭、凝灰岩製の加工礫と円面硯、平瓦、鉄鎌他の古代の遺物がある(第472~475図)。27は土師質小皿。底部は回転糸切り。28は瀬戸緑釉小皿。29は鉄釉皿。底部は回転ヘラケズリ。内面に鉄釉掛かる。外面はぼかし墨状。30は白磁碗の小片。内面に欄目が見える。31・32は天目茶碗。33は折縁深皿で、内外面に灰釉が掛かる。34~36は常滑甕。34は口縁下部がやや下方に引き出されている。35は口縁端部が上方につまみ上げられる。37は火鉢(火舎)。外面に菊花文のスタンプが押印されている。内面は剥離。土師質である。38も火鉢の脚部片。瓦質で獣足を模した脚部が付く。3足となろう。39は常滑(山茶碗窯)系の片口鉢である。40~43は在地系の片口鉢。40・41・42は瓦質。43は須恵質の焼き上がりである。44は盤形の火鉢か。土師

質で在地産と思われる。45は内耳鍋である。

46は小振りの須恵器蓋。47は須恵器壺蓋。小型で内面のかえりが突出する。非常に厚くぼったりした作りである。長頸壺蓋であろう。末野産。48~50は瀬西産の瓶類。51は高台盤である。52は盤。53は鉢か。54は瀬西産の長頸瓶で、内面が磨滅している。破片を二次的に転用されたものであろう。55は須恵器円面硯。低脚で硯面縁部の立ち上がりはほとんどない。硯面の隅に墨溜状の窪みを作り出している。脚部は沈線で加飾される。非常に堅く焼き上がる。末野産か? 56・57は須恵質の平瓦。56は凸面ヘラ状工具によるナデ、凹面は布目をナデ消している。横骨痕残る。57は凸面平行叩き、凹面細かい布目。58は礫石。59は正三角形型式の鉄鎌。関籠被が付く。61は鉄鎌。64・65は凝灰岩製の加工礫。64は側縁が丸く、上面が大きく窪み孔が貫通している。65は上下両面に平坦面を作り出す。

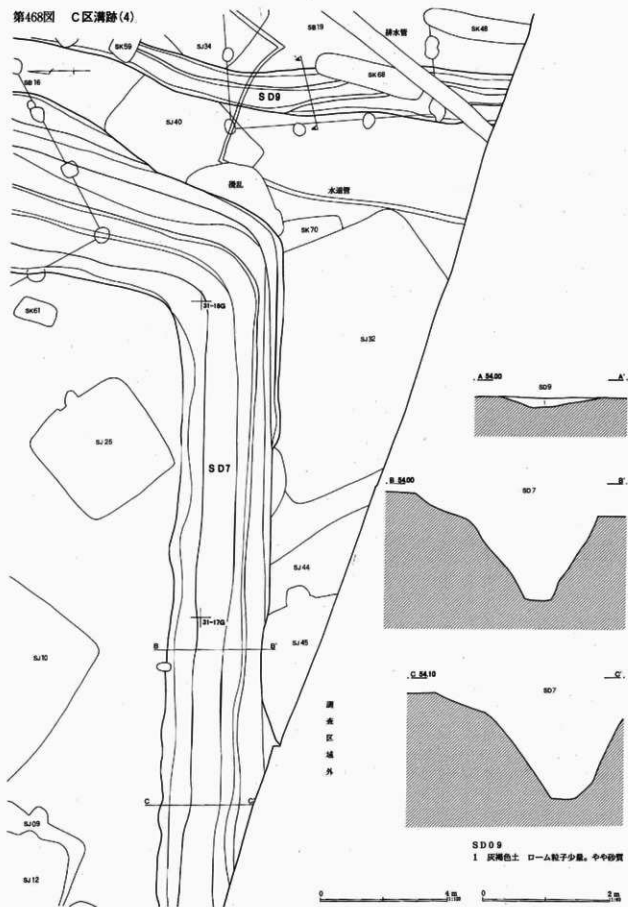
出土物の時期は古代の混入品を除いても一定程度の時期幅をもつ。常滑甕(35)、常滑系片口鉢(39)白磁碗(30)は13世紀代と見ても良い。在地系の片口鉢は14世紀頃か。天目茶碗、緑釉小皿、鉄釉小皿、折縁深皿、内耳鍋は15世紀代以降のものと考えられる。館跡の構築時期が13世紀代に上がるか否かは不明確であるが、少なくとも15世紀後半までは機能していたものと思われる。

C区第8・9号溝跡(第466・468図)

C区第8・9号溝跡は第7号溝跡の東側に位置する。第8号溝跡は第7号溝跡に取り付くように連結している。第9号溝跡は第7号溝跡東辺に平行して南北端は調査区外に抜けている。いずれも第40号住居跡をはじめ古代の遺構を切っていた。

第8号溝跡は幅0.50~0.60m前後、深さは0.05~0.10m程である。底面は凹凸があり一定しない。第9号溝跡は幅0.75~1.25m、深さ0.10~0.15mを測る。埋土はローム混じりの黒褐色土で両者ほぼ同一である。両溝跡を含めて有機的な関連をもつものと考えられる。第7号溝跡外縁から第8号溝跡を含め、

第468図 C区溝跡(4)



第9号溝跡まで、底面が硬化していた。特に橋脚と思われるビット列の検出された位置から北側部分で顕著に認められ、館跡の周囲が道路として機能していたことを窺わせる。

出土遺物は第9号溝跡から刀子片が検出された。

時期は中世と推定される。

C区第10号溝跡 (第466-467図)

C区第10号溝跡は29-30-19グリッドに位置する。第9号溝跡の東側にあり、ほぼ並行して南北に延びる。長さ4.45m、幅0.20-0.40m、深さ0.05m程である。埋土は暗灰褐色土で、ロームブロックが含まれていた。

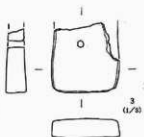
出土遺物はない。時期は不明確であるが、第9号溝跡と関連するとすれば中世となろう。

第171表 C区溝跡出土遺物観察表(第469-475図)

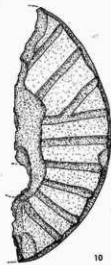
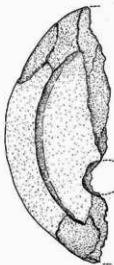
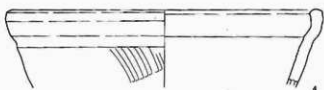
番号	器種	口径	高さ	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵内面硯		3.5	(17.0)	片	B	黒灰色	10%	SD03覆土。未野産か
2	須恵輪	(14.6)	(4.7)	8.3	BC	C	灰白色	30%	SD03覆土。群馬産か。口縁と底部接合しない
3	埴輪	SD03覆土。長さ5.4cm。最大幅5.4cm。最大厚1.6cm。重さ69.60g。径0.5cmの小孔貫通。凝灰岩製か							
4	内耳鉢	(32.0)	8.2		G片	B	灰色	5%	SD05No20。在地産。瓦質。胴部水口ナデ
5	幡鉢		7.9	11.5	C G片	A	淡褐色	10%	SD05No21。在地産。内面粗い罫り目。磨滅著しい
6	常滑系鉢				B	A	灰白色		SD06No1。外面正格子叩き。内面自然釉
7	幡鉢				G片	B	灰色		SD05No19。在地産。瓦質。内面粗い罫り目4条。磨滅著しい
8	土師質皿		1.0	5.2	G	B	褐色	90%	SD05覆土。底部糸切り後板目状残存
9	須恵皿	(42.0)	7.5		BC片	A	紫灰色	5%	SD05覆土。未野産。比叡区面十羅波状文
10	石臼	SD06No15。直径(30.0cm)。長さ26.7cm。短径10.7cm。厚さ10.0cm。重さ2940g。角閃石安山岩。							
11	石製品	SD05No53。長さ22.0cm。短径17.7cm。厚さ13.8cm。重さ4310g。角閃石安山岩。立方体状に面取り。煤付着							
12	石製品	SD05No30。長さ22.5cm。短径17.9cm。厚さ11.6cm。重さ3310g。角閃石安山岩。立方体状の切石							
13	石製品	SD05No44。長さ16.5cm。短径16.2cm。厚さ11.9cm。重さ2260g。角閃石安山岩							
14	石製品	SD05No03。長さ18.1cm。短径15.2cm。厚さ10.1cm。重さ1890g。角閃石安山岩							
15	石製品	SD05No55。長さ20.2cm。短径15.1cm。厚さ8.9cm。重さ2125g。角閃石安山岩							
16	石製品	SD05No40。長さ28.5cm。短径25.2cm。厚さ12.3cm。重さ7710g。角閃石安山岩							
17	石製品	SD05No13。長さ25.5cm。短径24.0cm。厚さ14.2cm。重さ6350g。角閃石安山岩。方形に面取り							
18	石製品	SD05No34。長さ36.7cm。短径22.2cm。厚さ16.4cm。重さ8100g。角閃石安山岩。上面に平坦面を作る							
19	石製品	SD05No26。長さ25.1cm。短径19.3cm。厚さ11.2cm。重さ4175g。角閃石安山岩。全体磨かれる							
20	石製品	SD05No24。長さ24.7cm。短径21.4cm。厚さ8.5cm。重さ3310g。角閃石安山岩							
21	石製品	SD05No52。長さ23.0cm。短径19.8cm。厚さ11.0cm。重さ3900g。角閃石安山岩							
22	石製品	SD05No38。長さ28.1cm。短径21.5cm。厚さ10.5cm。重さ5450g。角閃石安山岩							
23	石製品	SD05No36-29。長さ24.5cm。短径21.0cm。厚さ14.0cm。重さ5715g。角閃石安山岩							
24	石製品	SD05No33。長さ22.2cm。短径16.0cm。厚さ13.2cm。重さ3960g。角閃石安山岩							
25	石製品	SD05。長さ22.7cm。短径20.2cm。厚さ13.2cm。重さ4690g。角閃石安山岩。上下両面平坦面							
26	古銭	SD06。祥符元寶(北宋銭。1009年初鋳)							
27	土師質皿	11.0	2.6	6.2	C G	A	橙褐色	85%	SD07南溝覆土上層。在地産。底部回転糸切り
28	緑釉小皿	(11.6)	2.2		F	A	乳白色	10%	SD07館跡部中層。瀬戸。口縁部に灰釉掛かる
29	鉄釉小皿		0.8	(5.0)	B	B	灰白色	25%	SD07南溝覆土上層。瀬戸美濃系。内面に鉄釉
30	白磁碗					B	灰白色		SD07南溝。内面雜目文
31	天目茶碗	(12.0)	3.9		B F	A	乳白色	15%	SD07覆土。瀬戸美濃系。鉄釉内外面に掛かる
32	天目茶碗	(11.0)	2.6		B F	A	乳白色	10%	SD07東溝。瀬戸美濃系。鉄釉天目
33	折縁深皿	(30.0)	4.8		B	A	乳白色	10%	SD07東溝。瀬戸。残存部全面に灰釉掛かる
34	常滑壺	(41.0)	9.9		C E	A	茶褐色	10%	SD07南溝
35	常滑壺	(36.0)	6.1		C E	A	茶褐色	5%	SD07東溝。接合しない胴部破片あり
36	常滑壺		6.9	(15.6)	C E	A	淡茶褐色	20%	SD07南溝
37	火鉢		6.6		D H片	C	明褐色		SD07東溝北半。在地産。土師質。外面18弁の菊花文押印
38	火鉢	SD07東溝。瓦質。火舎の脚部片。不整七角柱の脚部を嵌め込む							
39	片口鉢	(30.0)	2.6		B C	A	明灰色	10%	SD07南溝覆土上層。常滑(山形)系片口鉢
40	片口鉢	(30.0)	(12.0)	(12.0)	B F	B	明灰色	10%	SD07覆土。在地産。瓦質。底部内面磨滅
41	片口鉢	(32.0)	3.6		G	B	灰褐色	10%	SD07北半。在地産

第469图 C区清跡出土遺物(1)

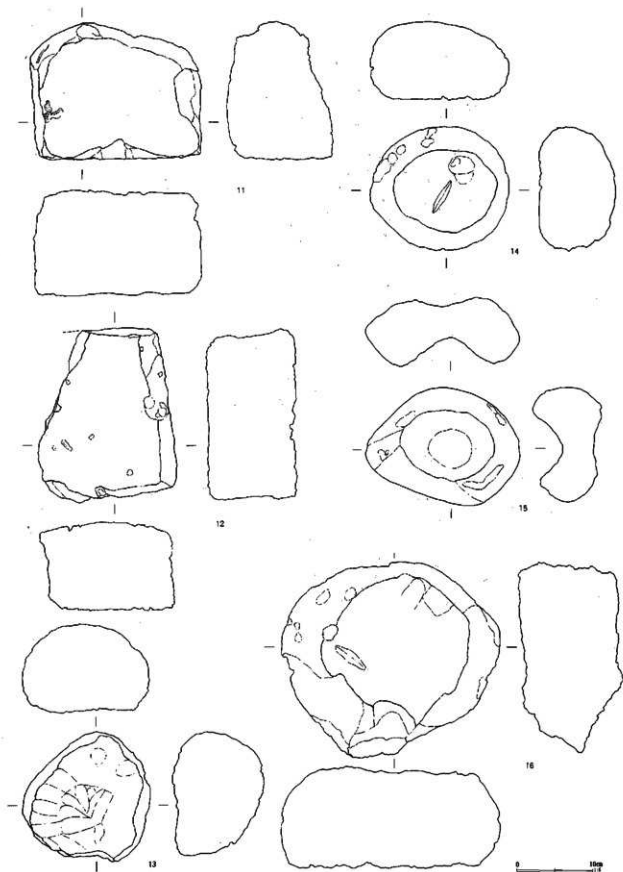
SD 03



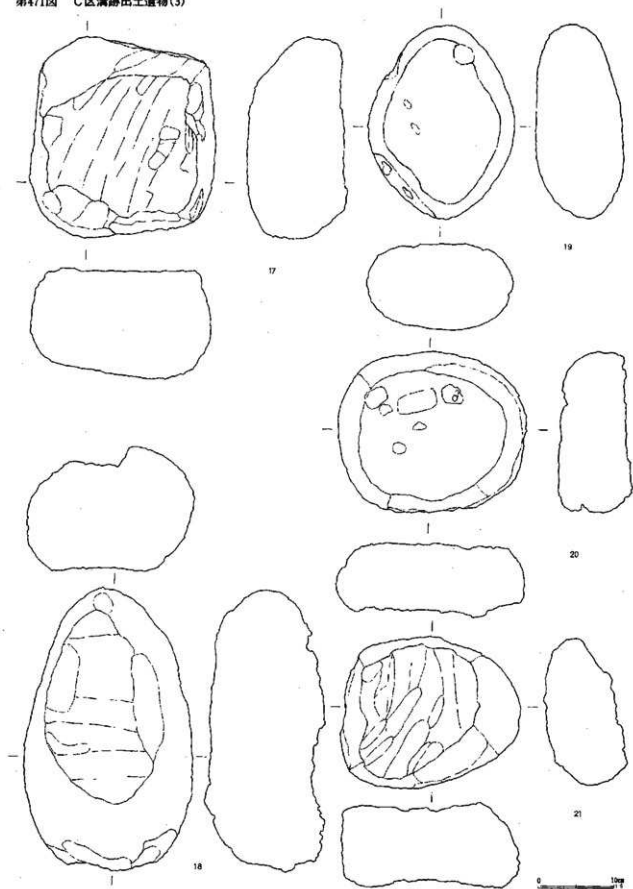
SD 05



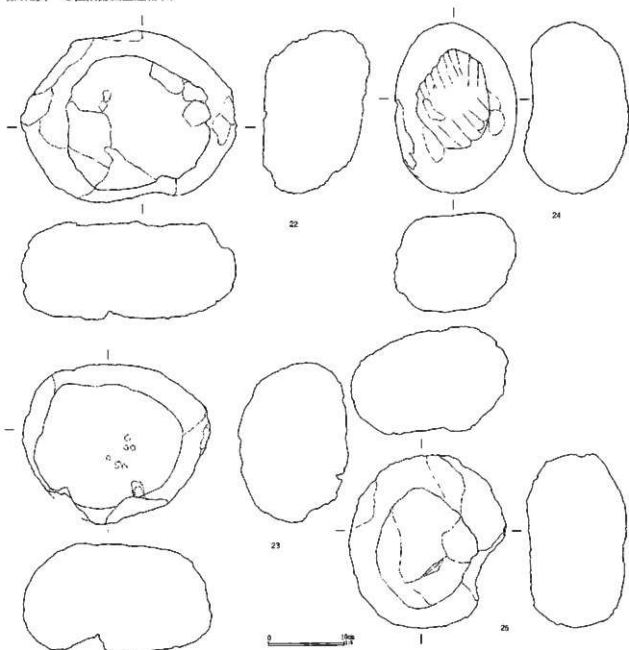
第470图 C区清跡出土遺物(2)



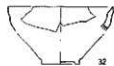
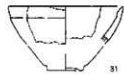
第471图 C区满跡出土遺物(3)



第472图 C区清除出土遗物(4)



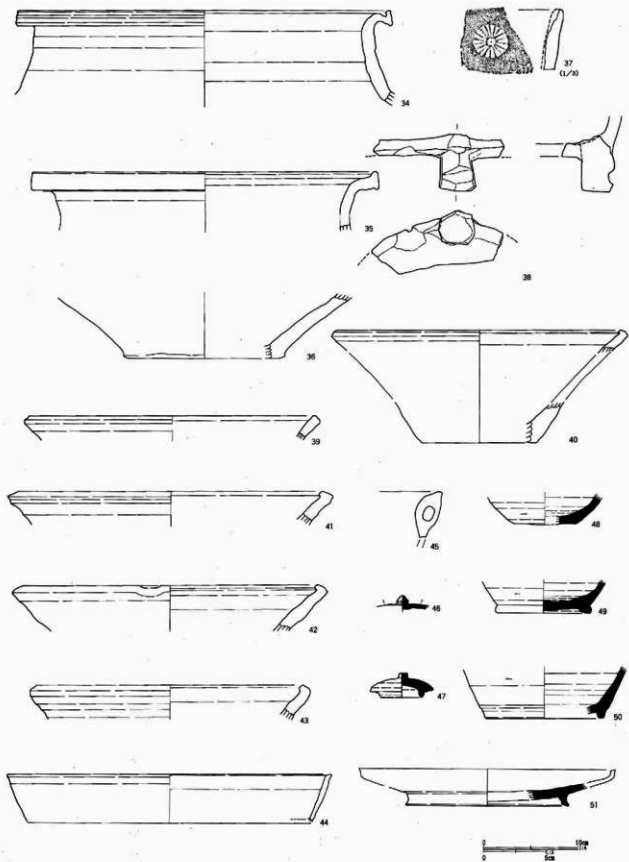
SD 06



SD 07



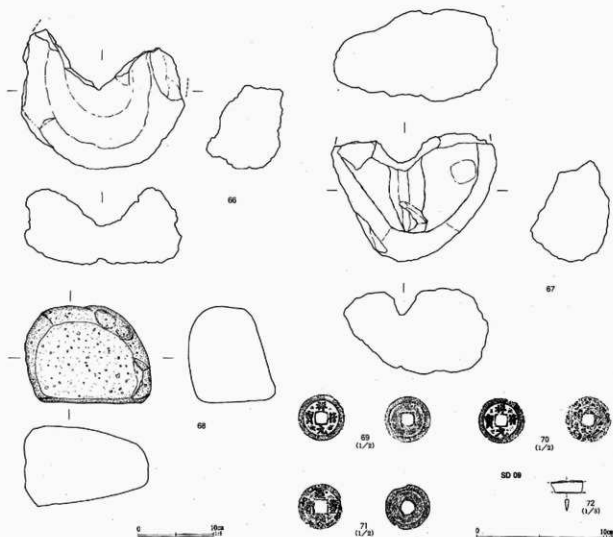
第473图 C区满踏出土遗物(5)



第474图 C区满脚出土遗物(6)



第475図 C区溝跡出土遺物(7)



番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
42	片口鉢	(31.0)	4.8		G	A	明灰色	5%	SD07覆土。在地産。瓦質
43	片口鉢	(28.0)	3.7		BC	A	灰色	10%	SD07東溝。在地産。須恵質
44	盤	(34.0)	5.0		C D G	B	褐色	5%	SD07南溝。在地産。土師質
45	内耳鉢		4.9		G	C	黒灰色		SD07南溝 上層。在地産。土師質
46	須恵蓋		1.5		B	A	淡青灰色	40%	SD07覆土。末野産
47	須恵蓋	6.5	2.6		C片	A	鈍い灰色	95%	SD07南溝。末野産。長頸瓶の蓋。かえり径4.2cm
48	須恵瓶		3.3	(6.4)	B	A	明灰色	20%	SD07南溝上層。湖西産
49	須恵長頸瓶		3.5	(9.6)	B	A	灰白色	25%	SD07南溝。湖西産。底部及び胴部回転ヘラケズリ
50	須恵長頸瓶		5.5	(11.8)	B	A	淡灰色	35%	SD07東溝。湖西産
51	須恵高台盤		2.3	(17.0)	C D H片	C	茶褐色	15%	SD07南溝。末野産
52	須恵盤	(31.0)	3.4		H片	A	灰白色	10%	SD07南溝。群馬産か
53	須恵鉢	(22.4)	8.8		B片	A	灰色	15%	SD07東溝。末野産
54	須恵長頸瓶		4.8		B	C	灰白色	10%	SD07南溝。湖西産。外面緑色の自然釉 内面著しく磨滅
55	須恵凹面硯	(20.0)	2.8	(19.4)	BC	A	灰黒色	10%	SD07東溝。末野産か。硯面に墨溜状の凹み 胴部沈線加飾
56	平瓦				BD	A	灰色		SD07東溝。凹面布目を一部残し他はナゲ消す 横骨痕あり
57	平瓦				BD	A	茶褐色		SD07東溝。凹面布目 (経糸25本 緯糸25本/3cm)
58	碓石	SD07東溝。長さ7.6cm。重さ160.42g。凝灰岩製 4側面は非常に良く使い込まれ平滑 底面にも条線あり							
59	鉄鏝	SD07南溝。残長6.6cm。3.3cm。							

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
60	不明鉄製品	SD07. 残長4.4cm. 棒状							
61	鏃	SD07南溝. 残長3.3cm. 幅2.4cm							
62	土罐	SD07北平. 長さ4.8cm. 最大径1.1cm. 孔径0.3cm. 重さ5.88g. 胎土A. 焼成A. 淡褐色. 残存100%							
63	土罐	SD07東溝. 長さ6.1cm. 最大径1.1cm. 孔径0.4-0.5cm. 重さ10.35g. 胎土A B D. 焼成A. 褐色							
64	石製品	SD07. 長径16.6cm. 短径16.4cm. 厚さ7.3cm. 重さ1295g. 角閃石安山岩. 上面のみ凹凸. 煤付着							
65	石製品	SD07北平. 長径17.5cm. 短径12.1cm. 厚さ7.5cm. 重さ1450g. 角閃石安山岩							
66	石製品	SD07. 長径21.4cm. 短径15.2cm. 厚さ10.0cm. 重さ2065g. 角閃石安山岩							
67	石製品	SD07. 長径21.5cm. 短径14.5cm. 厚さ10.8cm. 重さ2185g. 角閃石安山岩							
68	石製品	SD07. 長径16.2cm. 短径12.8cm. 厚さ10.7cm. 重さ3910g. 安山岩. 全体良く磨滅する							
69	古銭	SD0737-7G. 祥符元寶 (北宋銭 1009年初鑄)							
70	古銭	SD07南溝. 祥符元寶 (北宋銭 1009年初鑄)							
71	古銭	SD07南溝. 元豊通寶 (北宋銭 1078年初鑄)							
72	刀子	SD09. 残長2.5cm							

(7) 土壌

C区からは72基の土壌が検出された。形態は円形、楕円形、長楕円形、方形、長方形、長楕円形、不定形のものがあり、A区と同様である。各遺構の規模や形態等の説明は土壌一覧表に委ね、ここでは特徴的な土壌に関して説明を加えることにしたい。

A区で見られた超長方形土壌はC区でもまとまって検出されている。調査区西端部、第3号溝跡と第6号溝との中間部、第7号溝跡の東辺の西岸、東岸の北城と南城に数基単位で群集する傾向がある。主軸は方形館を形成する第7号溝跡に平行または直交するものが多く、その関連性が注目される。時期は不明確なものが多いが、第39号土壌からは常滑系の片口鉢が出土した。第68号土壌からは瀬戸灰釉平碗が出土した。第9号溝跡に上面を削平されており、平碗がどちらに伴うか不明確である。第42号土壌からは洪武通寶が出土した。

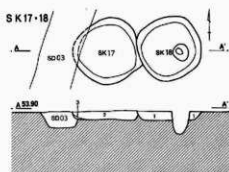
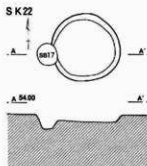
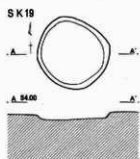
中世以降との新旧関係を確認すると第14号土壌は14-15世紀の遺物を含む第5号溝跡に切られていた。調査区西端の第3号掘立柱建物跡は柱穴から青磁蓮弁文碗が出土し、中世の所産と推定されるが、重複する第5号、8号土壌は第3号掘立柱建物跡に確実に切られていた。また、古代の遺構と重複する場合には例外なく土壌の方が新しかった。以上のことから超長方形土壌の大半は中世に構築されたことはほぼ確実視されるものである。但し、時期幅をどの程度見積もったらよいのか、館跡との関係を把握するには検討が必要である。

他に特徴的な土壌を挙げると、第62号土壌がある。不整楕円形で底面は凹凸がある。1×1間の第15号掘立柱建物跡が切っていた。埋土はロームブロックが多量に含まれ人為的に埋め戻された可能性が高い。第15号掘立柱建物跡は熊野Ⅰ期に遡る可能性があり、

表172表 C区土壌一覧表

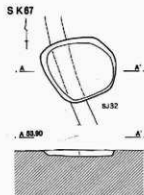
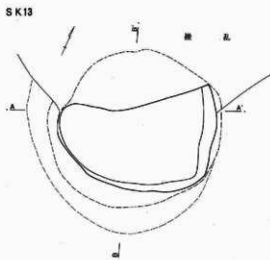
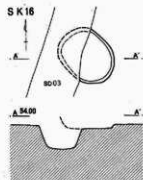
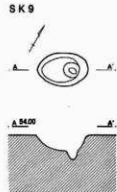
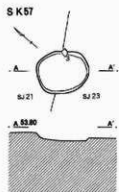
番号	位置	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	主軸方位	形態	重複関係・時期
1	28-13-14	4.66	0.84	0.50	N-16°-E	超長方形	SK2より新 中世
2	28-13-14	3.36	0.72	0.24	N-72°-W	超長方形	SK1より古 中世
3	28-29-13	3.95	0.85	0.53	N-20°-E	超長方形	中世
4	29-13	1.90	0.75	0.28	N-15°-E	長方形	中世
5	29-13	2.44	0.82	0.17	N-82°-W	長方形	SK3 SK6より古 中世
6	29-13	1.92	0.72	0.26	N-34°-E	長方形	SK5より新 中世
7	29-13	1.53	0.45	0.18		長方形	SK8より新 中世
8	29-13	4.10	0.70	0.50	N-3°-E	超長方形	SK7より古 中世
9	29-13	0.80	0.52	0.40	N-60°-E	楕円形	古代?
10	29-14	1.06	1.04	0.13	N-30°-W	方形	中世か
11	29-13-14	3.56	0.62	0.49	N-70°-W	超長方形	SK3より古SK8より新 中世
12	29-14	1.57	1.00	0.28	N-32°-E	楕円形	古代か

第476図 C区土壌(1)

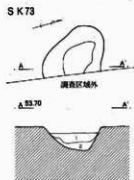


SK 17・18

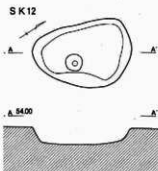
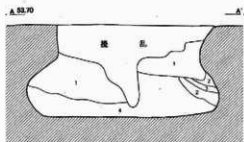
- 1 黒色土 □ローム粒子多量
- 2 黒褐色土 □ローム粒子少量
- 3 褐色土



- 1 褐色土

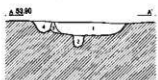
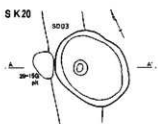


- SK 73
- 1 暗褐色土 □ローム粒子少量
- 2 明褐色土 □ローム主体
- 褐色土混入



- SK 13
- 1 褐色土 □ロームブロック混入
- 2 暗褐色土 □ロームブロック混入
- 3 黒色土 □ロームブロック混入
- 4 黒色土 □ロームブロック多量

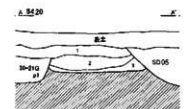
第477図 C区土壌(2)



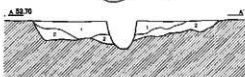
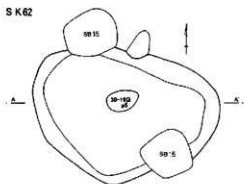
- SK 20
- 1 黒色土 ローム粒子少量
 - 2 黒褐色土 ロームブロック多量
 - 3 黒褐色土 ロームブロック多量
 - 4 暗褐色土 ローム粒子少量



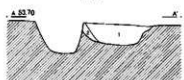
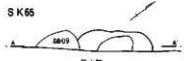
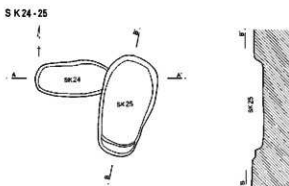
- SK 28
- 1 黒褐色土 ローム粒子多量



- SK 37
- 1 暗褐色土 ローム粒子・火山灰(B程度か)少量
 - 2 黒褐色土 粘土粒子・ローム粒子少量
 - 3 暗褐色土 ロームブロック・褐色土混入



- SK 62
- 1 暗褐色土 ロームブロック少量、ローム粒子多量
 - 2 褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量



- SK 65
- 1 暗褐色土 ロームブロック多量
 - 2 褐色土 ロームブロック多量



第62号土壌は最も古くなるであろう。性格は不明であるが、掘立柱建物跡を建てる際の整地土かもしれない。

第13号土壌は攪乱に半分壊されていたが、不整円

形プランで、壁面が大きくオーバーハンクしていた。埋土はロームブロック混じりの黒色土で人為的な堆積土である。おそらく土取りを行った採掘坑と推定される。本来、特殊遺構とすべきものである。

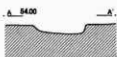


第478図 C区土壕(3)

SK64



SK50



SK72



SK10



SK72

- 1 暗褐色土 ローム粒子少量
- 2 黄褐色土 ロームブロック主体、黒色土少量

SK61



SK21



SK26



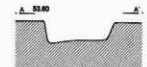
SK4



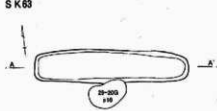
SK60



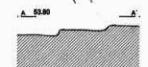
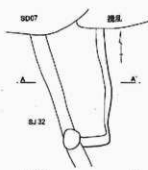
SK74



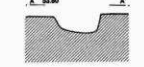
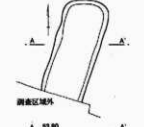
SK63



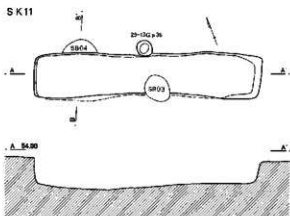
SK70



SK66



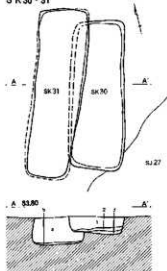
第479図 C区土塙(4)



SK11

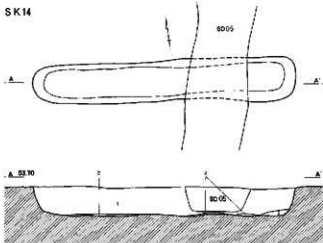
- 1 暗褐色土 ロームブロック多量
- 2 暗褐色土 ロームブロック少量
- 3 黒色土 黒色粒状粘土多量

SK30・31



SK30・31

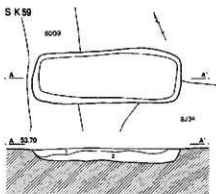
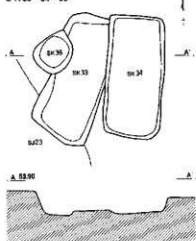
- 1 暗褐色土 ロームブロック多量
- 2 暗褐色土
- 3 黄褐色土 ローム干体、黒色土ブロック混入
- 4 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒下混入
- 5 黒褐色土



SK14

- 1 褐色土 ロームブロック・黒色土混入
- 2 黄褐色土

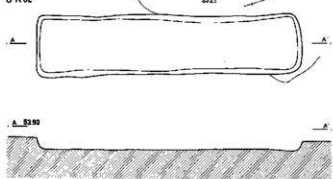
SK33・34・36



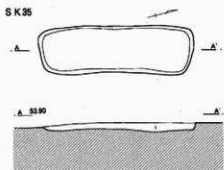
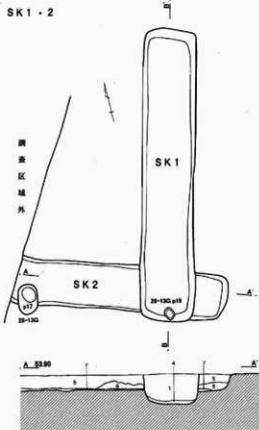
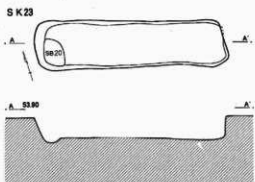
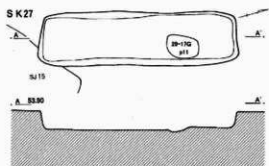
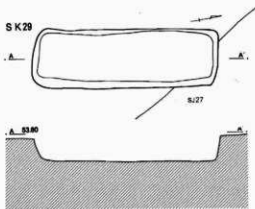
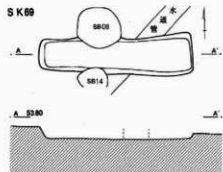
SK59

- 1 黒褐色土 ロームブロック・ローム粘土多量
炭化物少量
- 2 砂質 灰色粘土・砂多量

SK32



第480図 C区土墳(5)



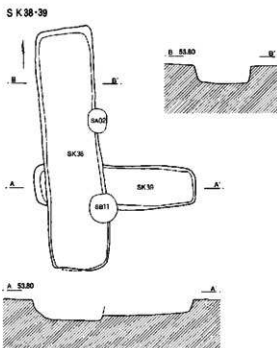
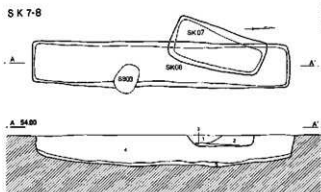
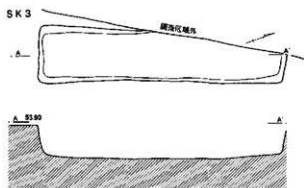
SK35
1 灰褐色土 火山灰(浅間Aか)多量

SK01・02

- 1 灰褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量
- 2 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子・黒色土ブロック多量
- 3 黒褐色土 ロームブロック多量
- 4 黒色土 砂状の粒子多量
- 5 黒褐色土 ロームブロック混入
- 6 暗褐色土 ロームブロック少量
- 7 黒色土 砂状の粒子多量



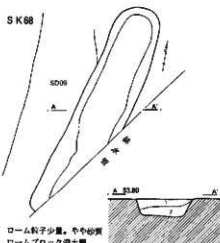
第481図 C区土壇(6)



SK 07・08

- 1 暗褐色土 ローム粒子多量
- 2 灰褐色土 ローム粒子多量
- 3 黒色土 黒色砂状粒子多量
- 4 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック・黒色土ブロック多量
- 5 無彩色土 ローム粒子・黒色砂状粒子多量

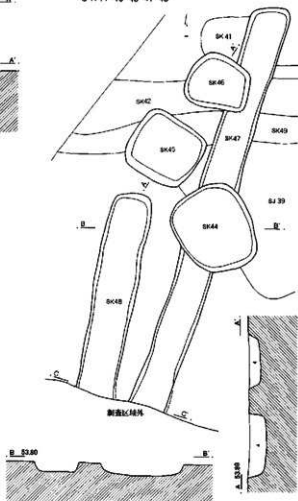
0 2m



SK 88

- 1 灰褐色土 ローム粒子少量、やや砂質
- 2 暗褐色土 ロームブロック盤土層

SK 44・45・46・47・48

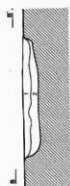
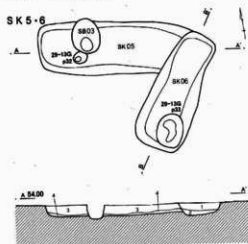


SK 45・46・47・48

- 1 黒色土 ロームブロック混入
- 2 黒色土
- 3 黄褐色土 ロームブロック
- 4 灰褐色土 ローム粒子混入少量

0 2m

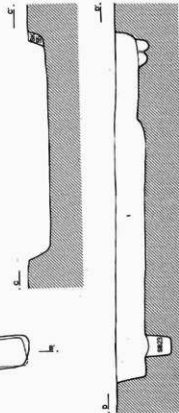
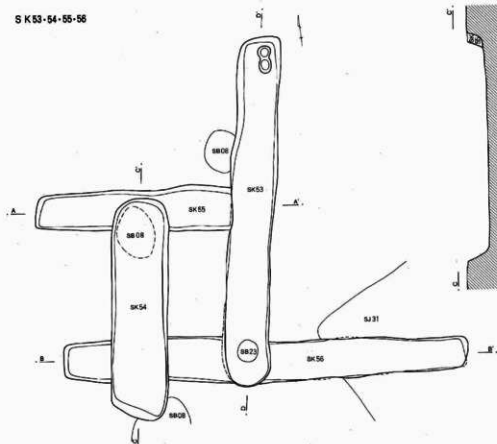
第482図 C区土墳(7)



SK 05・06

- 1 暗褐色土 ローム粒子混入
- 2 褐色土 黒色土ブロック・ロームブロック多量
- 3 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量
- 4 黒色土 砂粒状の粒子多量

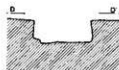
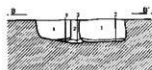
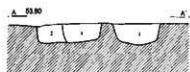
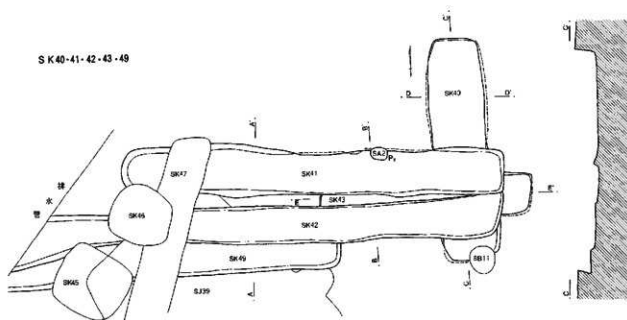
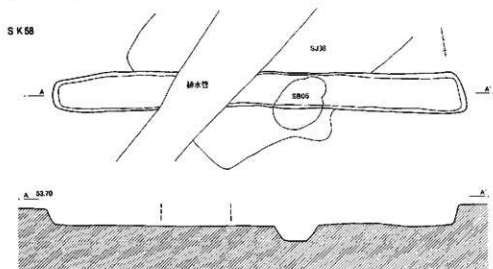
SK 53・54・55・56



SK 53

- 1 暗褐色土 ロームブロック階段状に混入
- 2 褐色土 ローム粒子少量

第483図 C区土壌(8)



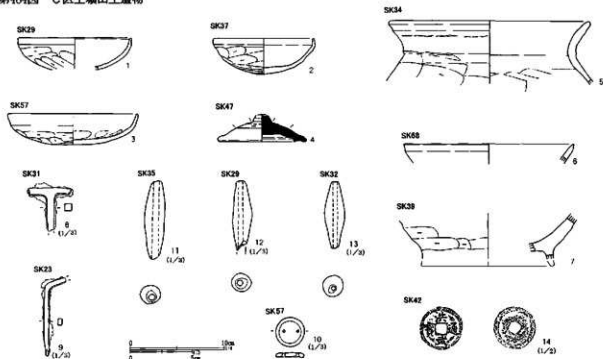
S K 4 1・4 2・4 9
 1 黒色土 ロームブロック層跡に混入
 2 灰褐色土 ローム砂子少量
 3 黒色土

0 2m

番号	位置	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	主軸方位	形態	重複関係・時期
13	30-20	2.53	1.25	1.44		不整形	擾乱を受けている 古代
14	29-21	4.10	0.63	0.45	N-85°-W	超長方形	SD5より古 中世
15	欠						
16	29-15	0.94	0.74	0.07	N-46°-W	楕円形	SD3より新 中世以降
17	29-15	1.05	1.00	0.13		円形	SD3より新SK18より古 中世以降
18	29-15-16	1.06	1.00	0.15		円形	SK17より新 中世以降
19	29-16	1.16	1.12	0.09		円形	中世
20	29-15-16	1.26	1.05	0.20	N-16°-W	楕円形	SD3より新 中世以降
21	28-29-16	1.84	0.78	0.33	N-11°-E	長方形	SJ7 SD3より新 中世以降
22	26-16	1.08	1.07	0.11		円形	SB17より新 中世以降
23	28-29-16	3.03	0.74	0.36	N-70°-W	超長方形	SR20新田不明 中世
24	29-16	1.11	0.56	0.07	N-88°-E	楕円形	SK25より古 中世
25	29-16	1.60	0.86	0.14	N-12°-E	楕円形	SK24より新 中世
26	29-17	2.15	0.76	0.23	N-20°-E	長方形	中世
27	29-17	3.12	0.86	0.30	N-15°-E	長方形	SJ15より新 中世
28	28-16	1.25	0.90	0.23	N-25°-W	楕円形	古代
29	28-29-18	2.95	0.92	0.41	N-12°-E	長方形	SJ27より新 中世
30	28-18	2.35	0.87	0.28	N-15°-E	長方形	SJ25 SK31より新 中世
31	28-18	2.67	0.76	0.44	N-20°-E	長方形	SK30より古 中世
32	29-18	4.24	0.94	0.17	N-17°-E	超長方形	SJ23より新 中世
33	29-18	2.00	0.87	0.27	N-21°-E	長方形	SJ23より新 SK34-36より古中世
34	29-18	1.94	0.95	0.23	N-4°-E	長方形	SK33より新 中世
35	29-17-18	2.45	0.72	0.14	N-15°-E	長方形	SJ21-23より新 中世
36	29-18	0.72	0.62	0.36		円形	SK33より新 中世
37	30-21	1.57	0.57	0.12		不整形	SD5より古 古代
38	31-19	3.85	0.88	0.32	N-3°-W	超長方形	SB11 SK39 SA2より新 中世
39	31-19	2.58	0.70	0.23	N-87°-W	長方形	SB11より新SK38より古 中世
40	31-19	3.56	0.90	0.38	N-4°-W	長方形	SB11より新 SK41-42-43より古 中世
41	31-18-19	6.10	0.75	0.36	N-89°-W	超長方形	SK40-42-43より新 SK46-47より古 中世
42	31-18-19	7.38	0.58	0.30	N-90°-E	超長方形	SK40-43-49より新 SK41-45-47より古 中世
43	31-19	3.38	0.70	0.37		長方形	SK40-41-42より古 中世
44	31-18-19	1.42	1.20	0.14	N-30°-W	方形	SJ39 SK47より新 中世
45	31-18	1.12	1.04	0.27	N-60°-W	方形	SJ39 SK42-49より新 中世以降
46	31-18-19	1.00	0.89	0.20	N-74°-W	方形	SJ39 SK41-42-47より新 中世以降
47	32-32-18-19	6.67	0.61	0.40	N-17°-E	超長方形	SJ39 SK41-42-49より新 SK46より古中世
48	31-32-18	3.29	0.70	0.28	N-12°-E	超長方形	中世
49	31-18-19	5.30	0.50	0.28	N-90°-W	超長方形	SJ39より新 SK42-45-47より古 中世
50	29-16	0.86	0.85	0.12		円形	SJ11内 中世以降
51	29-15	2.04	0.40	0.09	N-30°-W	長方形	中世
52	欠						
53	28-29-19	5.60	0.64	0.50	N-9°-E	超長方形	SB8-23 SK55-56より新 中世
54	29-19	3.50	0.89	0.32	N-10°-E	長方形	SB8 SK55-56より新 中世
55	29-19	3.08	0.64	0.29	N-84°-W	超長方形	SK53-54より新 中世
56	29-19	6.42	0.65	0.37	N-85°-W	超長方形	SJ31 SR23より新 SK53-54より古 中世
57	29-17	0.80	0.66	0.09		楕円形	SJ21-23より新 中世以降
58	29-20	6.55	0.56	0.28	N-82°-W	超長方形	SJ38 SB6より新 中世
59	30-18	2.34	0.86	0.23	N-69°-W	長方形	SJ34 SD9より新 中世以降
60	30-17	1.93	1.18	0.17	N-19°-E	長方形	中世
61	30-17-18	1.30	0.72	0.05	N-15°-E	長方形	中世
62	30-18-19	3.02	2.12	0.35		不整形楕円形	SB15より古 古代
63	29-20	2.47	0.52	0.20	N-83°-W	超長方形	中世
64	28-19	1.08	0.34	0.06	N-74°-E	楕円形	不明
65	30-19	1.20	0.32	0.32		不整形	SB9より古 古代

番号	位置	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	主軸方位	形態	重箱関係・時期
66	31-32-19	1.58	0.70	0.31	N-15°-E	長方形	中世
67	31-17	1.24	0.98	0.09		楕円形	SJ44より新 中世?
68	31-18	3.62	0.82	0.29	N-14°-E	超長方形	SD9より古 中世
69	29-19	2.47	0.56	0.22	N-90°-W	長方形	SB8-14より新 中世
70	31-18	2.00	0.77	0.08		長方形	SJ32より新 SD7より古 中世
71	欠						
72	32-20	1.16	0.68	0.22	N-36°-W	楕円形	中世以降
73	32-21	0.92	0.90	0.37		不整形	古代
74	30-20	0.97	0.70	0.34		不整形	擾乱を受ける 中世か
75	29-16	0.82	0.82	0.10		円形	古代か

第484図 C区土壌出土遺物



第173表 C区土壌出土遺物観察表 (第484図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師環	(11.8)	3.3		B G	A	橙褐色	10%	SK29
2	土師環	10.6	3.7		A	A	茶褐色	65%	SK37
3	土師環	13.2	3.2		A B	A	明褐色	40%	SK57 No4
4	須恵壺蓋	9.1	2.8		B C片	A	明灰色	55%	SK47覆土。未野産か。外面自然障灰
5	土師壺	(21.0)	6.7		A B	A	橙褐色	15%	SK34覆土
6	灰輪平筒	(18.0)	2.1		B	A	灰白色	5%	SK68覆土。瀬戸。内外面に灰輪掛かる
7	常滑系鉢		4.0		B C	B	明灰色	20%	SK39覆土。内面摩耗
8	不明鉄製品	SK31覆土上層。残長3.5cm。刺金状							
9	鉄釘か	SK23。残長6.2cm							
10	不明銅製品	SK57 No1。径2.2cm。4'の状							
11	土罐	SK35 覆土。長さ6.2cm。最大径1.5cm。孔径0.45cm。重さ13.32g。胎土B C D。焼成A。橙褐色。100%							
12	土罐	SK29 覆土。長さ5.5cm。最大径1.4cm。孔径0.5cm。重さ10.73g。胎土B D。焼成A。淡褐色。残存95%							
13	土罐	SK32 覆土。長さ5.2cm。最大径1.7cm。孔径0.3cm。重さ11.72g。胎土B。焼成A。黄褐色。残存100%							
14	占銭	SK42。洪武通寶(明銭 1368年初鑄)							

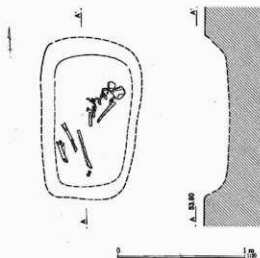
(8) 土墳墓

C区第1号土墳墓 (第485図)

C区第1号土墳墓は29-16-17グリッドに位置する。第14-15号住居跡調査中に発見され、覆土中に掘り込まれていたため平面形態を明確に捉えることができなかった。推定規模は長さ1.30m、幅0.80m、深さ18cm前後と思われる。

土墳墓内からは人骨が1体検出された。遺存状態はあまり良くないが、頭骨と上腕骨、下肢骨がある。北頭位で、体を西に向けた側臥屈葬状態で埋葬されたものと推定される。副葬品はない。時期は不明確であるが、中世またはそれ以降と考えられる。

第485図 C区第1号土墳墓



(9) 特殊遺構

C区からは特殊遺構としたものが3基検出された。第3号特殊遺構は土壌の項において第13号土壌として報告した。いずれも不定形で、壁面がオーバーハングする、そして埋土は埋め戻されるという共通項があり、おそらく土取り用の採掘壕と見るのが妥当であろう。

C区第1号特殊遺構 (第486図)

C区第1号特殊遺構は29-16グリッドに位置し、第13-14号住居跡、第22号掘立柱建物跡に切られている。

平面形態は隅丸方形で、北西側にスロープ状の張り出しが付く。規模は一辺2.50m、深さ1.50mである。側壁は大きく抉れ、底面は一段深く掘り込まれる部分があり一定しない。埋土にはロームブロックが多量に含まれ、人為的に埋め戻された可能性が高

いものと考えられる。遺構の性格は掘り込みの状態や埋土から、土取りのための採掘壕と考えるのが妥当であろう。

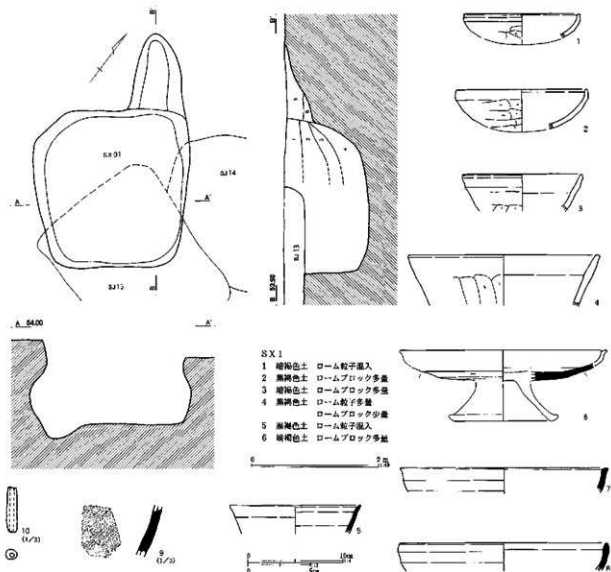
出土遺物は土師器環・鉢、須恵器環・脚付盤・壺・甕、土鎌がある(第486図)。1は暗文環系の無文土器。2は内屈口縁の北武蔵型環である。3は平底環となるもので、体部下位にケズリが入る。第14号住居跡に帰属するであろう。4は甌か。5は須恵器環。6は盤であるが、底部中心に近い部位にヘラケズリ後のナデが加わるためおそらく脚付の盤となろう。低脚盤か。7・8も盤か。9は須恵器壺か。外面カキ目調整。群馬産(藤岡?)の可能性はある。

時期は熊野I期新段階が中心で、降ってもII期古段階までと考えられる。

第174表 C区第1号特殊遺構出土遺物観察表 (第486図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師環	(12.1)	2.5		B	A	褐色	15%	覆土
2	土師環	(13.7)	4.2		AB	B	橙褐色	10%	覆土上層
3	土師環	(12.5)	3.9		CG	B	茶褐色	25%	覆土上層
4	土師甌?	(20.0)	5.4		AB	C	暗褐色	10%	覆土
5	須恵環	(13.7)	3.0		BC片	A	青灰色	10%	覆土。未野産
6	須恵脚付盤		1.8		BC片	A	灰色	25%	覆土上層。未野産
7	須恵壺	(22.0)	2.6		BC	A	青灰色	10%	覆土。未野産か
8	須恵盤?	(21.8)	3.0		F片	C	淡灰色	5%	覆土。未野産
9	須恵壺		4.1		B	B	灰白色		覆土。群馬(藤岡産か?)
10	土鎌	覆土。長さ3.6cm。最大径0.9cm。孔径0.35cm。重さ2.53g							

第486図 C区第1号特殊遺構・出土遺物



C区第2号特殊遺構 (第487図)

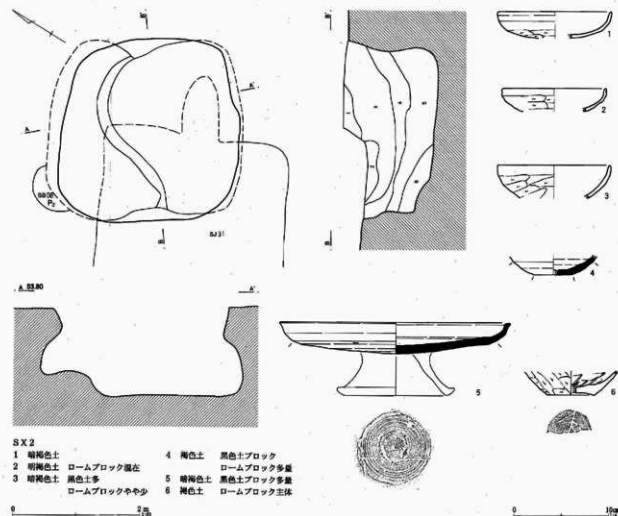
C区第2号特殊遺構は29-19・20グリッドに位置する。重複する第8号掘立柱建物跡との関係は、断面観察により本遺構の方が切っていることが判明した。また、本遺構を覆土中に第31号住居跡が構築されており、第8号掘立柱建物跡→第2号特殊遺構→第31号住居跡の順に構築されたことが確認された。

平面形態は不整形で、規模は一辺2.80m、深さは1.50mである。側壁は大きくオーバーハングしており、底面は凹凸をもち一定しない。埋土にはロームブロックが多量に含まれ、人為的に埋め戻された

可能性が高い。形態や掘り込みの状態は第1号特殊遺構と良く類似しており、第1号特殊遺構と同様、土取り塚と考えられる。

出土遺物は土師器環・甕、須恵器環・脚付盤がある(第487図)。1・3は北武蔵型環。1は口縁部が開き気味で浅身である。第31号住居跡からの混入遺物と思われる。3は口縁部が短く直立し丸底形態である。2は模倣環。口縁部の立ち上がりが短く小型である。4は須恵器のいわゆる環Hと思われる。胎土は織割で堅緻に焼き上がる。湖西産。5は須恵器脚付盤と考えられる。底部中央付近の剝離面には同心円状の

第487図 C区第2号特殊遺構・出土遺物



S X 2

- | | | |
|--------|--------|------------|
| 1 暗褐色土 | 4 褐色土 | 黒色土ブロック |
| 2 明褐色土 | 5 暗褐色土 | 黒色土ブロック多量 |
| 3 暗褐色土 | 6 褐色土 | ロームブロック多量 |
| | | ロームブロックやや少 |
| | | ロームブロック主体 |

第175表 C区第2号特殊遺構出土遺物観察表 (第487図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師環	(11.8)	2.8		B	A	橙褐色	10%	覆土
2	土師環	(10.9)	2.4		BG	A	橙褐色	10%	上層
3	土師環	(11.9)	3.4		AB	B	淡褐色	10%	上層
4	須恵環		2.2	(4.0)	BF	A	黒灰色	10%	覆土。湖西産。坏日身と思われる
5	須恵脚付盤	24.2	3.4		F片	B	黄灰白色	60%	上層。木野産
6	土師甕		2.6	(5.0)	B	A	茶褐色	50%	覆土。底部木葉痕

溝が刻まれている。脚部を接合する際の接合面積を増やす工夫であろう。木野産である。6は土師器甕底部。底面に木葉痕が残る。時期は熊野Ⅰ期新～Ⅱ期と考えておきたい。

C区第3号特殊遺構 (第476図)

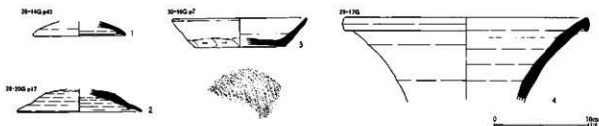
(10)ピット・グリッド出土遺物

C区において、単独ピット及び遺構に伴わずに出土した遺物を掲載した。1は小型のかえり蓋。2は

C区第3号特殊遺構は第13号土壌として報告した(第476図)。規模・形態等の詳細は第72表を参照願いたい。出土遺物がなく、時期は不明確であるが、おそらく第1・2号特殊遺構と時的にも性格的にも近いものと思われる。

中型のかえり蓋である。いずれも木野産。3は扁平な須恵器で、推定口径14.2cm。底径9.2cm。底部は

第488図 C区ビット・グリッド出土遺物



第176表 C区ビット・グリッド出土遺物観察表 (第488図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	収容	備考
1	須恵蓋	(9.4)	1.6		B	B	黄褐色	15%	28-14G P-43。末野産
2	須恵蓋	(12.8)	2.4		B D片	B	黄灰色	35%	28-20G P-17。末野産
3	須恵坏	(14.2)	3.0	9.4	B C片	A	黄褐色	25%	30-16G P-7。末野産。器縁静止糸切り
4	須恵甕	(25.3)	8.9		B C針	A	暗灰色	15%	29-17G。南比企産

静止糸切りで、体部下端が手持ちヘラケズリ調整されている。末野産である。糸切り痕をそのまま残すタイプとしては最も古い段階のものであろう。熊野

Ⅲ期でも古段階に属するものと推定される。4は南比企産の甕である。

報告書抄録

ふりがな	くまのいせき							
書名	熊野遺跡 (A・C・D区)							
副書名	岡部町岡中央団地関係埋蔵文化財発掘調査報告							
巻次	第2分冊							
シリーズ名	財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書							
シリーズ番号	第279集							
著者氏名	富田和夫							
編集機関	財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒369-0108 埼玉県大里郡大里村船木台4-4-1					In0493-39-3955		
発行年月日	西暦2002 (平成14) 年3月22日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
くまのいせき 熊野遺跡 (A・C・D区)	さいたまけん大里郡とくまのいせき 埼玉県大里郡岡部町 おおかみおぼろぎまの 大字岡字熊野2899番 地他 さいたまけん大里郡とくまのいせき 埼玉県大里郡岡部町 おおかみおぼろぎまの 大字岡字熊野2993-3 番地他	11405	017	36° 12' 36"	139° 14' 25"	19940601 ～19950331 19950401 ～19950831 19951001 ～19960229	13,400	団地建設 に伴う事 前調査
所収遺跡	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
熊野遺跡 (A・C・D区)	集落跡	縄文時代 奈良・平安時代		竪穴住居跡	143軒	縄文土器・石器		縄内産土師器
				掘立柱建物跡	69棟	土師器		陶棺
				ピット列	1条	須恵器		カマド形土製品
				溝跡	6条	灰釉陶器		刻字紡錘車
				土壌	50基	土製品		
				井戸跡	1基	石製品		
				特殊遺構	10基	鉄製品		
				道路跡	1条	青銅製品		
		中世以降		竪穴状遺構	20軒	中世陶磁器		
				掘立柱建物跡	23棟	青磁碗		
				ピット列	3条			
				溝跡	44条			
				土壌	205基			
				土壌墓	1基			
				井戸跡	3基			
				溝跡	7条			
		その他		土壌	50基			
				ピット列	1条			
				道路跡	1条			
				特殊遺構	2基			

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第279集

大里郡岡部町

熊野遺跡(A・C・D区)

岡部町岡中央団地関係埋蔵文化財発掘調査報告
第2分冊

平成14年3月15日 印刷

平成14年3月22日 発行

発行／財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 大里郡大里村船木台4-4-1

電話 0493(39)3955

印刷／(株)太陽美術